

宇治市埋蔵文化財発掘調査概報

第 10 集

1987

宇治市教育委員会

宇治市埋蔵文化財発掘調査概報

第 10 集

- I. 東中遺跡・菟道遺跡・滋賀谷窯跡
- II. 二子塚古墳外濠
- III. 岡本廃寺・岡本遺跡
- IV. 寺界道遺跡

1 9 8 7

宇治市教育委員会

序

近年、宇治市ではバイパス建設や宅地開発などの大規模な開発あいつぎ、それに伴う埋蔵文化財の発掘調査件数が急増しています。

本書は、宇治市教育委員会が昭和60年度を中心に実施した開発事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査4件を一冊の概報としてまとめたものです。

京滋バイパス工事用道路建設に伴い調査した東中遺跡・菟道遺跡・滋賀谷窯跡では奈良時代の集落や窯跡を、宅地開発に伴う二子塚古墳では外濠の存在を明確にしました。また、同じく宅地開発に伴い調査した岡本廃寺では新たな白鳳寺院を発見し、府・市営住宅改築に伴い調査した寺界道遺跡では本市で初めて縄文時代の人々の生活跡を検出しました。このような調査の成果は、古代の宇治を解明する大変重要な意味をもつものと考えます。

本書が多くの方々目にふれ、広く宇治の歴史解明に役立つことを願うものです。

最後になりましたが、調査にご協力いただいた開発事業者の方々を始め、調査期間中にご指導を賜りました関係機関ならびに各位に対し心よりお礼申し上げます。

昭和62年3月

宇治市教育委員会

教育長 岩本昭造

凡 例

1、本書は、宇治市教育委員会が実施した開発に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。

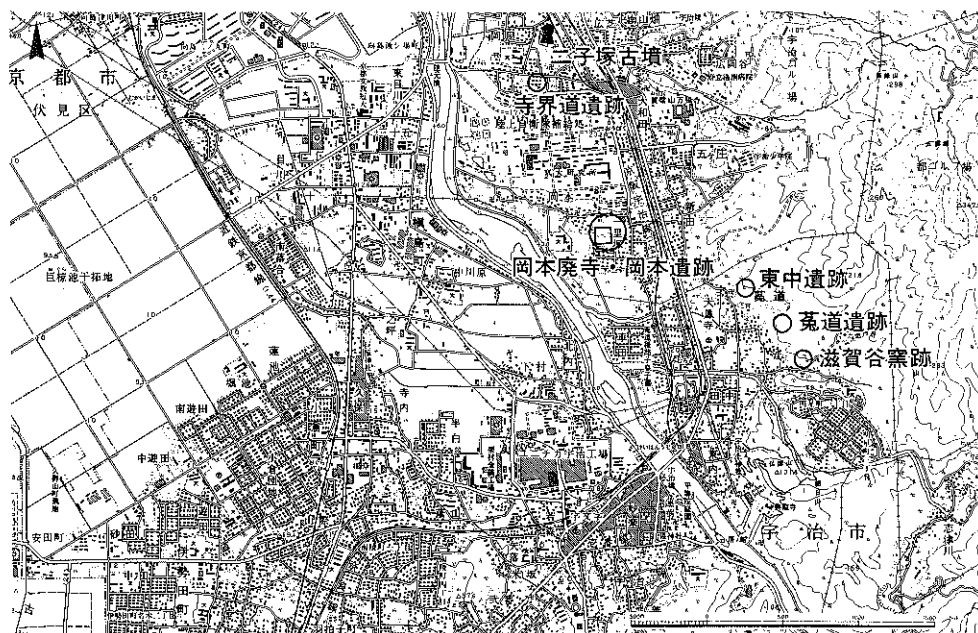
2、本書が収録した発掘調査は下記の4件である。

遺 跡 名	開 発 事 業	経 費 負 担	実 施 年 月
I. 東中遺跡・菟道遺跡 ・滋賀谷窯跡	京滋バイパス 工事用道路建設	日本道路公団	昭59.2～昭61.6
II. 二子塚古墳外濠	宅地開発	一井株式会社	昭60.9～10
III. 岡本廃寺・岡本遺跡	宅地開発	葵建設株式会社	昭60.8～12
IV. 寺界道遺跡	府・市営住宅改築	京都府・宇治市	昭60.8～11

3、本書の執筆分担は、各概要に明示した。

4、本書の編集は、宇治市教育委員会社会教育課が行ない、実務を杉本宏(同主事)と猿向敏一(同嘱託)が担当した。作図・整図は、主に古川小百合・中尾由香利・岸本展史・八瀬正雄が行なった。

5、各調査地は下記の場所である。



昭和60年度の動向

昭和60年度における宇治市内の発掘調査は9件あり、開発に伴い本市教育委員会が調査を実施したものが7件(本書に4件を収録)、国庫補助事業として実施したものが1件、開発に伴い(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター(以後、埋文センター)が調査したものが1件である。文化財保護法第57条の2の規定に基づく発掘調査届出件数は、年々増加の一途をたどっている。これは、宅地開発をはじめとする民間開発事業の増加によるものである。

東中遺跡・菟道遺跡・滋賀谷窯跡の調査は、京滋バイパス工用道路の建設に伴い、その一部を調査した。東中遺跡では、奈良時代から平安時代にかけての掘立柱建物群と中世末頃の火葬跡を検出した。前者からは、須恵器・土師器を始め緑釉陶器・陶硯が出土し、後者からは、輸入銭貨・瓦器香炉・土師皿などが見つかった。菟道遺跡では、当初予測した古代の遺構は発見されず、近世から近代にかけての宅地跡を検出したに留まった。滋賀谷窯跡は、今回の調査で初めてその存在が明らかとなった須恵器窯で、7世紀後半から8世紀前半にかけての須恵器が多数見つかった。杯の内底面には、ヘラ記号をもつものが多く認められる。

二子塚古墳外濠の調査は、民間の宅地開発に伴い実施した。二子塚古墳は、推定される墳丘全長105mの前方後円墳で、市内最大の古墳である。現在も前方部側に周濠が残っている。今回の調査地は、さらにその外側で、ここで幅12m程の外濠を発見し、本古墳が2重周濠をもつことが判明した。古墳の年代は、出土した埴輪・須恵器から6世紀頃と推定される。

岡本廃寺・岡本遺跡の調査は、民間の大型宅地開発に伴い実施した。岡本廃寺は、調査で初めてその存在が明らかとなった寺院で、調査前までは岡本瓦窯跡と呼ばれていた。検出した建物は、瓦積基壇の金堂・掘立柱建物の講堂で、塔心礎の一部と思われる花崗岩・中心伽藍をとり囲む2重の柵列も見つかった。伽藍配置は、いわゆる法隆寺式である。軒丸瓦は3種類ある。法隆寺西院式と川原寺亜式、そして法隆寺西院式の単弁化したものである。前2者が創建瓦で、後者が補修瓦である。軒平瓦は重弧文である。創建年代は7世紀末頃である。寺の廃絶は8世紀末頃と考えられ、金堂は焼亡したことが判明した。出土遺物は、軒瓦以外では鬼瓦・結紐文槿先瓦・鷗尾・熨斗瓦・平瓦・丸瓦の瓦類と土師器・須恵器がある。岡本遺跡は、岡本廃寺一帯に広がる遺物散布地で、その一部を調査した。検出した遺構は、削平された小型の古墳2基を始め、掘立柱建物・瓦溜り・土壙・溝等である。遺構の遺存状況は悪い。注目すべき遺物に「左寺」銘の軒平瓦がある。これは東寺造営に使用された瓦と同范であり、付近に東寺瓦窯の存在を窺わせる。

寺界道遺跡の調査は、府・市営住宅の改築に伴い実施した。寺界道遺跡は、前述の二子塚

古墳の南側一帯に広がる集落跡である。今回の調査で、縄文時代晩期の貯蔵穴2基、古墳時代後期の竪穴住居、古墳時代後期から平安時代にかけての掘立柱建物群を検出した。出土遺物には、縄文土器・石器・須恵器・土師器・陶硯などがある。縄文時代の遺物がまとめて出土したのは、市内で初めてである。

以上の4件の調査のように本書に収録した調査以外にも、開発に伴う小規模な試掘を3件実施している。このうち2件は、木幡古墳群(宮内庁管理の宇治陵墓)で実施した。調査地は木幡南山4-27他番地と木幡南端59-3番地である。ともに須恵器小片を発見しただけで、遺構は検出されなかった。もう1件は観音院本願寺跡(能化院北側)の木幡中村7番地で、数個の土壙と瓦片・須恵器・瓦器片が若干出土した。いずれも小規模な宅地開発に伴うものである。

このような開発に伴う調査以外に、本市教育委員会では大鳳寺跡の発掘調査を国庫補助業として実施した。5年計画の4年目である。瓦積基壇の金堂東側で基壇状の高まりを検出し、塔跡の可能性が考えられた。伽藍配置は法起寺式である可能性が高い。白鳳時代創建。

埋文センターが本市内で行なった調査として、隼上り1号墳の調査がある。京滋バイパス本線工事に伴うもので、昭和58年度から予定地内の調査を実施してきている。本年度が最終年度。隼上り1号墳は両袖式横穴式石室をもつ円墳で、石室内から須恵器片や土師器片とともに須恵器の特殊偏壺が出土した。隼上り1号墳は3基の円墳で構成される群集墳の1基で、すでに2基が調査されている。いずれも古墳時代後期である。

上記の調査のうち、本書が収録していないものは、下記文献を参照されたい。

(大鳳寺)

『大鳳寺跡発掘調査報告』宇治市教育委員会 昭和62年。

(隼上り古墳群)

「隼上り3号墳」『京都府埋蔵文化財情報第14号』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 昭和59年。

「隼上り2号墳」『京都府埋蔵文化財情報第15号』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 昭和60年。

「隼上り1号墳」『京都府埋蔵文化財情報第19号』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 昭和61年。

「京滋バイパス関係遺跡昭和59年度発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報第16冊』同上 昭和60年。

本文目次

I. 東中遺跡・菟道遺跡・滋賀谷窯跡発掘調査概要

1. はじめに	1
2. 調査の概要	4
(A. 東中遺跡)	4
(1) 調査の経過	4
(2) 遺構	5
(3) 遺物	16
(4) まとめ	22
(B. 菟道遺跡)	24
(1) 調査の経過	24
(2) 調査の概要	24
(C. 滋賀谷窯跡)	26
(1) 調査の経過	26
(2) 窯跡	27
(3) 灰原	30
(4) 遺物	32
(5) まとめ	37
付載 滋賀谷窯跡の磁気探査結果	39

II. 二子塚古墳外濠発掘調査外要

1. はじめに	41
2. 調査の概要	42
3. 遺構	44
4. 遺物	46
5. まとめ	48

III. 岡本廃寺・岡本遺跡発掘調査概要

1. はじめに	49
2. 調査の経過	51

3. 調査の概要	52
(A. 岡本廃寺)	52
(1) 基本層位	52
(2) 遺構	57
(3) 瓦類	65
(4) 土器類	99
(5) 金属器	106
(6) まとめ	107
(B. 岡本遺跡)	115
(1) 遺構	115
(2) 瓦類	119
(3) 土器・金属器	120
(4) まとめ	122

IV. 寺界道遺跡発掘調査概要

1. はじめに	131
2. 調査の経過	133
3. 遺構	135
4. 遺物	145
5. まとめ	171

挿 図 目 次

I. 東中遺跡・菟道遺跡・滋賀谷窯跡発掘調査概要

第1図 調査地点(1:5000).....	2
(A. 東中遺跡)	
第2図 調査地周辺の地形図.....	5
第3図 地区割と主要遺構.....	6
第4図 火葬跡 SX01	8
第5図 遺構 (1).....	10
第6図 遺構 (2).....	11
第7図 遺構 (3).....	12
第8図 遺構 (4).....	13
第9図 遺構 (5).....	14
第10図 土器 (1).....	17
第11図 土器 (2).....	18
第12図 火葬跡SX01 出土銭貨	20
第13図 古代の地形と主要遺跡.....	22
(B. 菟道遺跡)	
第14図 調査地全図.....	25
(C. 滋賀谷窯跡)	
第15図 調査地周辺の地形.....	27
第16図 窯跡全図.....	28
第17図 窯体断面図.....	29
第18図 第3トレンチ.....	31
第19図 井戸 SE02	32
第20図 窯体出土器.....	34
第21図 灰原2次堆積出土土器.....	35
第22図 第3トレンチ出土中世土器.....	36
第23図 磁気探査結果.....	40

II. 二子塚古墳外濠発掘調査概要

第1図	調査地位置図(1:5000).....	42
第2図	二子塚古墳全図.....	43
第3図	調査地全図.....	45
第4図	外濠出土の須恵器.....	47

III. 岡本廃寺・岡本遺跡発掘調査概要

第1図	岡本廃寺と周辺の主要遺跡(1:20000).....	49
第2図	トレンチ配置図.....	50—51
(A. 岡本廃寺)		
第3図	岡本廃寺全図.....	53
第4図	岡本廃寺部分 (1).....	54
第5図	岡本廃寺部分 (2).....	55
第6図	岡本廃寺部分 (3).....	56
第7図	基壇建物 SB300(金堂)部分断面図.....	57
第8図	基壇建物 SB300(金堂).....	59
第9図	掘立柱建物 SB120(講堂).....	61
第10図	軒瓦等出土割合.....	65
第11図	軒丸瓦 A.....	67
第12図	軒丸瓦 Ba・Bb.....	68
第13図	軒丸瓦 Bc.....	69
第14図	軒丸瓦 C (1).....	70
第15図	軒丸瓦 C (2).....	71
第16図	軒丸瓦 C (3).....	72
第17図	文様と丸瓦角度.....	73
第18図	軒平瓦分類図.....	74
第19図	軒平瓦 E.....	75
第20図	軒平瓦 A・C・D.....	76
第21図	軒平瓦 B I (1).....	77
第22図	軒平瓦 B I (2).....	78
第23図	軒平瓦 B II.....	79

第24図	軒平瓦BⅢ (1).....	80
第25図	軒平瓦BⅢ (2).....	81
第26図	平瓦C分割界線.....	83
第27図	瓦対応関係.....	84
第28図	熨斗瓦.....	85
第29図	丸瓦B (1).....	86
第30図	丸瓦B (2).....	87
第31図	丸瓦B・D・E.....	88
第32図	平瓦A.....	89
第33図	平瓦BⅠ (1).....	90
第34図	平瓦BⅠ (2).....	91
第35図	平瓦BⅠ (3).....	92
第36図	平瓦BⅠ (4).....	93
第37図	平瓦BⅡ.....	94
第38図	平瓦C.....	95
第39図	平瓦D.....	96
第40図	鬼瓦・極先瓦.....	97
第41図	鷗尾.....	98
第42図	土器 (1).....	101
第43図	土器 (2).....	103
第44図	土器 (3).....	104
第45図	金属器.....	106
第46図	岡本廃寺伽藍復元図.....	108
第47図	岡本廃寺に類似する寺.....	109
第48図	文様瓦等出土位置図.....	111
第49図	岡本廃寺のイメージ.....	112
(B. 岡本遺跡)		
第50図	D ₁ トレンチ.....	116
第51図	Eトレンチ.....	117
第52図	Hトレンチ.....	118
第53図	SK307出土瓦.....	119
第54図	Eトレンチ出土遺物.....	121

第55図	東寺出土瓦	122
------	-------	-----

IV. 寺界道遺跡発掘調査概要

第1図	調査地位置図(1:5000)	131
第2図	地区割と主要遺構	134
第3図	土層図	136
第4図	第1トレンチ西地区	138
第5図	第1トレンチ東地区	138—139
第6図	SK01・SK02実測図	139
第7図	第2トレンチ西地区	140
第8図	第2トレンチ東地区	141
第9図	第3トレンチ	142
第10図	SK01出土縄文土器実測図 (1)	147
第11図	SK01出土縄文土器実測図 (2)	148
第12図	SK01出土縄文土器実測図 (3)	149
第13図	SK01出土縄文土器実測図 (4)	150
第14図	SK01出土縄文土器実測図 (5)	151
第15図	SK02出土縄文土器実測図 (1)	153
第16図	SK02出土縄文土器実測図 (2)	154
第17図	SK02出土縄文土器実測図 (3)	155
第18図	石器実測図 (1)	159
第19図	石器実測図 (2)	160
第20図	石器実測図 (3)	160
第21図	古墳時代以降の土器実測図 (1)	162
第22図	古墳時代以降の土器実測図 (2)	164
第23図	古墳時代以降の土器実測図 (3)	165
第24図	古墳時代以降の土器実測図 (4)	166
第25図	古墳時代以降の土器実測図 (5)	167
第26図	古墳時代以降の土器実測図 (6)	168
第27図	陶硯実測図	169
第28図	鉄器実測図	169
第29図	古墳時代以降の土器編年図 (1)	172

第30図	古墳時代以降の土器編年図 (2).....	173
第31図	周辺遺跡位置図.....	174

図 版 目 次

東中遺跡・菟道遺跡・滋賀谷窯跡

- 図版第1 東中遺跡 (1) 調査地遠景(南から)
(2) 調査地遠景(北から)
- 図版第2 東中遺跡 (1) 調査地近景(伐採地が調査地)
(2) 調査前の状況(東から)
- 図版第3 東中遺跡 (1) 調査地全景(東から、拡張前の状況)
(2) 第1トレンチ全景(東から、拡張前の状況)
- 図版第4 東中遺跡 (1) 火葬跡 SX01 検出状況(西から)
(2) 火葬跡 SX01 完掘状況(南から)
- 図版第5 東中遺跡 (1) 火葬跡 SX01 中央礫の状況(北から)
(2) 火葬跡 SX01 中央部土層断面(北から)
- 図版第6 東中遺跡 (1) 第1トレンチ掘立柱建物 SB20(東から)
(2) 第1トレンチ焼土塊 SK02(南から)
- 図版第7 東中遺跡 (1) 第2トレンチ東部全景(西から)
(2) 第2トレンチ東端部(南西から)
- 図版第8 東中遺跡 (1) 第2トレンチ掘立柱建物 SB102(南西から)
(2) 第2トレンチ掘立柱建物 SB130(南西から)
- 図版第9 東中遺跡 (1) 第2トレンチ掘立柱建物 SB140(南東から)
(2) 第2トレンチ掘立柱建物 SB150(東から)
- 図版第10 東中遺跡 (1) 第2トレンチ土塊 SK100 付近(西から)
(2) 第2トレンチ西端部(南東から)
- 図版第11 東中遺跡 土器 (1)
- 図版第12 東中遺跡 土器 (2)
- 図版第13 菟道遺跡 (1) 調査前の状況(南から)
(2) 第1トレンチ完掘状況(南から)
- 図版第14 菟道遺跡 (1) 第2トレンチ完掘状況(東から)
(2) 第3トレンチ完掘状況(東から)
- 図版第15 菟道遺跡 近世陶磁器

- 図版第16 滋賀谷窯跡 (1) 調査地遠景(南から、第3トレンチ調査時)
(2) 調査地遠景(南から、伐採地が窯跡)
- 図版第17 滋賀谷窯跡 (1) 調査前の状況(北から、左側の土手部に窯体)
(2) 調査風景(北から、手前が第2トレンチ奥が第1トレンチ)
- 図版第18 滋賀谷窯跡 (1) 第1トレンチ全景(西から)
(2) 第1トレンチ北壁(左が1号窯、右が2号窯)
- 図版第19 滋賀谷窯跡 (1) 第2トレンチ全景(南から)
(2) 調査後窯跡全景(南から)
- 図版第20 滋賀谷窯跡 (1) 第3トレンチ全景(北から)
(2) 第3トレンチ調査風景(南東から)
- 図版第21 滋賀谷窯跡 (1) 第3トレンチ南部全景(北から)
(2) 第3トレンチ北端部(北から)
- 図版第22 滋賀谷窯跡 (1) 第3トレンチ灰原2次堆積土器出土状況(西から)
(2) 同上
- 図版第23 滋賀谷窯跡 (1) 第3トレンチ石組井戸 SE02 検出状況(東から)
(2) 第3トレンチ石組井戸 SE02 完掘状況(東から)
- 図版第24 滋賀谷窯跡 (1) 第3トレンチ井戸 SE01 (南から)
(2) 第3トレンチ河原石推積(北西から)
- 図版第25 滋賀谷窯跡 土器1(窯体出土)
- 図版第26 滋賀谷窯跡 土器2(灰原2次堆積出土)
- 図版第27 滋賀谷窯跡 土器3(同 上)

二子塚古墳外濠

- 図版第1 二子塚古墳全景(上が北)
- 図版第2 (1) 二子塚古墳全景(南西から)
(2) 二子塚古墳前方部と調査予定地(南西から)
- 図版第3 (1) 調査前の状況(北から)
(2) 調査風景(北から)
- 図版第4 (1) 完掘状況(北から)
(2) 完掘状況(南から、前方の土手は外堤)

岡本廃寺・岡本遺跡

- 図版第1 岡本廃寺 (1) 調査地遠景(西から)
(2) 調査地近景(南から)
- 図版第2 岡本廃寺 岡本廃寺全景(上が南)
- 図版第3 岡本廃寺 (1) B₁トレンチ調査前の状況(南から)
(2) B₁トレンチ調査風景(東から)
- 図版第4 岡本廃寺 (1) B₁トレンチ SB120 全景(東から)
(2) B₁トレンチ SA301a・SA301b (西から)
- 図版第5 岡本廃寺 (1) B₁トレンチ SB120 柱穴
(2) B₁トレンチ SB120 柱穴
- 図版第6 岡本廃寺 (1) B₁トレンチ SB120 北廂列とSD119 (西から)
(2) B₁トレンチ SD110 (東から)
- 図版第7 岡本廃寺 (1) B₁トレンチ SK100・SK101・SK103・SK104 (南西から)
(2) B₁トレンチ SK101・SK104 (東から)
- 図版第8 岡本廃寺 (1) B₁トレンチ SX305・SX306 (北東から)
(2) B₁トレンチ SX306 (南東から)
- 図版第9 岡本廃寺 (1) B₁トレンチ SK107 上面の土器出土状況(西から)
(2) B₁トレンチ 包含層の中世土器出土状況
- 図版第10 岡本廃寺 (1) B₂トレンチ遠景(南西から)
(2) B₂トレンチ近景(南から)
- 図版第11 岡本廃寺 (1) B₂トレンチ全景(北東から)
(2) B₂トレンチ SB300 全景(東から)
- 図版第12 岡本廃寺 (1) B₂トレンチ SB300 東辺検出状況(北から)
(2) B₂トレンチ SB300 東辺・SK157 瓦出土状況(東から)
- 図版第13 岡本廃寺 (1) B₂トレンチ SB300 東辺(南東から)
(2) B₂トレンチ SB300 東辺(北東から)
- 図版第14 岡本廃寺 (1) B₂トレンチ SB300 全景(西から)
(2) B₂トレンチ SB300 東辺の瓦積最下段(北から)
- 図版第15 岡本廃寺 (1) B₂トレンチ SA301a・SA301b (南から)
(2) B₂トレンチ SD161 瓦堆積検出状況(北から)
- 図版第16 岡本廃寺 (1) A₂トレンチ全景(南から)

- (2) A₂トレンチ SX200 (南から、石を裏返しにしたところ)
- 図版第17 岡本廃寺 (1) A₂トレンチ SA303 (東から)
(2) Fトレンチ全景(南から)
- 図版第18 岡本廃寺 (1) A₁トレンチ全景(北から)
(2) A₁トレンチ SE218 (東から)
- 図版第19 岡本廃寺 軒丸瓦A
- 図版第20 岡本廃寺 軒丸瓦B
- 図版第21 岡本廃寺 軒丸瓦C
- 図版第22 岡本廃寺 軒平瓦B I・B II・B III
- 図版第23 岡本廃寺 軒平瓦B I・B II
- 図版第24 岡本廃寺 (1) 軒平瓦B III
(2) 軒平瓦B III
- 図版第25 岡本廃寺 (1) 軒平瓦A・C・E
(2) 熨斗瓦
- 図版第26 岡本廃寺 (1) 丸瓦B
(2) 丸瓦B
- 図版第27 岡本廃寺 (1) 丸瓦E
(2) 丸瓦C
- 図版第28 岡本廃寺 (1) 丸瓦D
(2) 丸瓦B
- 図版第29 岡本廃寺 (1) 平瓦B I
(2) 平瓦B I
- 図版第30 岡本廃寺 (1) 平瓦B I
(2) 平瓦B I
- 図版第31 岡本廃寺 (1) 平瓦B II
(2) 平瓦A
- 図版第32 岡本廃寺 (1) 平瓦D
(2) 平瓦C
- 図版第33 岡本廃寺 (1) 鬼瓦A
(2) 鬼瓦B
(3) 樋先瓦
- 図版第34 岡本廃寺 (1) 鴟尾

- (2) 鴟尾
- 図版第35 岡本廃寺 寺院に関する土器・寺院創建前の土器 1
- 図版第36 岡本廃寺 (1) 寺院創建前の土器 2
(2) 寺院廃絶後の土器 1
- 図版第37 岡本廃寺 (1) 寺院廃絶後の土器 2
(2) 寺院廃絶の土器 3
- 図版第38 岡本遺跡 岡本遺跡全景(上が南)
- 図版第39 岡本遺跡 (1) 調査前の状況(北から)
(2) D₁トレンチ SX41(北から)
- 図版第40 岡本遺跡 (1) Eトレンチ SX01(北から)
(2) Eトレンチ SX01 鉄器出土状況(東から)
- 図版第41 岡本遺跡 (1) Eトレンチ SK307 全景(北から)
(2) Eトレンチ SK307 瓦堆積検出状況(西から)
- 図版第42 岡本遺跡 (1) 軒丸瓦
(2) 軒平瓦

寺界道遺跡

- 図版第 1 (1) 調査地遠景(西から)
(2) 調査地より二子塚古墳を望む(南から)
- 図版第 2 (1) 調査地近景(北東から)
(2) 調査地近景(北西から)
- 図版第 3 (1) 第 1 トレンチ西地区全景(南から)
(2) 第 1 トレンチ SB33(北から)
- 図版第 4 (1) 第 1 トレンチ SB34(南から)
(2) 第 1 トレンチ SB35(南から)
- 図版第 5 (1) 第 1 トレンチ全景(東から)
(2) 第 1 トレンチ SB05(南から)
- 図版第 6 (1) 第 1 トレンチ SB08 土器出土状況(東から)
(2) 第 1 トレンチ SB05 鉄鎌出土状況(東から)
- 図版第 7 (1) 第 1 トレンチ SK01・SK02(北から)
(2) 第 1 トレンチ SK01 縄文土器出土状況(南西から)
- 図版第 8 (1) 第 1 トレンチ SK02(北から)

- (2) 第1トレンチ SK01 (南から)
- 図版第9 (1) 第1トレンチ SK02 土層断面(北から)
- (2) 第1トレンチ SK01 土層断面(北から)
- 図版第10 (1) 第1トレンチ SB32 (南東から)
- (2) 第1トレンチ SX11 (北から)
- 図版第11 (1) 第2トレンチ西地区(北東から)
- (2) 第2トレンチ SB105・SB104 (南から)
- 図版第12 (1) 第2トレンチ全景(東から)
- (2) 第2トレンチ SK106 甌出土状況(西から)
- 図版第13 (1) 第3トレンチ全景(北から)
- (2) 現地説明会風景
- 図版第14 縄文時代晩期の土器 (SK01 出土探鉢)
- 図版第15 (1) 縄文時代晩期の石器 1
- (2) 縄文時代晩期の石器 2
- 図版第16 古墳時代以降の土器 1
- 図版第17 古墳時代以降の土器 2・陶硯
- 図版第18 古墳時代以降の土器 3
- 図版第19 (1) 古墳時代以降の土器 4
- (2) 古墳時代以降の土器 5
- 図版第20 (1) 古墳時代以降の土器 6
- (2) 古墳時代以降の土器 7

I. 東中遺跡・菟道遺跡・滋賀谷窯跡発掘調査概要

1. はじめに

本報告は、滋賀県と京都府南部とを結ぶ京滋バイパスの工専用道路建設に伴い実施した、埋蔵文化財発掘調査の概要報告である。

工専用道路は、宇治市と滋賀県大津市間のトンネル掘削に伴い、その排土輸送用として建設されるものであり、トンネルの宇治出口より宇治市炭山地区に至るまで、総長約6.6kmである。

京滋バイパスが建設される宇治市菟道地区は、飛鳥時代の瓦窯跡である単上り瓦窯跡を始め、白鳳時代寺院である大鳳寺跡等、宇治市内でも数多くの重要な遺跡が所在する所である。京都府埋蔵文化財調査研究センターが発掘調査を実施した^{註1}京滋バイパスの本線予定地内においても、古墳を始め、飛鳥・奈良時代の集落跡等が発見されている。

工専用道路は、菟道地区の東部丘陵端を南北に縦貫し、三室戸寺付近で東へ屈曲し山間部へいたる。発掘調査をしたのは、菟道東中他の東中遺跡、菟道河原の菟道遺跡、菟道只川・滋賀谷の滋賀谷窯跡の3遺跡である。調査範囲は、工専用道路建設予定地内である。

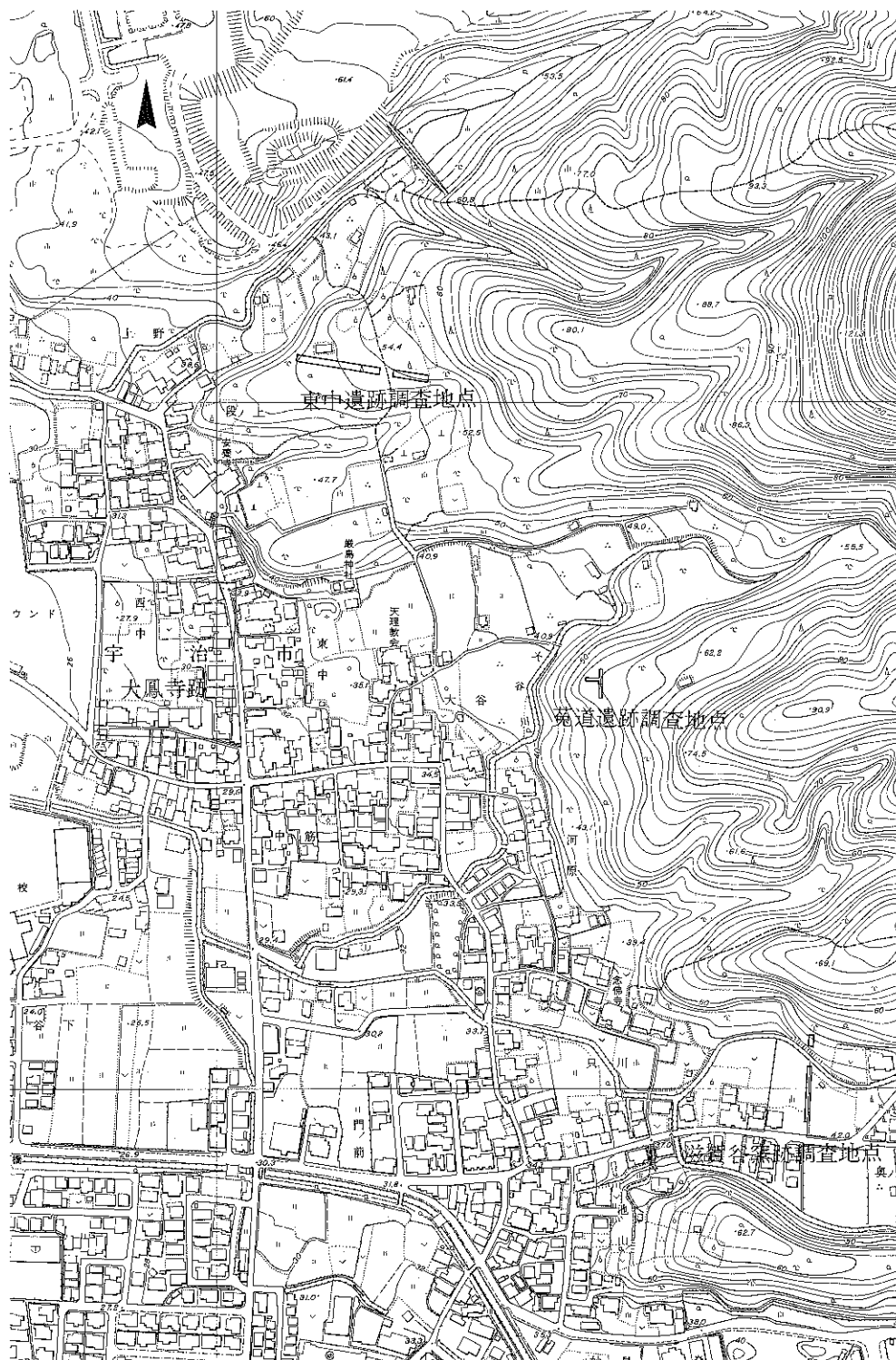
発掘調査は、工事準備と並行して実施したため、下記のとおり昭和59年から昭和61年までの3年間に断続的に行うこととなった。

昭和59年度	遺 跡	東中遺跡
	位 置	菟道東中・段ノ上
	期 間	昭和59年2月4日～昭和60年3月31日
昭和60年度	遺 跡	東中遺跡(拡張部)・菟道遺跡・滋賀谷窯跡(灰原部)
	位 置	菟道東中・河原・只川
	期 間	昭和60年4月1日～同年8月20日
昭和61年度	遺 跡	滋賀谷窯跡(窯跡部)
	位 置	菟道只川・滋賀谷
	期 間	昭和61年5月20日～同年6月28日

上記の調査結果については、後述するとおり、東中遺跡で奈良時代から平安時代にかけての集落跡、菟道遺跡で近世の集落跡、滋賀谷窯跡で奈良時代の須恵器窯跡2基を検出し、一定の成果をおさめることができた。

今回の調査を実施するについては、事業者である日本道路公団大阪建設局の全面的なご協力をいただくとともに、京都府教育委員会からは、久保哲正技師の本市への派遣等、多大なご助力を賜った。また、奈良国立文化財研究所には滋賀谷窯跡の磁気探査を実施していただ

I. 東中遺跡・菟道遺跡・滋賀谷窯跡発掘調査概要



第1図 調査地点(1:5000)

1. はじめに

くとともに、その成果の収録については西村康氏のお手を煩わした。感謝する次第である。最後に、本調査にご協力賜った各位、調査に従事していただいた調査補助員諸氏に対し、衷心より謝意を表したい。また、本報告の編集・執筆は杉本宏が担当した。

<調査組織>

調査主体者	宇治市教育委員会	
調査責任者	宇治市教育委員会 教育長	岩本昭造
調査指導者	元近畿大学教授	杉山信三
	京都府教育庁文化財保護課記念物係長	中谷雅治
調査担当者	京都府教育庁文化財保護課記念物係技師(昭和61年度)	久保哲正
	宇治市教育委員会 社会教育課 主事	杉本宏
調査事務局	宇治市教育委員会 参事	木村光長
	同 社会教育課長 (昭和61年5月1日まで)	小林巧
	同 社会教育課長 (昭和61年5月2日から)	小山豊嗣
	同 社会教育課文化係長(昭和60年5月1日まで)	伊藤忠正
	同 社会教育課文化係長(昭和60年5月2日から)	吉水利明
	同 社会教育課 主事(昭和60年5月1日まで)	吉水利明
	同 社会教育課 主事	梅田正人
	同 社会教育課 主事	小西弘子
調査員	宇治市教育委員会 嘱託 (昭和61年6月2日から)	猿向敏一
調査補助員	奥田耕三・猿向敏一・岩本俊也・佐原 耕・岸本弘司郎・上村和也・樋口秀一・成清利彦・岸本展司・元川康司・坂野善之・白樫文理・古川小百合・中尾由香里	
調査協力	日本道路公団大阪建設局、京都府教育委員会、奈良国立文化財研究所、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター、宇治市大型事業特別対策室、菟道自治会、三室戸寺、田中 琢・西村 康(奈良国立文化財研究所)、堤圭三郎・松井忠春・小池 寛・荒川 史(京都府埋蔵文化財調査研究センター)、〔順不同、敬称略〕。	

2. 調査の概要

A. 東中遺跡

(1) 調査の経過

東中遺跡は、本市が昭和57年度より国・府より補助金を受け4年計画で実施した市内遺跡詳細分布調査により確認した遺跡である。菟道東中・段ノ上に所在する。

遺跡は、標高50m程の台地上に東西約220m、南北に約220mの範囲であると思われる。今回の工事用道路は、この台地上を縦貫するように計画されたため、工事用道路予定路線内に限って発掘調査を実施することとなった。調査地の現状は竹林と檜の植林である。

調査は、工事用道路予定路線の伐採が終了した後に、試掘トレンチの設定から始めた。トレンチは、遺構の存在が予測される台地上平坦部に2本設定することとし、西側のトレンチを第1トレンチ、東側のトレンチを第2トレンチとした。第1トレンチは、幅5m、長さ30mであり、第2トレンチは、幅5m、長さ60mである。

掘削は、事前の土層確認により、地表下0.3mに赤褐色の地山が存在することを把握していたので、ただちに地山直上まで重機により掘り下げた。遺構は、すべて地山面において検出できた。また、第1トレンチ東端付近には、一部遺物包含層の遺存が認められた。このように、第1トレンチにのみ遺物包含層が検出されたのは、本トレンチが、南へ下る丘陵端部付近に設定されているためと思われ、斜面部に形成されている遺物包含層の一部が発見できたものと考えられる。

第1トレンチ及び第2トレンチで検出した遺構は、掘立柱建物・溝・土壇・火葬跡等であり、その中心となる年代は奈良時代から平安時代である。

上述の調査は、昭和60年2月4日より初め、同年3月31日に終了したが、掘立柱建物の多くがその全容を確認できていないため、調査指導者の指導のもとに、引き続き同年4月1日よりその規模確認のためのトレンチの拡張を一部で実施した。

建物の規模の確認については、工事用道路予定路線の用地との問題もあり、必ずしも全ての掘立柱建物の規模を確認することはできなかったが、新たな建物跡の発見もあり、拡張の目的は、一応達することができた。拡張に伴う掘削後は、検出遺構の実測と写真撮影を行った。実測については、調査地を任意に5m地区方眼に分け、東西を算用数字で表わした。

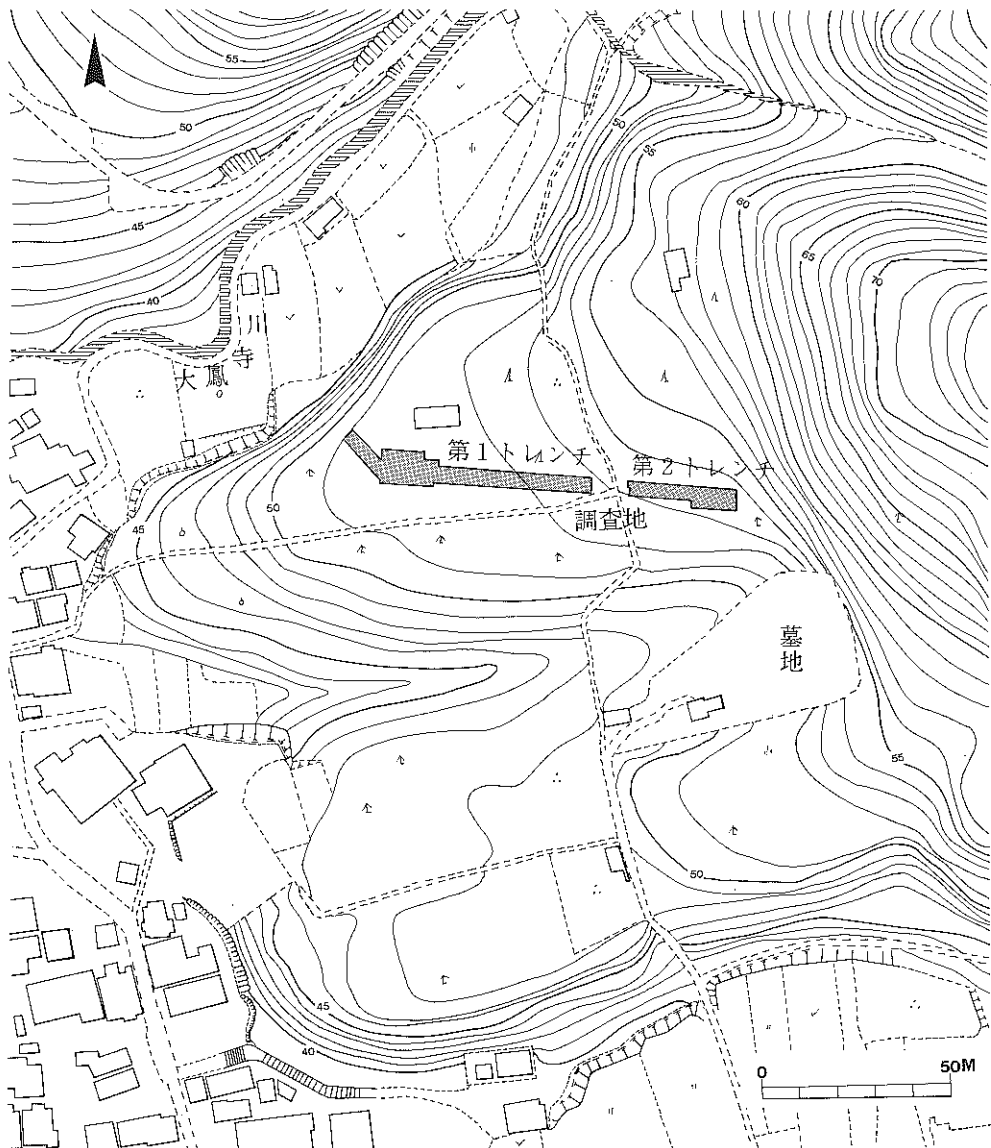
すべての現地作業が終了したのは昭和60年5月30日であり、総調査面積は700m²である。調査記録・出土遺物については宇治市教育委員会が保管している。

(2) 遺 構

東中遺跡は、宇治川東方に連なる標高300m程の山並みより西に派生する標高50m程の丘陵上に存在する。平野部との比高は25m程を測る。

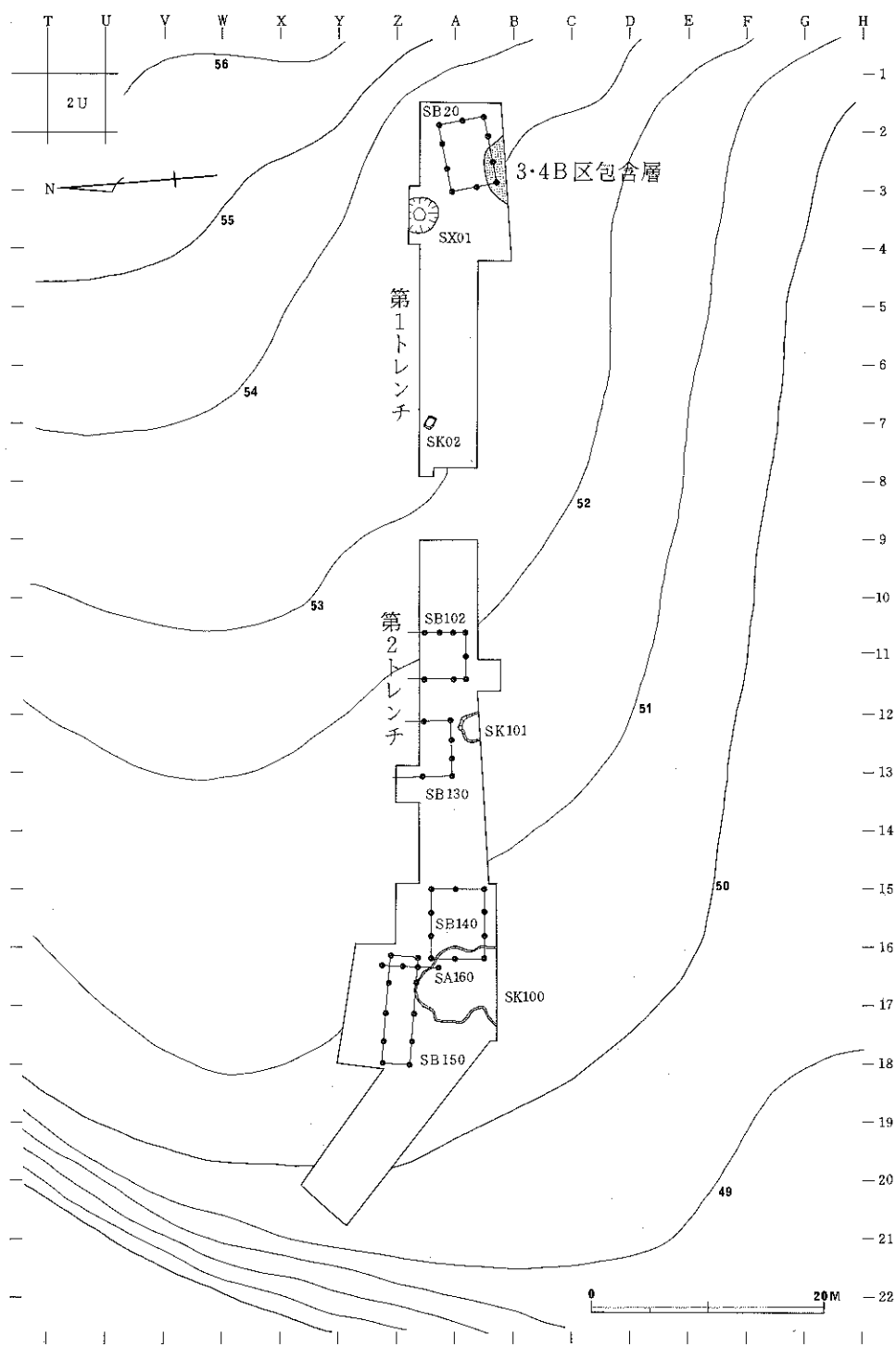
遺跡からの眺望は良好であり、南には菟道の集落をとおして宇治橋が、西には宇治川を通して巨椋池干拓地、そして八幡市の男山丘陵を望むことができる。遺跡としては、台地上の集落といえる。また、西側平野部には白鳳時代寺院である大鳳寺跡が存在する。

今回の調査により検出した遺構には、掘立柱建物5、柵列1、土塼6、焼土塼1、火葬跡



第2図 調査地周辺の地形図

I. 東中遺跡・菟道遺跡・滋賀谷窯跡発掘調査概要



第3図 地区割と主要遺構

1、溝6、柱穴等がある。では、以下に主要遺構の概要を報告する。

〔建物跡・柵跡〕

掘立柱建物 SB20 第1トレンチ西側で検出した、東西(桁)が3間、南北(梁)が2間の掘立柱建物である。規模は、桁行が5.75m、梁行が3.75m程であり、建物面積は21.6m²(約6.5畳)程である。桁行の柱間距離は約1.8m、梁行の柱間距離は約1.5m～2.1mであり、不揃いである。柱掘方は、平面形が隅丸方形及び円形を呈している。柱痕跡は円形であり、径は0.2m程である。SB20は、2B区包含層下で検出。

掘立柱建物 SB102 第2トレンチの11A・B区で検出した、東西(梁)が2間、南北(桁)3間以上の掘立柱建物である。規模は、梁行が3.3m、桁行が4.0m以上であり、建物面積は13.2m²(約4畳)以上である。梁行の柱間距離は約1.8m、桁行の柱間距離は1.3m～1.6m程である。西桁柱筋の南より3つ目の柱跡は検出されなかった。柱掘方は円形であり、柱痕跡は0.2m程である。

掘立柱建物 SB135 第2トレンチの13A区で検出した、東西が3間、南北が1間以上の掘立柱建物である。規模は、東西が5.1m、南北が2.5m以上であり、建物面積は12.8m²(4畳)以上である。東西の柱列の柱間距離は、1.5mから2.1mである。柱掘方は円形であり、柱痕跡は0.2m程を測る。

掘立柱建物 SB140 第2トレンチ16・17A・B区で検出した東西(桁)が3間、南北(梁)が2間の掘立柱建物である。規模は、桁行が5.3m、梁行が4.1mであり、建物面積は21.7m²(6.6畳)程である。桁行の柱間距離は1.8m～2.1m、梁行の柱間距離は1.8m程である。柱掘方は、方形である。柱痕跡は0.2m程を測る。西側の梁行柱筋が大型の土塊であるSK100により削平されている。

掘立柱建物 SB150 第2トレンチ17・18A区で検出した、東西(桁)が4間、南北(梁)が1間の東西に細長い掘立柱建物である。規模は、桁行が8.5m、梁行が2.5mであり、建物面積は約21.3m²(6.4畳)である。柱掘方は円形であり、柱痕跡は0.1m程である。土塊SK100より新しい。柱穴内より11世紀頃と思われる土師小皿片と砥石が出土している。

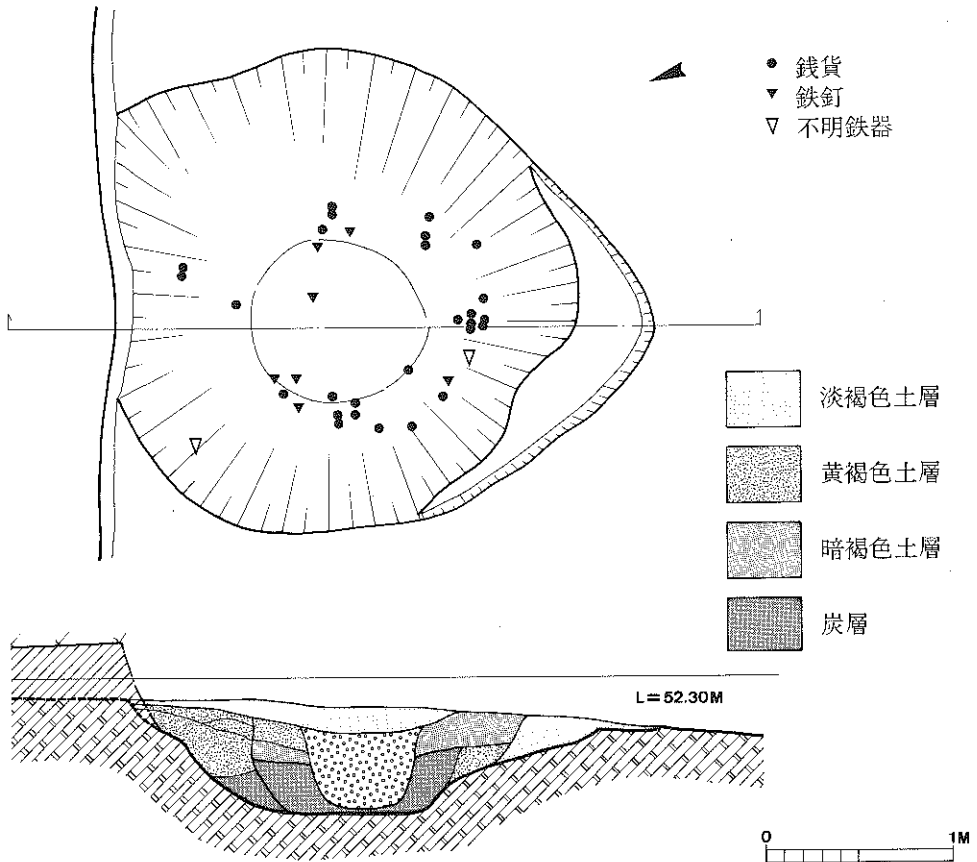
柵列 SA160 第2トレンチ17A区で検出した、東西に3間の柵列である。全長は5.3mを測る。柱掘方は方形である。土塊SK100よりも古い。状況的には、掘立柱建物SB140に伴う施設と考えられる。

〔火・葬跡〕

火葬跡 SX01 第1トレンチ4A区で検出した土塊状遺構である。平面形は、直径2.5m程の不整形円形を呈し、深さは0.55m程である。壁面の特に西側と南側は火を強く受けており、土が赤褐色に変化している。埋土は、基本的には最下層が炭層、その上に暗褐色土、その上

I. 東中遺跡・菟道遺跡・滋賀谷窯跡発掘調査概要

に黄褐色土、最上層が淡褐色土となっており、土壌中央部に拳大の河原石が集中している。しかし、最上層の淡褐色土については、遺構本来の埋土ではなく、遺構の廃絶後に周囲より流入した流入土層である。SX01が火葬跡であることを示すのは、上述した埋土の状況とともに、出土した遺物がある。遺物は、土師皿・瓦器香炉等の土器類とともに多くの銭貨、釘等があり、骨片も多数出土している。これらの遺物は、土壌中央部の礫集中部をとり囲むように、暗褐色土ないしは黄褐色土中より集中的に出土した。このような状況から本遺構の使用・廃絶の過程を復元的に考察すれば、次のようになる。まず土壌を掘削し、土壌底に焚木を置き、その上に銭貨等を入れた棺をのせ、着火する。火葬終了の後は、一定の厚さの土を一時被覆し、後に大型の骨片を取り出す、である。このような過程が、複数回にわたって本遺構で行なわれたことは、埋土の土層断面に土壌が埋没した後にさらにもう一度掘削を行なった痕跡を留めていることより理解できる。また、出土遺物のほとんどは、最後の火葬時のものであり、本遺構廃絶時のものである。出土した土師皿は、概ね16世紀後半頃のものであり、出土した銭貨の最も新しいものが、初鑄年が明の孝宗弘治十六年(1503)の弘治通宝で



第4図 火葬跡 SX01

あり、江戸時代の寛永三年(1626)に初鑄され、江戸時代全般を通じて最も多く流通した寛永通宝が全く含まれていない事を考えれば、土師皿の示す年代に大きな違いはないものと考えられる。

〔焼 土 壙〕

焼土壙 SK02 第1トレンチ7A区で検出した0.9m×1.3mの方形土壙。深さは0.2m程。土壙壁ないし土壙底は火を強く受け赤褐色に変化している。埋土は暗褐色土の単層であり、炭・灰等は検出されなかった。遺物は、埋土中より7世紀前半に比定できる須恵器の杯蓋小片が出土している。

〔土 壙〕

土壙 SK10 第1トレンチ3・4B区で検出した不定形土壙。東西4.5m以上、南北2m程を測る。西端を溝SD07により破壊される。埋土は暗褐色土の単層。埋土中より7世紀後半から8世紀にかけての須恵器類が出土している。

土壙 SK101 第2トレンチ13B区で検出した不定形土壙。東西2.5m、南北2m以上、深さ0.2m程を測る。埋土は暗褐色土の単層であり、埋土中より8世紀前半に比定される須恵器杯身が出土している。

土壙 SK108 第2トレンチ16A区で検出した不定形土壙。東西0.8m、南北1.1m、深さ0.2m程を測る。時期不明。

土壙 SK100 第2トレンチ17・18A・B区で検出した大型の不定形土壙。東西5.9m、南北6.3m以上、深さ0.2m程を測る。埋土は暗褐色土の単層であり、埋土中からは須恵器・土師器等が出土している。掘立柱建物SB140より新しく、掘立柱建物SB150より古い。

土壙 SK106 第2トレンチ19A区で検出した長方形土壙。東西2.8m、南北0.7m、深さ0.2m程である。時期不明。

土壙 SK107 第2トレンチ20A区で検出した不定形土壙。北側を溝SD156で、西側を溝SD157で破壊されている。

〔 溝 〕

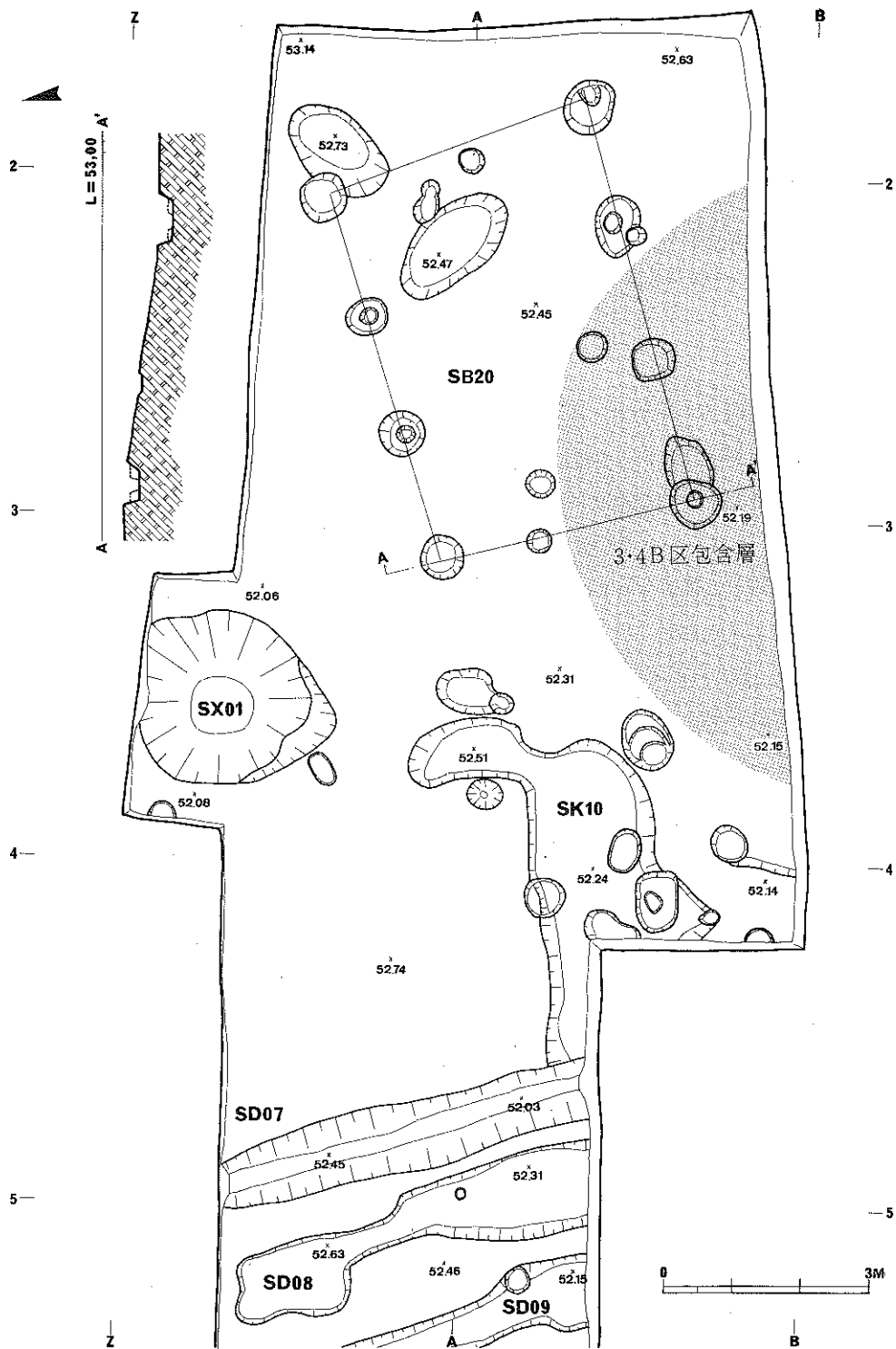
溝 SD07 第1トレンチ5A・B区で検出した南北溝。幅1.0m、深さ0.4m程。近世の地割溝である。

溝 SD08 第1トレンチ5・6A・B区で検出した南北溝。幅は最大1.2m、深さ0.1m程。雨水による自然流路である。

溝 SD09 第1トレンチ6A・B区で検出した南北溝。幅0.7m、深さ0.2m程。時期不明。

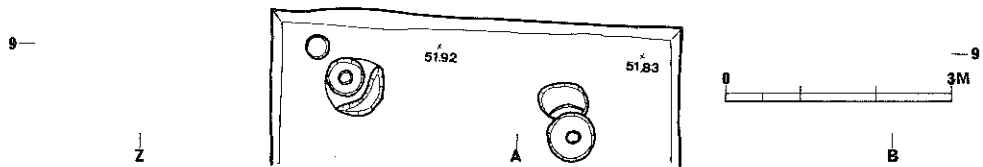
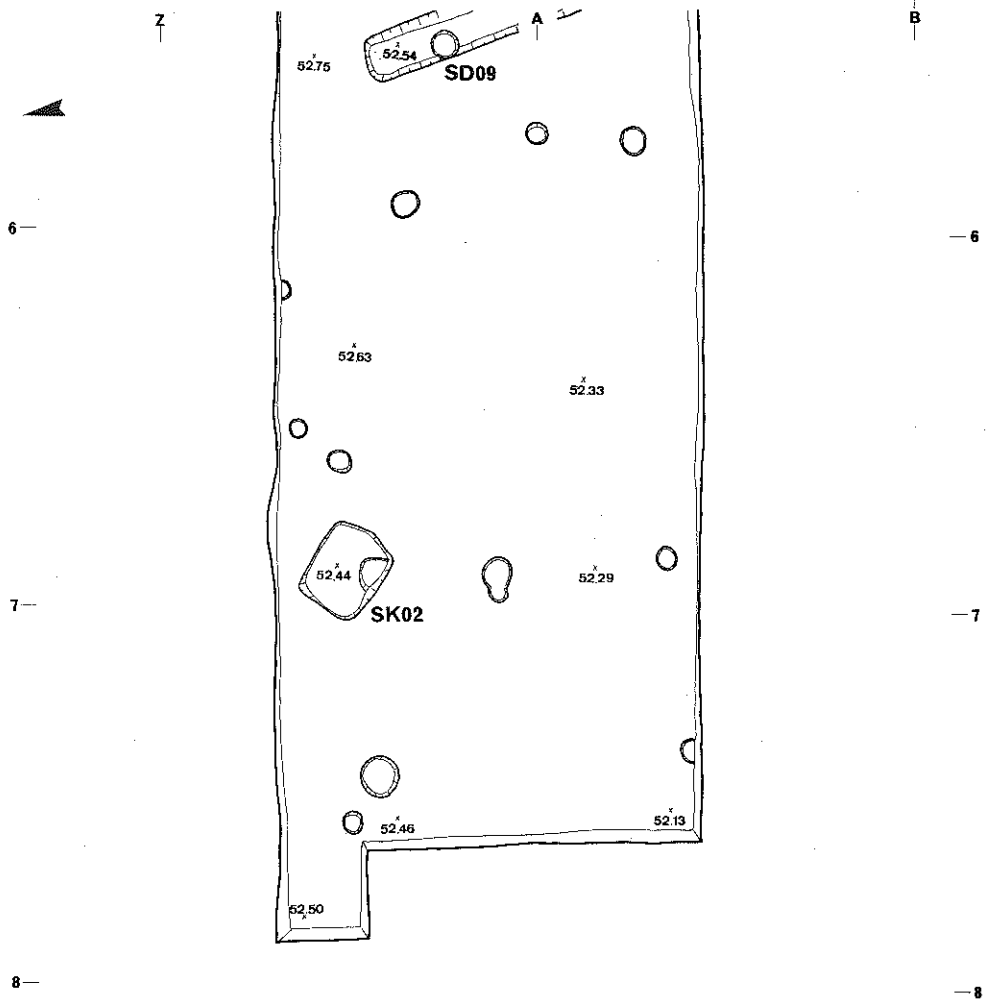
溝 SD156 第2トレンチ19～21Z区で検出した東西溝。検出長10m、幅0.7m、深さ0.2m程である。掘立柱建物SB150より新しい。時期不明。

I. 東中遺跡・菟道遺跡・滋賀谷窯跡発掘調査概要



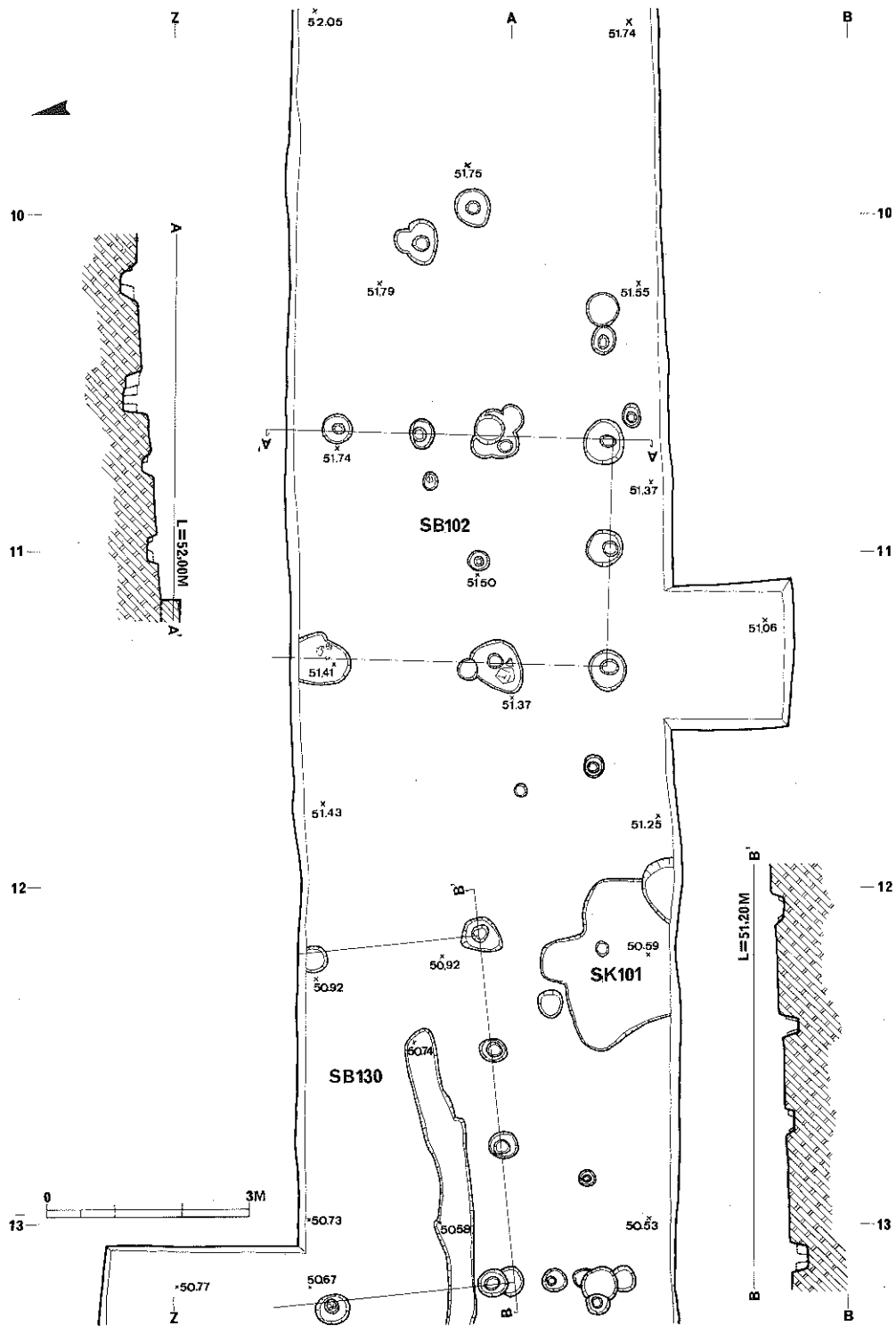
第5図 遺構 (1)

A. 東中遺跡

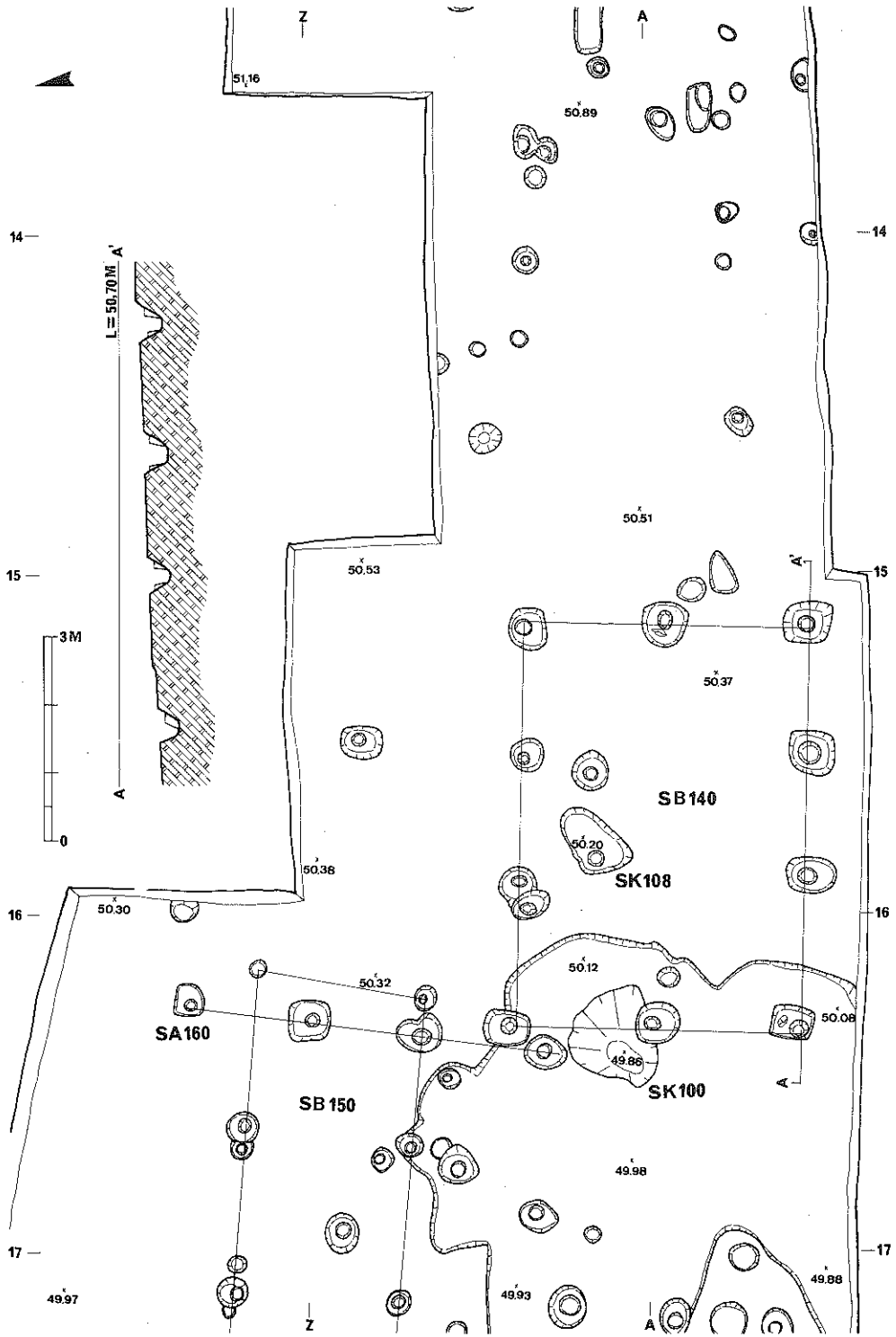


第6図遺構(2)

I. 東中遺跡・菟道遺跡・滋賀谷窯跡発掘調査概要

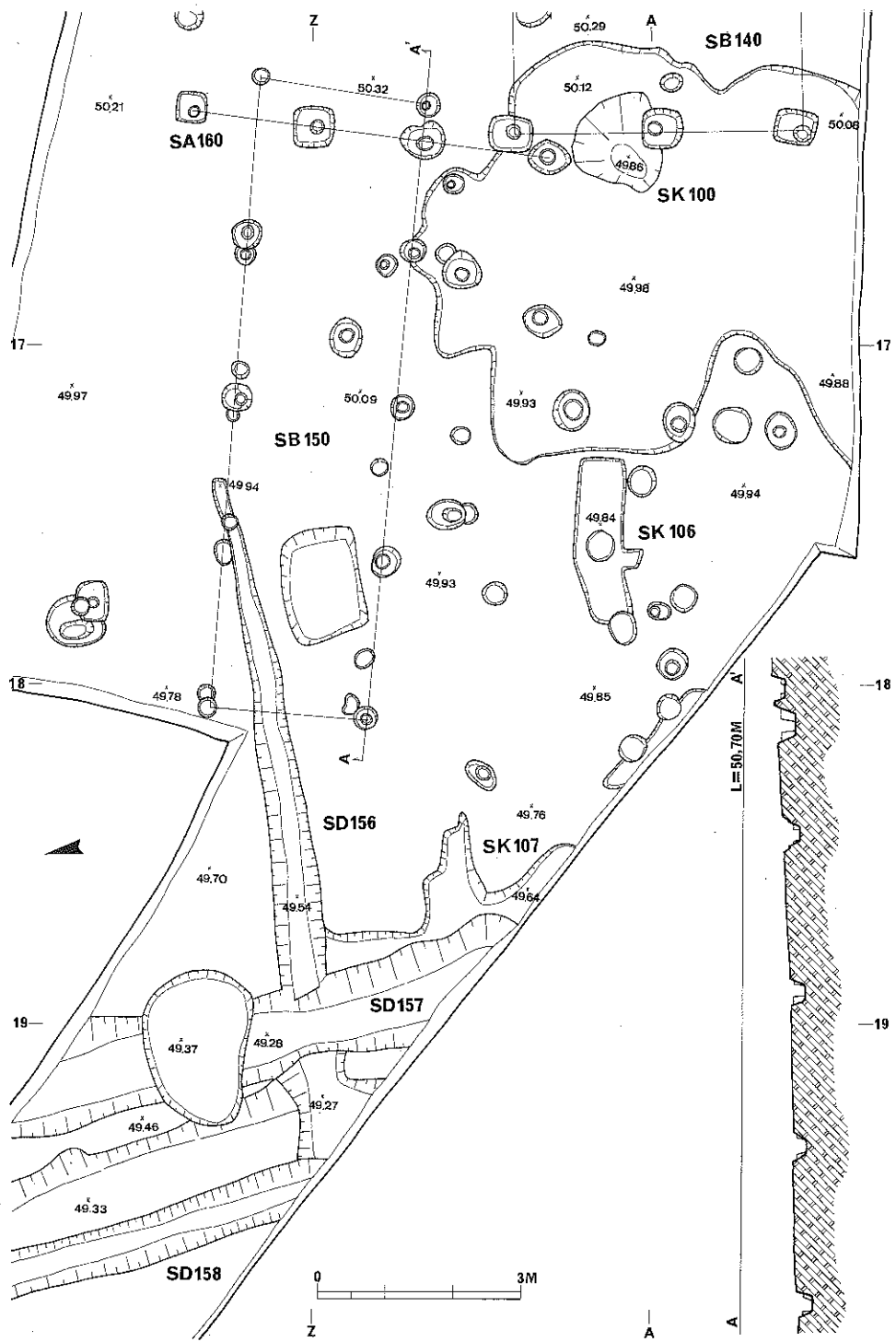


第7図 遺構 (3)



第8図 遺構 (4)

I. 東中遺跡・菟道遺跡・滋賀谷窯跡発掘調査概要



第9図 遺構 (5)

溝SD157 第2トレンチ20・21Z・A区で検出した南北溝。幅1.2m、深さ0.5m程。溝SD156より新しい。近世地割溝。

溝SD158 第2トレンチ21Z・A区で検出した南北溝。幅0.7m、深さ0.3m。近世地割溝。

〔包含層〕

3・4B区包含層 第1トレンチ東端部の南側一部に認められた遺物包含層であり、表土下に形成されている。層の厚さは、丘陵が下りつつある南側で0.5m程を測る。層序としては、上・下層の2層に分けることができる。上層は黄褐色土であり、下層は暗褐色土である。遺物は下層に多く含まれており、上層はその2次の堆積の可能性が高い。掘立柱建物SB20は、包含層下で検出された。

以上のように、今回検出できた遺構は、掘立柱建物を中心とするものであり、集落跡である。その時期は、概ね、奈良時代と平安時代とに分けることができる。奈良時代の建物跡としては、掘立柱建物SB20、SB102、SB135、SB140が想定でき、平安時代の建物としては、掘立柱建物SB150がある。遺跡の中心となる時期は、奈良時代であるといえる。

今回の調査地は、必ずしも遺跡の所在する台地部の中央部を広範囲に調査したものでなく、限定されたトレンチ幅で、台地部を東西に縦貫した調査である。このような調査状況の中で、上述したように幾棟もの建物跡が発見できたことは、当遺跡の規模が比較的大きいものであることを予想させる。

I. 東中遺跡・菟道遺跡・滋賀谷窯跡発掘調査概要

(3) 遺物

今回の調査で出土した遺物は、土師器、須恵器、瓦器、緑釉陶器、灰釉陶器、鉄器、銭貨等がコンテナ5箱分程出土している。この中で、土師器・須恵器がその大半を占め、他は極めて少ない。遺物の遺存状況は、土師器は台地上より出土する時の常として極めてその状態が悪く、表面が風化しているものがほとんどである。では、以下に主要遺構出土の土器の概要を報告する。

3・4B区包含層出土土器(第10図) 遺物の出土状況は、前述したとおり下層にそのほとんどが含まれており、細片化し、元の形に復元できるものはない。出土量はコンテナに2箱程である。

土師器には、杯・高杯・甕等の器形が認められるが、その遺存状況は悪い。高杯は、脚部を八角形に面取りするものである。

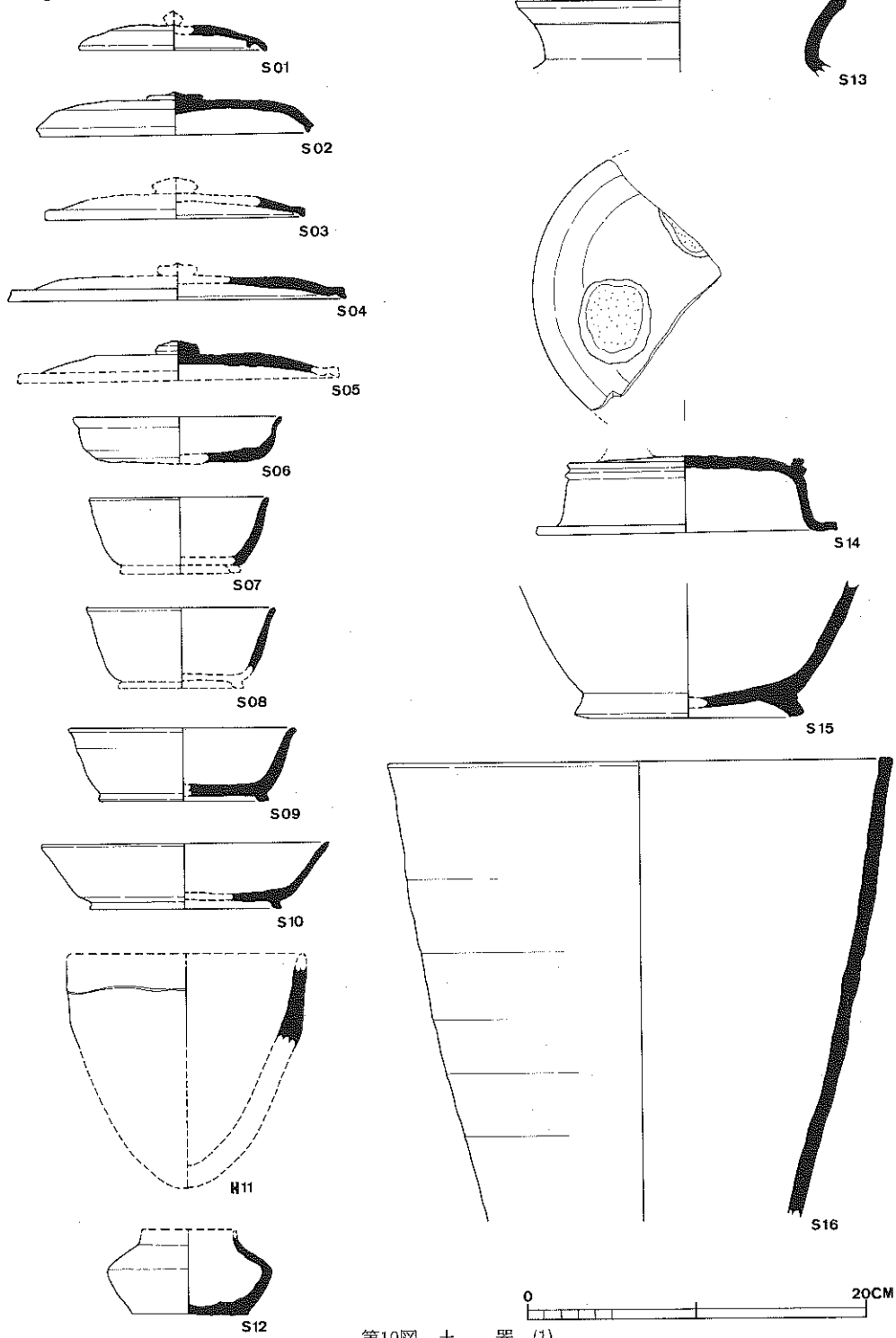
須恵器には、杯・甕・壺・鉢等の器形が認められる。杯蓋は、すべて宝珠様のつまみを有すものであるが、口縁部内面に返りをもつもの(S01)ともたないもの(S02~S05)とがある。杯身は、高台を付すもの(S07~S10)と付さないもの(S06)があり、前者が圧倒的に多い。S13は甕の口縁部である。S12・S15はともに壺であり、前者は水滴かと思われる短頸壺、後者は長頸壺と思われる。S16は、底部の形状は不明であるが、バケツ状の鉢と思われる。

その他の遺物として、製塩土器(H11)と硯(S14)とがある。製塩土器は、小片で数個体分出土しているが、いずれも胎土に砂粒を多く含み、外面に粘土紐の痕跡を残している。硯は、圈脚円面硯であり、脚端部を外方に屈曲させている。硯面には何かが剥落した痕跡が現状で2箇所認められる。硯面には使用による摩耗は認められない。

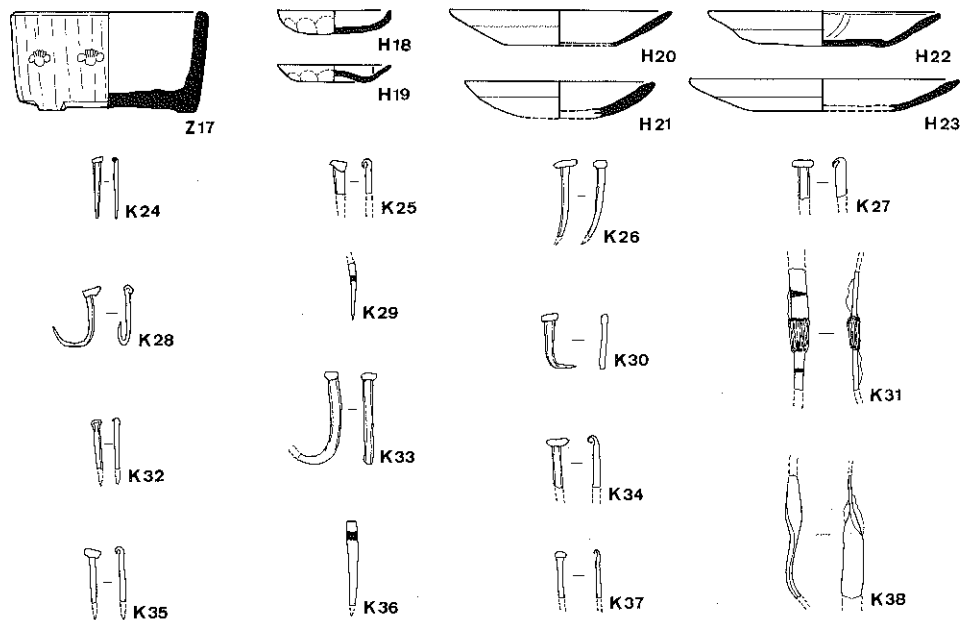
これらの土器は、S01が7世紀中葉に比定される以外、8世紀前半~中頃にかけてのものと思われる。

火葬跡SX01出土土器・金属製品(第11・12図) 土器には、瓦器香炉(Z17)と土師皿(H18~H23)がある。香炉は、底部に削り出しの低い脚を三方にもち、体部外面中央付近に梅花の押印を一定間隔で施している。外面はタテヘラミガキにより入念に磨かれている。土師皿は法量的に小皿、中皿、大皿の3種に分けることができる。小皿(H18・H19)は、口径6cm程のもので、手づくねにより整形している。中皿(H20~H22)は、口径10~12cm程のものであり、口縁部の強いヨコナデのために内面見込みに凹線がめぐるもの(H20・H22)とそうでないもの(H21)とがある。H20には口縁端部にススの付着が認められ、燈明皿として使用されたことが理解できる。大皿(H23)は、口径14cm程のもので、口縁部に強いヨコナデを施すため、内面見込みに凹線がめぐる。いずれも16世紀後半に比定できる。

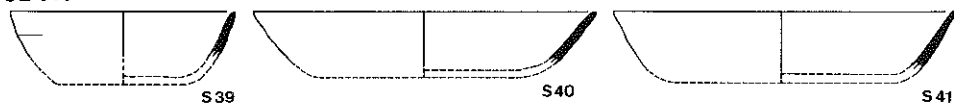
3・4BE包含層



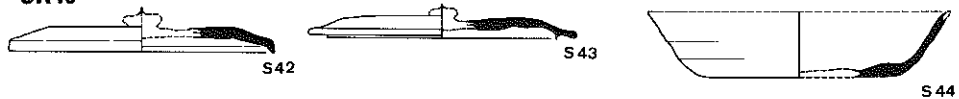
SX01



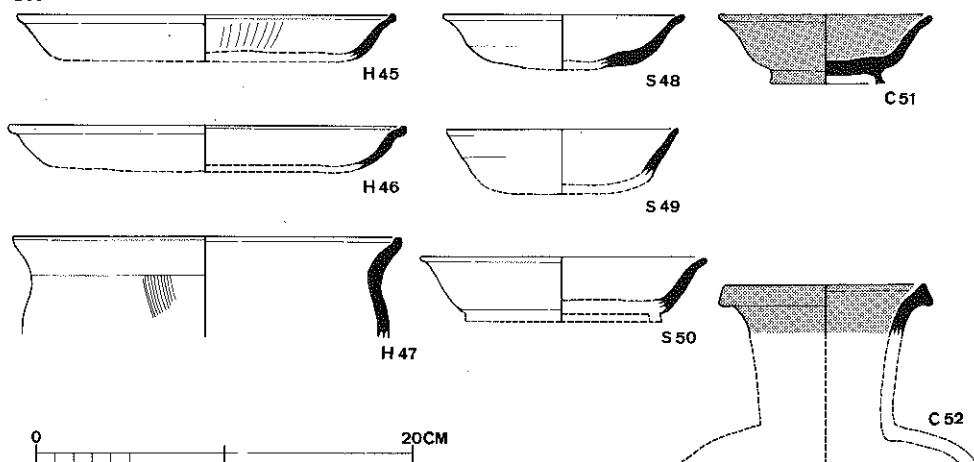
SB140



SK10



SK100



第11図 土器 (2)

付表1 火葬跡 SX01 出土銭貨一覧表

番号	名称	書体	初 鑄 年	素材	備 考
1	開元通宝		唐 武徳四年(621)	銅	他に2枚あり
2~4	祥符元宝		北宋 大中祥元年(1008)	銅	
5・6	祥符通宝		北宋 大中祥二年(1009)	銅	
7・8	天聖元宝	篆	北宋 天聖元年(1023)	銅	
9・10	景祐元宝	真	北宋 景祐元年(1034)	銅	
11・12	皇宋通宝	篆	北宋 宝元二年(1039)	銅	
13	治平元宝	真	北宋 治平元年(1064)	銅	
14	治平元宝	篆	北宋 治平元年(1064)	銅	
15	熙寧元宝	真	北宋 熙寧元年(1068)	銅	
16	元豊通宝	篆	北宋 元豊元年(1078)	銅	他に2枚あり
17	元祐通宝	真	北宋 元祐元年(1086)	銅	
18・19	紹聖元宝	篆	北宋 紹聖元年(1094)	銅	
20	聖宋元宝	真	北宋 建中靖国元年(1101)	銅	
21	洪武通宝		明 洪武元年(1368)	銅	
22	弘治通宝		明 孝宗弘治十六年(1503)	銅	
	不明			銅	1枚あり

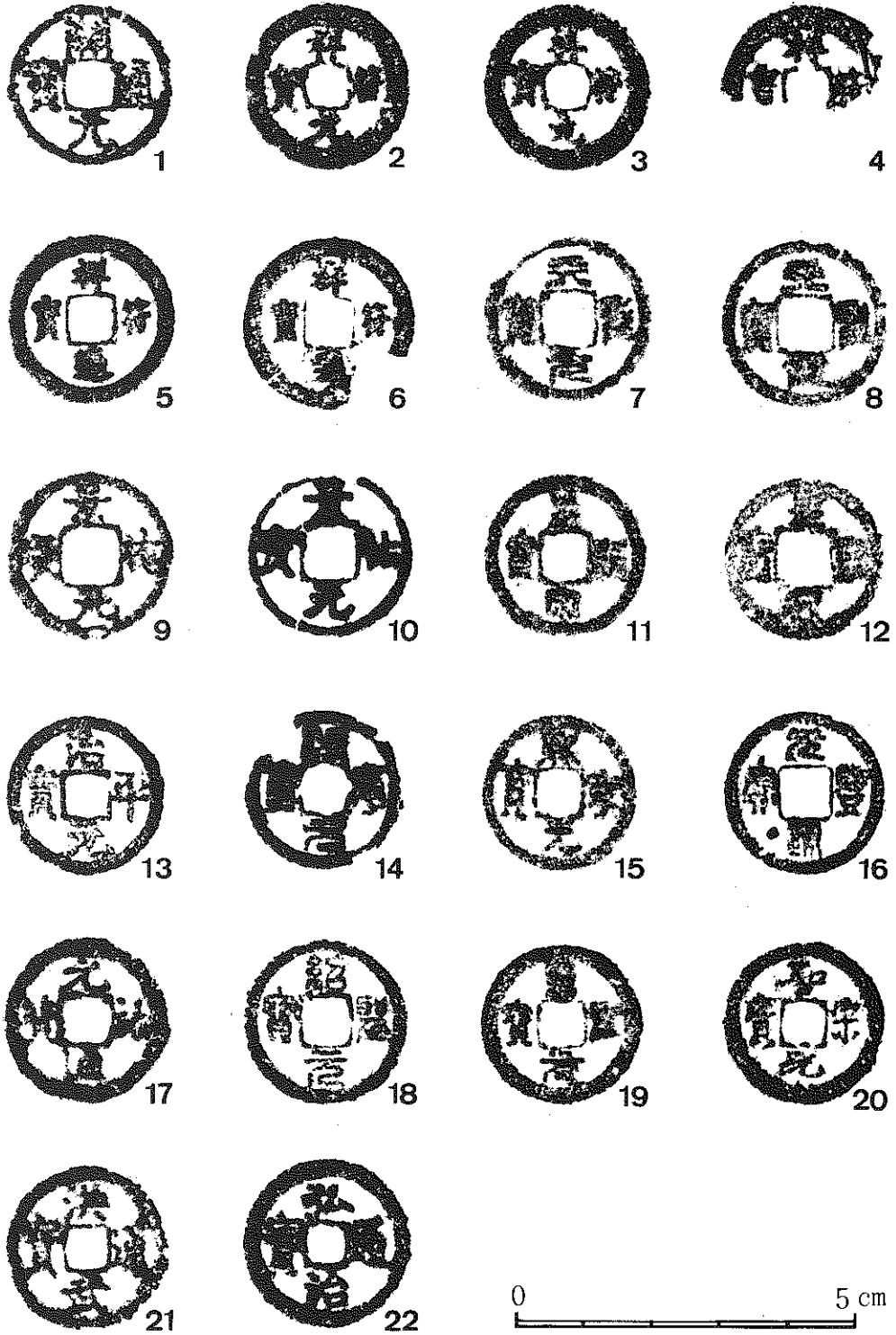
※番号は第12図と整合する。

出土銭貨は総数27枚あり、その内容は付表1に示したとおりである。判読可能な26枚はすべて中国銭であり、北宋銭を中心に古いもので唐の開元通宝、新しいものが明の弘治通宝である。出土状態では、2~5枚が錆びついて出土したものもある。遺存状況は、錆化が著しく良好とはいえない。このように、銭貨が中国銭のみにおいて占められているのは、江戸幕府開府以前の状況を良く示しており、銭貨による本遺構の年代は、上限を弘治通宝の初鑄年である1503年に、下限を江戸時代全般を通じて最も普遍的に使用された寛永通宝の初鑄年である1626年に置くことができる。

鉄製品には、釘・刀子・不明鉄器がある。釘(K24~K30, K32~K37)は13本出土しており、いずれも釘頭を片方に折り曲げた角釘である。長さ是一寸(K24・K30・K32・K35・K37)、一寸半(K26・K28・K36)と二寸(K33)の3種類がある。棺に使用されたものであると考えられる。K31は刀子の破片であり、K38は不明鉄器である。

掘立柱建物 SB140 出土土器(第11図) 柱掘方内より須恵器杯身の口縁部小片が出土している。

土壇 SK10 出土土器(第11図) 埋土内より土師器・須恵器等が出土している。土師器は遺存状況が悪く、その形状を窺うことのできるものはない。須恵器には杯がある。S42は口縁端部を下方に折り曲げる杯蓋であり、天井部中央に宝珠様のつまみが付くと思われる。



第12図 火葬跡 SX01 出土銭貨

A. 東中遺跡

S43 は口縁部内側に返りを有す杯蓋であり、天井部中央に宝珠様のつまみが付くと思われる。前者は 8 世紀前半に、後者は 7 世紀後半に比定できる。S44 は杯身であり、高台を付さない。

土壌 SK100 出土土器(第11図) 埋土内より、土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器が出土している。出土量は、コンテナ 2 箱分程であるが、細片が多い。

土師器には、杯・皿・甕等があるが、細片化が著しくその全容を知り得るものは少ない。H45・H46 は皿であり、ともに口縁端部を肥厚させている。H45 には、口縁部内側に一段の放射状暗文が認められる。H46 は風化が著しく不明。H47 は甕である。口縁端部をやや内側に肥厚させる。体部外面にタテハケが一部観察できる。口縁部内外面ともヨコナデを施す。

須恵器には、杯・壺がある。杯身には、高台を付すもの(S50)と付さないもの(H48・H49)の 2 者がある。杯蓋は、良好な資料はないが、いずれも天井部に宝珠様のつまみを付すものである。壺も全形を窺う資料はないが、体部片等が出土している。

緑釉陶器では、碗(C51)が 1 個体出土している。素地は須恵質に焼成されており、淡緑色の釉が全体に施されている。高台は貼り付け高台である。

灰釉陶器では、壺(C52)が 1 個体出土している。口縁部の小片であり、全形を窺うことはできない。内外面に淡黄緑色の釉が施されている。

土器の年代は、土師器・須恵器は 8 世紀代を中心とするものであり、緑釉・灰釉陶器は概ね 9 世紀後半代に比定できるものである。後者と同時期と考え得る他の土器は本土境内においては認められない。後者には混入品の可能性が否定できない。

掘立柱建物 SB150 出土土器 柱穴内より、11 世紀頃と思われる土師皿小片が、砂岩製の砥石とともに出土している。

その他 上述した遺構以外からも、土器等が出土しているが、いずれも細片でありその年代を知り得ない。また、表土層からは、近世陶磁器等が出土している。

I. 東中遺跡・菟道遺跡・滋賀谷窯跡発掘調査概要

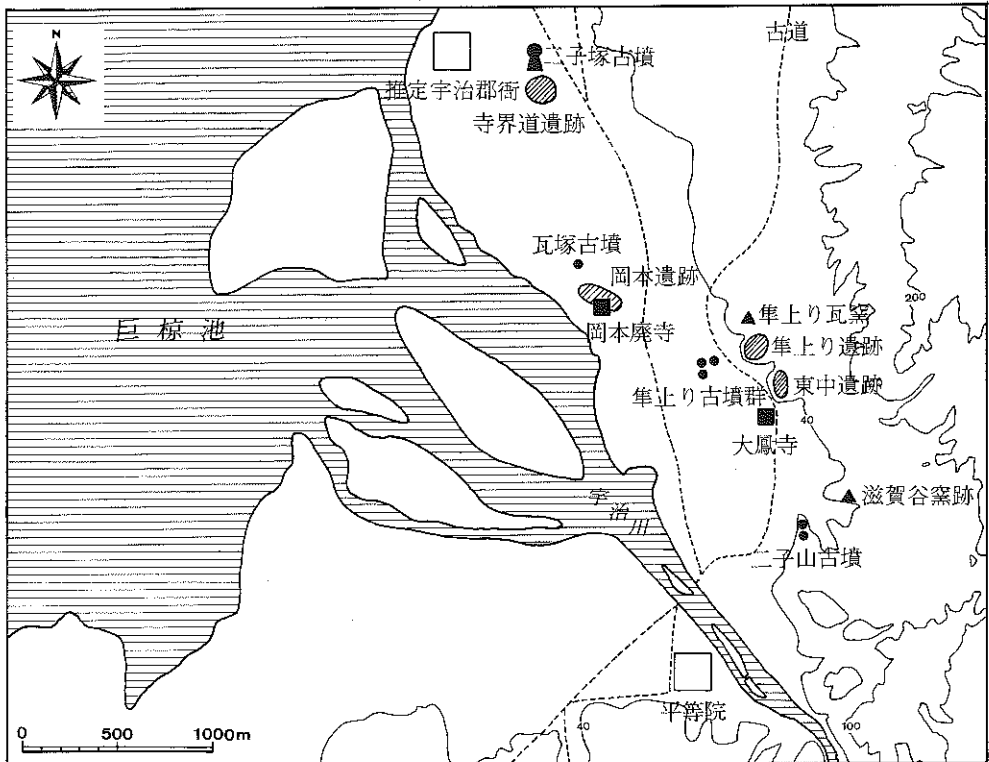
(4) ま と め

今回検出した遺構から、遺跡の性格についてその概略を記しまとめとする。

検出した遺構は、年代的には7世紀前半から16世紀後半までの時間幅を有しているが、その中心となる時期が7世紀後半から11世紀前半にかけてであることはすでにのべてきたところであり、この時期に掘立柱建物が建築され、集落が営まれていた。

宇治川東岸部における古代集落の実態については、いまだ不明な部分が多いが、五ヶ庄の寺界道遺跡・岡本遺跡のように標高20m程の平地に営まれる集落以外に、本遺跡を始め、本遺跡の北方300m程に位置する単上り遺跡のように、平地を見おろす低丘陵ないしは台地上に営まれる集落が存在することが明らかとなってきた。このような丘陵性の集落は、南隣の城陽市においても、芝山遺跡・芝ヶ原遺跡として認めることができ、当地方における古墳時代後半以降の一般的な集落動向として、丘陵地指向があったことを示しているようにも思える。しかし、また一方で本遺跡の場合には、すぐ西側の平地部に存在する大鳳寺跡との関係を無視するわけにはいかない。

大鳳寺跡は、過去の調査より7世紀後半に建立され、概ね13世紀頃まで存在していたことが予測される寺院跡である。その廃絶時期については、なお検討を必要とするが、出土遺物



第13図 古代の地形と主要遺跡

物の検討からは、10世紀中頃には衰退が始まっていることが指摘できる。

ほぼ同時期に至近距離の中で成立した両遺跡が全く無関係でありえた訳はなく、東中遺跡より一般集落では出土が稀な硯が発見されていることを考えれば、東中遺跡の成立とその廃絶に大鳳寺の動向が大きく関わっていたことはまちがいないであろう。

近世には、この大鳳寺跡周辺は「大鳳寺村」とされていた。この大鳳寺村は、明治8年(1875)に隣接する三室村と合併し、菟道村となりその村名を終えている。この村名は、現在の中では天正十三年(1585)の豊臣秀吉の朱印状の中に認められるものが最も古く、概ね中世末頃には現在の菟道の集落の原形が成立していたと考えられる。本遺跡で検出した火葬跡 SX01 は、この大鳳寺村のある時点での火葬地と見ることができる。

今回の東中遺跡の発掘調査は、面積的には予想される遺跡範囲のごく一部を調査したにすぎないが、遺跡の内容については一定の確認を行なうことができた。今後の周辺部分での調査により、この遺跡の実態がますます明らかとなることに期待したい。

(註)

註1. 「隼上り遺跡昭和58年度発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第11冊、京都府埋蔵文化財調査研究センター、昭和59年。

「京滋バイパス関係遺跡昭和59年度発掘調査概要」『同上』第16冊、同上、昭和60年。

「隼上り2号墳」『京都府埋蔵文化財情報』第15号、同上、昭和60年。

註2. 『大鳳寺跡発掘調査報告』宇治市教育委員会、昭和62年。

註3. 『宇治市史』第1巻、昭和47年。

B. 菟道遺跡

(1) 調査の経過

菟道遺跡は、菟道出口・谷下・中筋・門ノ前等の菟道地区の平野部一帯に広がる遺跡であり、東中遺跡と同様に市内遺跡詳細分布調査により確認したものである。遺跡内容は不明な点が多いが、奈良時代から中世に至る土器片等が広範囲に採集でき、長期間の集落跡と考えられる。

今回の調査地は、菟道河原の丘陵上であり、標高55m程を測る。同調査地は、菟道遺跡内には必ずしも含まれないが、道路予定地内の分布調査時に人為的に切り開かれた平坦地を発見したため、日本道路公団・京都府教育委員会と協議の結果、一定の試掘調査を実施することとなった。また、遺跡名称については、便宜上「菟道遺跡」内に含むこととした。

(2) 調査の概要

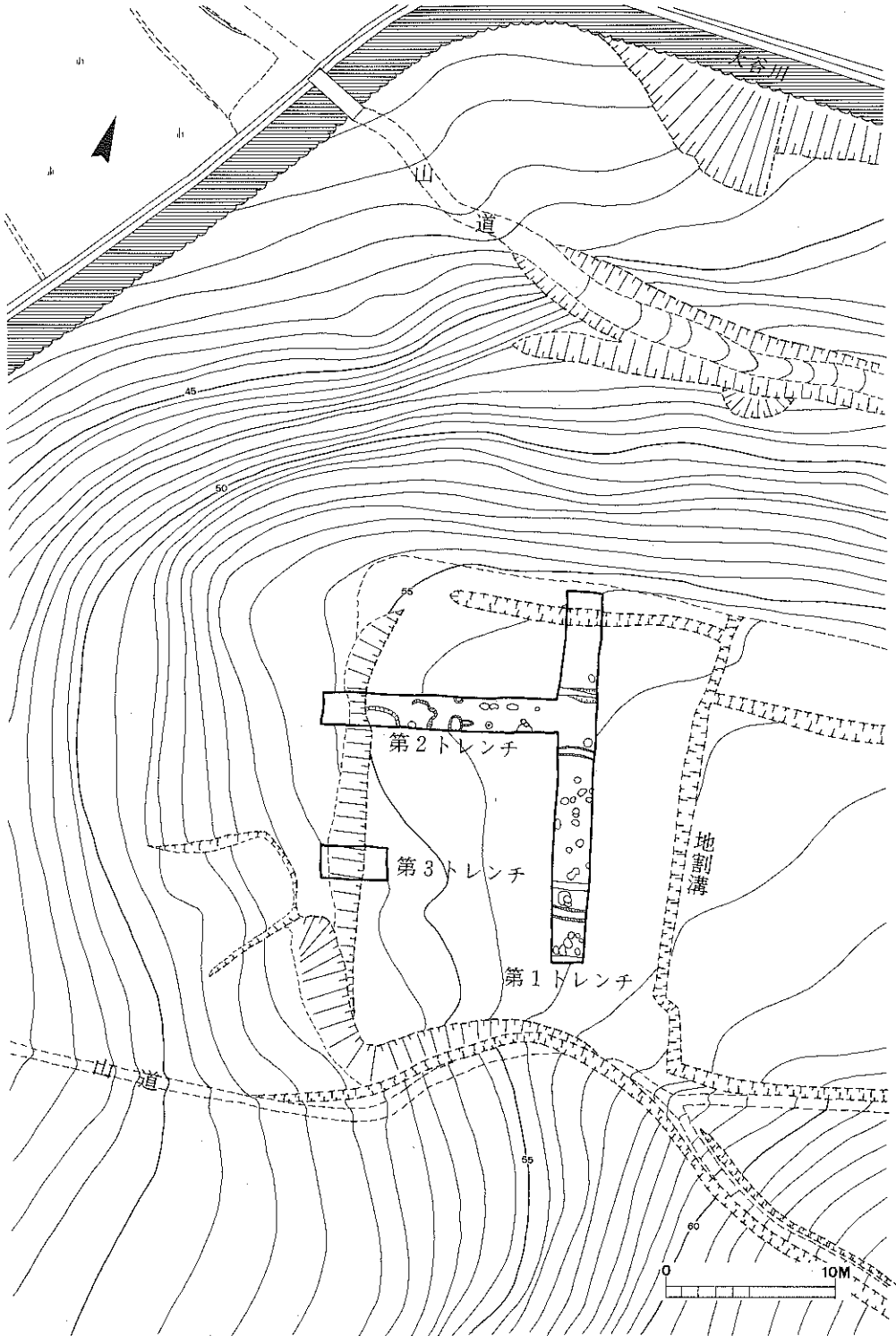
調査地は、平野部からの比高15m程の丘陵上に切り開かれた南北25m、東西40m程の平坦地であり、西方には菟道の集落を眺望することができる。調査地の現状は竹林である。

調査は、道路予定地内の樹木伐採後にトレンチの設定から開始した。トレンチは3カ所とした。平坦地を南北に貫く第1トレンチ(22m×2m)、東西に設定し第1トレンチに取りつく第2トレンチ(14m×2m)、第2トレンチ西端の平坦地終了部分を南側で確認する第3トレンチ(4m×2m)である。

掘削はすべて人力によって行なった。層厚0.2m程の腐植土層下に淡褐色土層が存在し、遺構はこの上面において検出できた。遺構は、不定形土壇・柱穴・溝等で、それぞれ余りまとまりをもたない。埋土中には炭・灰・焼土を混じえるものが多い。

出土遺物は、腐植土中ないしは遺構内より近世陶磁器・かんざし・ガラス器・棧瓦等がコンテナ6箱分出土した。

上記のことより、この平坦地は近世末から近代にかけての宅地跡であることが判明し、火災により廃絶したことが理解できたため、当初の計画をもって現地調査を終了することとした。



第14図 調査地全図

C. 滋賀谷窯跡

(1) 調査の経過

滋賀谷窯跡は、菟道滋賀谷・只川に所在する2基の須恵器窯であり、今回の調査により初めてその所在が明らかとなった遺跡である。

この窯跡の発見の契機は、昭和60年度に三室戸寺駐車場西側の平地部を菟道遺跡として調査した結果、平安時代から室町時代にかけての土器等とともに、7世紀後半頃に比定される須恵器片が数多く出土し、その中に焼け歪みをしたものや、須恵器同志がくっついているものが含まれていたため、これらの須恵器が生活に使用され廃棄されたものではなく、生産時の破損により廃棄されたものであることが理解できたからである。このため調査地(第3トレンチ)北側の戦川を挟んで東西にのびる丘陵斜面の踏査を行なった結果、ちょうど第3トレンチ北側の丘陵斜面において、須恵器片や窯壁片が散乱する所を発見し、ここに新たな窯跡の発見となったのである。

この窯跡の発見は、当初の全体的な調査計画の一部変更を必要としたため、第3トレンチの調査終了後に、日本道路公団と京都府教育委員会と本市の特別対策室及び本市教育委員会の4者で協議を行ない、まずは、その正確な位置及び基数の確認を早急に行うこととなった。このため、本市教育委員会は奈良国立文化財研究所に窯跡の磁気探査を依頼し、昭和60年9月26日に西村康氏の派遣を受け探査を実施した。

探査の結果、1基ないし2基の窯が道路予定地内に存在することが明らかとなったため、再び4者による協議を行い調査の時期や工事の計画等を検討することとなった。

窯跡の調査は、工事計画の諸事情により昭和61年5月20日より開始することとなった。また、道路予定地が当初より西へ若干変更されたため、窯の本体部は道路予定地外となったが灰原や窯の他の施設及び窯体の一部を確認するための最大限の調査を実施することとなった。

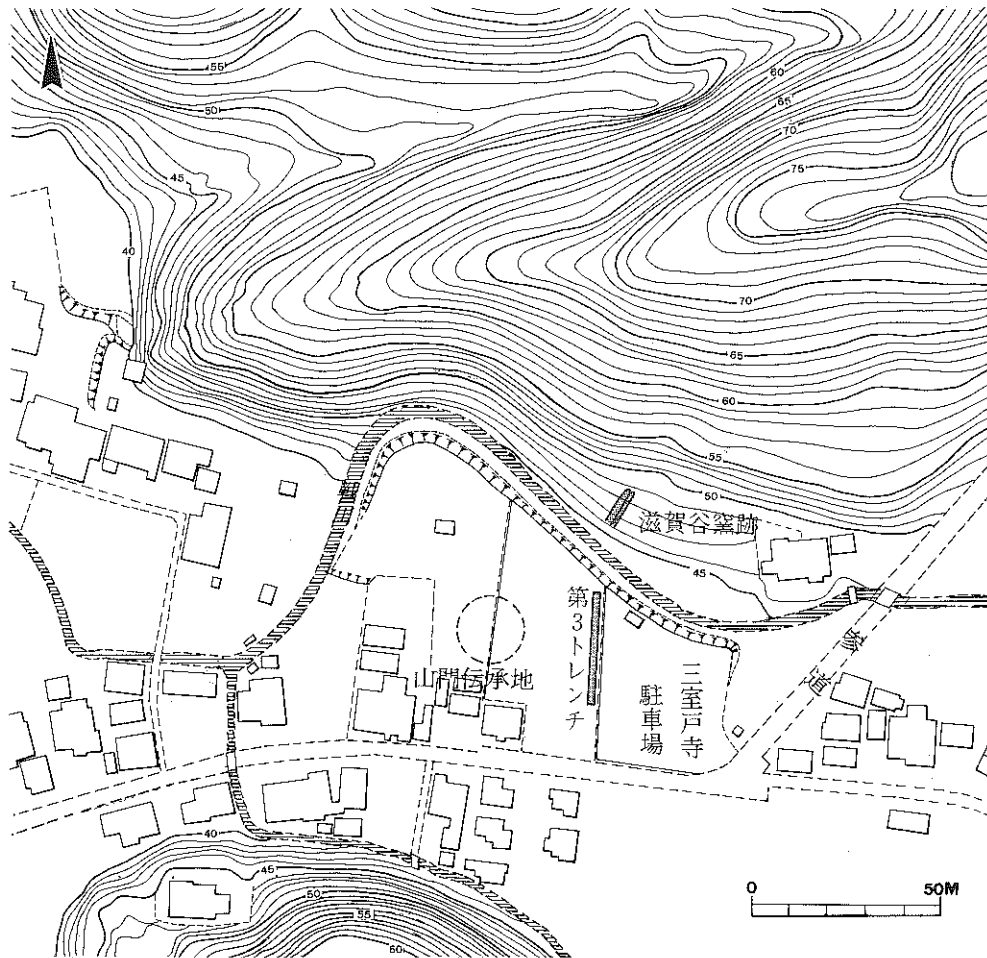
以上のような事情のため、昭和60年7月17日から同年8月20日まで実施した駐車場横の菟道遺跡の調査地は、本報告では滋賀谷窯跡第3トレンチとして取り扱うこととし、最終的には窯に伴う灰原のためのトレンチというものとなった。

窯跡部の調査は、土取りによる窪みや崖を利用しながら第1トレンチと第2トレンチの2つのトレンチを設定し、人力による掘削を行い窯の検出に努めたが、第2トレンチにおいて窯の断面を検出したのみに留まり、他の部分では後世の土取りにより旧状が大きく改変されていたため、遺構の検出はできなかった。したがって、これ以上の調査の必要性は無いものと判断し、現地調査を終了した。

(2) 窯 跡

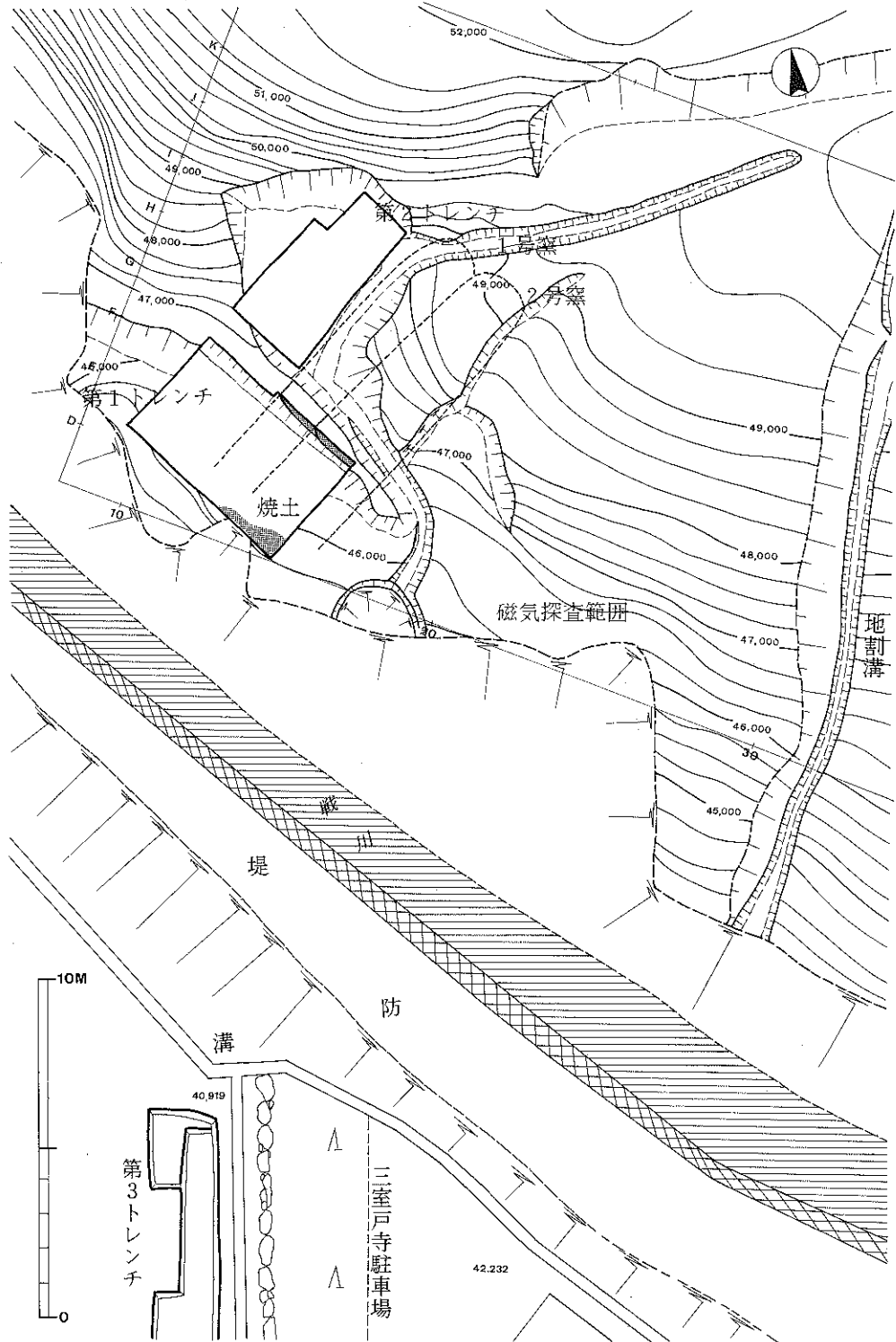
窯跡は、三室戸寺の駐車場北側の丘陵南斜面にあり、現状は竹林である。丘陵裾には戦川が裾をえぐるように流れている。窯跡は川によって作られた崖面のすぐ上に存在しているため、崖面には須恵器片・窯壁・焼土等の混在した土層が確認できた。

磁気探査により窯跡が予測される部分の地形は、土取りにより大きく地形を改変されており、旧状を留めている部分は皆無に近い状態であった。土取りにより削り残された土手状部分、後の第1トレンチ北壁部分では調査前から須恵器片・窯壁片が露出していることが認められたため、ここにトレンチを設定し窯跡の状況を調査することとした。この第1トレンチの調査を実施してゆくなかで、窯跡はより上方に拡がる事が予測されたため、第1トレンチ北側に、道路予定地東側いっばいに第2トレンチを設定し窯の有無を調査することとした。以上の各トレンチの概要は次に報告するとおりである。



第15図 調査地周辺の地形

I. 東中遺跡・菟道遺跡・滋賀谷窯跡発掘調査概要

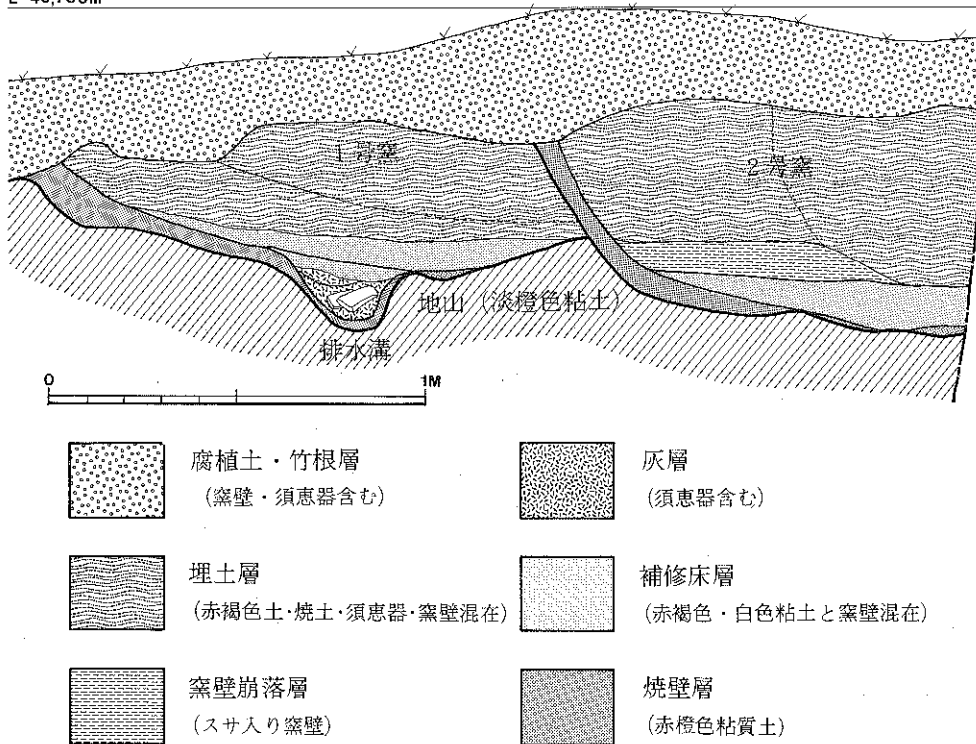


第16図 窯跡全図

第1トレンチ 第1トレンチの状況は、後世の土取りにより削り残された土手状部分(トレンチ北壁)において窯の断面を検出した。他の部分は、後世の土取りがそうとう深く及んでいたため、窯体はすでに完全に削り取られており、トレンチ南端の一部で若干の焼土を検出したにすぎない。断面において検出した窯跡は、2基が重複して築窯されており、古い方を1号窯、新しい方を2号窯とした。

1号窯は、検出幅1.5m程で窯床から0.4m程の高さまで遺存していた。床の中央部には幅0.3m、深さ0.2m程の排水溝と思われる落ち込みがある。窯は淡橙色粘土の地山を直接に穿って築かれており、窯と地山との境は地山が高温で赤橙色に変化し焼壁層となっている。断面にはスサ入り粘土を地山に塗り付けた窯壁の痕跡は認められないものの、埋土中から窯壁片が多量に出土するため、本来は築窯のために地山を掘削した後にスサ入り粘土により窯壁を構築したものと考えてまちがいない。1号窯には1回ないし2回の床面補修の痕跡を見出すことができる。それは、排水溝が灰層により一定埋没した後に上面を白色粘土で被覆している事より理解できる。ただ、この白色粘土層は、排水溝部分のみを覆う下層と床面全体を覆う窯壁・須恵器片を混在した上層とに分層でき、この両層の解釈のしかたにより1回の補修か2回の補修かに分かれるが、今回の調査では検出部分が広いとはいえないためその

L=46,700M



第17図 窯体断面図

1. 東中遺跡・菟道遺跡・滋賀谷窯跡発掘調査概要

どちらとも決し難い。窯の埋土は焼土・窯壁・須恵器片が混在する赤褐色土であり、下層部分に窯壁が顕著に認められた。

2号窯は、1号窯が廃絶し埋没した後にその東壁の一部を破壊し築窯されている。窯の東側は調査地外のため、その幅を知り得ないが、検出幅1.2m、遺存高0.5m程であり、1号窯より若干深く地山を削り込み築窯されている。1号窯に認められる排水溝は2号窯には存在しない可能性が高いが、他の部分は基本的には1号窯と同じである。2号窯も1号窯と同様に床面の補修を実施しており、その回数は1回と考えられる。床面の補修にあたっては、須恵器と窯壁の混在する赤褐色ないしは白色粘土を厚さ0.1m程で床全面に被覆し高上げを行っている。この補修床面上の西側には窯壁が厚さ0.1m程で堆積している部分があり、窯の西側窯壁が一挙に崩落した事が理解できる。この窯壁層の上には須恵器片や焼土等を混じえた埋土が存在しており、窯壁崩落後に窯は使用されなかったことがわかる。ただ、この窯壁崩落のため窯が廃絶したのか、窯の廃絶後ほどなく自然崩落したのかは不明といわざるを得ない。第1トレンチ南東端部で検出した焼土層が2号窯の一部を示すと考えれば、磁気探査の反応等を考慮して概ね全長10m程に復元が可能である。

第2トレンチ 第1トレンチ北西の第2トレンチでは、遺構は一切確認できなかった。これは、土取りによりこの部分が大きく破損していたためである。ただ、トレンチ東及び南壁の一部で焼土・炭等を混じえた土層を確認したが、これらも後世の土取りにより窯の一部が破壊されそれが形成された層と考えられる。

(3) 灰原

窯と戦川を挟んだ平地部に設定した第3トレンチ北端部にて灰原の2次堆積層を検出した。窯の位置から考えて、灰原は第3トレンチより西側に形成されている可能性が高い。しかし、前述したごとく窯の存在する丘陵の裾部には戦川が丘陵裾を切断するように流れており、灰原がどの程度遺存しているかはやや疑問が残る。以下に第3トレンチの概要を記す。

第3トレンチ 第3トレンチは、窯の調査の前年に調査した所であり、滋賀谷窯跡発見の契機となったトレンチである。トレンチ幅2m、全長32mの南北に細長いトレンチで、その北端部で灰原の2次堆積が、他の部分で戦川の旧流路や井戸等が検出された。

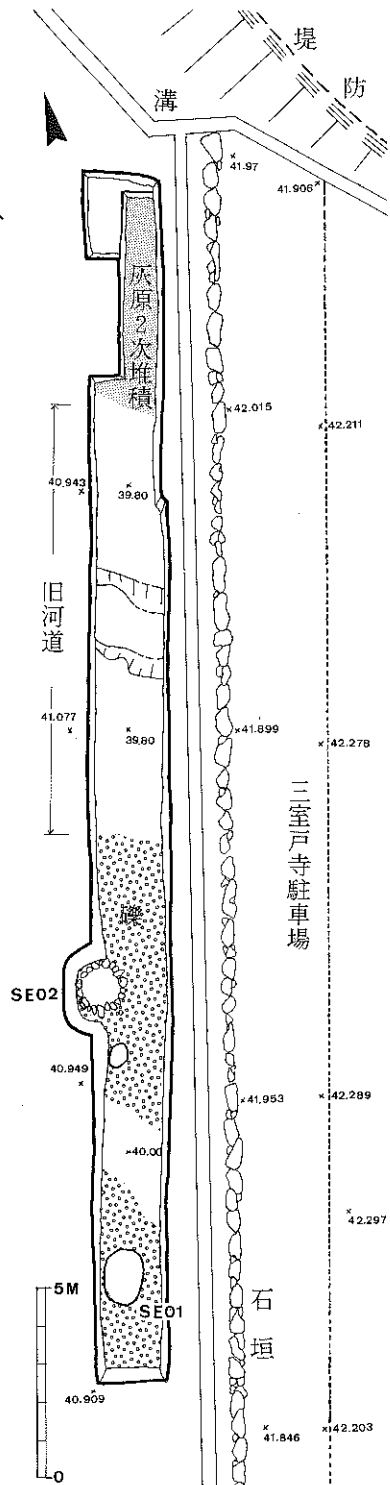
トレンチの基本土層は、上から層厚0.3m程の表土及び水田床土層がありその下に3層に分層できる厚さ0.4m程の中世遺物包含層がある。これらの下に遺構面が存在するが、その基盤となる地山は北端部と他の部分と相異なる。北端部の地山は黄褐色混礫土であるのに対し南部では黄灰色砂礫土となる。これは、北端部が窯の存在する丘陵末端部にあたるのに対してトレンチ南半部では谷部にあまっているためである。

灰原の2次堆積層は、黄褐色混礫土の地山上に広がっており、厚さ0.3m程で2層に分層

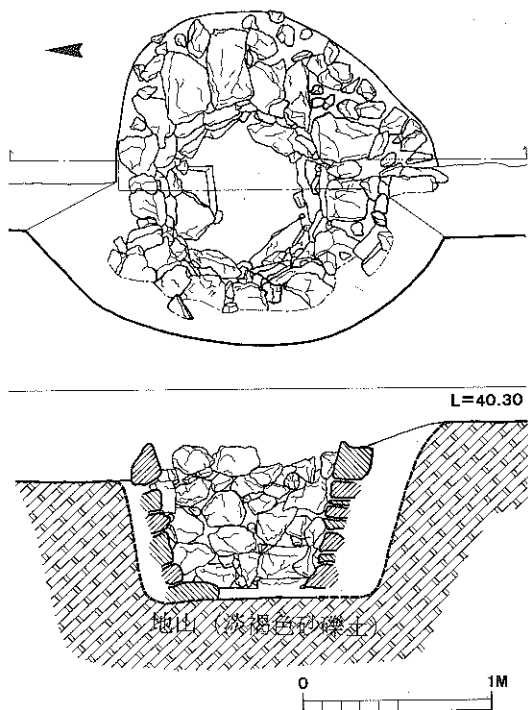
できる。上層は灰褐色砂礫土であり下層は青灰色砂質土層である。これらの層中から若干の灰・炭とともに須恵器片・窯壁片が出土し、またその土層の状況や須恵器の出土状態からは、これらが灰原本体ではなく、その2次の堆積層であることが理解できた。灰原の2次堆積層は、基本的にはトレンチ全体を覆う中世遺物包含層下に形成されており、後述する戦川の旧河道の北岸部までの広がりをもつ。

トレンチ中央部で検出した旧河道は、現在の戦川が流路変更される前の川筋であり、川幅11m程を測る。旧河道の北岸は黄褐色混礫土の地山を削り、南岸は黄灰色砂礫土の地山を削る。埋土は、砂層・砂礫層等が検出面より-0.5mまで堆積していたが、それ以下は激しい湧き水のため調査が不可能であり、河床は未検出状態である。旧河道の埋土中からは、須恵器を始め瓦・中世陶器・土師皿等の中世遺物や木材片が出土したがいずれも細片化していた。また、埋土の上層には竹の根と腐植物が薄く堆積している所があった。旧戦川は川幅11m程の範囲の中で幅数m程の流路が水量によりその幅を増減しながら西に流れており、その北岸部には竹藪が展開していた光景がそこからは読みとることができる。

この旧河道南岸部には、トレンチ南端部に至るまで人頭大ないしは拳大の河原石が一面に堆積していた。河原石の堆積は、所々において大型のものが直径2m程の円形に集中する部分が3カ所認められた。この内の一つは石組井戸 SE02 の石組崩落であるが、他の2つは地山上に無造作に積みあげられているのみであり、河原石中央に広葉樹の円柱を埋めこんであるものもあった。人為的に構築されたものと思われるがその性格は不明と言わざるを得ない。旧河道南側に広がる河原石の堆積は、やはり戦川により形成されたものであり、戦川の旧河原と言える。したがって後述する井戸や前述した人為的に



第18図 第3トレンチ



第19図 井戸 SE02

測る。井戸枠は木桶だったらしく、その竹の「たが」が遺存していた。井戸というよりは水溜めのなものと思われる。井戸内よりの出土遺物はなく、付近より備前焼大甕の口縁部片が出土したのみである。

(4) 遺物

今回の調査で出土した遺物は土器類を中心にコンテナで10箱分程ある。その内容は、須恵器の杯・壺・甕、土師器の皿・高杯、瓦器の椀・桶・火舎・羽釜、中世陶器のスリ鉢・鉢・甕・瓶子、輸入磁器の椀、瓦類等である。この内、須恵器は滋賀谷窯跡に関する遺物であり、第1トレンチ及び第3トレンチより出土している。他の器種は第3トレンチの中世遺物包含層及び遺構より出土した中世遺物である。以下にその概要を報告する。

窯体出土土器(第20図) 第1トレンチより出土した土器群であり、須恵器がコンテナ5箱分程出土している。器形としては杯を主体的に壺・甕等であり、後2者には良好な個体はない。窯跡が1号窯と2号窯とに分けられることは前項でのべてきたが、ここに図示した土器の多くはトレンチの表土ないしは窯の埋土等より荒掘作業実施時に出土したもので遺構に伴うものではない。したがってここでは、この土器群を窯体出土土器として一括に取り扱い灰原2次堆積出土土器と区別する。

杯蓋(S53~S60)は、口径15~17cm程、器高3cm程で天井部に宝珠様のつまみを付すも

造られた河原石の円形集積は、増水時には冠水の危険性のある戦川の河原部に構築された遺構となる。

石組井戸 SE02 は、トレンチ中央部の西壁ぞいで検出した遺構であり、検出時は石組の上部が崩壊し、井戸内に落ち込んだ状態であった。井戸の掘方は不整円形で、南北1.7mを測る。この中に大ぶりの河原石を木口積みにし、円形の石組を築いている。石組の内径は底面で約0.6m、遺存部上面で約1.0m、遺存高は約0.8mである。井戸内からは、多くの木材と瓦質の桶底部片が出土した。

井戸 SE01 は、トレンチ南端部の中央部分で検出した楕円形井戸である。南北約1.4m、東西約1.0m、深さ約0.3mを

のである。口縁部は、その端部を短く垂下させるもの(杯蓋Cとする)で、他の形態はない。

杯身には、底部に高台を付すもの(杯身Cとする)と付さないもの(杯身Bとする)の2者がある。杯身B(S66~S70・S73~S76)は、口径11~13cm程、器高3~4cm程であり外底面はヘラ起こしのままである。S66は杯身Bの中では例外的に小型品であり、他と同一には取り扱えないものである。杯身C(S61~S64・S71・S72)は、口径12~16cm、器高4cm程であり、断面台形の高台が底部外周寄りに付されている。出土量は杯身Cより相対的に少ない。また、杯身B・Cの内底面にはヘラ記号を持つもの(S71~S76)がある。ヘラ記号の全体が知り得るものはすべて「×」書きである。

S65は、短頸壺の体部中央付近に時々一対付することがある把手部片と思われる。この他に図示はしなかったが、壺の体部片、外面に平行タタキ、内面に同心円文をもつ甕の体部片、長さ11cm程の把手状土製品や瓦質の土製品も出土している。

灰原2次堆積出土土器(第21図) 第3トレンチの北端部より出土し、滋賀谷窯跡の灰原の2次堆積出土と考えられるものは、須恵器ばかりコンテナに3箱分程ある。器形的には、杯を主体に壺・甕が見受けられるが、後2者の遺存状況は良くない。

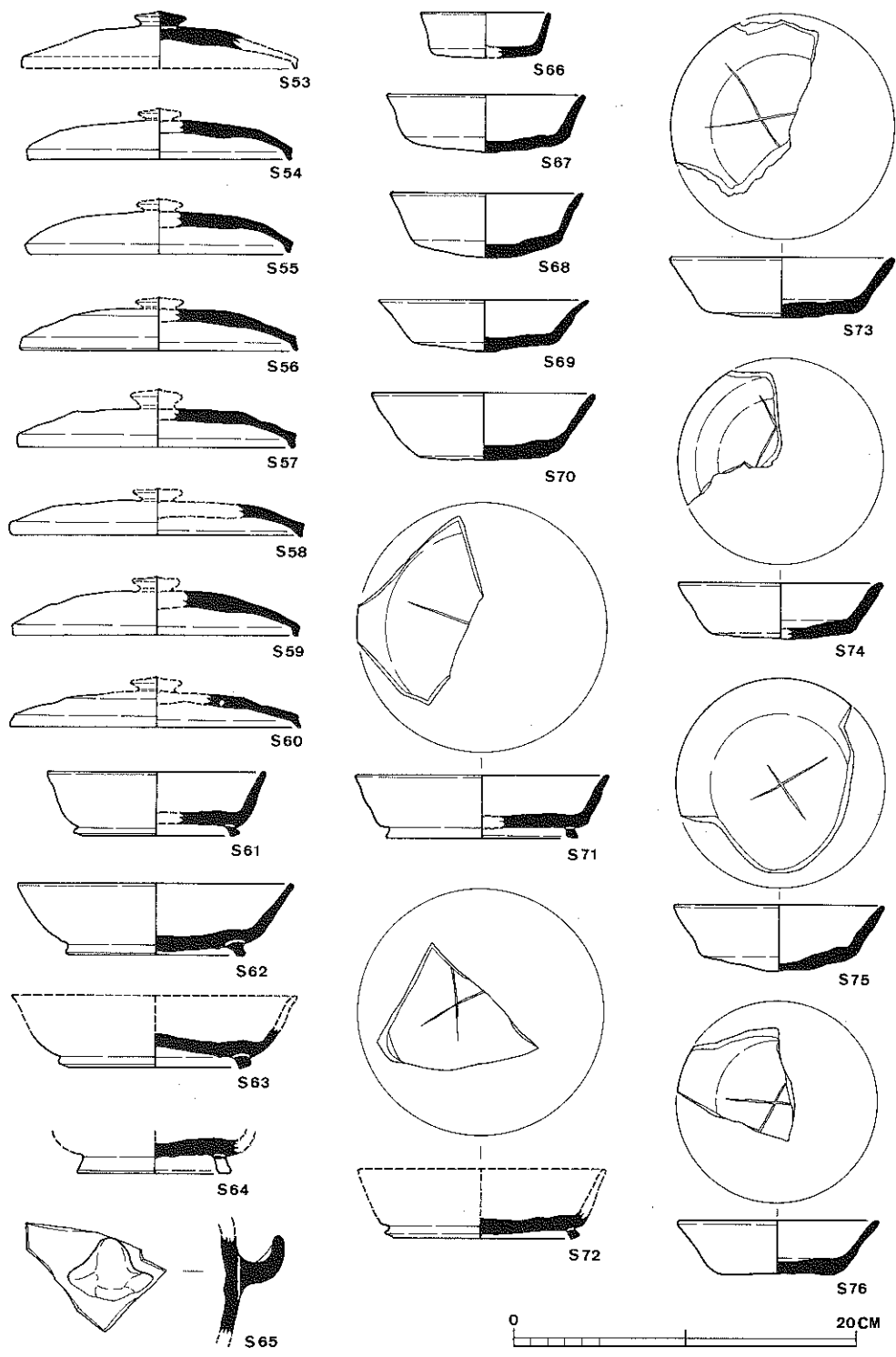
杯蓋(S77~S90)は、口径11~18cm程、器高3cm程で天井部中央に宝珠様のつまみを付すものである。口縁部の形状は、内面にかえりをもつもの(杯蓋Bとする)と杯蓋Cとが見られるが、前者の方が圧倒的に多い。杯蓋BはS78~S80・S82~S86・S88~S90であり、杯蓋CはS77・S81・S87である。

杯身(S91~S111)には、杯身B(S91~S105)と杯身C(S106~S111)とがある。杯身Bは、口径10~16cm程、器高3~4cm程であり外底面はヘラ起こしのままである。S103は口縁端部が内側に屈曲するもので特異な杯である。S103・S105は、重ね焼きのまま熔着したもので、器壁の所々に火ぶくれが認められる。杯身Cは、口径15~19cm程、器高5~6cm程であり、やや外方にふんばる断面台形の高台が付く。S111の高台は高く、出土例中では古式の部類に属する。ヘラ記号は一切認められない。

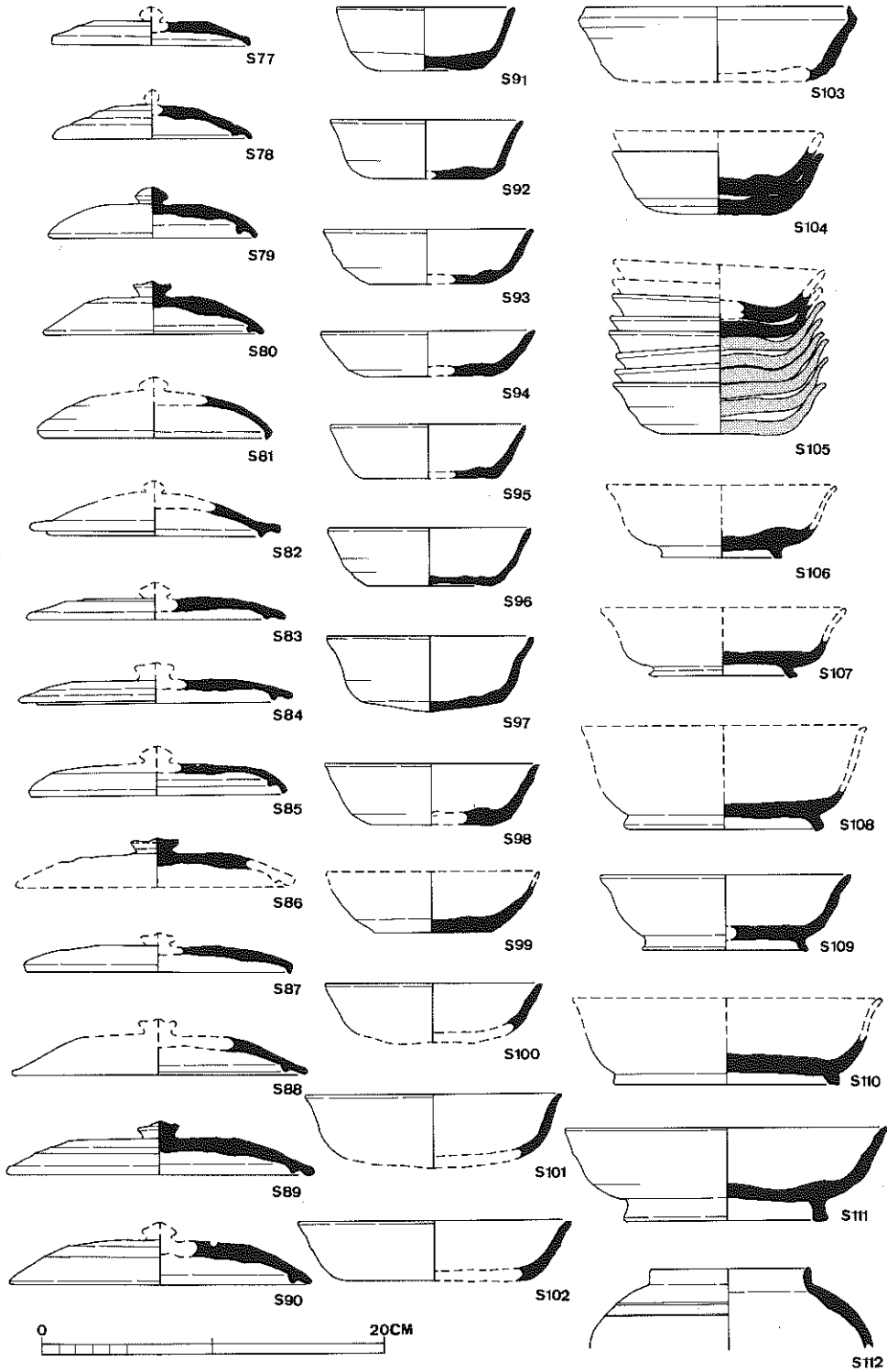
S112は、短頸壺の上半部であり、肩部に2条の沈線を施す。図化はしなかったが、壺類はこの他にも長頸壺の頸部や形式は不明だが底部片等が若干出土している。甕類は体部片がほとんどで、この中には杯蓋Bが体部外面に熔着しているものも認められる。

第3トレンチ出土中世土器(第22図) 第3トレンチで出土した中世土器の器種には、土師器・須恵器・瓦器・中世陶器・輸入磁器があり、コンテナで3箱分程出土している。

土師器は出土量が最も多い器種で、皿・台付皿・高杯等の器形が認められる。皿は所謂「土師皿」と呼ばれるもので、形態的には口縁部を「て」字状に屈曲させるもの(H113~H118)と単純におさめるもの(H121~H130)とがある。また、後者には口縁部に2段のヨコナデを

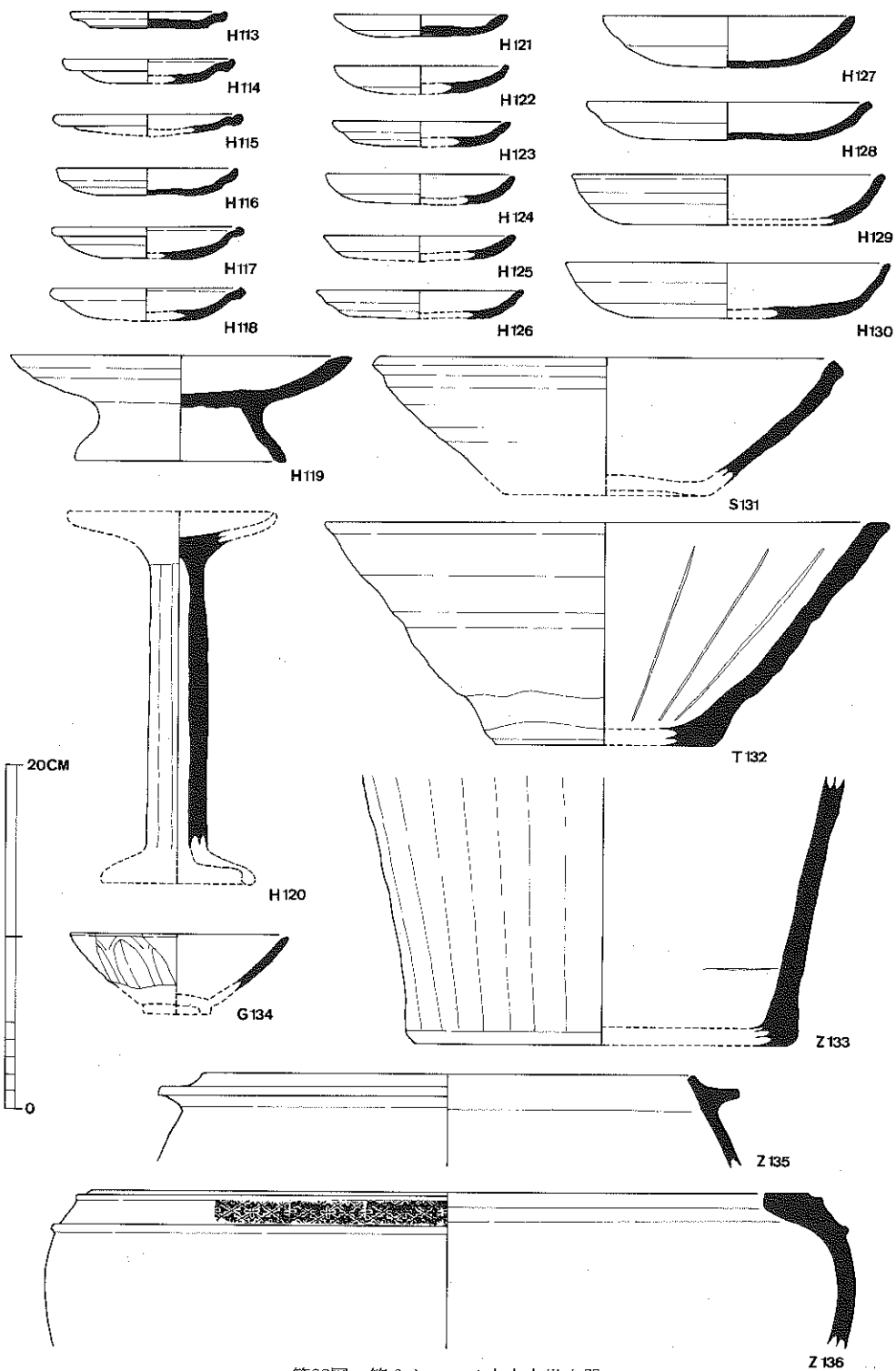


第20図 窯体出土土器



第21図 灰原2次堆積出土土器

I. 東中遺跡・苑道遺跡・滋賀谷窯跡発掘調査概要



第22図 第3トレンチ出土中世土器

施すもの(H123・H126・H129・H130)がある。法量的には口径9~12cmの小皿(H113~H126)と口径15~19cmの大皿(H127~H130)とに分けることができ、口縁部が「て」字状に屈曲するものは前者のみに認められる。H119は台付皿で、口縁部に2段のヨコナデを施す大皿に高さ3cm程の脚台を付している。H120は高杯の脚柱部で、外面を多角形状に面取りしている。

須恵器は、S131のネリ鉢のみであり東播州産と考えられるものである。

瓦器には、鍋・羽釜・桶・火舎等の器形が認められる。Z135は羽釜の口縁部で、口縁部下には鏝がめぐる。Z133は、石組井戸 SE02内より出土した桶下半部分で、外面は丁寧なヘラミガキを行う。Z136は火舎の口縁部分で、口縁部の2条の凸帯間にはスタンプによる菱形文様が施されている。

中世陶器には、スリ鉢・大甕・瓶子などがある。T132は紫香楽焼と思われるスリ鉢で、内面に1条単位の条痕が施されている。使用による摩耗が顕著に認められる。大甕は備前焼と思われるもので、口縁部が玉縁状になっている。瓶子は口縁部小片が出土しており、鉄釉がかかっている。瀬戸産と思われる。

輸入磁器には、椀と合子がある。G134は龍泉窯系の青磁椀であり、外面に蓮華を陽刻している。合子は身の小片が出土している。白磁であり、外面にはやはり蓮華の陽刻がある。

以上の中世土器は、年代的には12世紀頃より16世紀頃までの幅を持ち、資料的には一括性に乏しい。

(5) ま と め

以上、滋賀谷窯跡の遺構・遺物の状況を報告してきたが、ここでは再度それらを整理し、窯の変遷・年代と中世遺物について若干の考察を行ないまとめとしたい。

窯の変遷・年代 滋賀谷窯跡の窯の変遷が1号窯から2号窯へと移り変っていることは、窯の土層断面より明白であり、1号窯が完全に埋没した後に2号窯がその一部を削り掘りぬかれている。この窯の変遷で問題となるのは、2号窯の築窯が1号窯の廃絶後に直ちに行なわれたのか、一定時間経過の後に新たに築窯されたかである。今回の調査では、検出面積の少なさと土層深くまで侵入していた竹根に阻まれてこの問題に対する明確な証拠は見発できなかったものの、1号窯床面に窯壁の崩落が余り認められなかった事を積極的に理解すれば前者の可能性が高いと言える。では、遺物からはどうであろうか。

前項では、遺物を「窯体出土土器」と「灰原2次堆積出土土器」の2群に分けて報告した。この両群とも一括性には乏しいが、内容的には一定の差異が認められることは前述のとおりである。年代的には灰原2次堆積出土土器が7世紀後半、窯体出土土器が8世紀前半である。現状では、この幅の中に滋賀谷窯跡の操業期間を求めることができる。では、これらの土器

I. 東中遺跡・菟道遺跡・滋賀谷窯跡発掘調査概要

がいずれの窯の製品なのか若干の検討を加えてみたい。窯体出土土器で確実に各窯床面より出土したものはないが、ここにおける須恵器杯には杯蓋Bが全く見受けられず、杯蓋Cからのみ構成されている。これは、調査状況を考慮しても、1号窯の末期には杯蓋Bはすでに生産されておらず、杯蓋Cに転換していた可能性を示しているように思える。このように仮定すると滋賀谷窯の変遷は次のようになる。

1号窯前期(杯蓋B)→1号窯後期(杯蓋C)→2号窯(杯蓋C)

灰原2次堆積出土土器は以上のことから1号窯創業時に近い時期のものとなり、1号窯から2号窯への移り変わりはさほど時間が経過していないと思われる。

中世土器と三室戸寺 西国十番札所として巡礼の絶え間ない三室戸寺は、「明星山三室戸寺」と号し、本山修験宗の寺である。もとは天台宗寺門派に属し、『行尊巡礼記』によれば寺の建立は10世紀とされ、また、寺伝によれば奈良大安寺の僧行表の開山としている。しかし、いずれにしろ正確な寺の開創時期は不明点が多い。康和元年(1099)の頃、修験僧隆明(中興開山)が大いに伽藍を修造したらしいが、度重なる兵火により衰亡し、文明年間(1469～1486)、後土御門天皇の勅命により再興され現在に至っている。

今回の調査で出土した中世土器がこの三室戸寺といかなる関係を持つかについては今後の周辺部の調査に期待しなければならないが、土器が康和元年の中興以降に比定されるものより見受けられ始めることは注意してよい。また、現在の戦川は、地形にさからって丘陵端に付け換えが行なわれている。しかし、12世紀から14世紀頃の流路は第3トレンチ中ほどを流れていたことは確実であり、その後、何らかの事情により一部の流路変更が行なわれていた。この流路変更については、現在その事情を窺うことはできないが、かつては第3トレンチ西側に山門があったといい、その伝承地がちょうど戦川旧流路推定線近くになる。戦川の流路変更がこのような伽藍整備事業の一環として実施された可能性は否定できない。

今回の滋賀谷窯跡の発見により、市域宇治川東岸部における窯業遺跡は9遺跡となった。この狭長な地域にこのように窯業遺跡が集中することは、小規模ではあるもののやはり窯業適地として意識されていたことは間違いなく、今後、さらに綿密な調査が当地域の丘陵部では必要となろう。

付 載

滋賀谷窯跡の磁気探査の結果

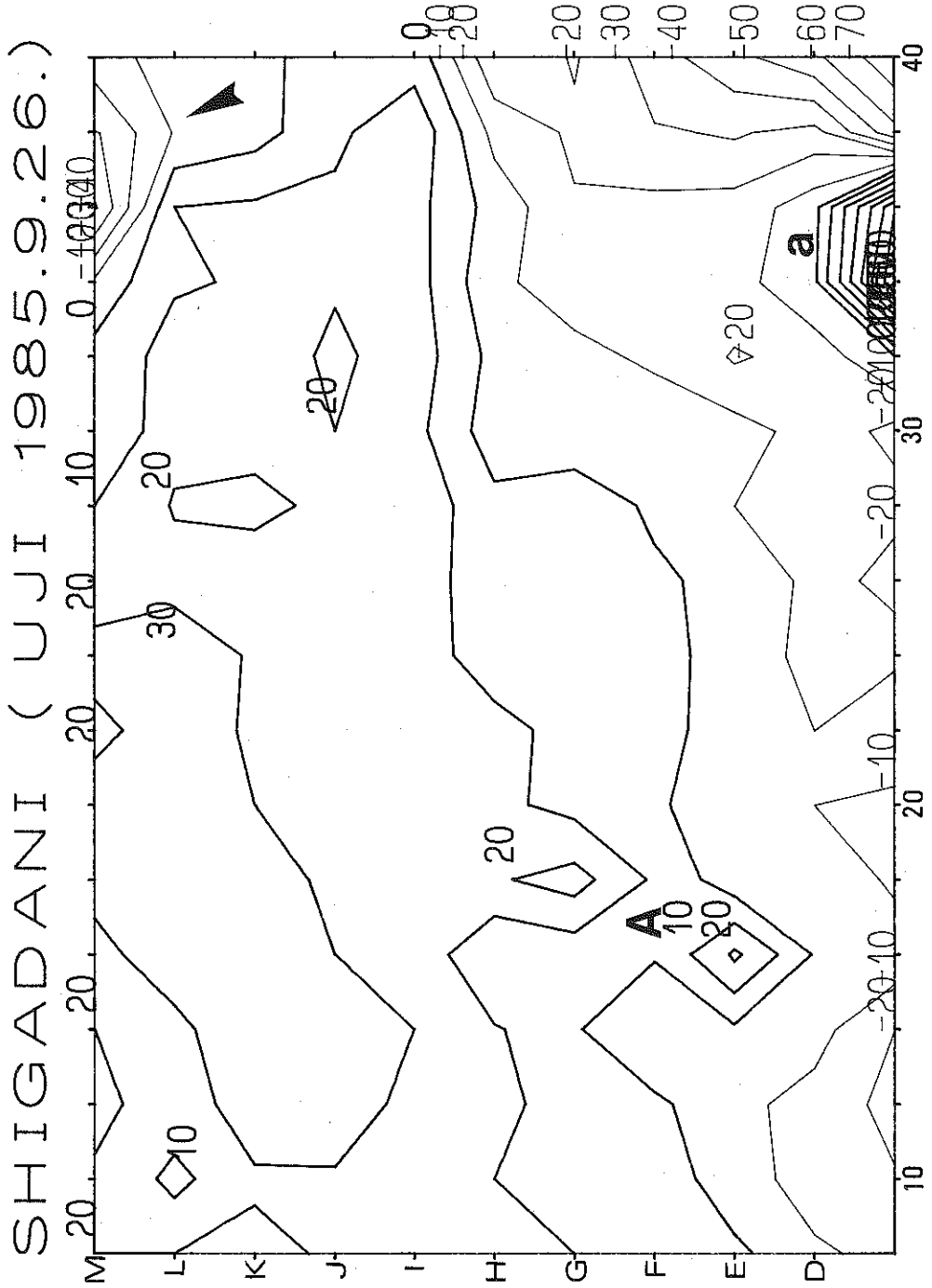
奈良国立文化財研究所 西 村 康

磁気探査は、地下遺構が地磁気へ与えている、局部的磁気異常を検出することにより、遺構の位置・形態・規模を推定する方法である。窯跡の場合は、高熱をうけているため、その位置は、熱残留磁気を帯びていて、周囲と比較すると、大きな磁気異常の個所として、とらえることができる。しかし、この磁気異常より強い磁気を帯びているものが近辺にあると、これがノイズとなって正確な測定ができない。特に電車・自動車のように移動するノイズ源は、時間経過にしたがって、異なる量のノイズをもたらし、測定に最も大きな影響を与える。これには、二台の磁力計を連動させ、二台同時に読定する測定法が有効であることが確認できている。今回もこの二台連動法によった。定点のセンサーの高さは1.8m、移動点の方は0.6mである。使用した磁力計はバリンジャーリサーチ社製 G-122 型二台で、測定能力としては±1 ガンマの精度がある。測定間隔は2m、面積は600m²で、半日強の測定であった。

測定結果を、定点と移動点との差の値によって、地磁気の強さのコンターマップとして表わしたものが第23図である。この中では、Aとした部分が、磁気異常としては微弱ではあるが、最も窯体である可能性が高い個所であると考えた。通常、窯体が示す磁気異常には、北側にマイナスの磁気異常を伴い、正負一対となったダイポールの形態をとることが多いが、このAの個所にはそれがみられない。しかし、南北に二分されたように見えるこの部分の磁気異常を、仮に窯体中央部分が破壊された状況を示すものと考え、一基の窯体とみなすと、その全体は延長8m弱の磁気異常とみることができるので、北北東から南南西に方位をとる、窯体である可能性が強いと推定したのである。しかしながら測定結果では、磁気異常は二分されているのであるから、試掘などの窯体確認作業においては、二基の窯体である可能性をも、考慮しながら実施するべきものと考えた。

Aの個所以外には、測定範囲内では窯体の可能性のある部分はない。aとした位置は、測定作業中に、この南方に鉄製品が存在することを認めていたので、その影響と考えたが、磁気異常の程度が、鉄による異常として小さく、通常の窯体が示す程度の異常範囲内にあることから、窯体である可能性は少ないが、この地点の南方に存在する崖面の清掃などによって、遺構の有無を確認しておいた方がよい地点とみなした。

参考：「磁気探査」(『隼上り瓦窯跡発掘調査概報』宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第3集 1983)



第23图 磁気探査結果

Ⅱ. 二子塚古墳外濠発掘調査概要

1. はじめに

本報告は、宇治市五ヶ庄大林に所在する二子塚古墳の前方部側外濠の発掘調査の概要報告である。

二子塚古墳は別名ダンノ山古墳とも呼ばれる前方後円墳である。推定される墳丘全長は約105mである。宇治市内最大の古墳であり、周濠に水を湛える府下でも珍しい古墳である。

古墳の現状は、大正年間の土取りのため後円部の大半を失っているが、前方部は旧状を良く留め三段築成であることが看取できる。前方部前面及び西側には幅23m程の周濠と幅18m程、高さ2～4m程の外堤が遺存している。

本古墳の考古学的調査は、後円部破壊時に梅原末治氏が踏査^{註1}されたのを知るのみで、本格的な発掘調査は現在までのところ皆無である。

今回の調査は、五ヶ庄寺界道42-1番地において小規模の宅地開発に先立つもので、当初は外堤及び古墳周囲に広がる寺界道遺跡^{註2}の調査として着手したが、調査過程の中で二子塚古墳の外濠が発見されたため、本報告では二子塚古墳外濠発掘調査とすることとした。調査にあたっては開発事業者である一井株式会社の全面的なご協力をいただいた。調査期間中にご指導いただいた下記の方々に感謝する。なお、本報告の執筆・編集は杉本宏が担当した。

〈調査組織〉

調査主体者	宇治市教育委員会		
調査責任者	宇治市教育委員会	教育長	岩本昭造
調査担当者	宇治市教育委員会	社会教育課 主事	杉本宏
調査事務局	宇治市教育委員会	参事	木村光長
	同	社会教育課 課長	小林巧
	同	社会教育課 文化係長	吉水利明
	同	社会教育課 主事	梅田正人
	同	社会教育課 主事	小西弘子
調査補助員	鐘方正樹・樋口秀一・中尾由香里		
調査協力者	京都府教育委員会、一井株式会社、小林行雄(京都大学名誉教授)、森浩一(同志社大学教授)、川西宏幸(平安博物館)、中谷雅治(京都府教育委員会)、高橋美久二(京都府立山城郷土資料館)、〔順不同、敬称略〕。		

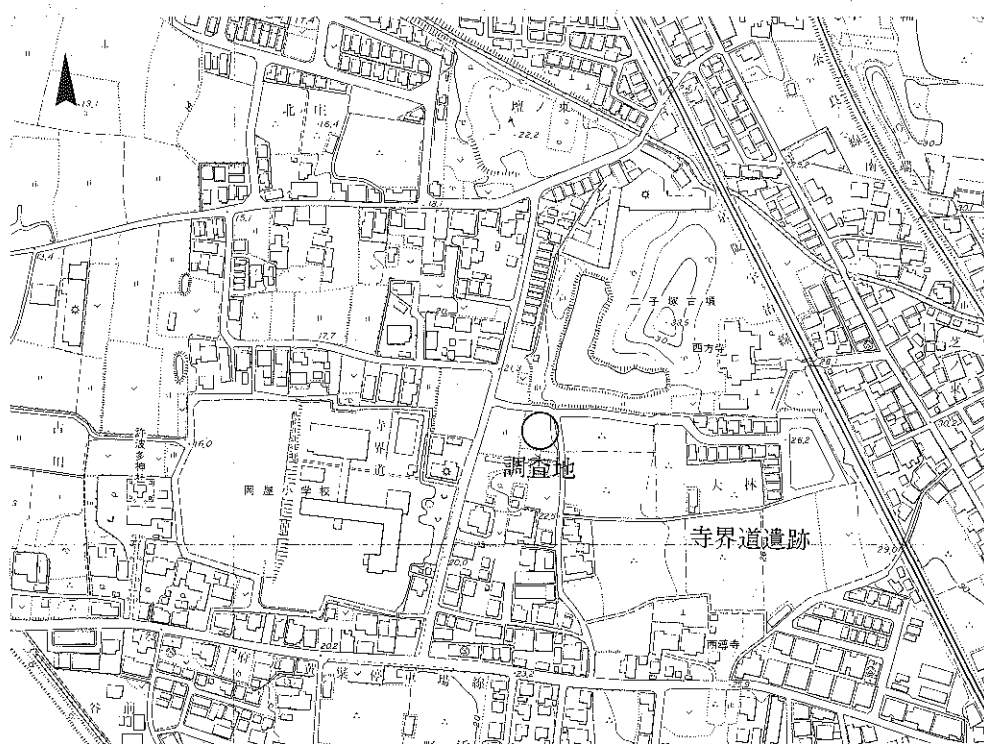
II. 二子塚古墳外濠発掘調査概要

2. 調査の概要

調査地は、二子塚古墳前方部西側外堤コーナーに隣接する場所で、外堤とは幅員6m程の道路を挟んでいる。現状は畑地であり、地表面の標高は21.5m程を測る。

調査対象面積が466m²程とさほど広くないため、開発予定地中央部に幅5m、長さ20m程のトレンチを南北に設定し、調査を実施することとなった。

掘削にあたっては、パワーショベルを使用し、耕作土及び外濠埋土の上層部分を排除した。耕作土中ないしは外濠上層埋土中に若干の須恵器片・中世土器片が認められた。上層部分の機械排除が終了した後は、外濠内の掘削及び外濠外肩の検出をもっぱら人力により実施した。この掘削の中で遺物が比較的まとまって出土したのは、外濠の外肩部付近であり須恵器片が主体である。このような掘削を行なうなかで土層の確認のためトレンチ東壁にそって幅0.5m程の断ち割り溝を入れた。この調査により外濠外側に一定の整地層が存在することが明らかとなったが、トレンチ南端部で湧水層に遭遇し、滾滾と湧き出る地下水によりしばしばトレンチが冠水することとなった。このため濠底の全体的な検出にはやや不安を残すこととなった。調査期間は、昭和60年9月17日から同年10月7日までである。



第1図 調査地位置図(1:5000)

2. 調査の概要



第2図 二子塚古墳全図

3. 遺 構

今回の調査で検出したものは、二子塚古墳前方部側外濠の一部であり、この発見により本古墳が二重周濠を持つことが初めて明らかとなった。以下に外濠の状況とその埋土の様相について報告する。

外 濠 今回、初めて発見した外濠は、検出長約5m、検出幅約12mである。地表面から外濠外肩まで約0.2m、外濠底まで約1.7mである。

外濠は、淡褐色混礫土の地山を掘り込んだもので、濠の肩部及び底部には何の施設も見あたらない。内肩を外堤の頂部平坦面の外端とすると外濠の幅は25m程となる。また、トレンチ北端部で検出した地山の段差を外堤の外端ラインとすると、外濠底の幅は約10mとなる。

外濠外肩と外濠底との比高差は約1.5mで、前方部外堤頂部と外濠底の比高差は約5mである。

外濠の埋土 外濠の埋土は、大きく4層に分けることができる。すなわち、上から表土ないし耕作土、以前の耕作土ないし盛土、古代末ないし中世の遺物包含層、埴輪片・須恵器片を含む遺物包含層である。

最下層の埴輪片・須恵器片を含む遺物包含層は、黒褐色粘質土を中心とする層位で、遺物は外肩付近から比較的まとまって出土した。濠底部では、黒褐色粘質土が泥土化しており、かつては滞水していたことが窺われた。

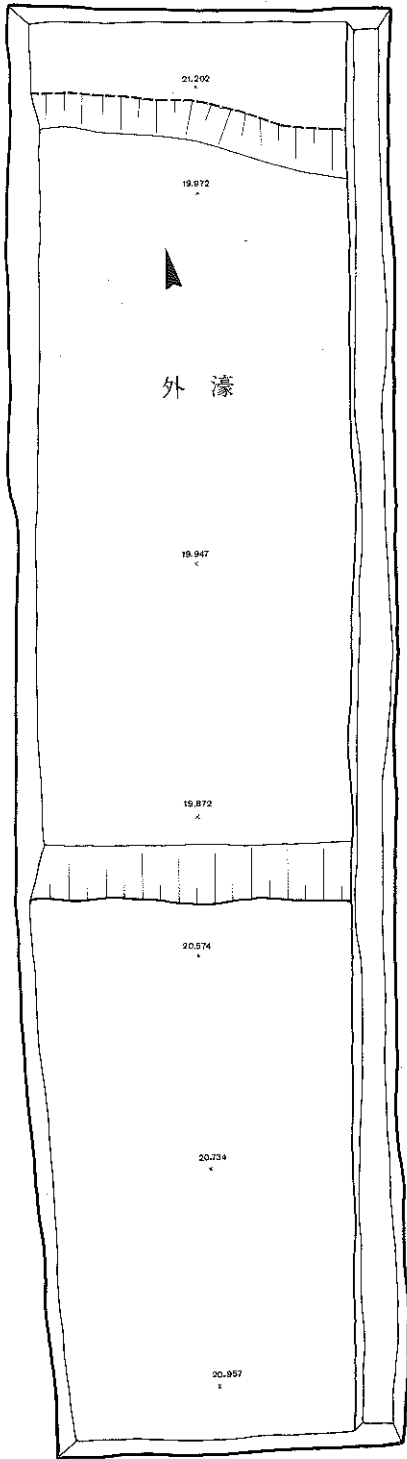
古代末ないし中世の遺物包含層は、黄褐色粘質土や淡褐色砂礫土等からなるものである。遺物は余り含まれていない。黄灰色ないし黄褐色系の土層は、盛土と思われ、中世以降のある時期に外濠の埋めたてが行われたことを示している。

かつての耕作土ないし盛土は、水田の床土と水田開墾に伴う盛土である。調査地の現状は畑であったが、その前の土地利用は外濠部分が水田で、それ以外は畑であったことが理解できる。水田の開墾は近世以降のことと思われる。

また、外濠の外側には層厚0.3～0.4m程の整地層がある。整地層は暗灰色砂礫土の単層で遺物を含んでいない。古墳造営時のものと思われる。

このような、外濠の埋土の状況からは、かつて外濠も内濠同様に水をたたえる堀であり、その痕跡は近世のある時点まで凹みとして残っていたことが理解できた。

現在の地形から外濠の全容を予測することは極めて困難である。しかし、調査地西側の茶畑では、推定される外濠部分が周囲より若干低くなっている。後世に大きな土地の改変を受けなかった所では、詳細に観察すれば外濠の痕跡を見い出すことも可能と思われる。



1. 表土・耕作土
2. 黄灰色粘質土
3. 黄灰色粘質土
4. 灰褐色砂礫土
5. 淡灰色粘質土
6. 黄褐色粘質土
7. 黄褐色粘質土
8. 黄褐色粘質土
9. 暗褐色砂礫土
10. 淡褐色粘質土
11. 黑褐色粘質土
12. 青灰色粘質土
13. 茶褐色粘質土
14. 黄褐色粘質土
15. 黄褐色粘質土
16. 暗灰色砂礫土



旧耕作土



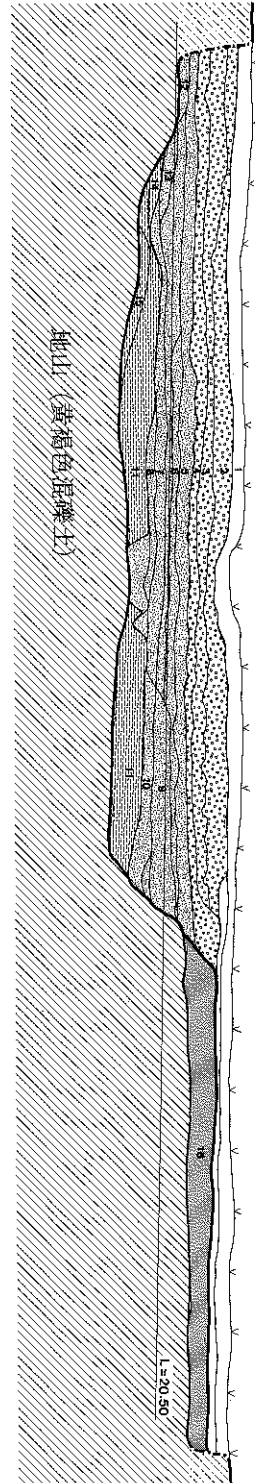
整地層



中世遺物等
包含層



須惠器・埴輪等
包含層



第3図 調査地全図

4. 遺物

外濠内より出土した遺物は、土師器・須恵器・埴輪・瓦などがある。出土総量はコンテナーに5箱分ほどである。量的には須恵器が圧倒的に多く、他は少ない。

土師器では、体部内面にヘラミガキを施す7世紀半頃の杯身片を始め時期不明の甕の体部片などが見られる。いずれも細片化しており全形を窺えない。また、古式土師器の壺の口縁部細片も出土している。

須恵器では、杯・壺・壺蓋・甕などがある。この中で甕が最も多く他は少ない。

甕は大きく2種類に分けることができる。すなわち、大きく外反する口縁部をもつものと口縁部が短く外反するものである。形式的には前者の方が古相を示す。また、前者はしばしば口頸部外面に複数の波状文をめぐらす。前者を甕A、後者を甕Bとしよう。

甕Aは、(3)・(6)以外にも数点ある。(3)は、口縁端部が外側に肥厚するもので口縁端部から頸部にかけて複数の波状文をめぐらす。外濠底よりやや遊離して出土した。(6)は、肩の張る倒卵形の体部をもつもので、底部は丸底。口縁端部は坦面をもち、口縁端部の外面直下に一条の凸帯をもつ。頸部には2本の波状文がめぐる。体部外面は細かい格子タタキであり、内面には同心円文の当て具痕跡が見られる。また、体部内面の中央部分は、さらにハケで調整を行っている。(6)は、外濠外肩の底付近からまとまって出土し、概ね全形の6割程の破片がある。破片は細片化しているものが多数見られ、意識的に破壊・投棄された可能性がある。

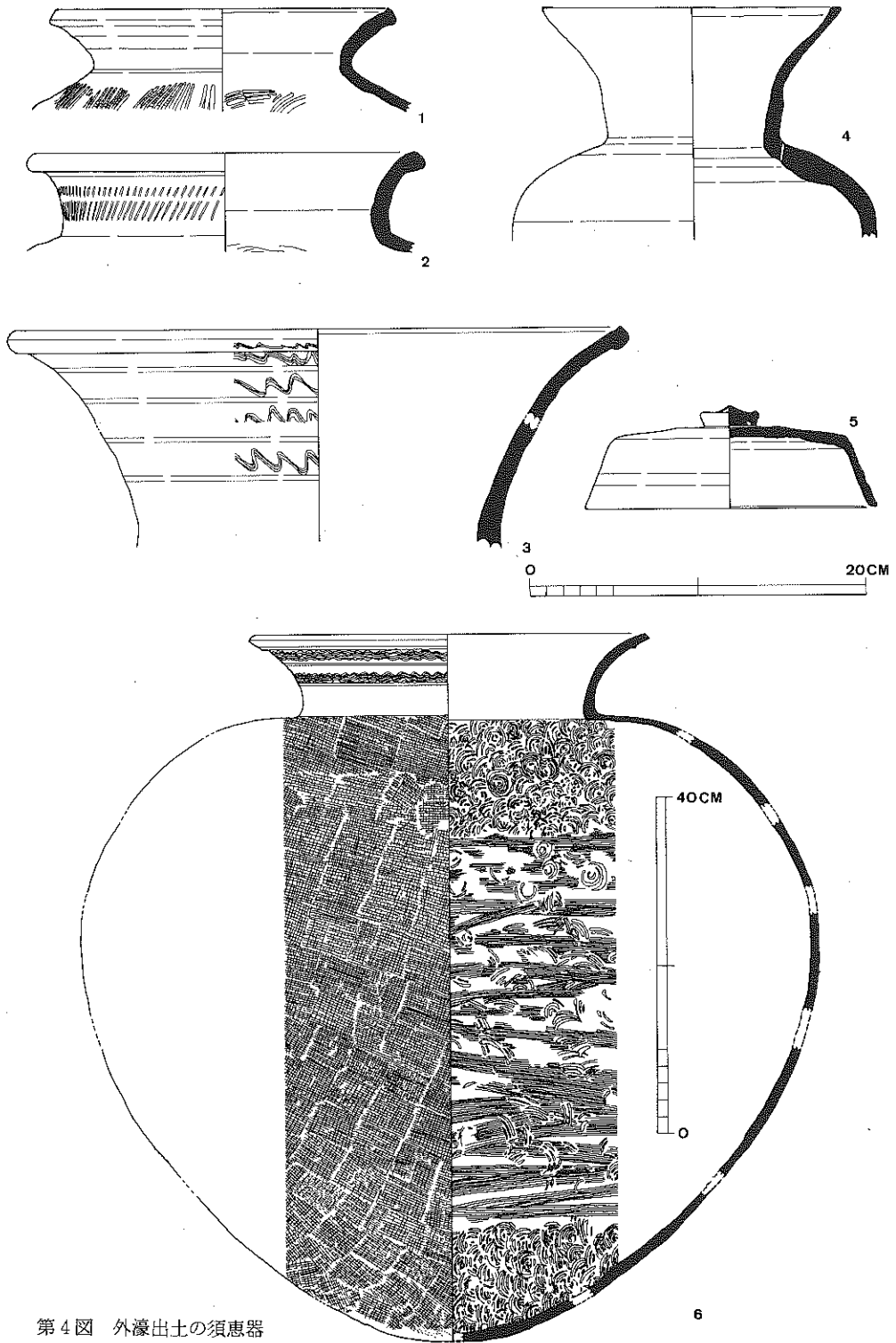
甕Bは、(1)・(2)以外にも数点ある。口縁端部に坦面をもつものとやや肥厚させるものの2者がある。ともに外濠底より遊離して出土した。

壺は、2～3点出土しているが、残りの良いものは(4)だけである。(4)は大きく開く口縁部をもつ長頸壺の一種である。(5)は、壺の蓋である。天井部に擬宝珠様のつまみをもつ。外面には濃緑色の自然釉が厚くかかっている。外濠底よりやや遊離して出土した。

他に古墳時代後期の杯身片があるが、細片のため形式はわからない。

埴輪は、外濠底にたまった泥土部分より出土している。量的にはコンテナー1箱分ほどである。しかし、かなり細片化しており図化できるものはない。いずれも赤褐色を呈する軟質のものである。

以上の遺物の年代については、(6)が6世紀ごろ、(1)～(3)が6世紀中頃から7世紀、(4)・(5)が7世紀後半頃と思われる。



第4図 外濠出土の須恵器

II. 二子塚古墳外濠発掘調査概要

5. ま と め

ここでは、今回の発掘調査の成果を要約し、本報告のまとめとしたい。

今回の発掘調査は、調査面積100m²程の小規模なものではあったが、凶らずも二子塚古墳が二重の周濠をもつ前方後円墳であることを確認できたのは、大きな成果であったといわねばならない。内濠と外濠というように濠を複数めぐらす古墳は、大阪府堺市の大山古墳(伝仁徳天皇陵)や高槻市の今城塚古墳のように、所謂大王陵級の古墳とされるものが多い。二重の濠は、一重に比べ、外界と墳丘を遮断するという事に関してより堅固であるし、造営に投入される労働力も大きい。同規模の墳丘をもつ古墳と比べた場合、一重の周濠のものより二重のものの方がより上位に位置づけられると見てよい。

二子塚古墳の築造年代については、今回の調査では明確にできなかった。しかし、墳丘より採集されている埴輪^{註3}は、川西宏幸氏編年のV期に相当するものであることから考えて、6世紀ごろの築造と思われる。外濠外肩より一個体分まとまって出土した須恵器の甕(6)がほぼ同様な年代に比定できる。この甕は、古墳築造後まもなく意識的に破壊され外濠に投入された可能性がある。

二子塚古墳の築造年代を6世紀ごろとした場合、100m級の墳丘をもつ前方後円墳は山城地方では本古墳だけとなり、山城最後の大型古墳ともなる。大型の古墳が希薄な宇治川東岸地域に突如として出現した二子塚古墳は、その具体的な内容のみならず、その周辺の状況を合わせて不明な点が多い。今後、さらに調査を進めて全容の究明をはかりたいと考える。

(註)

註1. 梅原末治「五箇荘二子塚古墳」『京都府史蹟勝地調査会報告 第4冊』、京都府、大正12年。

註2. 昭和59年の遺跡分布調査で確認。縄文から奈良時代にかけての集落跡と思われる。

註3. 杉本宏「宇治二子塚古墳の円筒埴輪」『京都考古 第36号』、昭和60年。

註4. 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌 第64巻2号』、昭和53年。

Ⅲ. 岡本廃寺・岡本遺跡発掘調査概要

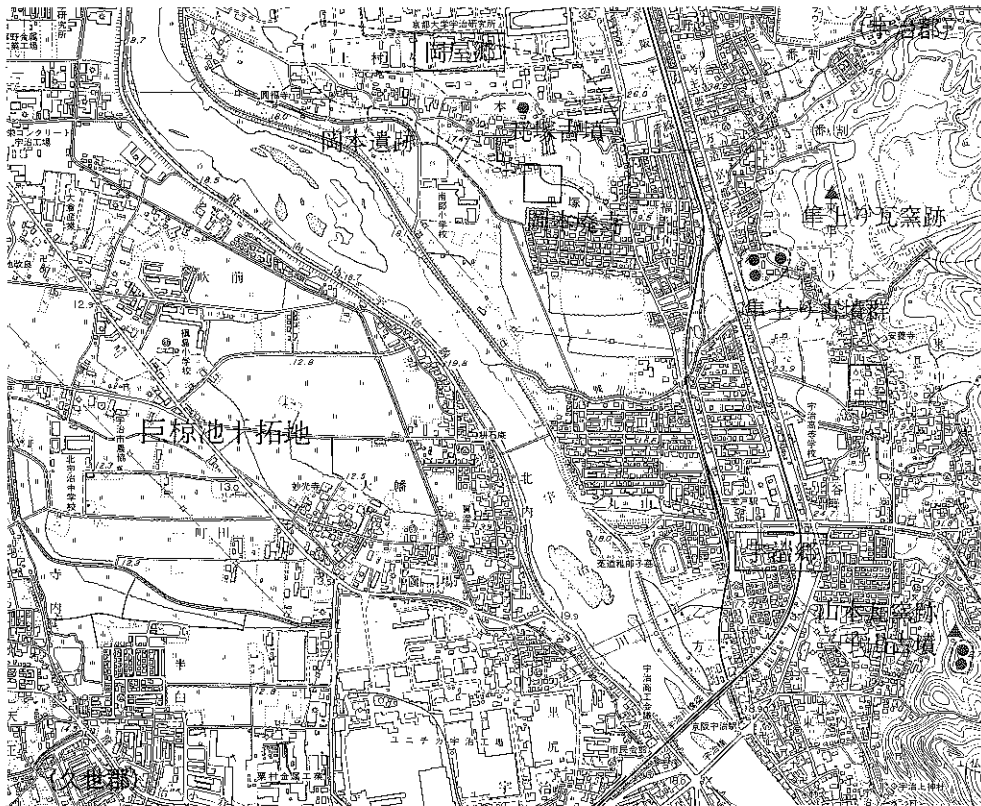
1. はじめに

岡本廃寺・岡本遺跡は、宇治市五ヶ庄岡本・日皆田一带に存在する寺跡と遺物散布地である。ともに今回が初めての発掘調査であり、岡本廃寺は調査のなかで初めて確認した遺跡である。調査前は、岡本瓦窯跡^{註1}と呼ばれており、調査により寺跡であることが判明した。

調査は、五ヶ庄日皆田に計画された宅地造成の事前調査として実施した。昭和60年8月20日から同年12月20日まで現地調査を実施した。調査面積は約2500m²である。遺構の測量は、国際航業株式会社に委託し、国土地理院の基準点をもとに基準点測量を行なった。

出土遺物は、瓦類を中心にコンテナで約450箱分あり、整理が完了していないため、本報告ではその概要を報告するに留めたい。

調査にあたっては、開発事業者である葵建設株式会社の全面的なご協力をいただくとともに関係機関・各位のご指導・ご協力を賜った。感謝するしだいである。



第1図 岡本廃寺と周辺の主要遺跡(1:20000)

Ⅲ. 岡本廃寺・岡本遺跡発掘調査概要

本書の遺物写真は、高橋猪之介氏の撮影によるものであり、報文の執筆は、土器類を猿向敏一が、他を杉本宏が行なった。編集は杉本が担当した。

なお、岡本廃寺の一面は、現在、公園となっており遺跡の説明板が設置されている。

< 調 査 組 織 >

調査主体者	宇治市教育委員会	
調査責任者	宇治市教育委員会 教育長	岩本昭造
調査指導者	元近畿大学教授	杉山信三
	京都府立桃山高等学校教頭	山田良三
	京都府教育庁文化財保護課 記念物係長	中谷雅治
調査担当者	宇治市教育委員会 社会教育課 主事	杉本宏
調査事務局	宇治市教育委員会 参事	木村光長
	同 社会教育課 課長	小林巧
	同 社会教育課 文化係長	吉水利明
	同 社会教育課 主事	梅田正人
	同 社会教育課 主事	小西弘子
調査補佐員	奥田耕三・猿向敏一	
調査補助員	岸本弘司郎・佐原 耕・上村和也・樋口秀一・成清利彦・坂野喜之・元川康司・鈴木静江・古川小百合・中尾由香里・藤田訓子	
調査協力者	奈良国立文化財研究所、京都府教育委員会、帝塚山考古学研究所歴史部会 葵建設株式会社、国際航業株式会社 田中琢・佐原眞・宮本長二郎・西村康・田辺征夫・山中敏史・上原真人・ 大脇潔(奈良国立文化財研究所)、藤沢一夫(四天王寺国際仏教大学名誉教授)、 森郁夫(京都国立博物館)、木村捷三郎・江谷寛(京都市埋蔵文化財研究所)、 平良泰久・奥村清一郎(京都府教育委員会)、高橋美久二・橋本清一(京都府立山城郷土資料館)、 松井忠春・辻本和美・荒川史(京都府埋蔵文化財調査研究センター)、 植山茂(京都文化財団)、五十川伸矢(京都大学埋蔵文化財センター)、 小玉道明(三重県教育委員会)、堅田直(帝塚山大学)、小笠原好彦(滋賀大学)、 中尾芳治(大阪市文化財協会)、中井公(奈良市教育委員会)、藤原学(吹田市教育委員会)、 星野猷二(伏見城研究会)、青山均(天津市教育委員会)、樋口隆久(亀岡市教育委員会)、〔順不同、敬称略〕。	



第2図 トレンチ配置図

2. 調査の経過

調査地である五ヶ庄日皆田は、宇治川により形成された河岸段丘上にあり、標高13~20m程である。調査地の西400mには宇治川が流れ、宇治川をとおして巨椋池干拓地が望める。北側には京都大学宇治校地(旧陸軍弾薬庫)がある。調査前の状況は、水田・休耕田・畑・茶畑等である。

調査にあたっては、調査地を土地の状況をもとにAからHの8地区に分け、計14本のトレンチ(試掘溝)を設定した。発掘調査は、これらのトレンチを基本に実施した。トレンチの名称は、地区名と同じとし、同一地区で複数のトレンチを設定した場合は算用数字の孫番号を付すこととした。A・B・F・G地区は当初の岡本瓦窯跡、後の岡本廃寺、C・D・E・H地区は岡本遺跡に該当する。

最初に調査を行ったのは、A₁・A₂・B₁・C・D₁・D₂・Eの各トレンチで、幅2m、長さ18~40m程の規模である。まず、これらにより遺跡の範囲・内容を確認することを目的とした。B₁トレンチでは、表土下に多量の瓦類を検出した。このため、南に拡張したところ大型の掘立柱建物(SB120)を検出し、B₁トレンチと里道をはさんだ南側に設定したB₂トレンチで瓦積基壇(SB300)を発見した。この時点で、これらの遺構が寺跡の一部と判断できたため、新たに「岡本廃寺」と命名した。A₁・A₂・Fトレンチでは、開墾に伴う掘削のため、確実に寺院に関係する遺構は検出できなかった。しかし、A₂トレンチでは、花崗岩の巨石が地山を掘り込んで埋め込まれている状況を検出し、この巨石が塔の心礎の一部である可能性が考えられた。Fトレンチでは、南端部分で湿地及び沼の一部を検出した。この沼(SX350)が寺院存続時まで遡るとすれば、寺は沼の北岸に隣接して建っていたこととなる。

C~Eトレンチでは、耕作土直下に地山が存在する。D₁・Eトレンチでは、土器類が散見できたため、拡張を実施した。この結果、削平された古墳・土壇・瓦堆積等を確認した。しかし、遺構はその痕跡を留めているにすぎず、後世の土地改変が深くまで及んでいることが理解できた。遺構は、E・D₁トレンチで検出でき、他では若干の遺物が出土したのみである。

Hトレンチは、工事中進入道路建設時に遺構を発見したところであり、工事との関係上、他の地区と統一的な測量・調査を実施できなかった。

遺跡の測量は、国土地理院の基準点をもとに航空測量を行った。細部の実測及び土層の実測は、調査期間中に適宜行った。

今回の調査により出土した遺物及び調査関係資料は、すべて宇治市教育委員会が保管している。

3. 調査の概要

A. 岡本廃寺

岡本廃寺の想定される寺域内に設定したトレンチは、 $A_1 \cdot A_2 \cdot B_1 \cdot B_2 \cdot F$ の各トレンチである。これらのトレンチで検出した遺構は、その性格により大きく2分することができる。すなわち、寺院に関係するものと寺院廃絶後のものである。前者は、基壇建物 SB300、掘立柱建物 SB120、柵列 SA301a・b、柵列 SA302a・b、溝 SD119、溝 SD110、土塋SX200等であり、後者は、井戸 SE218、井戸 SE105、土塋等である。前者は岡本廃寺に関する遺構であり、後者は岡本遺跡の遺構となるが、後者は寺院の廃絶の時期とその後の土地利用を窺う資料として、ここで取り扱うこととしたい。

(1) 基本層位

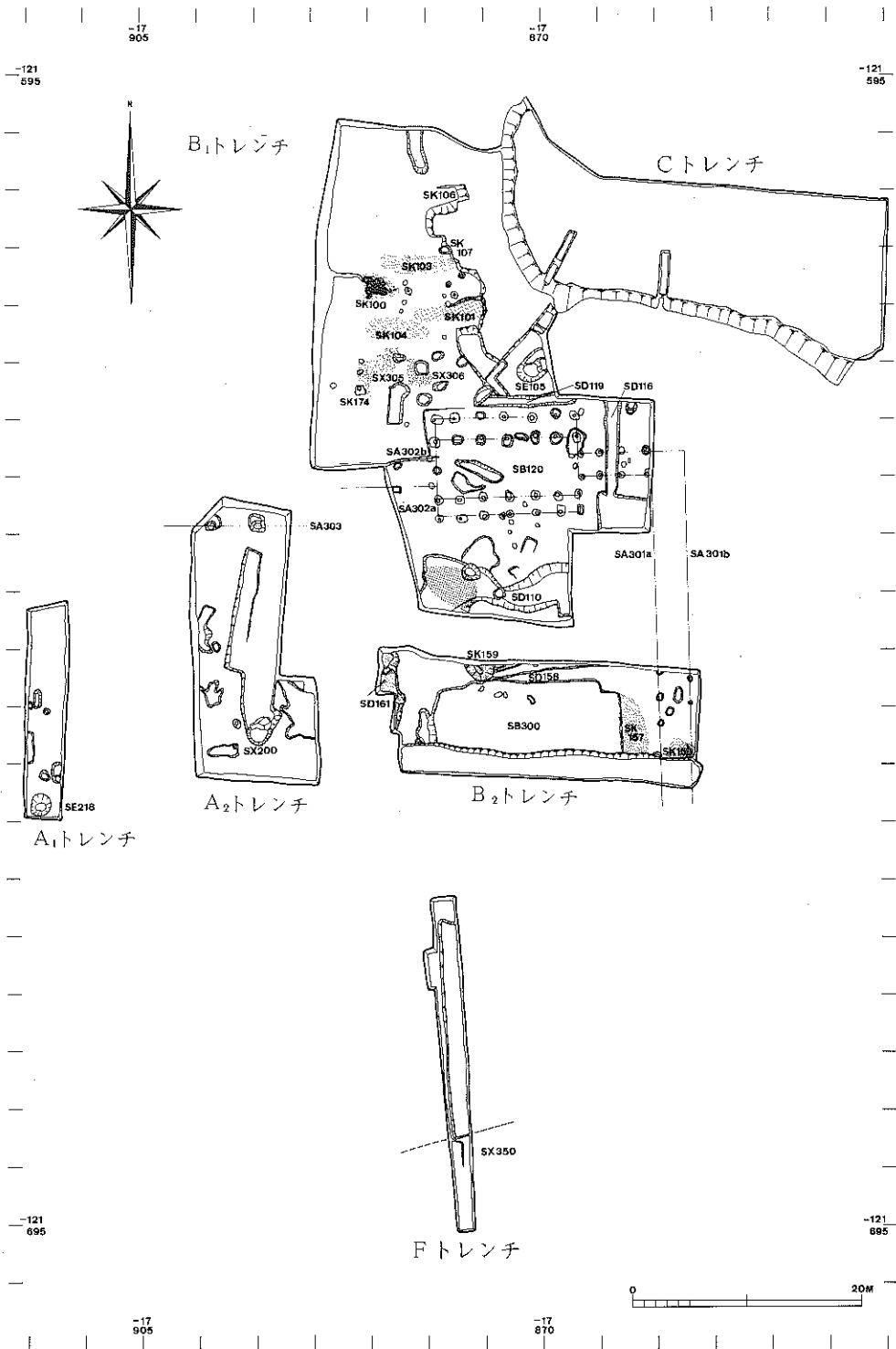
遺跡を覆う土層は、 $A_1 \cdot A_2 \cdot F$ トレンチの状況と $B_1 \cdot B_2$ トレンチの状況とに大別できる。

$A_1 \cdot A_2 \cdot F$ トレンチの基本的な土層は、層厚0.3~0.5m程の水田耕作土・床土直下に黄色砂礫土ないしは黄色粘質土の洪積層が存在し、遺物包含層は基本的に存在しない。遺構は、洪積層(地山)上で一挙に検出できる。年代が理解できる遺構は、すべて中世のものである。

これに対して、 $B_1 \cdot B_2$ トレンチでは全く違う様相を看取できる。 B_1 トレンチ北側の標高16m以上では、表土下に黄褐色混礫土の地山が存在し、遺構は地山上で検出できる。しかし、他の部分では、表土下に数層の遺物包含層が存在する。遺物包含層は、上・下の2層に大きく分層できる。上層は暗褐色土で瓦・中世土器を含む。下層は黒褐色土で上層と同じく瓦・中世土器を混じえている。また、それぞれの層上面より掘り込まれる遺構が存在し、両層は中世のある時期の地表面であったことが理解できる。これらの遺物包含層は、南ほど厚く堆積しており、 B_1 トレンチ南端では0.5m程の厚みとなっている。遺物包含層の下に黒色土層がある。寺院に関する遺構は、すべて黒色土層を掘り込んでいる。この黒色土層は、遺物包含層と同様に、地形に合わせて南に向かって厚くなり、遺物を含まない。洪積層は、黒色土層下に存在する。このような状況から、黒色土層は、寺院建立前に自然に堆積した有機質を含む層と判断された。また、 B_1 トレンチの掘立柱建物 SB120 北側では、黒色土層上に薄い整地層が認められた。整地層の土は、洪積層と同質のものである。

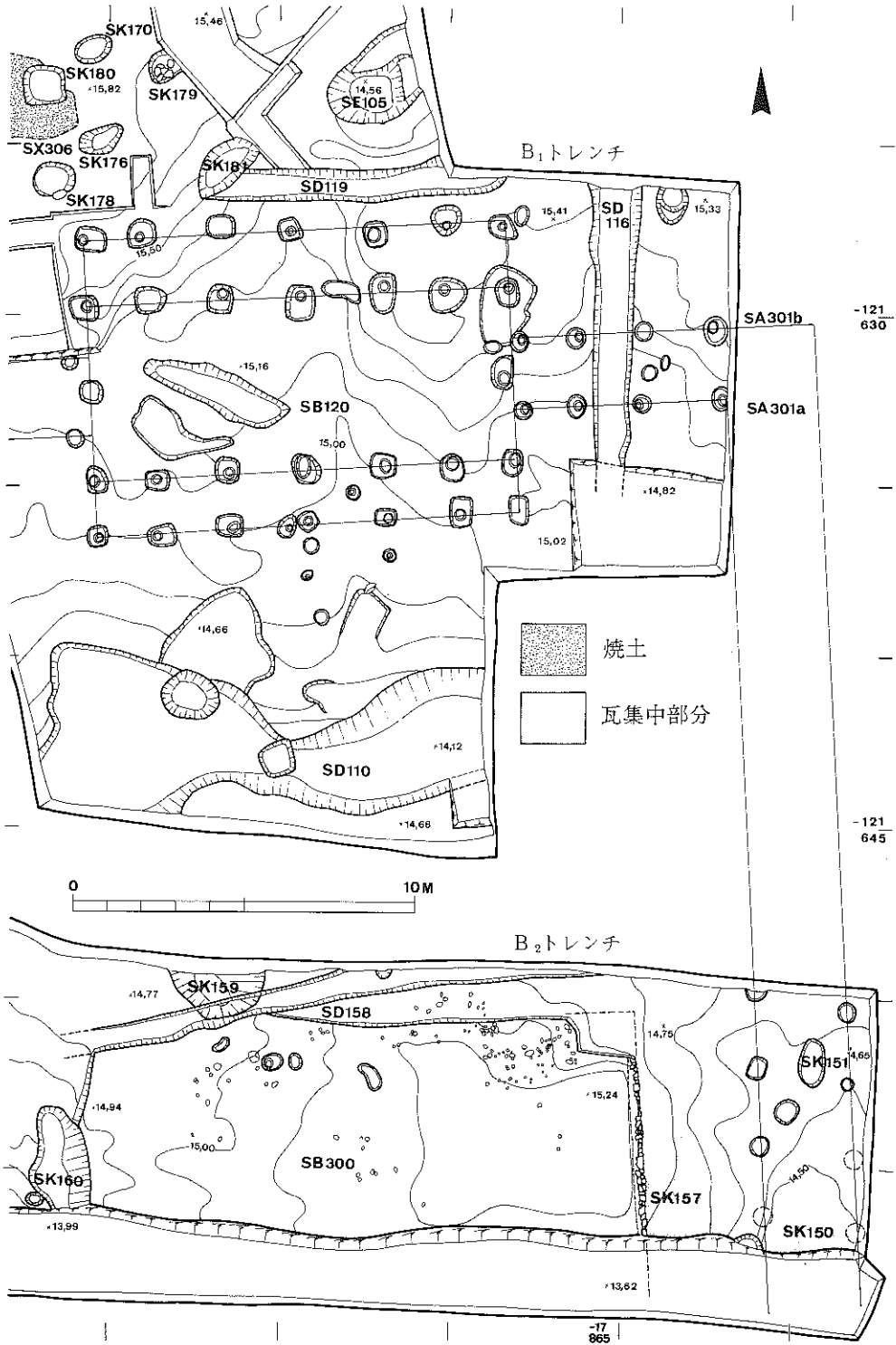
このようなトレンチごとの土層の状況と現在の地形とを考え合わせると、 $A_1 \cdot A_2 \cdot F$ トレンチは、後世に約1~2m削平され、寺院に関する遺構は失われたと判断でき、寺院が存在していた層位を残す所は、 $B_1 \cdot B_2$ トレンチだけと考えられた。また、このような削平は、中世以前には行われていることが、遺構の状況より理解できた。

A. 岡本廃寺

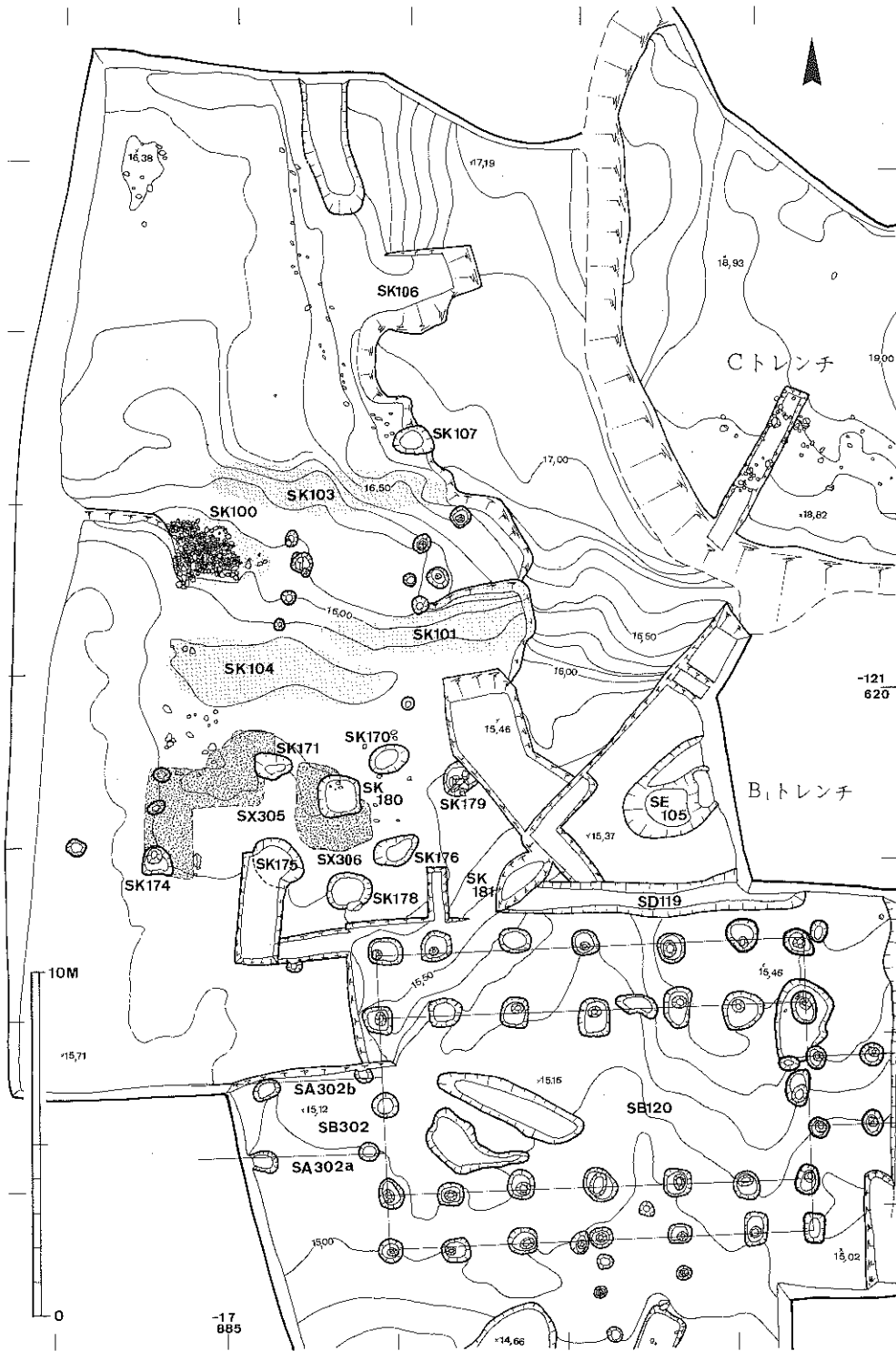


第3図 岡本廃寺全図

Ⅲ. 岡本廃寺・岡本遺跡発掘調査概要

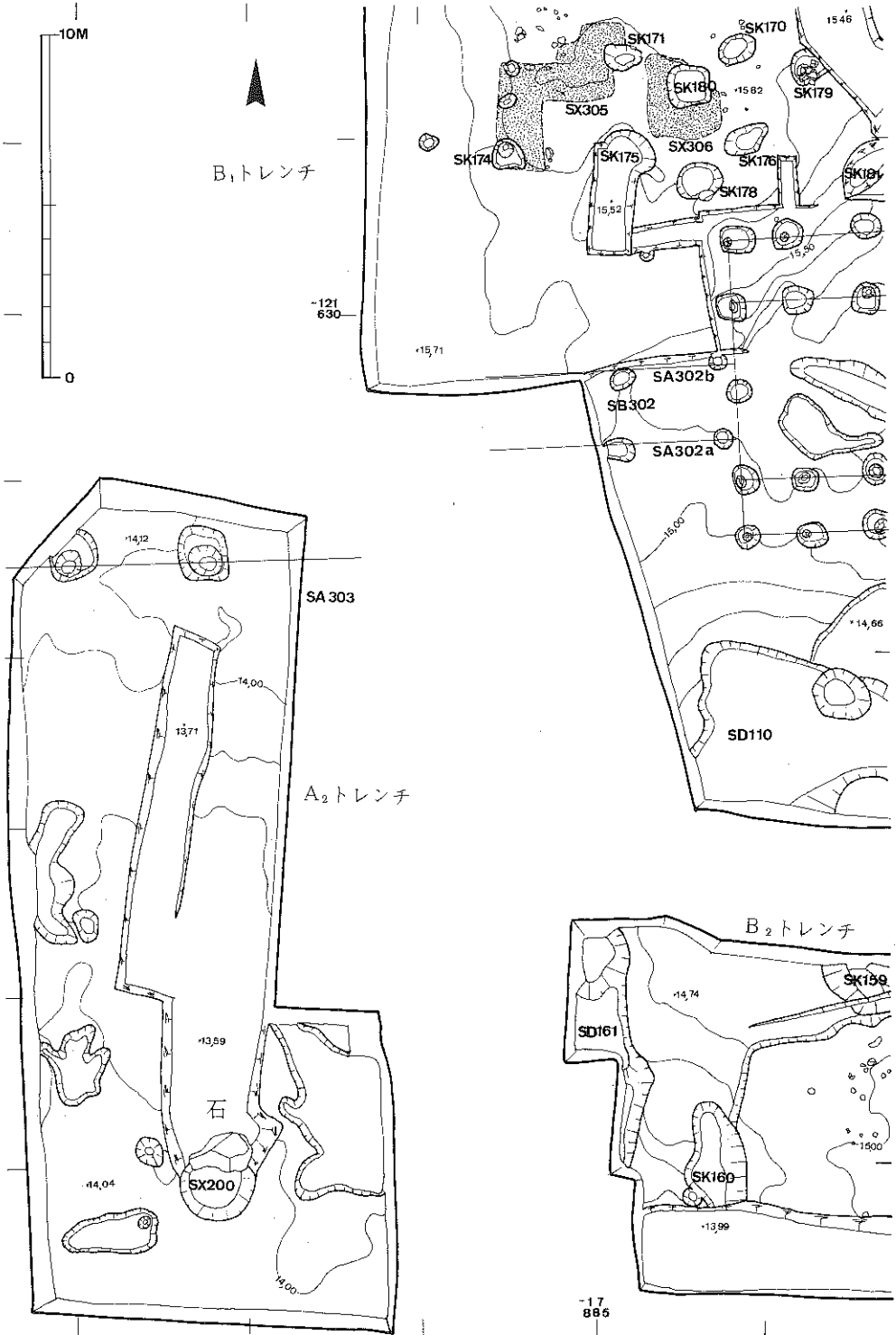


第4図 岡本廃寺部分 (1)



第5図 岡本廃寺部分 (2)

Ⅲ. 岡本廃寺・岡本遺跡発掘調査概要



第6図 岡本廃寺部分 (3)

(2) 遺 構

遺構については、大きく、寺院に関する遺構と寺院廃絶後の遺構とに分け、それぞれの概要を報告する。

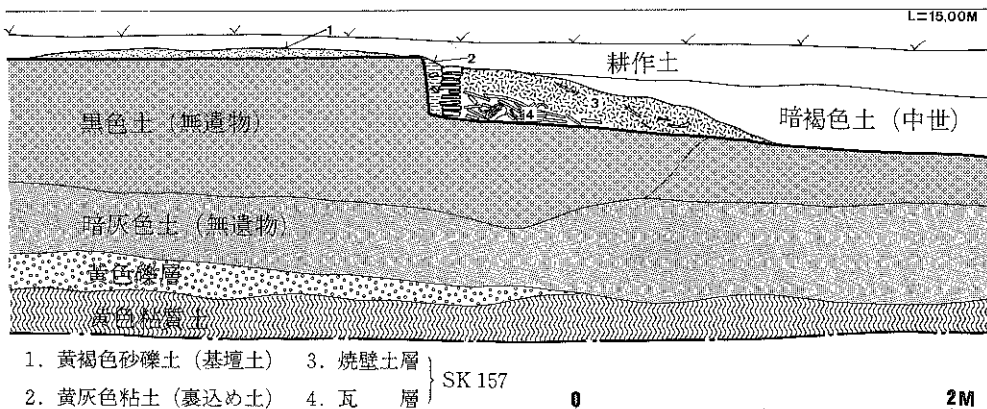
〔a. 寺院に関する遺構〕

基壇建物 SB300(金堂) B₂トレンチで検出。南半部は後世の土取りで失なわれており、北半部が遺存していた。この建物跡は、調査前の地表観察では全く確認できず、調査で初めて検出した。

基壇の検出長は、東西16.7m程、南北6m程、高さ0.1~0.4m程である。基壇化粧が遺存していたのは東辺部であり、全長5.2m、高さ0.3m程の瓦積の化粧である。北辺部及び西辺部は、余り旧状を留めておらず、土壇状の高まりとして検出した。北辺部の西側は、SD158により削り取られているが、東側は西辺部の瓦積みと直行してわずかな段差を認めることができ、この部分は、かつての基壇を留めている可能性が指摘できる。

瓦積は、すでに上部の大半を失なっており、その下部のみが遺存していた。標高15.0mの旧地表面からただちに積みあげられている。使用されている瓦は、平瓦を主体に丸瓦・軒平瓦・鷗尾であり、半載以下に破片化しているものである。積み方は、平瓦・丸瓦とも側面を基壇正面に向ける木口積が基本であるが、中には破断面や端面を正面に向けるものもある。瓦と瓦の間には、厚さ数ミリの黄色粘土が認められた。瓦積みは、南端で8段・北端で3段分である。

基壇の築造のしかたは、まず、低い基壇を地山から削り出し、その上に盛土を行い基壇をととのえ、最後に瓦積により基壇側面の化粧としている。最初に地山(黒色土層)から削り出した低い基壇は、概ね0.3m程の高さであり、南へ向って高さを若干増す。この上に盛られ



第7図 基壇建物 SB300(金堂)部分断面図

Ⅲ. 岡本廃寺・岡本遺跡発掘調査概要

た土は、硬くしまった黄褐色砂礫土であり、一部が残っていた。版築の可能性はある。基壇の上面外装は不明。しかし、基壇周囲より若干、塼が出土していることを評価すれば塼敷であった可能性も否定できない。礎石及び礎石の据え付け痕跡は未検出。

瓦積部分にあって、その外側に幅2m程の広がりをもつ瓦の集中部分が検出された。これをSK157と呼ぶ。人為的な遺構ではなく、金堂倒壊時の瓦の堆積である。SK157の有様は、旧地表面上に薄い灰層があり、その上に軒瓦を多く含む瓦層があり、瓦層の上をさらに炭・灰を混ぜた焼けた壁土が覆うというものであった。瓦については後述するが、軒瓦は良く火を受けており、かつ復元によって完形に近い状態にもどる個体が比較的多く含まれている。このことから、金堂は火災により倒壊し、その時に屋根から一挙にすべり落ちた瓦が堆積したものがSK157である事が理解できる。

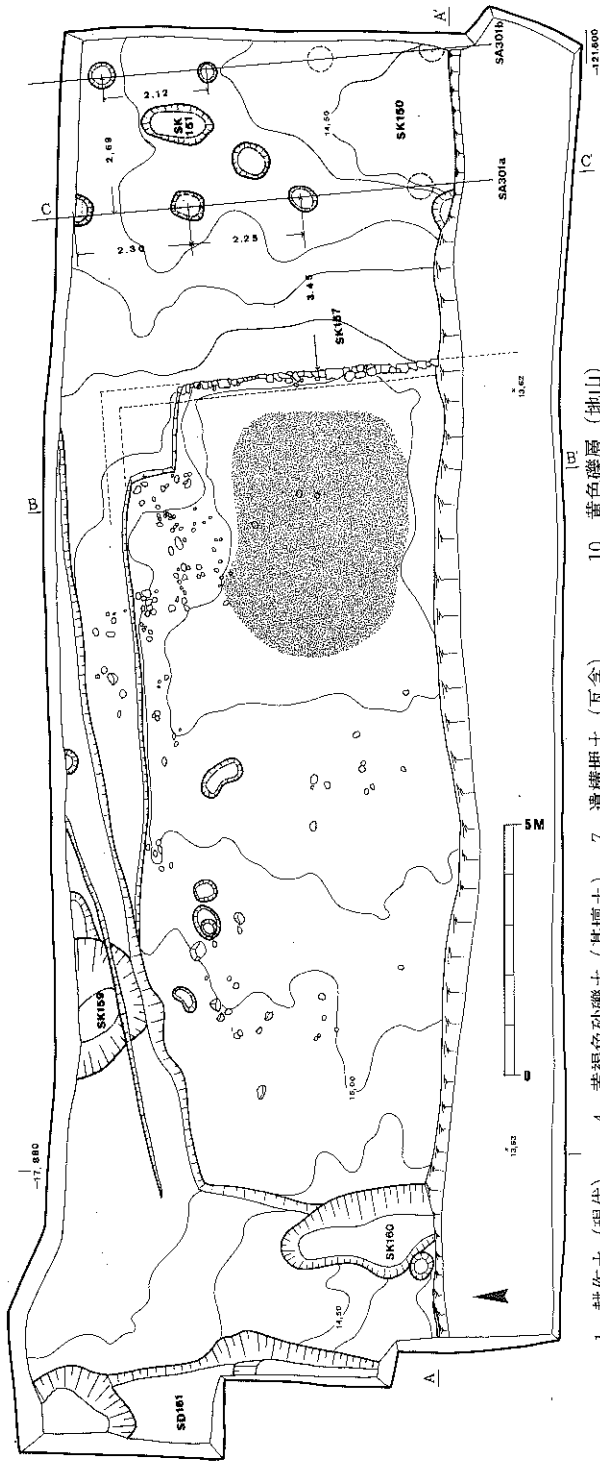
掘立柱建物SB120(講堂) B₁トレンチ南部で検出。桁行6間、梁間4間の切妻の東西棟掘立柱建物。南・北側に1間分の廂をもつ。桁行全長12.4m、梁間全長8.7m。桁行の柱間寸法は、中央の2間が各2.3m程と最も広く、次いでその外側間が約2.1m、端の1間が約1.9mと、中央から端へ行くほど狭くなっている。梁間では、母屋の柱間が約2.5m、北廂が1.9m、南廂が1.6m程である。

柱掘方は、一辺0.8~1.2m程の隅丸方形で、その中に径0.3m程の柱痕跡をもつ。柱の抜き取り痕跡は、母屋南柱列の中央柱に認められるだけである。柱穴の深さは、0.2~0.3m程と浅く、SB120 廃絶以後に削平が行われている事が理解できる。また、建物の北西部の柱穴は、焼土SX305等が存在する整地層(黄褐色混礫土)下で検出できた。整地層は、B₁トレンチ北部に露出する地山と全く同一のものである。整地層の厚さは3~5cm程。整地層下で検出した柱穴も、他と同様に深さ0.3~0.4m程と浅く、SB120の削平は、整地前と考えられる。

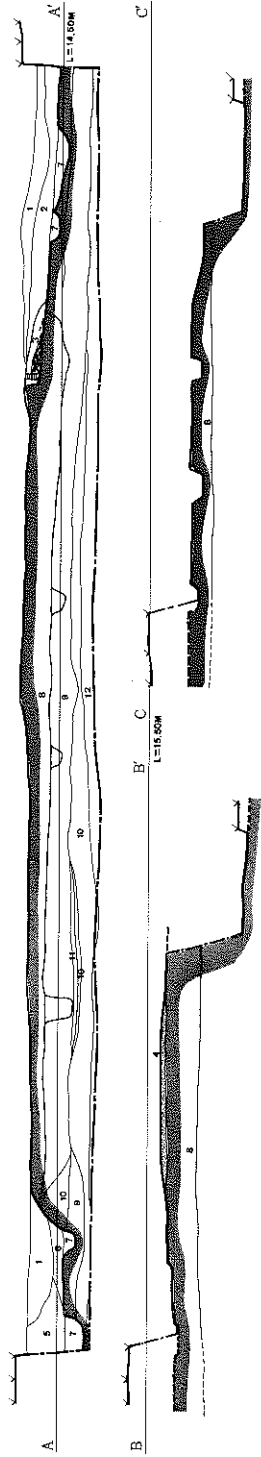
SB120北側には、雨落し溝と思われるSD119があり、梁間中央に内郭柵列SA301a・bとSA302a・bがとり付く。

巨石SX200(推定塔心礎) A₂トレンチ南端で検出。直径約2mの円形土壌内に花崗岩が埋められていた。花崗岩の大きさは、1.9×1.1m程で重量3.3tを量る。A₂トレンチは前述したように、旧地表が推定で1m程掘平されているところであり、耕作土除去後に土壌の輪郭と埋め込まれた石の一部を検出した。石は、耕作土表面には露出していない。

石には、ところどころに鑿の刃跡があり、割られた面には余り風化が認められないため、現状より大きな石が、余り時間の遡らない過去において割られ、地中に埋められたことが理解できる。花崗岩は、このあたりでは産出しないこと^{註2}から、この石は人為的に当地まで運ばれた事は確かである。また、旧状を留める部分には明瞭な加工痕跡はない。



- 1. 耕作土 (現代)
- 2. 暗褐色土 (中世)
- 3. 焼壁土層
- 4. 黄褐色砂礫土 (基壇土)
- 5. 礫・瓦層 (中世)
- 6. 暗褐色土 (瓦倉)
- 7. 遺構埋土 (瓦倉)
- 8. 黒色土 (無遺物・地山)
- 9. 暗灰色土 (地山)
- 10. 黄色礫層 (地山)
- 11. 黄褐色粘土 (地山)
- 12. 黄色粘質土 (地山)



第8図 基壇建物SB300(金堂)

Ⅲ. 岡本廃寺・岡本遺跡発掘調査概要

以上のような状況から、SX200の遺構自体は寺院廃絶後のものであることが明白である。しかし、以下の点において、石が塔の心礎の一部である可能性を考えている。

1. 花崗岩は近くで産出せず、人為的にここまで運ばれた可能性がある。
 2. SX200の位置に塔を想定することが、地形的にも伽藍配置の上でも無理がない。
 3. 寺院跡が水田等の耕地になった場合、礎石を割り、移動可能になったものを穴にすてる事がしばしばある。
 4. SX200は、大きさから考えて通常の礎石ではなく、塔心礎と考える方が無理がない。
- 現時点では、SX200の位置に塔を想定しておきたい。

柵列 SA301・302(内郭柵列) SB120の梁間中央からそれぞれ東西にのび、中心伽藍を取り囲む柵列と思われる。このような施設を内郭柵列と呼びたい。

SB120から東にのびる内郭柵列をSA301とし、西へのびるものをSA302とする。また、それぞれの内側の柵列をaとし外側をbとする。

SA301a・bは、B₁トレンチとB₂トレンチとで検出した。それぞれの柱間は1.5~2.5m程であり不揃いである。aとbは平行する柵列であるが、互いの間隔はところによって異なる。例えば、B₁トレンチで検出したところでは約2mであるのに対し、B₂トレンチでは2.7m程である。SA301aとbが一体の建物(回廊)の柱穴でなく、独立した2本の柵列と考えたのは、B₂トレンチでaとbでの柱が対応しないことによる。B₂トレンチの状況では、両者の上に屋根を架けるのは難しいのではないか。

SA302a・bはB₂トレンチで検出した。1間分のみ確認。

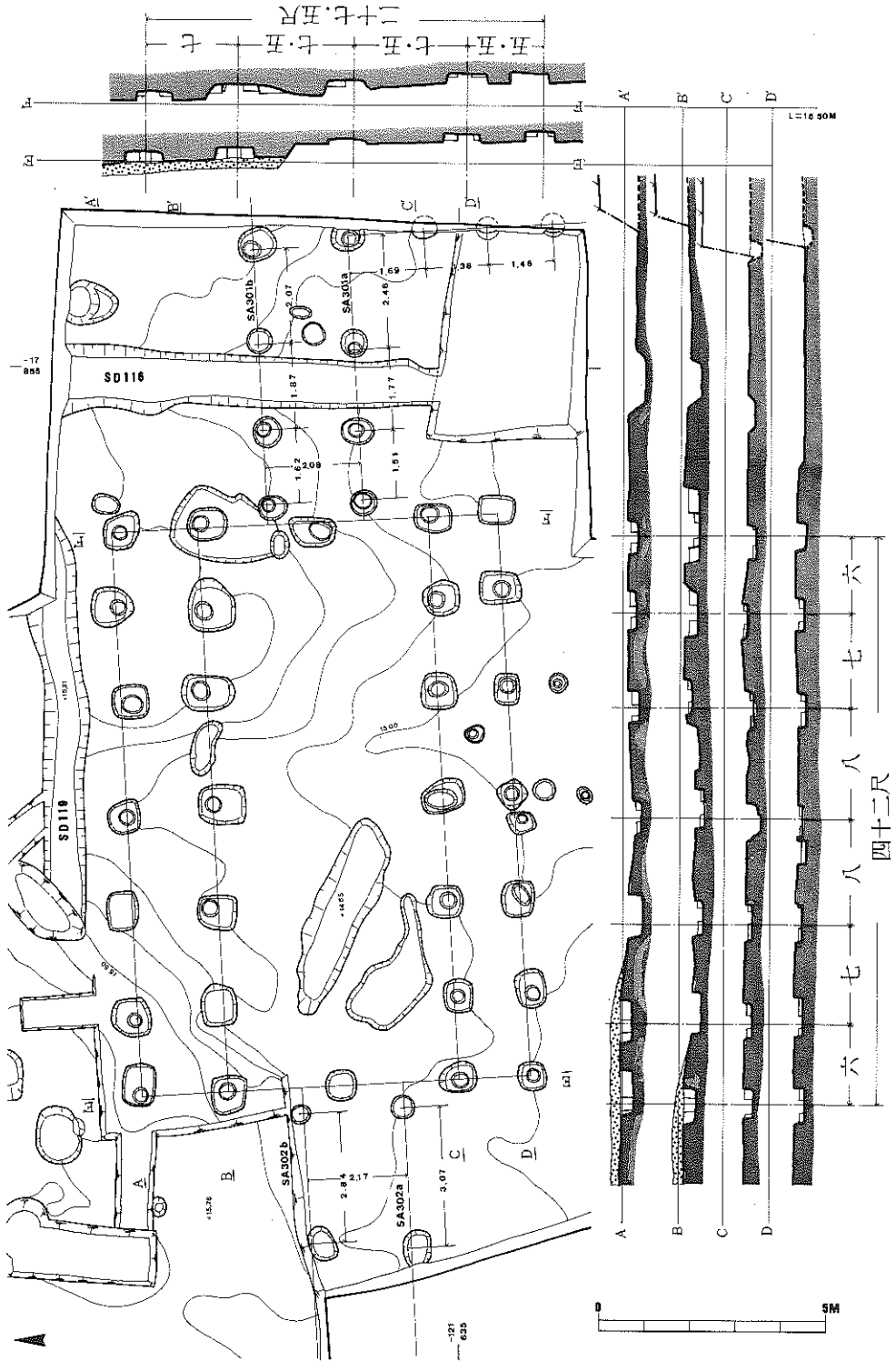
溝 SD119(SB120北雨落し溝) SB120北側約1.2mのところでは建物と平行する東西溝。SB120の雨落し溝と思われる。溝の幅約0.9m、検出長約9m、深さ0.2m程。埋土中から、拳大の河原石・瓦片・鷗尾片・土器等が出土した。また、溝の埋没後その凹みを中心に遺物包含層(SD119上面の土器)が形成されている。

溝 SD110 B₁トレンチ南端で検出した東西溝。幅は最大約4m、最少約1.5m、検出長約12.5m。底は東端と西端部分で幾分深く、中央辺りで浅い。埋土は暗褐色土の単層。西端部で瓦が集中的に出土した。瓦は細片化したものが多く、後述するように創建時に使用された瓦のみが出土した。

(b. 寺院廃絶後の遺構)

瓦集積 SK100 瓦集積 SK103の南西側で検出した瓦集中部分である。一辺約2mの不整形形状に瓦の細片が敷き詰められていた。

瓦集積 SK101 瓦集積 SK103南側において、同様に地山の傾斜面に平行して形成された瓦集中部分である。東西約6m、南北約1.8mを測る。瓦層の厚さは0.4m程である。



第9図 掘立柱建物 SB120 (講堂)

Ⅲ. 岡本廃寺・岡本遺跡発掘調査概要

瓦集積 SK103 B₁トレンチ北部の緩斜面に形成された瓦集中部分である。東西約7 m、南北約1.5 mであり、瓦層の厚さは0.2~0.4 m程である。表土直下で検出した。

瓦集積 SK104 瓦集積 SK101の西側の平坦部に形成された瓦集積である。東西約6 m、南北約2 m、瓦層の厚さ約0.2 mを測る。SK101・SK103に比べると瓦片はかなり細片化しているものが多く認められる。

井戸 SE105 B₁トレンチ中央部東壁ぞいで検出した不定円形の素掘り井戸である。直径2.3 m程、深さ1.5 m以上である。埋土は暗灰色粘質土であり、埋土中より瓦片・中世土器片等が出土している。湧水が激しく、底部は未確認である。

土壌 SK107 B₁トレンチ北部で検出した直径1.3 m程の浅い土壌である。黄褐色混礫土の地山を穿っており、埋土内より中世の土師皿が多く出土した。

溝 SD116 掘立柱建物 SB120の東側を南北に走る溝である。溝幅1.4~0.9 m程、検出長約8 m、深さ0.2~0.3 m程を測る。溝南端は攪乱により不明である。埋土中からは瓦・須恵器片・埴輪・中世土器が出土している。

土壌 SK151 B₂トレンチ西端部で検出した東西約0.6 m、南北約1.5 mの楕円形土壌である。土壌内からは細片化した瓦片が多く発見された。

瓦集積 SK156 B₂トレンチ南東端部で検出した瓦の集中部分である。東西約2 m、南北1.5 m以上で、地形の凹みに細片化した瓦が集中していた。

瓦集積 SK157 B₂トレンチの基壇建物 SB300の基壇東辺にそって幅2 m程の広がりをもつ瓦集中部分。この瓦集積の層序は、基壇外方の旧地表面直上に薄い灰層がありその上に多くの軒丸瓦を含む瓦層があり、その上に炭を混じえた焼けた壁土が被覆するというものである。これは、明らかに基壇建物 SB300が焼亡した時に倒壊した屋瓦ないし壁が倒壊時のままで遺存していた部分であることが理解できた。

溝 SD158 B₂トレンチにおいて、基壇建物 SB300の西北端を破壊しつつほぼ東西に走る溝である。淡褐色砂質土の埋土内からは瓦片とともに近世陶器が出土している。

土壌 SK159 B₂トレンチ東部北壁ぞいで検出した不整形土壌である。規模は東西2.7 m、南北1.3 m以上である。埋土上層には多くの細片化した瓦片を含んでおり、土壌底よりは完形の土師器の皿が押しつぶされた状態で発見された。基壇建物 SB300の一部を切り込んでおり、溝 SD158により一部を破壊されている。

土壌 SK160 B₂トレンチ西側で検出した長円形土壌である。南北約3.1 m以上、東西約1.8 mであり、基壇建物 SB300の一部を切り込んでいる。埋土中より瓦片が出土している。

溝 SD161 B₂トレンチ西端部で検出した溝状遺構。検出幅1.5 m、検出長6.5 mを測る。埋土は上・下の2層に分層できる。上層は多量の瓦・拳大の礫・中世土器等を含んでおり、下

層はほとんど瓦類のみによって占められている。この遺構は、層位的には表土直下より掘り込まれており、B₂トレンチにおいて地山を切り込む状況で検出した部分は、その底部付近である。溝 SD161 は、B₁トレンチの西壁面においても確認され、状況的には、中世以降に耕作の邪魔になる瓦・礫等を投棄した場所である可能性が高い。

土壌 SK170 B₁トレンチ北半部中央で検出した東西1.2m、南北0.8m 程の楕円形土壌である。埋土には焼土が多量に含まれている。出土遺物はない。

土壌 SK171 土壌 SK170 の西側に穿たれた東西1.2m、南北0.8m 程の不定形土壌である。埋土には焼土が多量に含まれている。後述する焼土 SX305 を切り込んでいる。

土壌 SK174 B₁トレンチ北半部西端付近で検出した東西約1m、南北約0.8m の不定形土壌である。埋土には焼土が含まれていた。焼土 SX305 を切り込んでいる。

土壌 SK175 土壌 SK171 南側で検出した直径1.5m 程の不整形土壌である。一部をグリッドにより破壊されている。埋土には焼土及び瓦片が含まれていた。

土壌 SK176 土壌 SK170 南側で検出した東西約1.2m、南北約0.8m の不定形土壌である。埋土には若干の瓦片が含まれていた。

土壌 SK178 土壌 SK176 南側で検出した直径約1.3m の不整形土壌である。埋土中には若干の瓦片が含まれていた。

土壌 SK179 土壌 SK170 東側で検出した直径約1.1m の不整形土壌である。土壌内には河原石が集中する部分があった。

土壌 SK180 土壌 SK170 南西側で検出した一辺1.2m 程の方形土壌である。埋土中には多量の焼土が含まれていた。焼土 SX305 を切り込んでいる。

土壌 SK181 B₁トレンチの溝 SD119 西端部で検出した直径2m以上の土壌である。正確な規模については、未検出となっている。深さは、遺構検出面より-0.8m 程と深く、埋土下層には瓦片を若干ではあるが含んでいた。状況的には人為的掘削というより、地形起伏の凹地である可能性が強く、溝 SD119 の埋没と同時に SK181 も埋没している。

土壌 SK203 A₂トレンチ南端で検出した東西約2.8m、南北約1.2m の不定形土壌である。出土遺物はない。

土壌 SK211 A₂トレンチ東壁ぞいで検出した不定形土壌である。水田耕作にかかる起伏の一部である可能性が高い。

井戸 SE218 A₁トレンチ南端で検出した石組円形井戸である。直径1.7m 程の円形掘方内に直径1m 程の円形石組が高さ0.5m 程遺存していた。石組には人頭大から拳大の河原石を用いる。埋土中からは中世土器片が出土している。

柵 SA303 A₂トレンチ北端部で検出した東西柵列と思われる遺構。柱掘方は一辺1.5m 程、

Ⅲ. 岡本廃寺・岡本遺跡発掘調査概要

柱痕跡は0.5m程を測る。A₂トレンチ北壁は、後世の土取りによりB₁トレンチの位置する部分から削り取られた高さ2m程の崖面であり、状況的にはこの柵列は、後世土取り後の遺構である可能性が高い。

焼土 SX305 B₁トレンチ中央西よりで検出した焼土帯である。東西約7m、南北約3mの範囲に大きく2カ所に分かれて焼土が存在している。焼土は、掘立柱建物 SB120 の北西端部柱穴数個を覆っている地山によく似る黄褐色混礫土層(整地層)上に厚さ数cm程でのっている。焼土面は平坦であり、かなり強い火を受けているためか表面は灰白色状に硬く焼けている。焼土は、単に地面が焼けたものではなく、薄い粘土を上記の整地層上に貼り付けてあり、明らかに何らかの施設(窯状施設)の底部の一部が遺存しているものであることが推察された。SX305周辺に穿たれている土壌 SK170・SK171・SK174・SK175・SK176・SK180の埋土には、焼土が多量に含まれており、この焼土と何らかの関係をもつ一連の施設である事が考えられた。

今回の調査の当初の該当遺跡が「岡本瓦窯跡」であったことは前述したが、その点から見れば、この焼土 SX305 は「岡本瓦窯跡」に対応する遺構となるのかも知れない。しかし、現実では、これが瓦窯跡であることを示す確実な証拠を見出すことは難しく、現時点では不明焼土遺構と言わざるをえない。

焼土 SX305 の年代についても不確定な部分が多いが、掘立柱建物 SB120 廃絶以後のものである。これは先に述べたように、掘立柱建物 SB120 の柱穴を覆う整地層上に焼土が展開している状況より確定し得る。

沼 SX350 F トレンチの南端部において検出した落ち込みであり、沼ないしは湿地状の自然地形と思われるものである。規模不明。深さは検出面より-0.2m程である。埋土は上層が黒褐色粘質土、下層が暗青灰色土であり、一定期間、滞水状況にあった部分と思われる。埋土中からは、中世土器・瓦片が出土している。また、調査においても常に水が湧き出していた。

(3) 瓦 類

岡本廃寺より出土している遺物は、瓦を中心に土器・鉄製品等があり瓦がコンテナ約400箱、土器類が約5箱分である。

瓦には、軒丸瓦・軒平瓦を始め、丸瓦・平瓦・熨斗瓦・鬼瓦・極先瓦・鷗尾等の種類が認められ、出土量の大多数は丸瓦・平瓦によって占められている。これらの瓦類の報告時までの整理状況は、軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦等の出土個数の比較的少ない種類については概ね終了しているものの、丸瓦・平瓦についてはそのすべてを整理し終えるのは現時点では不可能に近く、その概ねの傾向と型式を把握し得たにすぎない。

土器には、須恵器・土師器・瓦器・陶器・輸入磁器等の種類を認めることができる。しかし、この中で、寺の存在期間中に比定できるものは少なく、その多くが所謂中世土器である。中世土器については、その概略を報告するに留め、詳細については次の機会としたい。

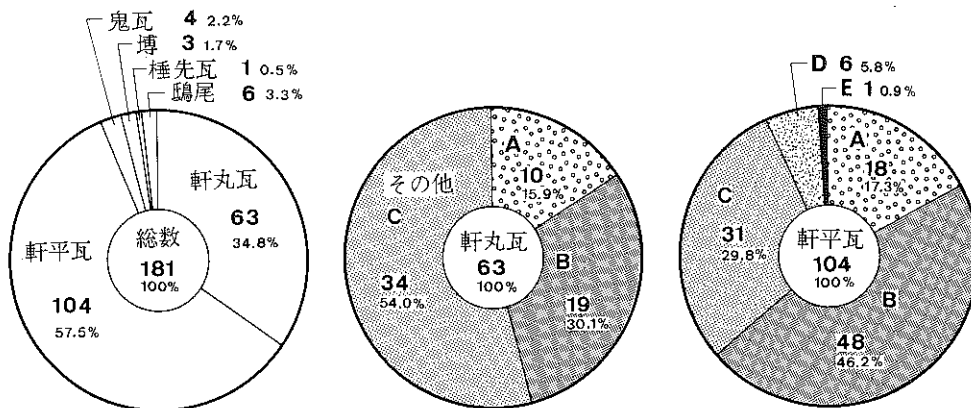
また、ここで、使用する瓦の部分名称は、奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所基準資料Ⅰ』^{註3}・『同基準資料Ⅱ』^{註4}及び佐原眞氏の論文「平瓦桶巻作り」^{註5}の用語に基本的には依っている。

(a. 軒丸瓦)

軒丸瓦は63個出土しており、それらは瓦当文様によってA～Cの3型式に分類できる。

軒丸瓦 A 複弁八弁蓮華文を内区主文とし、外縁は平坦縁気味となっている。外縁外周・内周には圏線がめぐり、その中に想定49個の珠文が配置されている。中房は大ぶりで低く、中に環状蓮子が1+4+8で配置されている。中房外周には圏線がめぐり。胎土は、細砂粒を比較的多く含み、一見して他の型式のものと区別が可能である。色調は、焼成が良好なものは暗青灰色を呈し、不良のものは、黄乳色を呈する。出土数は10個体である。

この型式の文様は、基本的には大和川原寺の系譜を引くものであるが、外縁が大和川原寺



第10図 軒瓦等出土割合

Ⅲ. 岡本廃寺・岡本遺跡発掘調査概要

では三角縁となり、そこに面違鋸歯文が配される点で異なっている。この「岡本廃寺式」とも呼ぶべき瓦当文様は、京都府下においては見受けられず、岡山県北津高廃寺・鳥取県弥陀ヶ平廃寺^{註6}に比較的類似したものが、奈良県法隆寺^{註7}と長林寺^{註8}に弁の退化したものがある。

軒丸瓦 B 復弁八弁蓮華文を内区主文とし、大ぶりの低い中房に1+6+11の蓮子を配している。外縁の形状には3種類が認められ、a～cに細分できる。出土個数は19個である。

aは、平坦縁であり、圏線に囲まれた中に線鋸歯文を配するものである。

bは、外縁が外区外縁と内区外縁とに区別できるものであり、外区外縁は三角縁気味ないしは直立縁となっている。内区外縁には圏線に囲まれた線鋸歯文が配されている。

cは、bと同様に外縁が外区外縁と内区外縁とに分かれ、外区外縁が二段からなる直立縁となっているものである。

これらのa～cの形状差異は、軒丸瓦Bにおいて、外縁のみにおいて認められるものであり、内区文様・中房等の文様は、その範キズまでも含めて全く同一である。したがってこれらの差異は、軒丸瓦Bの範の使用範囲もしくは範のほりなおしにより出現していると理解できる。中房の蓮子において認められる範キズの変化から、a・bが古くcが新しいと理解でき、cは、a・bで使用した範の外縁部の外周にさらに一段の深目の掘り込みをしたものと考えられる。aとbとの間に範のほりなおしがあるか否かについては、aの製作について、bの内区外縁までの粘土充填であれば、範のほりなおし等を考慮しなくても理論的にはaは製作可能であるため、不明といわざるをえない。

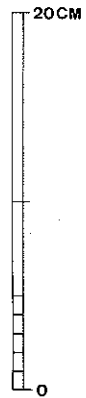
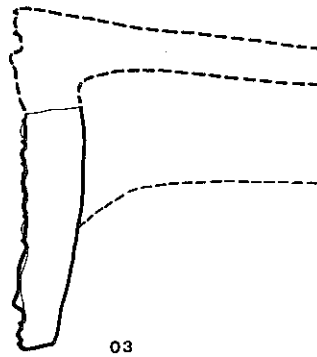
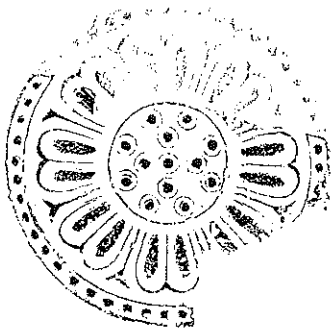
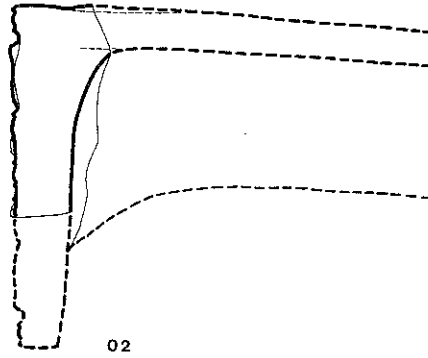
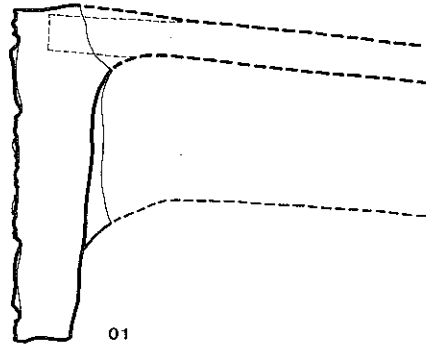
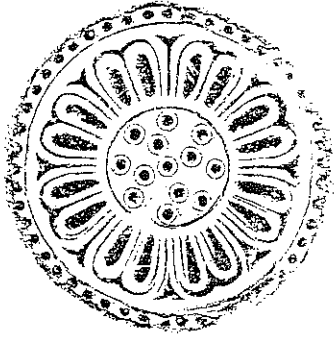
胎土は、比較的精良な粘土を使っており、砂粒等は余り含まない。色調及び焼成の度合は、須恵質の硬く焼けしまったものは青灰色系であり、通常の焼け具合のものは、淡橙色から乳白色を呈している。

この文様は、所謂法隆寺西院伽藍式の系譜を引くもので、京都府下の類例としては、京都市伏見区法琳寺出土例^{註9}がある。

軒丸瓦 C 単弁八弁蓮華文を内区主文とし、中房には1+4の蓮子を配している。外縁は軒丸瓦 Bcと同じ構成であり、外区外縁に二段の直立縁を、内区外縁に圏線に囲まれた線鋸歯文を配している。また、瓦当の外周部に範の当りによる粘土のはみ出しが認められることから、この範は、外区外縁の凹凸まですべて範にほり込まれたものであることが理解できる。

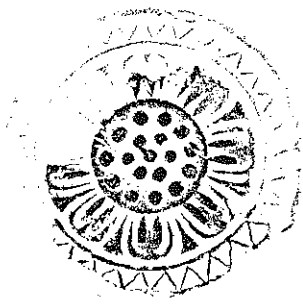
胎土は比較的精良であり砂粒等を余り含まない。焼成の度合は一律であり須恵質のものは見あたらない。色調は、表面に炭素の吸着が一般的に認められるため黒灰色を呈している。出土個数は34個と軒丸瓦の中で一番多い。

この文様は、基本的には軒丸瓦 Bcの文様構成を踏襲しつつ、内区文様を単弁文と変化させているもので、軒丸瓦 Bcの変化型式と見ることができる。

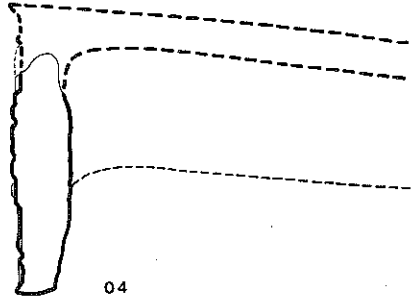


第11図 軒丸瓦A

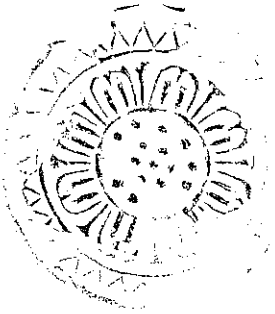
Ⅲ. 岡本廃寺・岡本遺跡発掘調査概要



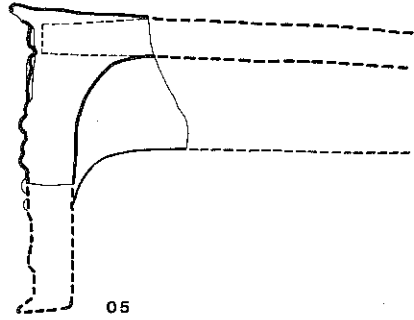
Ba



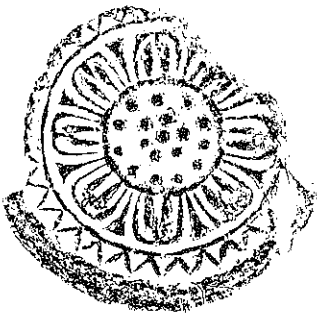
04



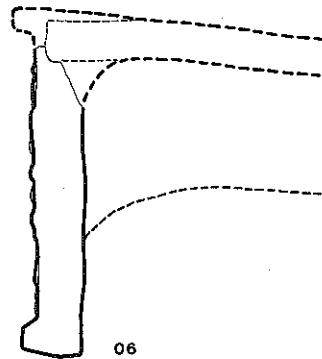
Bb



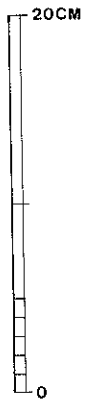
05



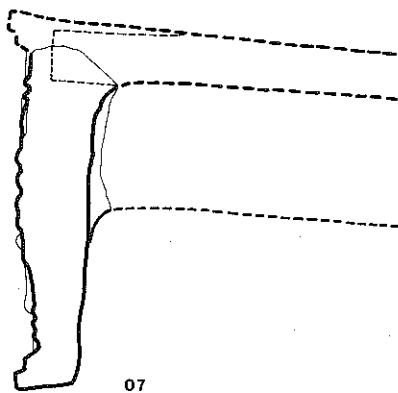
Bb



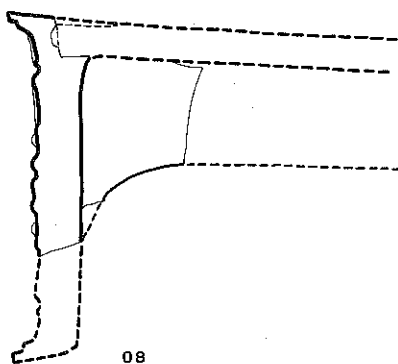
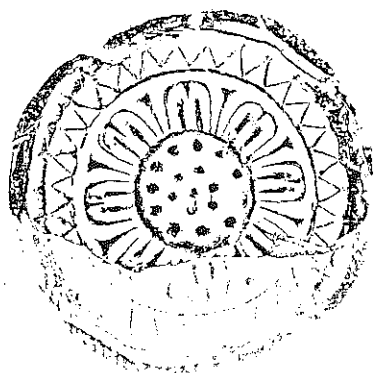
06



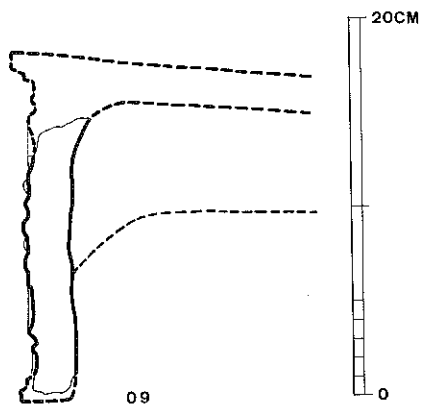
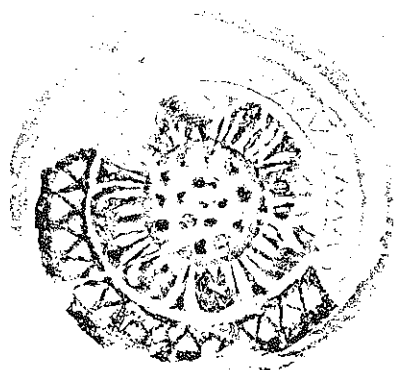
第12図 軒丸瓦 Ba・Bb



07

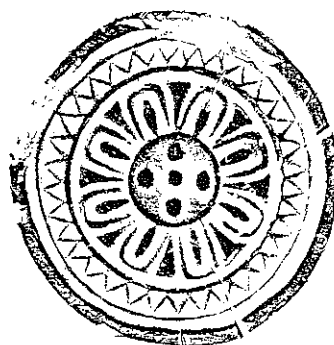
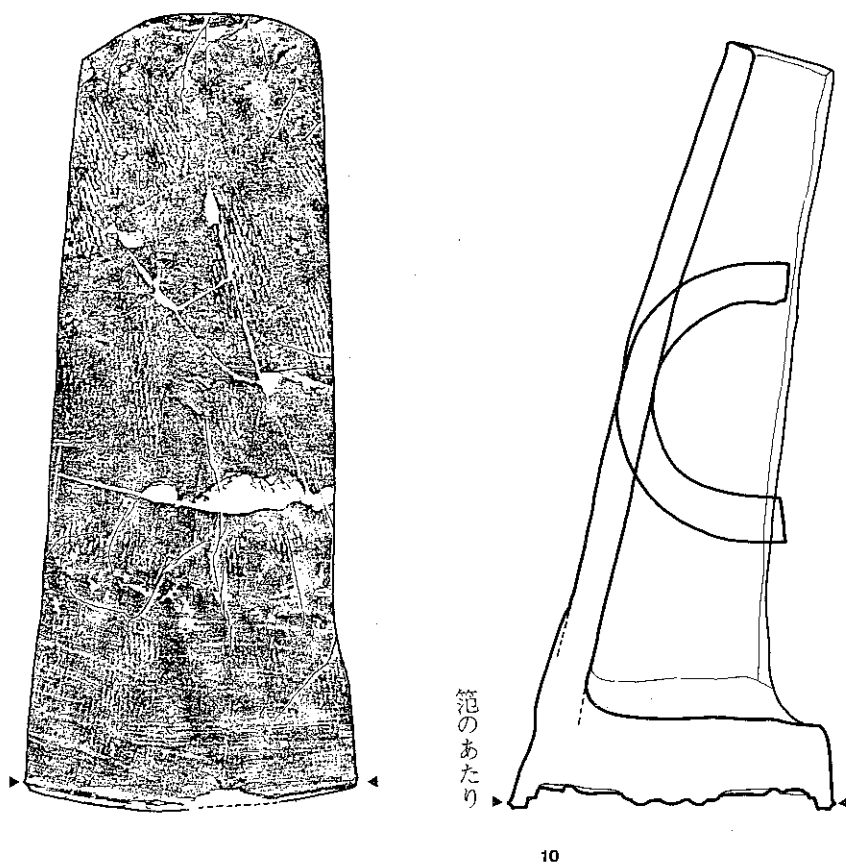


08

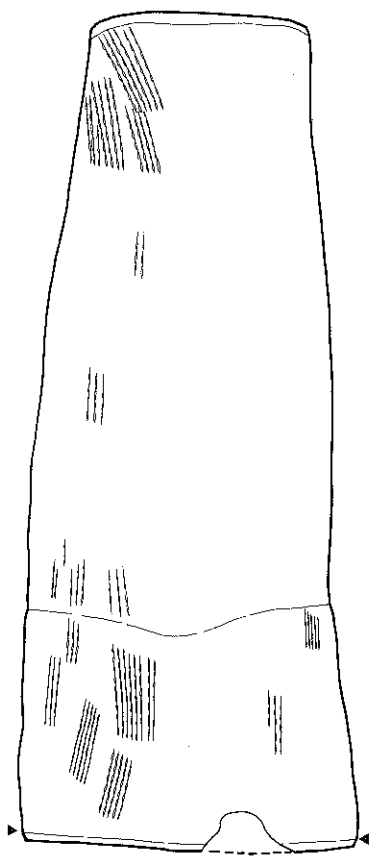


09

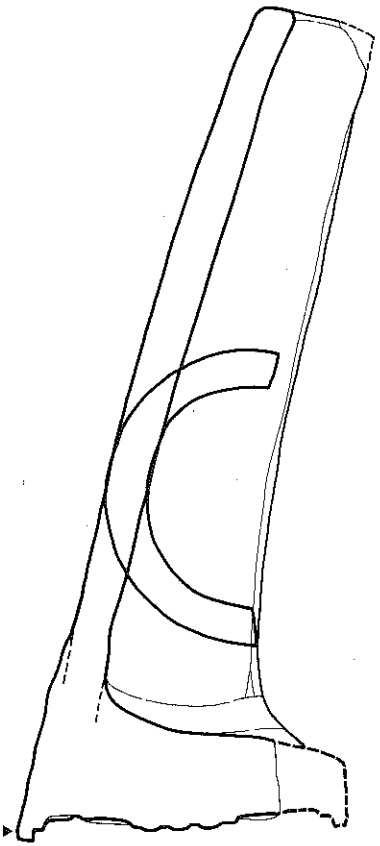
第13図 軒丸瓦 Bc



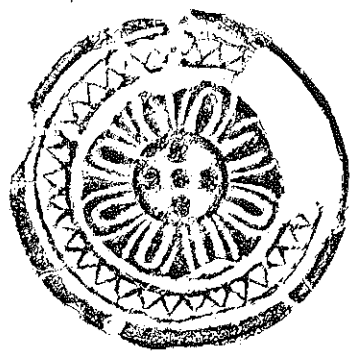
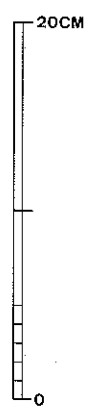
第14図 軒丸瓦C (I)



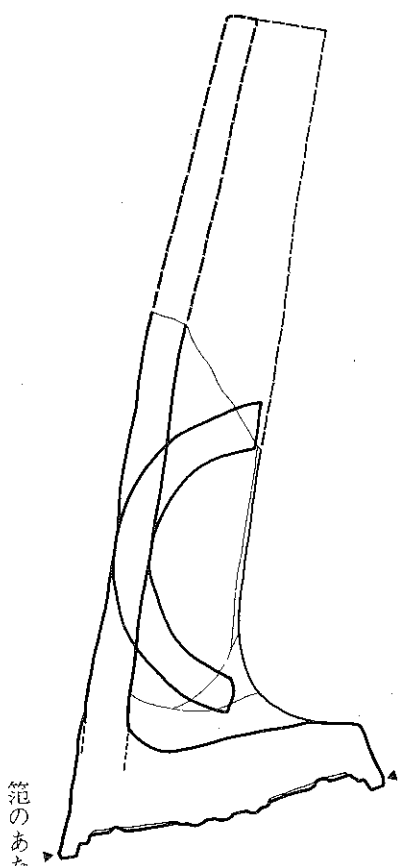
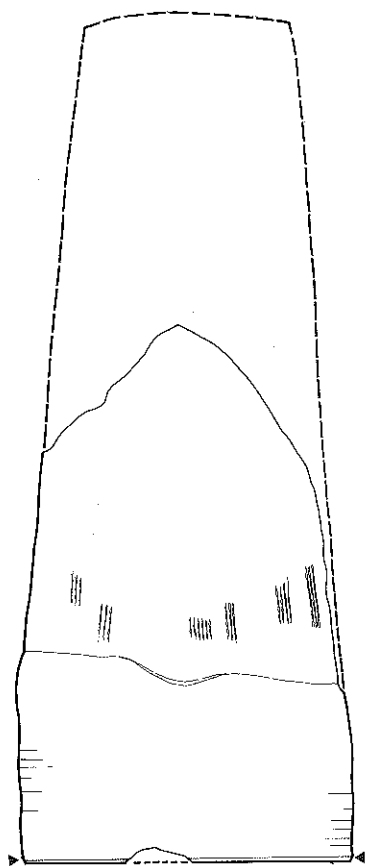
范のあたり



11

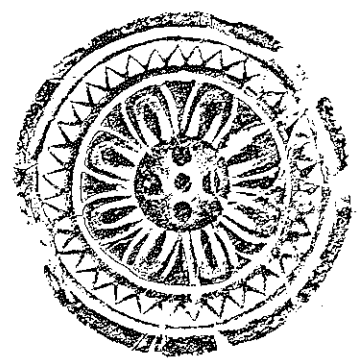
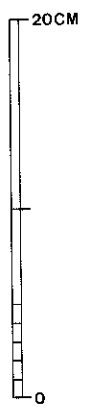


第15図 軒丸瓦C (2)



範のあたり

12



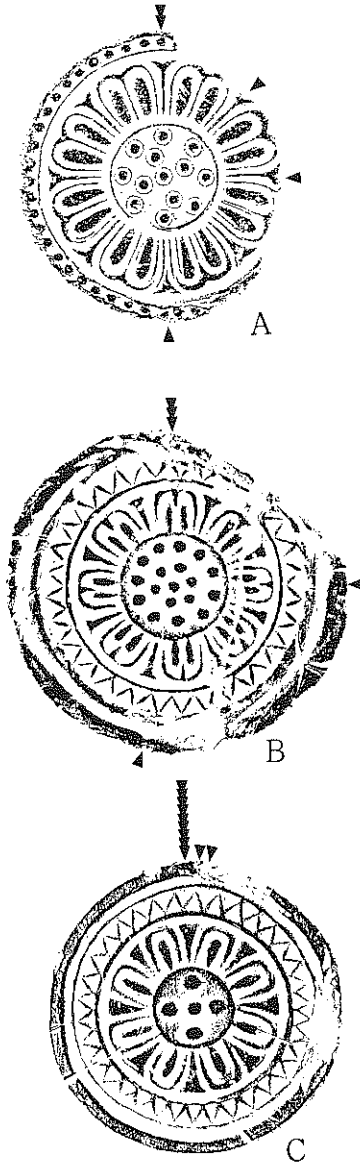
第16図 軒丸瓦C (3)

丸瓦の接合 軒丸瓦A～Cに対応する丸瓦は後述するように、それぞれ丸瓦A～Cである。では、以下に軒丸瓦における丸瓦の接合のしかたについて見てみよう。

第17図は、各軒丸瓦の文様と丸瓦の取り付け位置の関係を図示したものである。軒丸瓦Aでは5個体でその関係が確認できるものがあり、丸瓦凸面頂部は文様に対して45°を最少公倍数として取り付けられている。軒丸瓦Bでは5個体でやはり文様と丸瓦の取り付け位置が確認でき、概ね90°ごととなっている。また、軒丸瓦Cは11個体で取り付け位置が確認でき、そのすべてが同一位置となっている。このように、それぞれの文様と丸瓦の取り付け位置が一定の規則性を持つことは、各型式の范の形状に起因するものと思われ、軒丸瓦Aでは8角形の范、軒丸瓦Bでは4角形の范が想定できる。軒丸瓦Cについては范の形状はなかなか想定できないが、范を一見するだけで特定位置が理解できるものであったと思われる。

軒丸瓦の製作工程の中で丸瓦がいつ取り付けられるかについては、通常、范に粘土を一定量充填した段階において、その上に生乾きの丸瓦を乗せ接合しているものと考えられている。軒丸瓦A・軒丸瓦Bについてもその遺物に残された調整・製作痕跡からやはり同様の手順を復元できる。しかし、軒丸瓦Cについては、これとは全く違う製作工程が復元できる。

軒丸瓦Cの瓦当部全周囲には丸瓦部に認められる縄叩き痕跡と同様のものが認められる。したがって、丸瓦と瓦当部接合後に、特に瓦当部分を中心に叩きしめが実施され、軒丸瓦の基本的形状が完成している事が理解できるのであるが、問題となるのは、この瓦当部に実施された叩きしめ痕跡を瓦范のあたりが切り込んでいる事である。いうなれば、范からの瓦当文様の移し出しは、軒丸瓦の基本的形状完成後と理解できるのである。實際上、どのように文様が施されたか現時点では不明であるが、軒丸瓦A・軒丸瓦Bとは全く違う技法において製作された事は確かである。



第17図 文様と丸瓦角度

Ⅲ. 岡本廃寺・岡本遺跡発掘調査概要

(b. 軒平瓦)

軒平瓦は104個体出土しており、5型式7種類に分類できる。瓦当文様はいずれも重弧文である。

軒平瓦 A 直線顎の3重弧文である。文様は浅く、断面はゆるやかな山形である。顎部調整は横ナデであり、後述する平瓦Aを軒平瓦としたものである。胎土は細砂粒を多く含み、一見して他型式のものとは区別できる。18個体出土している。

軒平瓦 B 段顎の3重ないし4重弧文である。重弧数ないしは顎の調整によりⅠ～Ⅲに細分できる。48個体出土している。

Ⅰは、4重弧文で、顎全体に格子叩きが残るものである。文様は浅く、弧の断面は台形をなす。

Ⅱは、4重弧文で、顎全体に格子叩きを施した後、文様側半分をナデ消すものである。文様の状況はⅠと同様である。

Ⅲは、3重弧文で、顎の全体をナデ調整するものである。文様の上・下端部には施工具で

型式	断面形状	重弧数	顎形状	顎調整	平瓦部凸面調整	顎部側断面形状
A		3	直線	ヨコナデ	ナデ	
BI		4	段	格子タタキ	格子タタキ	
BII		4	段	格子タタキ ↓ 一部 ヨコナデ	格子タタキ	
BIII		3	段	ヨコナデ	格子タタキ	
C		3	直線	縄タタキ ↓ ヨコナデ	縄タタキ ↓ ヨコナデ	
D		3	直線	ヨコナデ	格子タタキ	
E		2	直線	格子タタキ	格子タタキ	

第18図 軒平瓦分類図

ある型のあたりが認められる。文様は深く刻まれており、弧の断面は台形である。

以上のⅠ～Ⅲは、後述する平瓦Bを軒平瓦としたものである。

軒平瓦 C 直線顎の3重弧文である。顎を形成するための補充粘土は全くなく、平瓦Cの端面に施文し軒平瓦としている。顎部の調整は縄叩きの後にナデ調整を行っている。文様は比較的深目に刻まれており、弧の断面形状は山形である。文様の上・下端部には型のあたりが認められる。出土個数は31個体である。

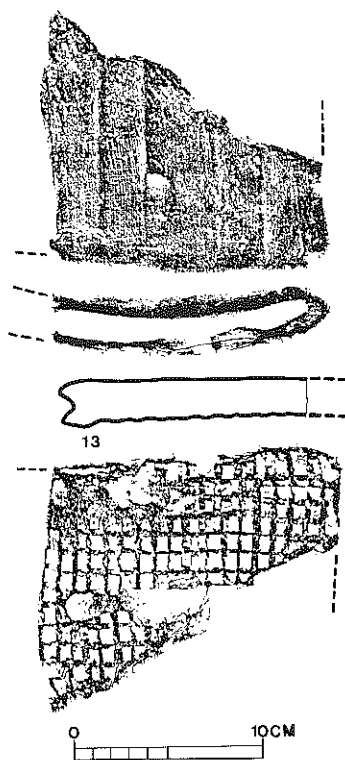
軒平瓦 D 直線気味の顎をもつ3重弧文である。顎部には薄く粘土を貼付している。文様は深目ではあるが、弧同志の間が比較的広いために一見したところでは深さを感じない。顎部の調整はナデ調整である。平瓦Bを軒平瓦としたものである。出土個数は31個体である。

軒平瓦 E 直線顎の2重弧文である。平瓦Bの端面に施文し軒平瓦としたものである。1個体のみ出土しており、当遺跡出土の軒平瓦の中ではやや特殊なものである。

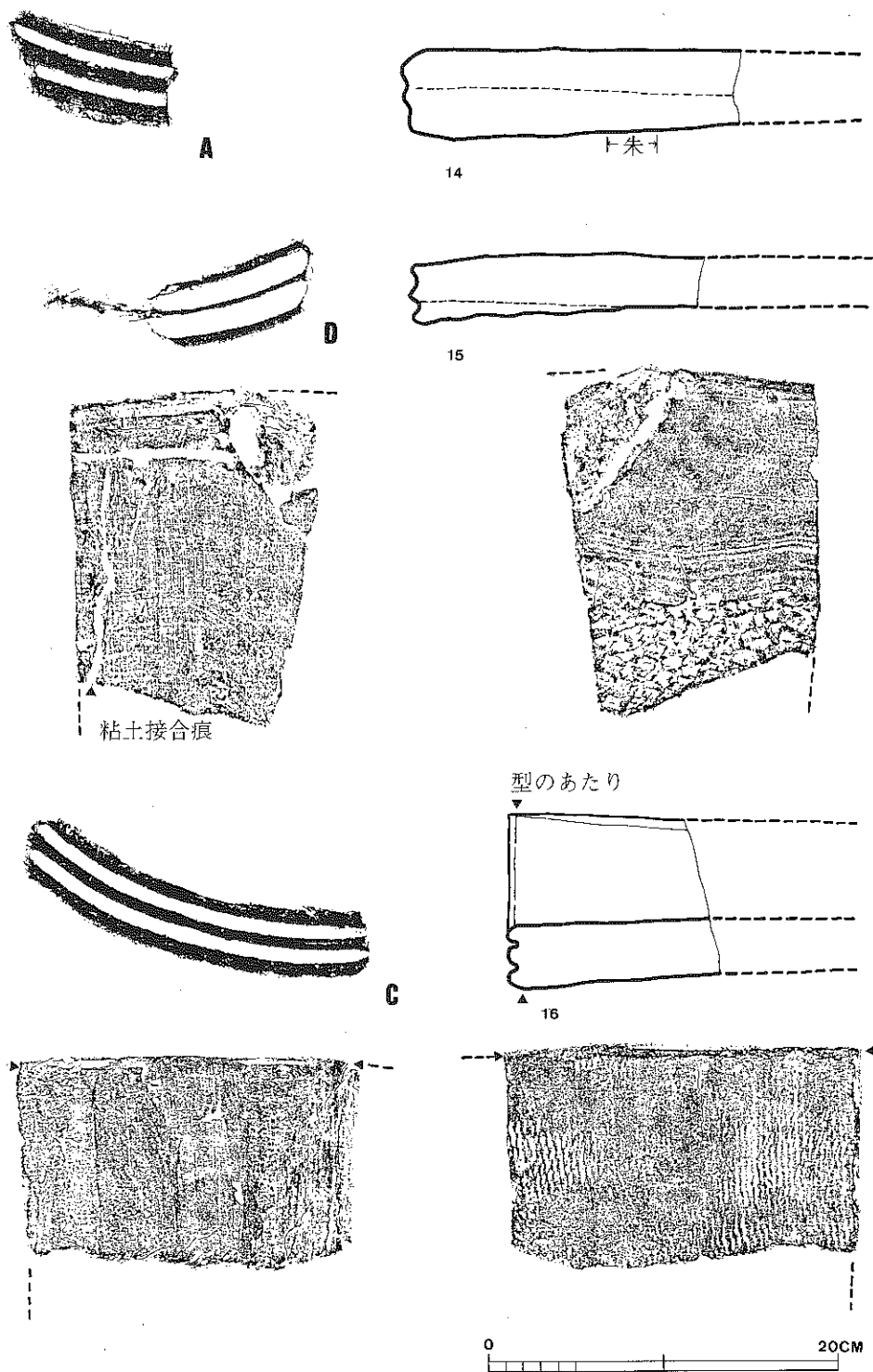
製作工程 顎の剥落等により、比較的製作工程の復元が容易な軒平瓦Bについて、その手順の復元を行いたい。

軒平瓦は、通常の平瓦広端部に顎等を設け、そこに施文するものであるため、平瓦の製作工程と顎の貼付とがどのように組み合わされているかが大きな問題となる。

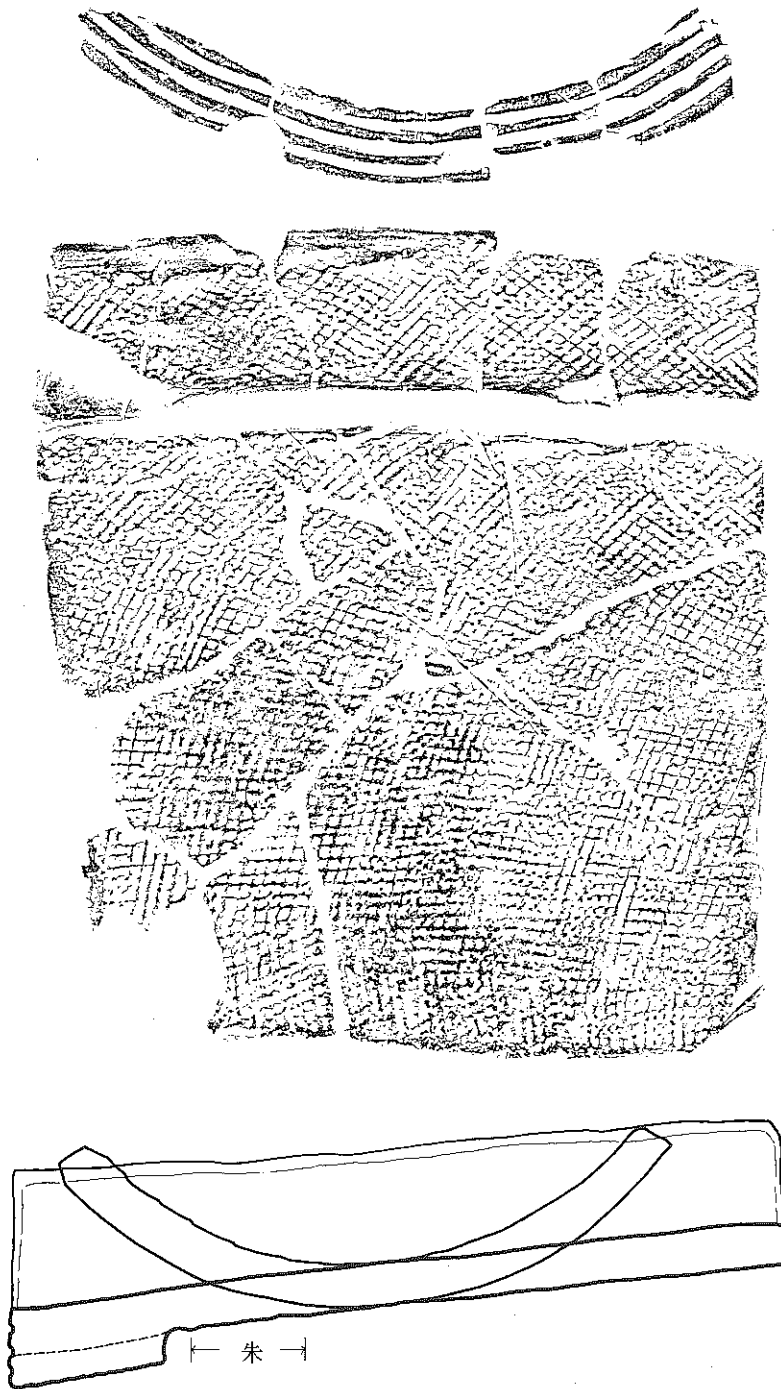
軒平瓦Bにおいて、顎部の剥落しているものを観察すると、平瓦凸面側顎剥落部分だけ格子叩きが施されていない事が理解でき、かわって、横方向に強いナデ痕跡が認められるものがある事に気付く。ようするに、平瓦凸面に施される叩きは、広端側の顎が貼付される部分にはなく、軒平瓦BI・BIIにみるように、貼付された顎の凸面に施されているのである。このことは、軒平瓦Bの製作に関しては、まず、桶に粘土板を巻きつけ、その後平瓦の広端部となる桶底部ぞいに顎となるべき粘土帯を巻きつけ、そして全体にわたって叩きを行っているという理解できるのである。軒平瓦BのⅠ～Ⅲの各種は、この叩き成形後に、顎部の叩き痕跡をどのように処理するかによって分かれることとなる。次に施文をするわけであるが、文様面は平瓦の広端面側(これはあくまでも、桶の形状が円錐台形と仮定した場合ではあるが)であるため、施文しようとする面は桶底面にくっついている。したがって、分割前の軒平瓦円筒を桶からはずさなければ



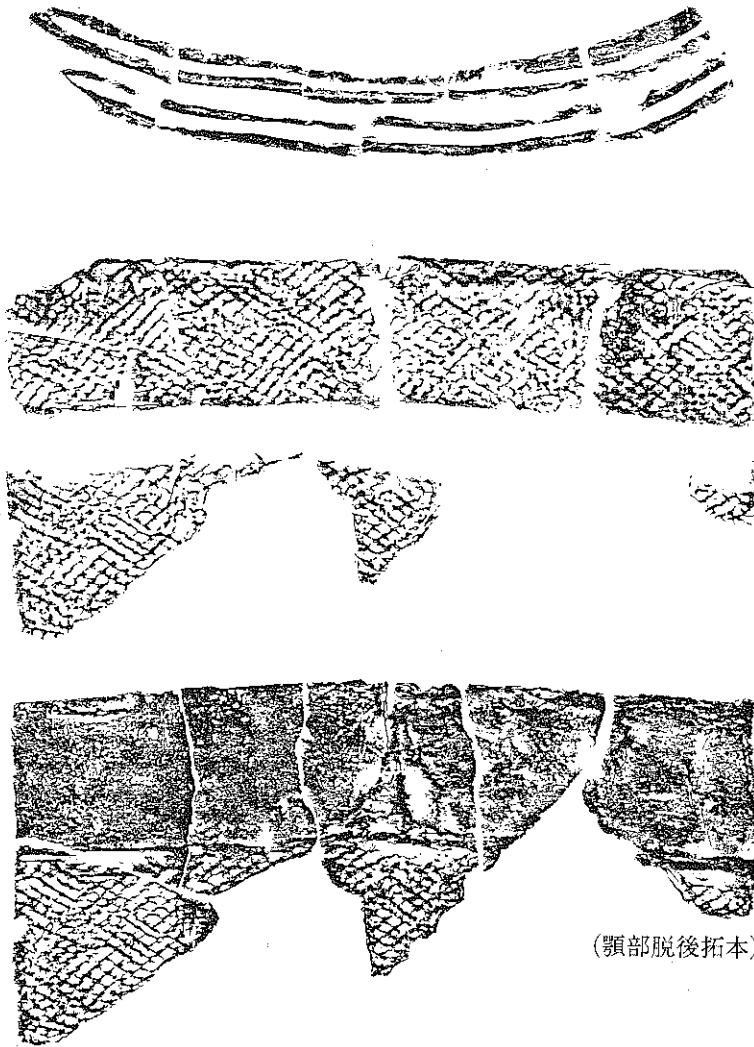
第19図 軒平瓦E



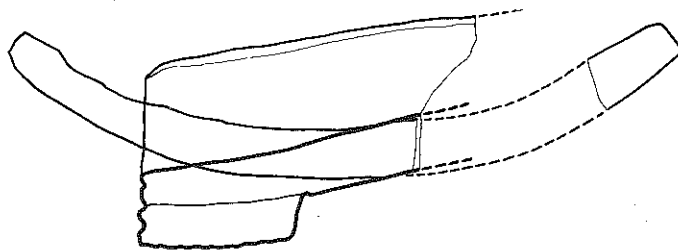
第20図 軒平瓦A・C・D



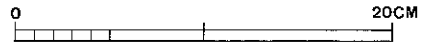
第21图 軒平瓦BI (1)



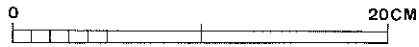
(顎部脱後拓本)



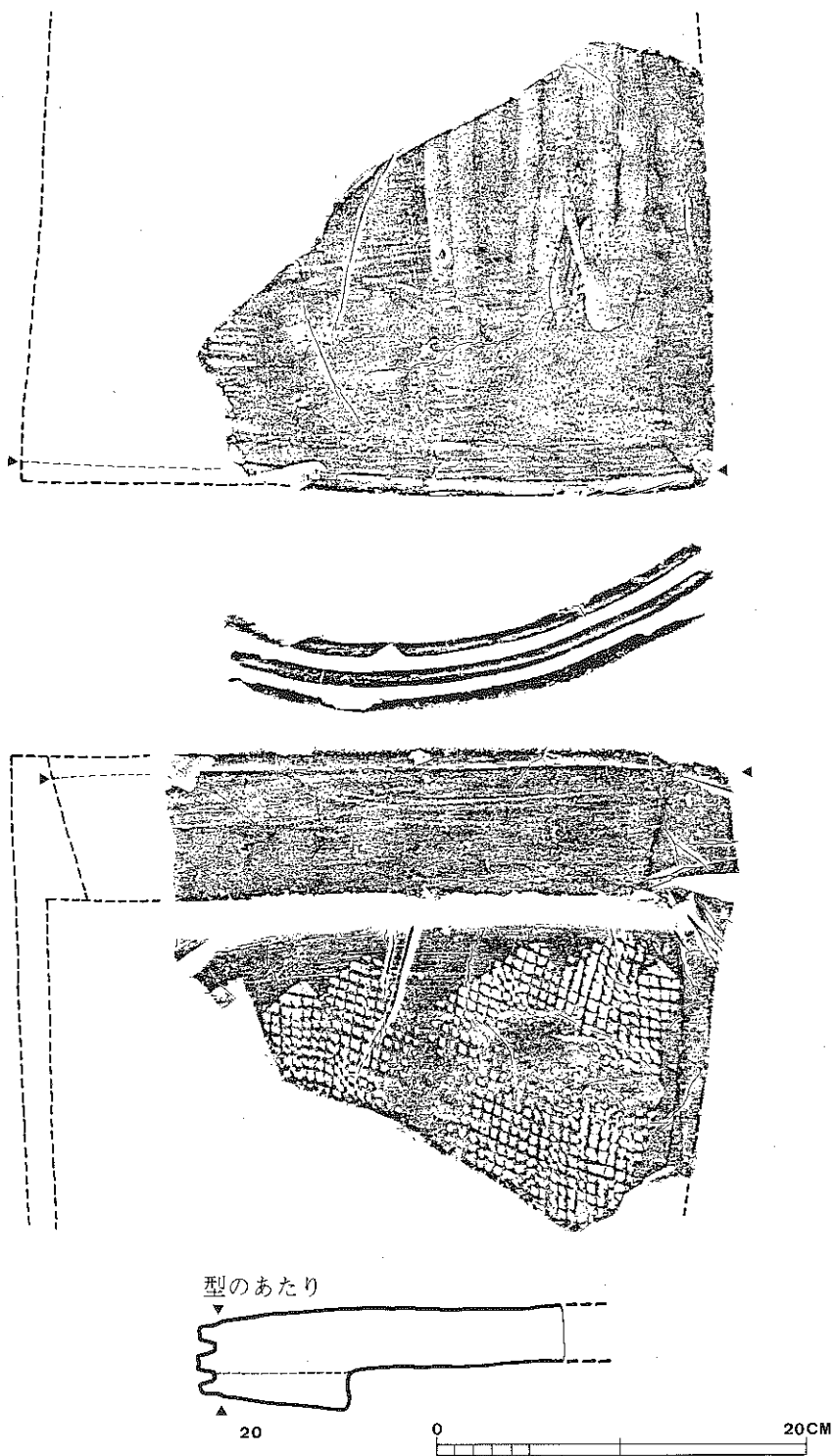
18



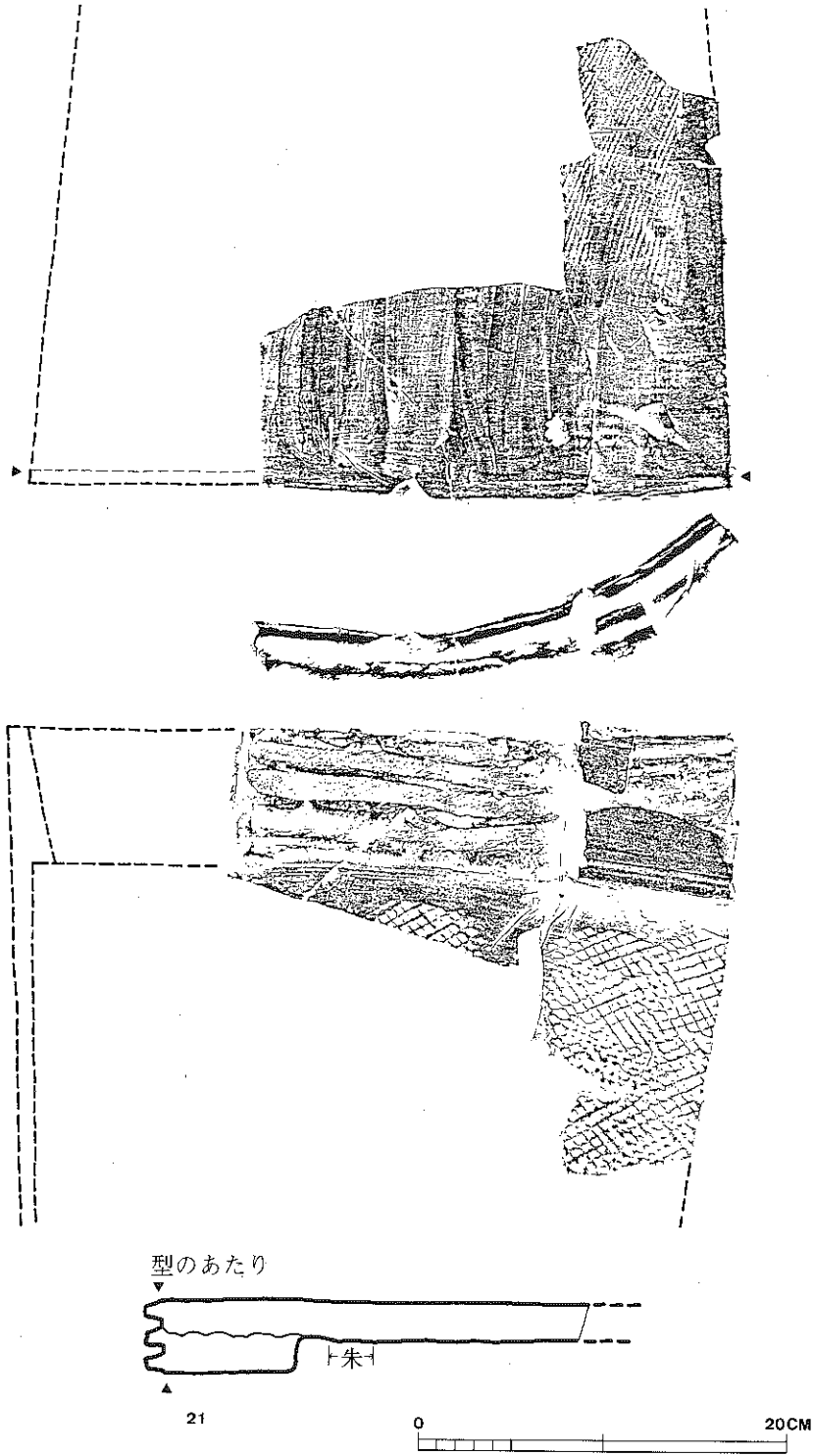
第22図 軒平瓦 B I (2)



第23图 軒平瓦 B II



第24図 軒平瓦 BⅢ (1)



第25図 軒平瓦 BIII (2)

Ⅲ. 岡本廃寺・岡本遺跡発掘調査概要

ならない。施文の手順については2通りが考えられる。一つは、桶からはずした軒平瓦円筒を分割する前に施文し、後に4分割し一枚の軒平瓦とする。もう一つは、桶からはずした軒平瓦円筒をまず4分割し一枚の軒平瓦とした後に一枚一枚に施文を施す、である。前者であることを確認するためには、瓦当文様に、施文具が軒平瓦円筒を一周して起点と終点が出合った所が検出できれば良い事となる。出土個体の中には明瞭にこの文様の合わせ目を読みとることはできないものの、その可能性が高い個体を見出すことができるため、ここでは前者の手順による施文工程を想定しておきたい。

施文具 軒平瓦Eを除く他はすべて所謂型引きによる施文を行っている。この中で軒平瓦BⅢと軒平瓦Cには、文様の上・下端に型のあたりが認められ、これに用いられた型は、瓦当面より広いものであったことが理解できる。また、それ以外のものについては、この型のあたりが認められないため、型の幅は瓦当面の縦の長さと同じのものであったと想定できる。施文後、軒平瓦Aと軒平瓦Dについては、文様面をナデ調整している。

〔c. 丸瓦〕

丸瓦は平瓦と同様に出土量が多く、この報告時点においてその整理作業は未完了のままとなっている。したがって、以下に報告するのはあくまでも丸瓦における基本的な様相に留まっており、詳細については今後新たな整理作業の機会を待つこととしたい。

丸瓦は概ねA～Eの5型式に分類できる。

丸瓦A 行基葺き型式のものであり、第1次成形を粘土板巻きつけによっている。第2次成形は不明である。成形後は凸面全体にわたってヨコナデ調整を施している。胎土は砂粒を多く含み、焼成の良いものは暗青灰色を呈する。軒丸瓦Aに対応する丸瓦であり、胎土・色調において他のものと一見して区別できる。出土量は余り多くない。

丸瓦B 行基葺き型式のものであり、第1次成形を粘土板巻きつけによっている。第2次成形は不明である。成形後は凸面全体をヨコナデもしくはタテナデによって調整している。胎土は比較的精良であり、須恵質に焼けしまっているものは灰白色に、通常のは淡橙色から乳白色を呈している。軒丸瓦Bに対応する丸瓦であり、出土量は比較的多い。

丸瓦C 行基葺き型式のものであり、第1次成形を粘土板巻きつけによっている。第2次成形は縄叩きである。成形後はヨコナデもしくはタテナデによって調整している。胎土は比較的精良であり、一般的に表面に炭素の吸着が認められるため黒灰色を呈している。軒丸瓦Cに対応する丸瓦である。出土量は比較的多い。

丸瓦D 行基葺き型式と思われるものであり、第1次成形を粘土紐巻き上げによっている。第2次成形は不明である。成形後は凸面をヨコナデ調整している。出土量は極めて少ない。対応する軒丸瓦の型式は不明である。

丸瓦 E 玉縁をもつものであり、第 1 次成形を粘土板巻きつけによっている。第 2 次成形は縄叩きであり、成形後に凸面をナデ調整している。胎土は精良で、色調は乳白色を呈している。1 個のみ出土している。対応する軒丸瓦は不明である。

(d. 平 瓦)

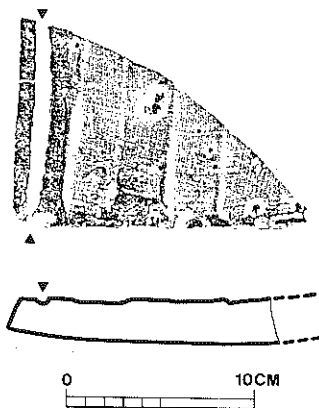
出土した瓦類の中で圧倒的多数を占めるのがこの平瓦である。丸瓦の項においてものべたように、これらの平瓦はほとんど手付かず状態であり、ここでは基本的な型式の概略を報告し、詳細については今後の課題としたい。

平瓦は、概ね A～D の 4 型式 5 種に分類できる。また、第 1 次成形はすべての型式において粘土板を使用しており、粘土紐巻き付けは確認できない。

平瓦 A 凸面は丁寧なヨコナデが施されており第 2 次成形の痕跡は全く見られない。凹面には布目が良く残り、側縁部に分割界線の凹を残すものがある。粘土板の継ぎ目を残す個体は確認できないものの、分割界線が認められることから、粘土板桶巻きによる 4 枚作りであると考えられる。胎土は細砂を多く含みやや粗い。焼成度合の良いものは暗青灰色を呈する。一見して、他の型式と区別のできるものであり、軒平瓦 A と対応する平瓦である。出土量はさほど多くない。

平瓦 B 第 2 次成形が格子叩きによるものであり、その後凸面をヘラケズリ調整を行うものを平瓦 B II とし、無調整の平瓦 B I と区別できる。叩き目には比較的細かいものから、粗いものまで 2～3 種類確認できる。凹面は、布目をそのまま残すものが主流であるが、桶(模骨)の凹凸を削り取るものが若干認められる。凹面には、粘土板の継ぎ目が読みとれる個体があり、これらが粘土板桶巻きにより製作されたものであることが理解できる。側縁部には分割界線の凹を残すものが若干ある。また、広端側凹面下部には結紐痕跡と思われる凹が模骨の合わせ目で認められる個体があり、ここでは隣り合う模骨同志が若干の起伏を見せるので桶の合わせ目であることが推察される。胎土は比較的精良であり、須恵質に焼けしまっているものは灰白色を呈し、通常のもは淡橙色ないしは黄白色を呈する。軒平瓦 B・D・E に対応する平瓦である。

平瓦 C 第 2 次成形が縄叩きによるもので、凹面に粘土板の継ぎ目が認められるので、この型式が粘土板桶巻きにより製作されたものであることが理解できる。側縁部には、分割界線の凹を残すものがあるが、この凹は直線的に側縁に平行して走るもの以外に、ゆるやかな曲線を示すものもある。また、その圧痕を詳細に観察すると縄状のものの圧痕であるこ



第26図 平瓦 C 分割界線

Ⅲ. 岡本廃寺・岡本遺跡発掘調査概要

丸瓦	対応	軒丸瓦	対応	軒平瓦	対応	平瓦
A	—	A	—	A	—	A
B	—	[Ba Bb]	—	[BI BII BIII]	—	BI BII
C	—	C	—	C	—	C
D	---			D		---D
E	---			E		

第27図 瓦対応関係

とが理解できる。凹面は、模骨の凹凸を削り取るものがある。胎土は比較的精良である。須恵質に焼けしまっているものは淡灰色を呈し、通常のもは灰白色を呈する。軒平瓦Cに対応するものと思われる。

平瓦D 第2次成形は縄叩きによる点で平瓦Cと似るが、凹面各辺ぞいに布の綴じ合わせ目が認められ、粘土板を凸型台にのせる一枚作りのものである点で平瓦Cと相似する。凸面の縄叩きの単位が平瓦Cでは広端側から狭端側にむかってやや弧状の動きをしているのに対し平瓦Dでは、ほぼ側縁に対して平行に施されている。これは、叩き実施時の工人の手の動きを示しているのであり、平瓦Cは平瓦Bに見る叩きの動きと同一であるのに対し、平瓦Dは全く違う動きを示していることが理解できる。胎土は比較的精良で、色調は灰白色系である。出土量は余り多くなく、対応する軒平瓦は不明である。

出土傾向 軒瓦類の出土位置については、その全個体において整理ができています。ここでは平瓦の遺構別の出土傾向について簡単にふれておきたい。

平瓦の遺構毎における出土傾向は、大きく3種のパターンに現段階では理解してよい。第1のパターンは、平瓦A・Bのみによって占められている状況、第2のパターンは平瓦Cのみによって占められている状況、第3のパターンは、平瓦A・B・C・Dの全型式によって占められている状況、である。

第1のパターンは、溝SD110が典型的な遺構である。ここにおける平瓦Aと平瓦Bとの割合は後者が圧倒的に多い。

第2のパターンは、瓦集積SK100・SK101・SK103・SK104であり、この掘立柱建物SB119の北方地区の瓦集積部分は、平瓦Cによって占められている特色がある。

第3のパターンは、上記外の主要遺構及び包含層である。ただ、それぞれ遺構毎に型式別

の割合は若干違うようだが、詳細については未整理のため不明といわざるをえない。

〔e. 熨斗瓦〕(第28図)

1個体のみ確認した。通常の平瓦の約半分の幅であり、両側面ともヘラケズリされている。凸面は斜格子叩きの後、ナデ調整されており、表面に濃緑色の自然釉が付着している。凹面は布目をそのまま残し、粘土板の接合痕跡を認めることができる。断面観察をすると、この粘土板の接合は単純に粘土板が合わさったものではなく、一定の補充粘土が合わせ目凸面側に充填されていることが理解できる。全長は、一端を欠失しているために不明である。



〔f. 鬼瓦〕(第40図)

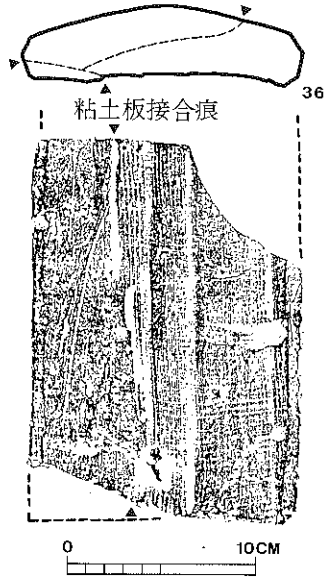
鬼瓦にはAとBの2種類が確認できる。

鬼瓦 A 鬼瓦 Aは、断片で10片ほど出土しているが全形を窺えるものはない。蓮弁文鬼瓦である。弁は剣菱形を呈し10弁である。中房には1+4の蓮子を配す。全体の形状は長方形で、下端に刳り込みをもつ。裏面に縄叩きの痕跡を残す。

鬼瓦 B 1点のみ出土。幾何学文鬼瓦と思われる。

〔g. 榿先瓦〕(第40図)

結紐文榿先瓦と呼ばれるものが1点出土している。方形榿先瓦である。主文は結紐文であり、周囲に圏線に囲まれた複波鋸齒文がめぐる。京都市山科区註10の法琳寺出土例と同范。



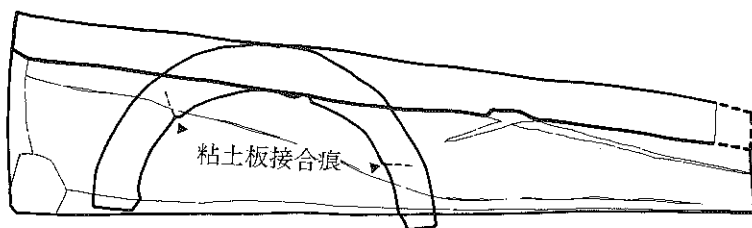
第28図 熨斗瓦

〔h. 鷗尾〕(第41図)

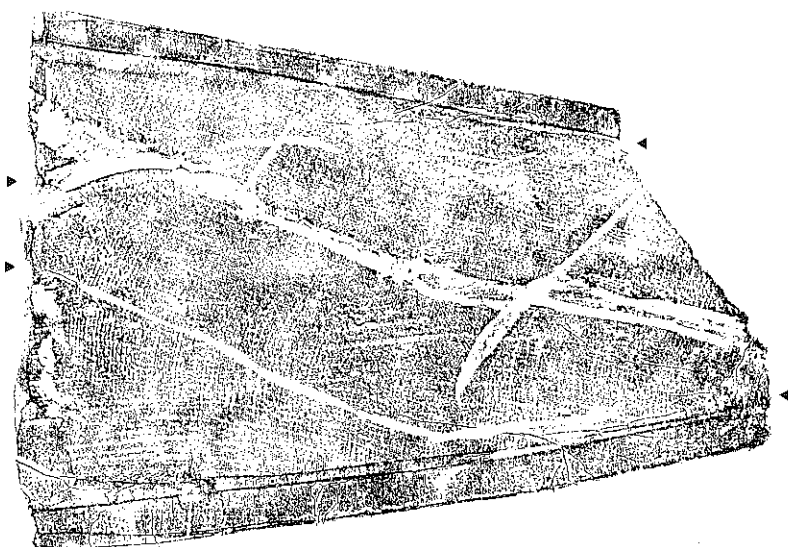
鷗尾片が10数片出土している。個体数不明。すべて同一形式と思われる。確認できる部分は、鰭部・胴部・縦帯部・腹部である。縦帯部には、圏線に囲まれた円形浮文が配されている。鰭は正段型である。

〔i. 瓦 埴〕

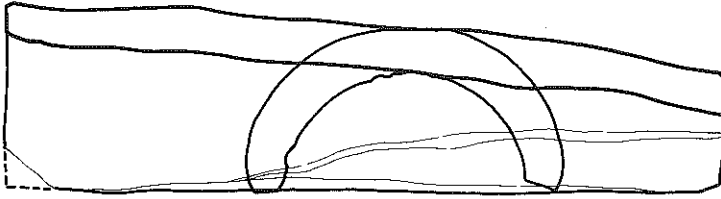
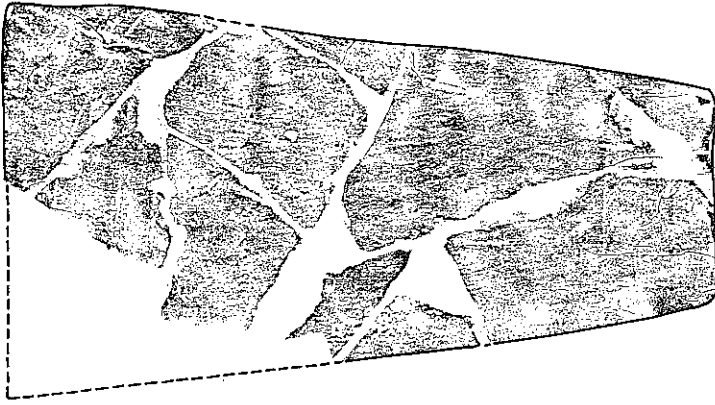
瓦埴の断片が数個体分出土している。全形を窺えない。淡橙色を呈し軟質のものが多い。



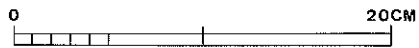
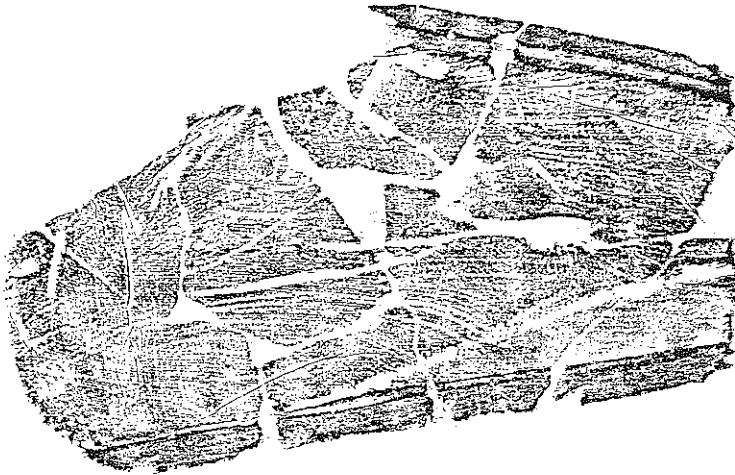
22



第29図 丸瓦B (1)

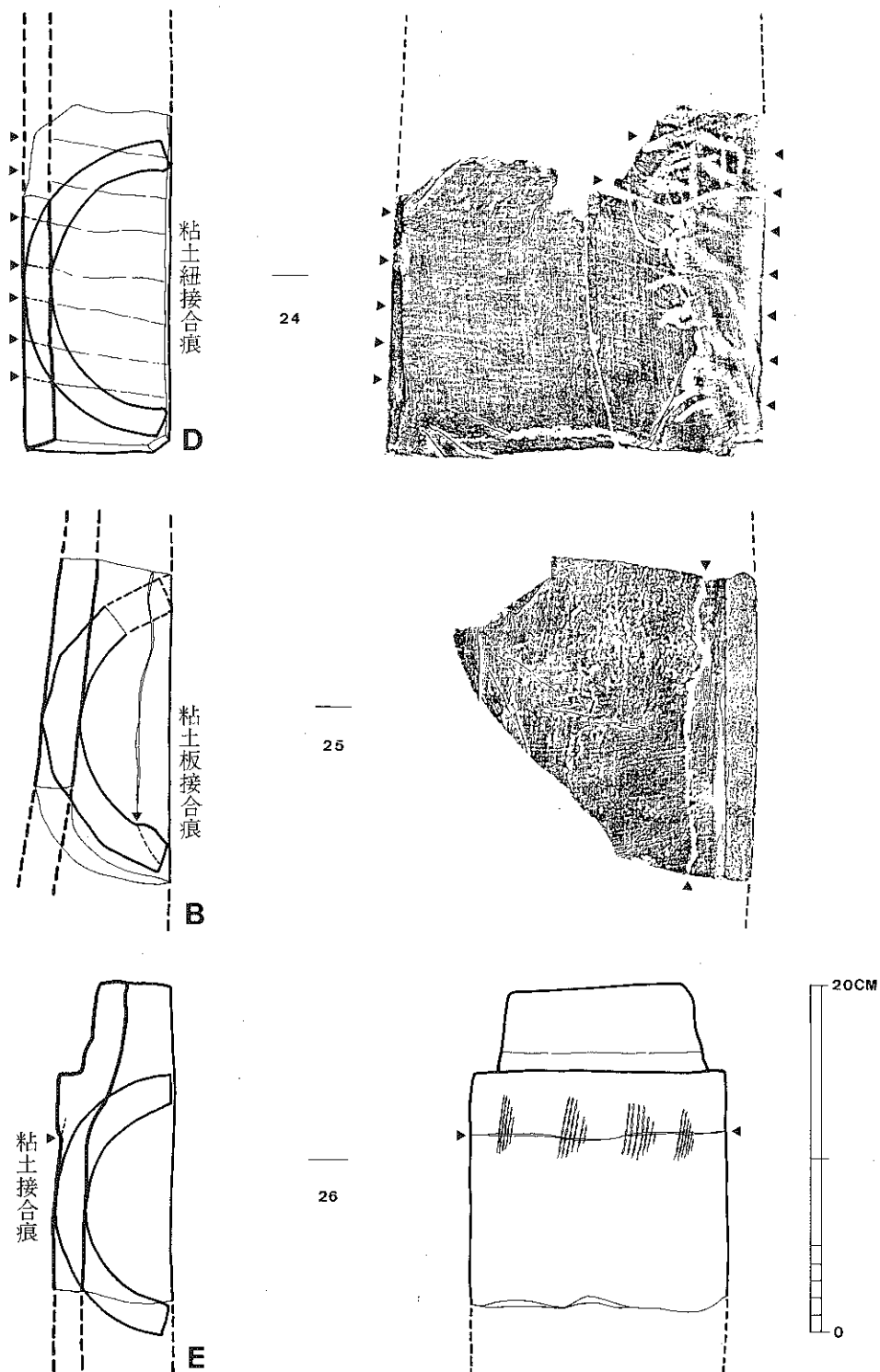


23

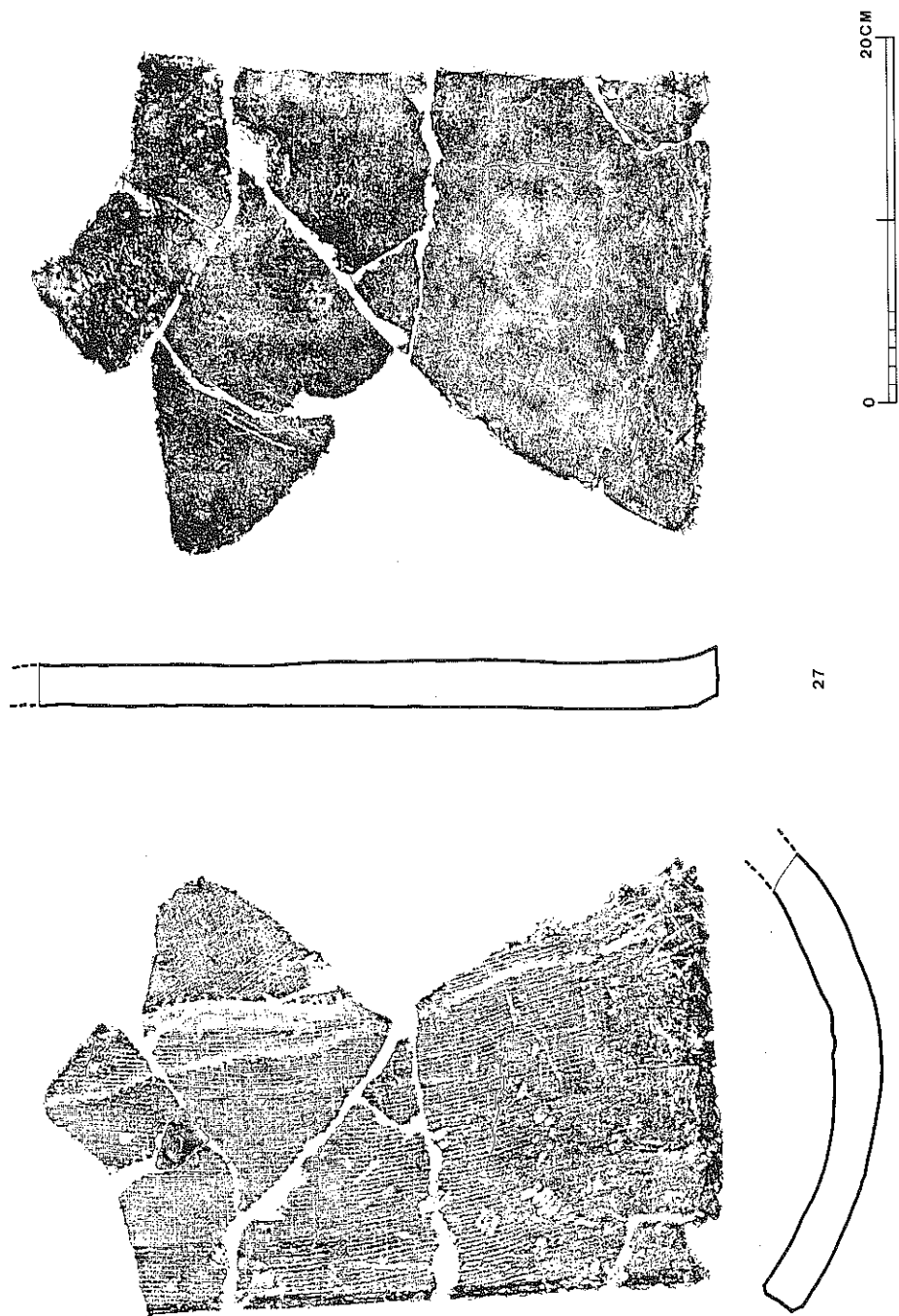


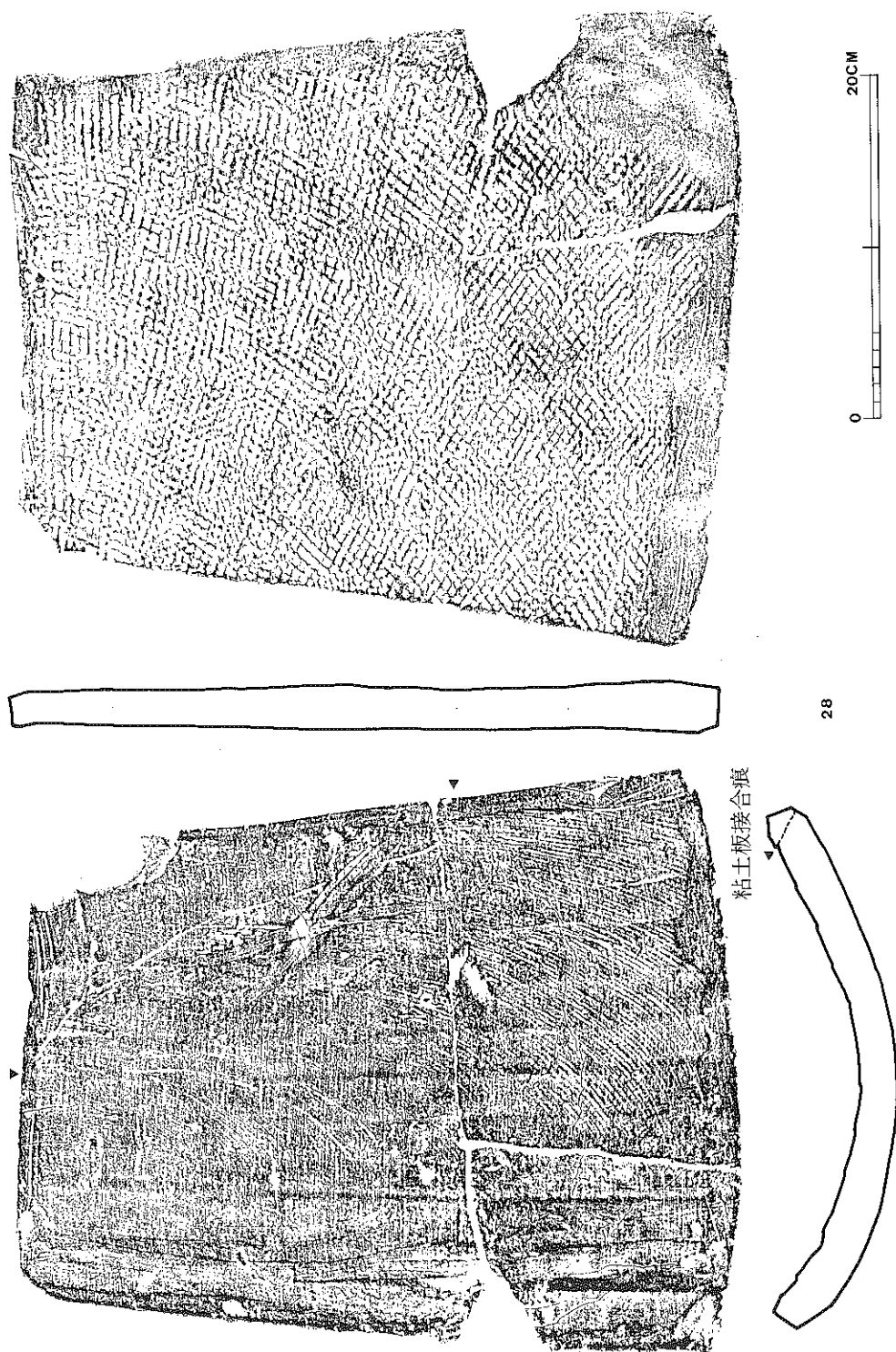
第30图 丸瓦B (2)

III. 岡本麿寺・岡本遺跡発掘調査概要

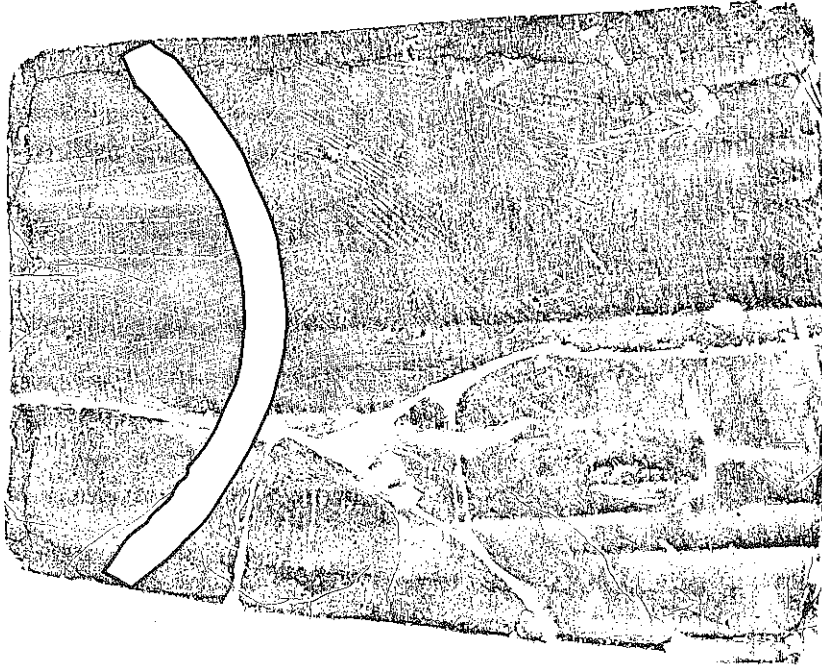
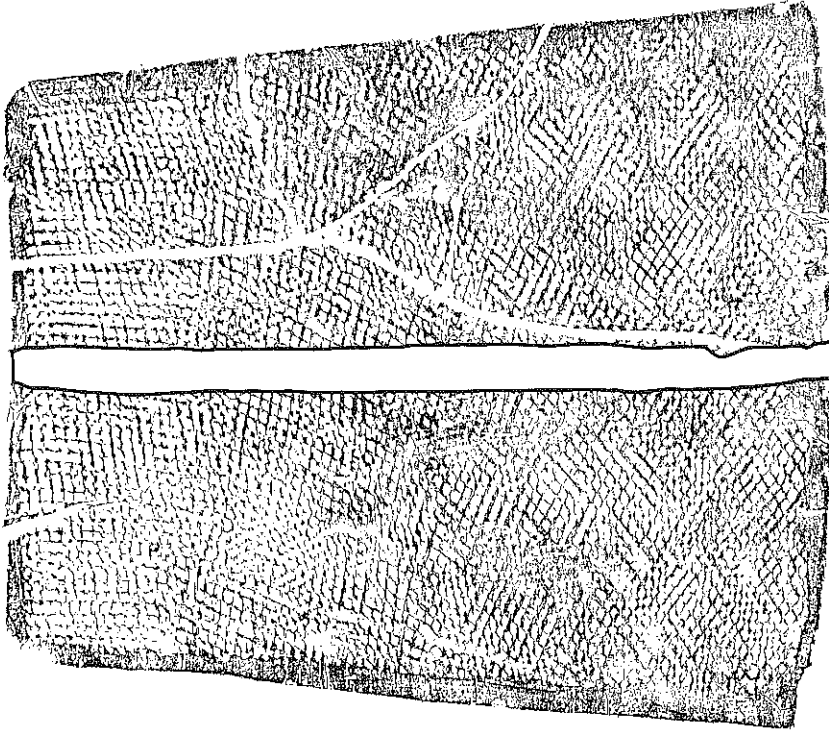


第31図 丸瓦B・D・E





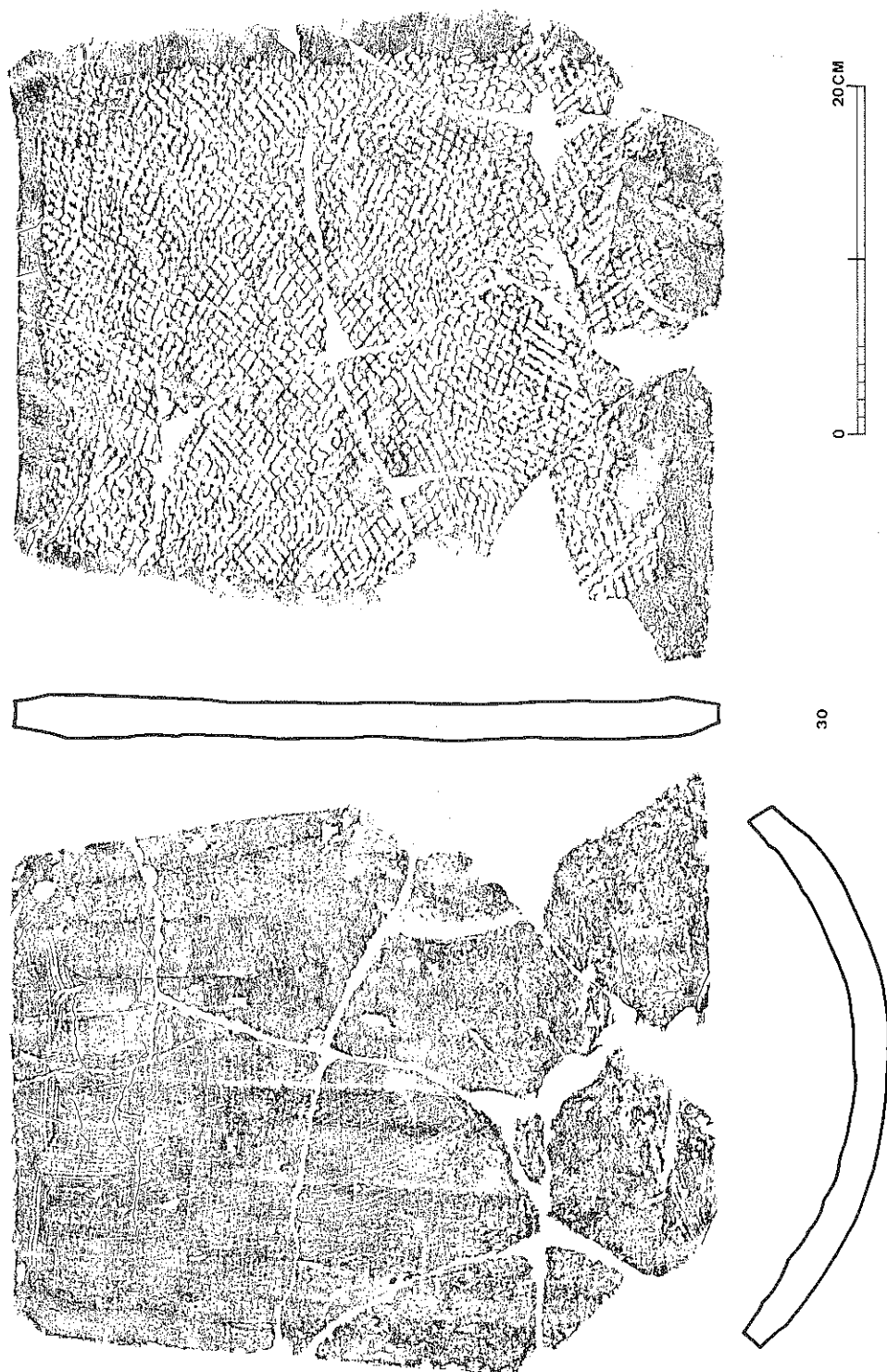
第33図 平瓦BI (1)



桶合せ目

29

第34図 平瓦B I (2)



第35図 平瓦 B I (3)



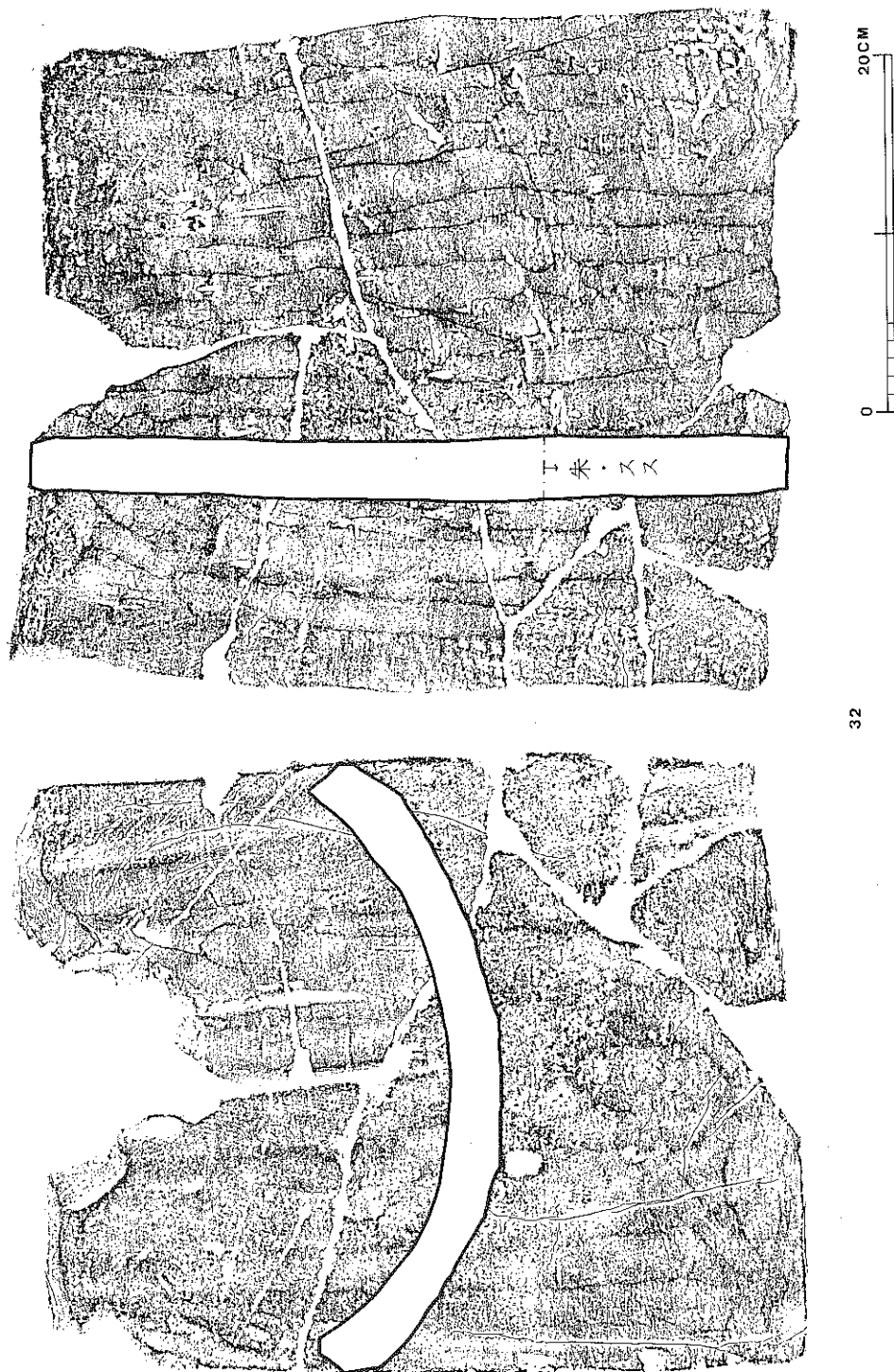
米



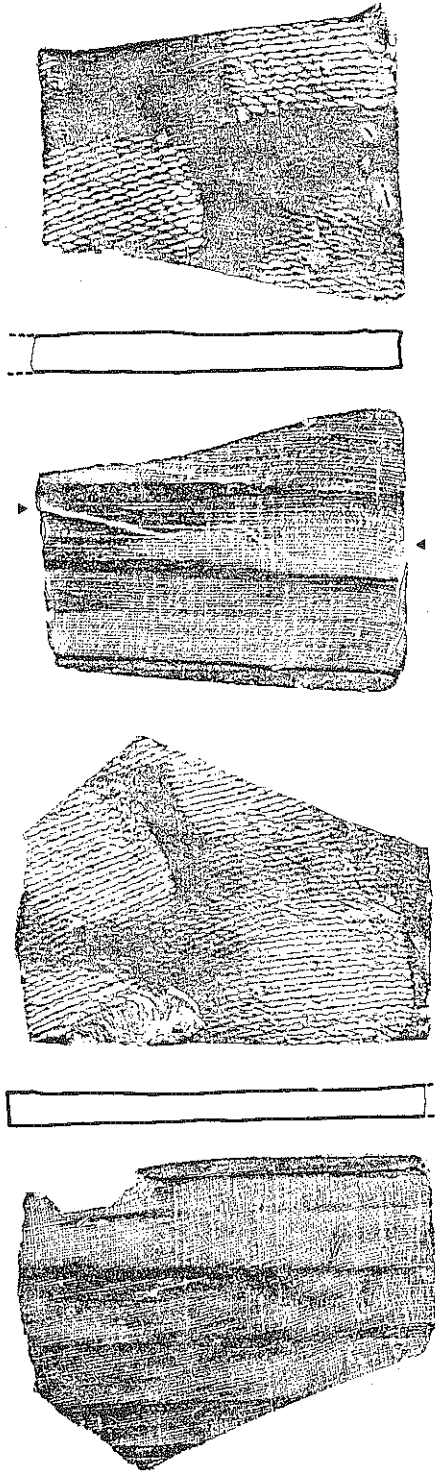
分割界線

31

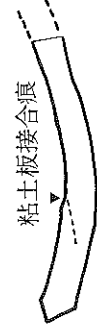
第36圖 平瓦BI (4)



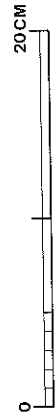
第37図 平瓦BⅡ



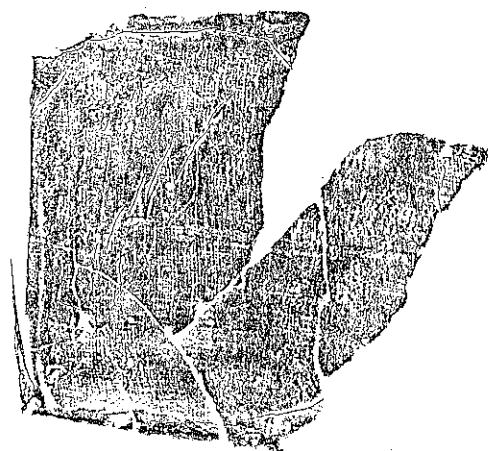
34



33



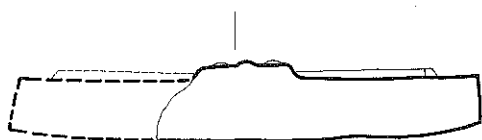
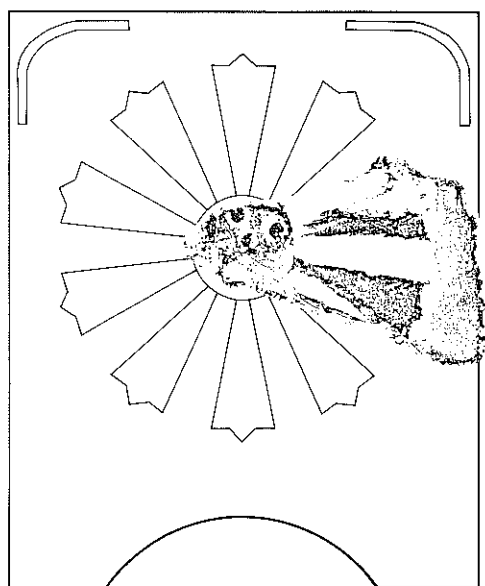
第38图 平瓦C



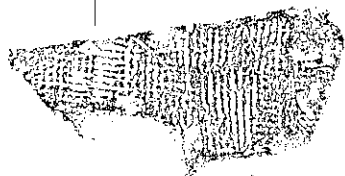
35



第39図 平瓦D



37



鬼瓦A



42

鬼瓦B



38



39



40

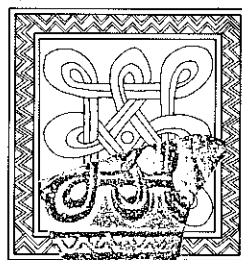


41

鬼瓦A

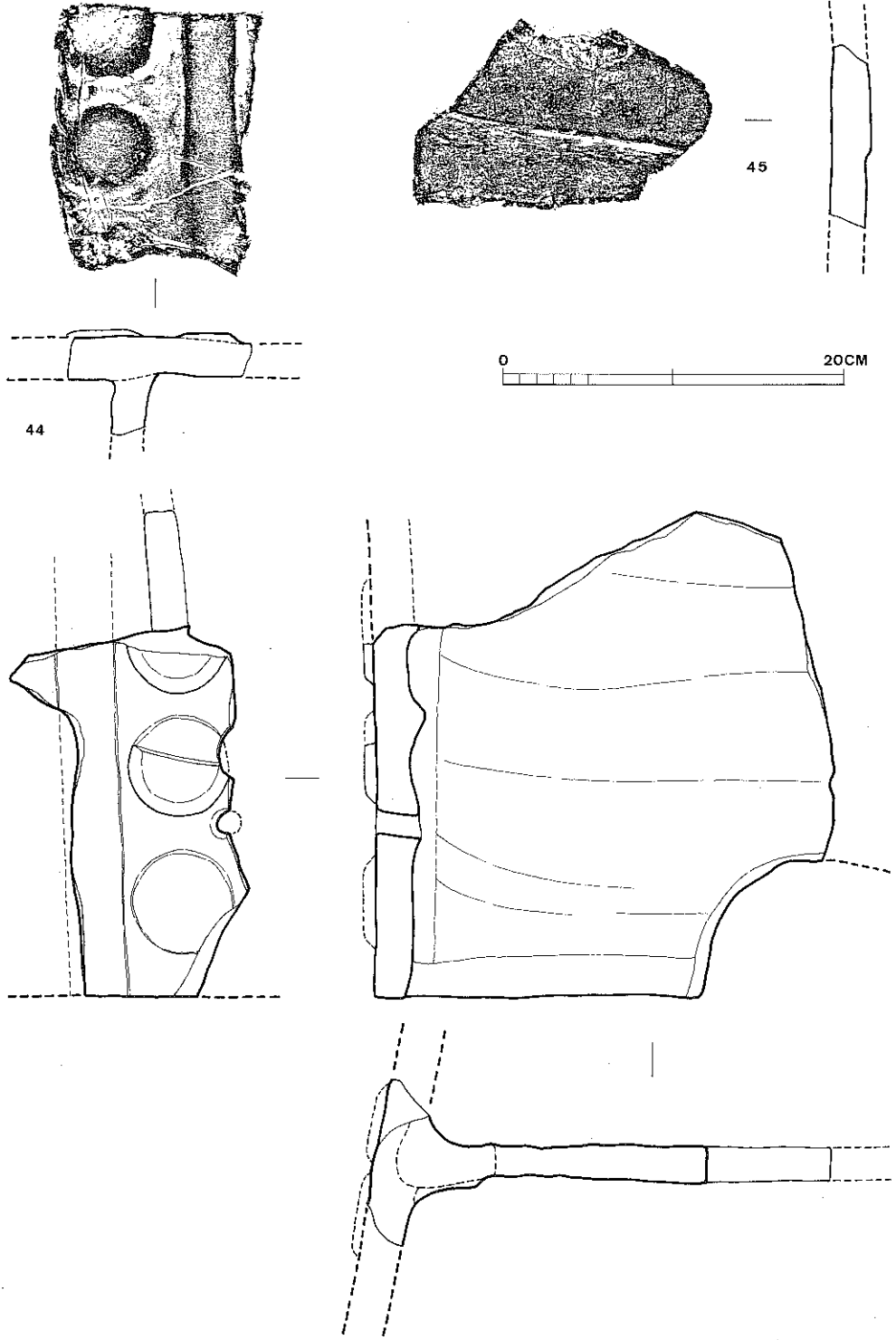
種先瓦

43



第40図 鬼瓦・種先瓦

Ⅲ. 岡本廃寺・岡本遺跡発掘調査概要



46

第41図 鴟尾

(4) 土器類

今回の調査では、土師器、須恵器、瓦器、灰釉陶器、中世陶器、輸入磁器等がコンテナ5箱分程出土した。量的には、土師器、須恵器が大半を占め、次いで瓦器が多く他は少ない。出土場所は、調査地全域にわたるが、大半は中心伽藍の位置するB₁・B₂トレンチの各遺構及び遺物包含層からである。時期的には、5世紀後半から16世紀後半に及ぶが、その中心となるのは7世紀後半から8世紀初頭の土師器・須恵器の一群と、11世紀中頃から13世紀初頭の土師器・瓦器・灰釉陶器等の所謂中世土器である。ここでは、土器の整理作業が未了であるため主要遺構ごとにその出土土器の概要を述べることにしたい。ただし、古墳時代の土器・中世土器は直接的に岡本廃寺と関係する遺物ではなく、岡本遺跡に属するものである。

したがって、ここでは寺院創建前の土器、寺院に関する土器、寺院廃絶後の土器に分けることとする。なお、遺物番号の頭初に付すアルファベットは次の器種を示す。H：土師器、S：須恵器、Z：瓦器、T：灰釉陶器・中世陶器、G：輸入磁器。また、近世陶磁器が若干出土しているが今回は割愛する。

〔a. 寺院に関する土器〕

SD119出土の土器 SD119からは、埋土中及び埋没後その上面の若干の凹みに堆積した土層より、土師器の杯・杯蓋・皿・碗・高杯・甕、須恵器の杯・杯蓋・甕等が出土している。これらの土器のうち後述のSD119上面のものは厳密には遺物包含層出土土器とすべきであるが、便宜上SD119上面としてここで取り扱う。量的にはコンテナに3分の1程で、その大半は土師器の杯・皿が占める。時期的には2つの土器群に分類できる。すなわち、概ね7世紀前半に比定できるもの(H14・H15・S16~20・S22・S23)と、概ね7世紀後半及び8世紀前半に比定できるもの(H01・S13、H06~09・S10~12・S21)である。以下、それぞれの特徴を良く示す個体についてその概要を述べる。

SD119上面からは、7世紀前半の土器がまとまって出土している。H15は高杯である。杯部外面にはヘラケズリを施す。S16~19は杯蓋である。口縁部内面にかえりをもつもので、この形式の初源的なものである。口径9cm前後を測る。S22・23は杯である。古墳時代の伝統的な杯の末期型式のものである。年代的には前者に併行するものである。これらの土器は、古墳時代末から飛鳥時代のものであり岡本廃寺創建前の遺物である。

埋土内で7世紀後半に比定できるものには、H01とS13がある。H01は杯である。口縁端部は内傾する凹面をなす。底部外面にヘラケズリ、体部外面に丁寧なヘラミガキを施す。内面は風化のため不明である。8世紀前半に比定できるものには、H06~09・S10~12・S21がある。H06は杯蓋である。内面はナデ調整、外面にヘラミガキを施す。H07は杯である。底部外面にヘラケズリ、体部外面に丁寧なヘラミガキを施す。体部内面は丁寧な2段放射磨

Ⅲ. 岡本廃寺・岡本遺跡発掘調査概要

文を施す。H09は皿である。口縁端面がやや凹む。底部外面はヘラケズリのちへらミガキを施す。内面には丁寧な螺旋暗文と2段放射暗文を施す。口径23.6cm、器高2.4cmを測る。S10・S11は杯蓋である。口径15cm程で天井部に宝珠様のつまみをもつ。S12は杯である。口径12cm、器高3cmを測る。底部外面は不調整である。

7世紀後半のものは、岡本廃寺創建期の遺物にはほぼ比定できるものであり、8世紀前半のものは、寺院存続期間中の遺物である。SD119上面の7世紀前半のものは、SD119埋没後に実施された整地に伴い移動した遺物である可能性が高い。

SD110 出土の土器 SD110からは、土師器細片、須恵器の杯・杯蓋・壺・甕がある。土師器は細片のうえ風化が著しく、全形を窺えるものはない。須恵器も大半が細片である。S02は杯である。口径12cm、器高3.5cmを測る。底部外面は不調整である。S26は壺である。肩部と体部上位の沈線が画する文様帯に櫛描き波状文を施す。S02・S26は概ね7世紀前半に比定できるものである。

SE105 出土の土器 SE105からは、その上層より土師器の杯、須恵器の杯・杯蓋が出土している。土師器の杯は細片のうえ風化が著しく、全形を窺えるものはない。S03・S04は杯である。S04は底部中央寄りに外側に開く高台をもつ。口径10.6cm、器高3.8cmを測る。

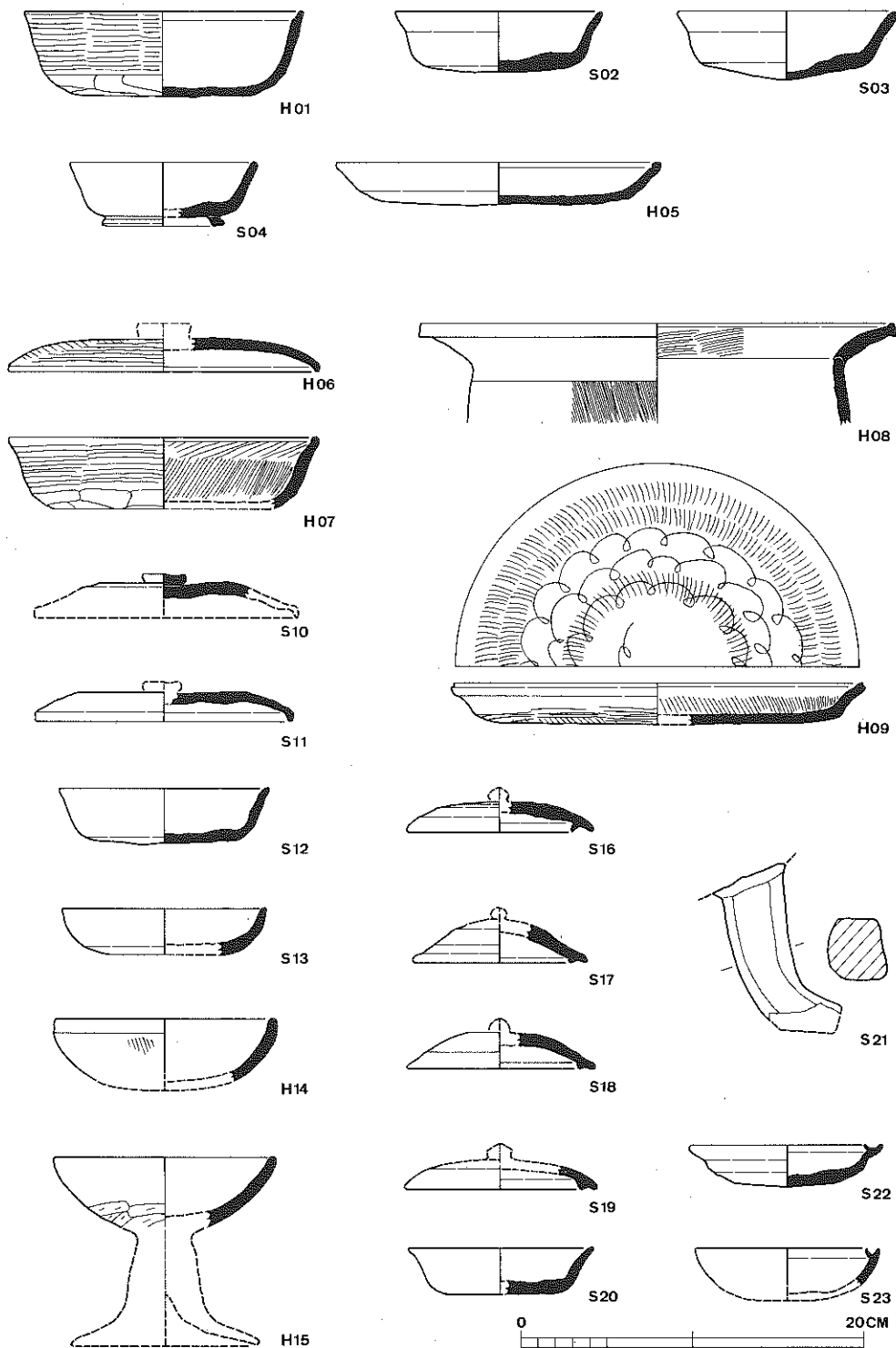
SK159 出土の土器 SK159からは、土壙底より完形の土師器の皿(H05)が出土している。口縁端面はやや巻き込み肥厚する。底部外面は不調整、内面はヨコナデを施し暗文はもたない。口径18.6cm、器高2.4cmを測る。時期的には概ね8世紀末に比定できる。SK159の検出状況及びH05の出土状況から、H05はSB300の廃絶の上限を示していると考えられる。

遺物包含層出土の土器 遺物包含層からは、瓦片・中世土器とともに寺院存続期に該当する土師器の杯・皿・甕、須恵器の杯・杯蓋・壺・甕が出土している。土師器は細片のうえ風化が著しく図示しえるものはない。S27は小型の壺である。底部外面には回転糸切り痕をもつ。

〔b. 寺院廃絶後の土器〕

岡本廃寺廃絶後、その上を覆う遺物包含層をはじめ各遺構より、中世の土器が比較的まとまった量で出土している。前述のとおり、これらは岡本廃寺を含む一帯に存在する岡本遺跡に属するものである。しかし、寺院廃絶後の状況を知り得る資料としてここで報告する。

中世土器には、所謂かわらけと呼ばれる土師器皿、瓦器の碗・皿・鍋・羽釜、灰釉陶器の碗、中世陶器の壺・鉢、輸入磁器の青磁碗・白磁碗がある。出土場所は、その大半が遺物包含層からであるが、各遺構からも瓦片及び若干の奈良時代の土師器・須恵器をともない出土している。量的にはコンテナー2箱分程である。時期的には11世紀中頃から16世紀後半に及ぶが、その中心となるのは11世紀中頃から13世紀中頃の瓦器・灰釉陶器である。以下、主要遺構ごとにその出土土器の概要を述べる。



第42図 土 器 (1)

Ⅲ. 岡本廃寺・岡本遺跡発掘調査概要

SK107・SK115 出土の土器 SK107からはH31・H35のほか15個体分以上、SK115からはH32・H33・H36のほか15個体分以上の土師器皿が、それぞれまとまって出土した。これらは所謂かわらけと呼ばれるもので、法量的に大・小の2種がある。大皿は口径12cm、器高2cm前後のものである。口縁部に2段のヨコナデを施す。小皿は口径8.5cm、器高1.5cm前後のものである。

SD100 出土の土器 SD100からは、若干の土師器・須恵器とともに瓦器・灰釉陶器・青磁の椀、中世陶器の鉢がある。T49は灰釉陶器の椀である。器壁は全体に厚手で断面三角形の高台をもつ。百代寺窯式^{註11}の特徴に類似することから概ね11世紀後半に比定できる。

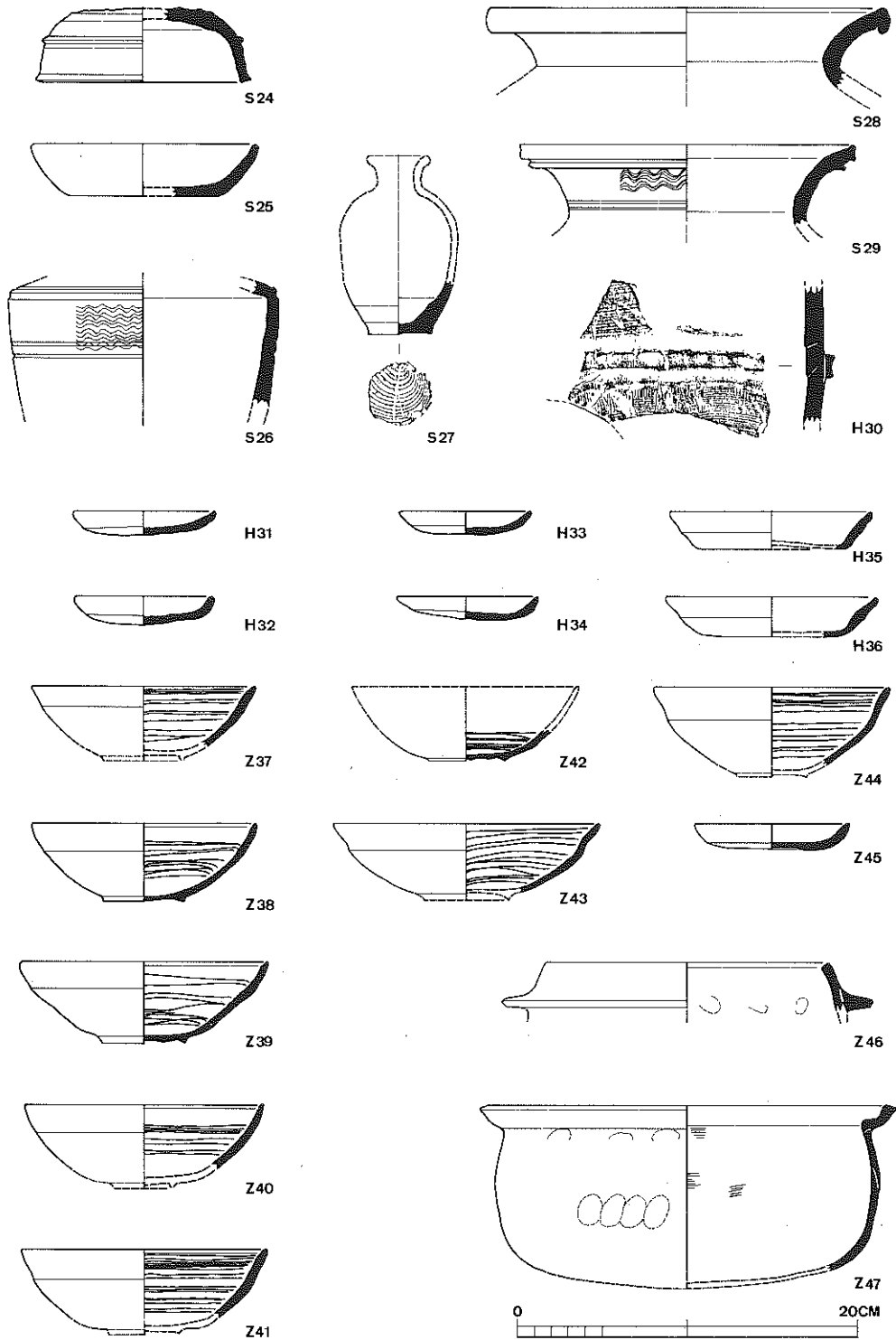
SD161 出土の土器 SD161からは若干の須恵器とともに、瓦器の羽釜、灰釉陶器・青磁の椀、中世陶器の壺・甕がある。T48は灰釉陶器の椀である。底部の体部際に断面台形の高台をもつ。折戸53号窯式後半期^{註12}の特徴と類似する。G50は龍泉窯系の青磁椀である。断面が台形の高台をもつ。底部内面に菊花文のスタンプ文様を施す。

SE218 出土の土器 SE218からは、信楽系の中世陶器の鉢(T57～59)及び甕などが出土している。鉢はそれぞれ内面に数単位の条痕と使用痕が認められる。

遺物包含層出土の土器 前述のとおり、中世土器の大半は遺物包含層から出土している。土師器皿、瓦器の椀・皿・鍋・羽釜、灰釉陶器の椀、輸入磁器の青磁椀・白磁椀、中世陶器の鉢・甕がある。

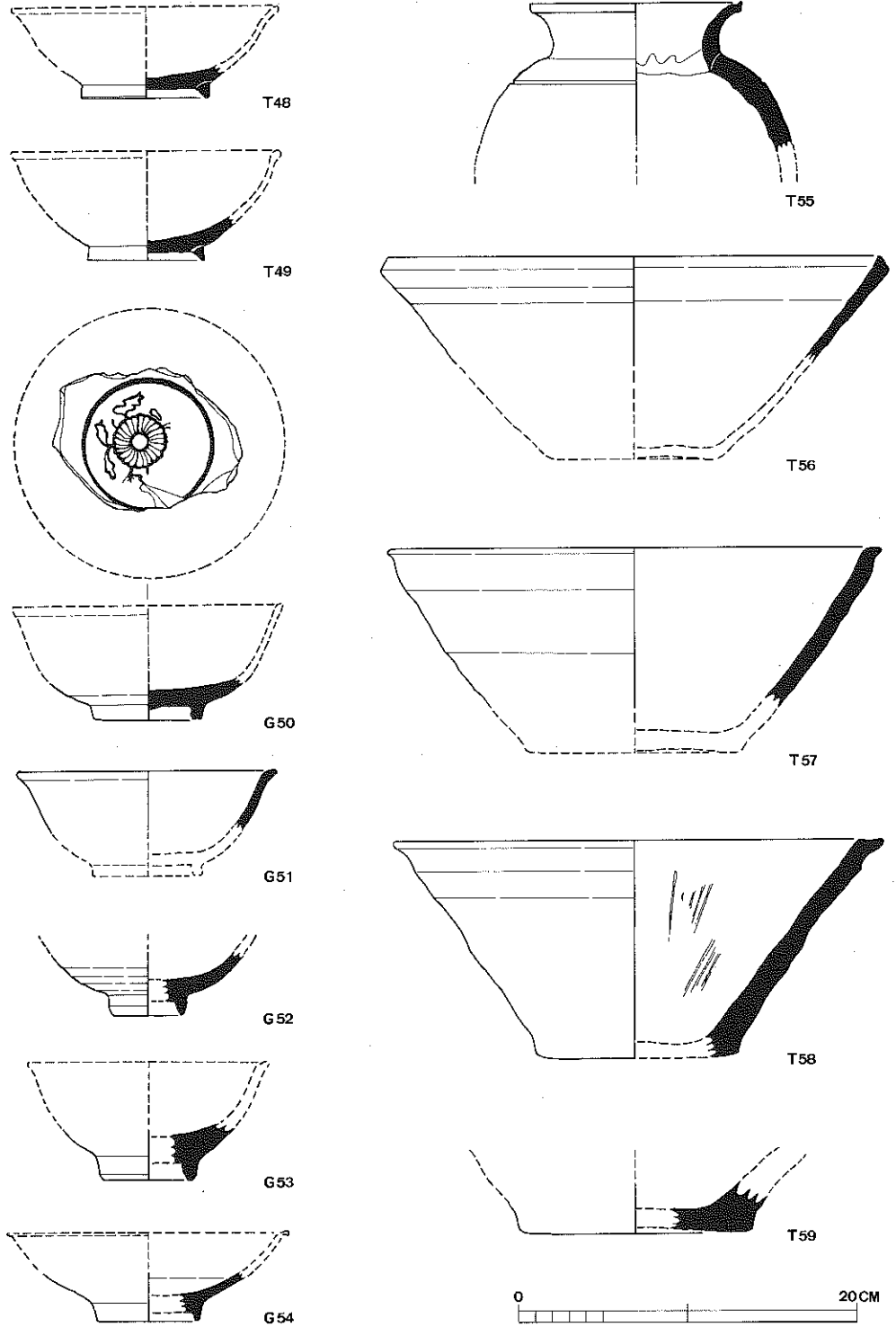
Z37～44は楠葉系の椀である。口縁部において、端部内面に1条の沈線をめぐらすもの(Z37～41)と、外反するもの(Z43・Z44)がみられる。高台は断面三角形で、ヘラミガキは体部内面のみで粗い。また、体部外面は不調整で指圧痕を残す。口径14cm、器高5cm前後を測る。上牧遺跡第Ⅲ期第1小期^{註13}に類似することから概ね13世紀前半に比定できる。Z45は皿である。底部外面は不調整で指圧痕を残す。口径9cm、器高1.4cmを測る。Z46は羽釜である。三足脚部片もみられる。Z47は鍋である。口縁が外反したあと上方へ立ち上がるものである。両者は、平安京内膳町SD345下層出土土器の様相に類似することから、概ね12世紀後半に比定できる。T56は東播系の鉢である。口縁端部は外傾する端面をなす。平安京内膳町SK118出土土器^{註14}に類似することから、概ね13世紀中頃に比定できる。G53は龍泉窯系の青磁椀である。全体に器壁は厚く、体部外面には細長い蓮弁の削り出しが認められる。高台の内部を除く全面に施釉する。G54は白磁の椀である。高台内部の削り出しは浅く底部の器壁は厚い。体部下半の外面はロクロケズリ、内面には細い沈線が1条めぐる。

これらの土器は、土師器皿、瓦器椀・鍋等日常的な雑器類がその主体となっている。これは、寺院廃絶後の13世紀前半頃には既にこの一帯に中世の集落が成立し、岡本廃寺の旧寺域内もその一部に含まれていたと考えられる。中世の建物などの明確な遺構がないこと、SK161



第43图 土 器 (2)

Ⅲ. 岡本廃寺・岡本遺跡発掘調査概要



第44図 土器 (3)

等の整地層や土壌から中世土器が出土することを考えあわせると、調査地は、生活空間というよりはそれに近接した耕作地であった可能性が高いように思われる。SE105・SE218などは、ここでの耕作に伴う井戸であったと考えられる。

〔c. 寺院創建以前の土器〕

各時代の遺構・遺物包含層から、概ね5世紀末葉に比定できる須恵器の杯蓋・甕、円筒埴輪が若干出土している。これらは岡本廃寺に関する遺物ではなく、岡本遺跡に属するものである。しかし、寺院創建以前の状況を復元する資料としてここで報告する。

S24は杯蓋である。SD161上層より、瓦片・中世土器、若干の須恵器とともに出土した。天井部と口縁部との境界は突出して稜をなす。比較的古い特徴をもつものである。口径11.7cm、器高4.3cmを測る。S29は甕の口縁部片である。SD110より、奈良時代の土師器・須恵器とともに出土した。口縁端部は上・下に稜をなし、端部直下に1条の突帯をもつ。頸部には櫛描き波状文を施す。両者とも細片のため速断はできないが、その特徴から陶邑編年のTK23号^{註15}窯式に類似する。H30は円筒埴輪の破片である。突帯は扁平化し断面は低い台形をなす。内面は不調整で粘土紐痕を残す。外面は2次調整のヨコハケが認められる。円形の透孔が認められる。5世紀末葉頃に比定できるものである。

当調査地付近は、調査地北方約150m地点に現存する瓦塚古墳をはじめ、出土遺物のみが知られる一里塚古墳など、いくつかの古墳が存在している。今回出土した古墳時代の遺物がいかなる性格のものであるか不明ではあるが、かつてこのあたりに存在した古墳ないしは集落の遺物である可能性も考えられる。これらの課題については、今後の周辺地域の調査に期待したい。

Ⅲ. 岡本廃寺・岡本遺跡発掘調査概要

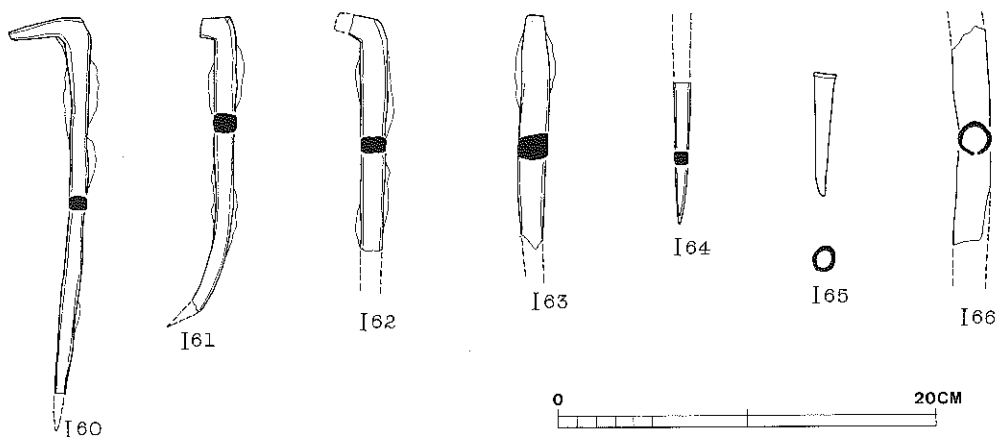
(5) 金属器

今回の調査では、大量の瓦類・土器類とともに若干の金属器が出土している。出土場所は、B₁トレンチ中央部の瓦溜り土壌群及びSB300の周辺土壌群からである。金属器には、鉄製の釘・管・不明品がありその他の金属器はない。図示しえた数点を除き、大半は錆化の進んだもので全形を窺えるものはない。以下、種類ごとにその概要を順次述べる。

鉄釘 鍛造の角釘が総数10数個体分ある。すべて釘頭部を折り曲げるものであるが、釘頭端部の形態の違いから、A・Bに分類することができる。Aは、釘頭端部が扁平するもの(I60)である。釘部は断面方形。残存長20cmを測る大型の鉄釘である。Bは、釘頭端部が断面方形で短く曲がるものである。釘部は断面方形。残存長16cmを測る大型の鉄釘である。釘部がゆるやかに曲がるもの(I61)と真直ぐなもの(I62)とが見られる。

これらの鉄釘の中でI61・I64等は、金堂SB300東側のSK157の炭を含んだ焼土層及びその直下の瓦堆積中から出土したものであり、金堂に使用された鉄釘であることが推測される。

その他の鉄製品 I66は直径1.8cmを測る鉄管である。径1.2cmの芯棒に厚さ0.3cmの鉄板を巻きつけ成形したものである。I65は先細りする中空のものである。



第45図 金属器

(6) ま と め

以下に、調査で知り得た知見を若干述べ、まとめとする。

建物の性格と伽藍配置 すでに述べたように、基壇建物 SB300 を金堂、掘立柱建物 SB120 を講堂、巨石 SX200 を塔心礎と考えている。この理由について少し述べたい。

SB300 は、旧状を残す部分は、東辺及び北辺の一部だけであり、現状ではかつての規模を窺えない。しかし、一般的に古代寺院の主要堂宇が互いに規格性をもって配置されていることから、SB300 の規模を SB120 との位置関係から類推することができる。

SB120 の南北中心線を SB300 までのばし、そこから瓦積基壇の遺存する部分までの距離を測ると 7.85m である。この距離は、SB300 の東西長の 2 分の 1 に想定できる。したがって SB300 基壇の東西復元長は $7.85\text{m} \times 2 = 15.7\text{m}$ と考えることができる。南北長については、復元が不可能であるが、東西復元長から考えて SB300 を金堂とした。

SB120 については、SB300 の背後に位置し、SB300 に方位を合わせているところから、寺院の中心建物の一つである講堂と考えた。ただ、この建物は掘立柱建物であり、通例、古代寺院の主要な建物は礎石建物であることを思えば異色の感をまぬがれない。しかし、講堂に掘立柱建物を用いる例は、京都府亀岡市の観音芝廃寺^{註16}や城陽市の久世廃寺^{註17}(母屋は礎石、廂が掘立柱)で見出すことができ、必ずしも古代寺院の建物は礎石建物だけではないことが理解できる。もちろん、礎石建物の方が本格的な寺院建物であったことは言うまでもない。講堂が瓦葺きであったか否かは断定できない。一般的に掘立柱建物には瓦を葺かないところから、講堂も瓦葺き以外の屋根であったと思われる。しかし、雨落ち溝からは鴟尾をはじめ瓦片が出土している。屋根の一部分に瓦を使用していた可能性も考えられる。

SX200 を塔心礎と考えた理由は先述した。当時の寺院は、通常、塔を備えており、金堂の東側および西側ないし南側のいずれかに建てられていることが多い。当寺跡の場合、金堂の東側には内郭柵列があり、南側には沼が存在している。塔を想定できる場所は、SX200 付近しかない。

そして、これらの中心建物を内郭柵列 SA301・302 がとり囲んでいたと思われる。掘立柱による 2 重の柵列(塀)である。回廊のかわりに寺院の中枢部を区画する内郭柵列は、兵庫県加古川市の西条廃寺^{註18}でも確認されている。西条廃寺の内郭柵列は 1 重で講堂の中央にとり付いている。愛媛県松山市の来住廃寺^{註19}でも掘立柱の回廊状遺構が検出されている。

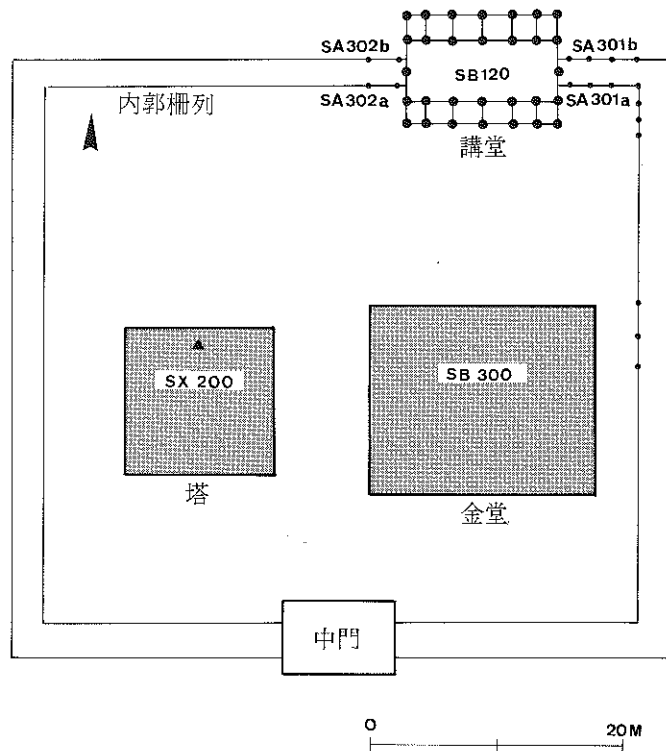
以上から伽藍配置を復元すると第46図のようになる。中門を入ると右に金堂、左に塔がそびえ、金堂の背後に講堂があり、それらを 2 重の内郭柵列がとり囲む中心伽藍が復元できるのである。法隆寺西院伽藍に近い。しかし、講堂が法隆寺では塔と金堂の間に配置されているのに対し、岡本廃寺では金堂の背後に配される点、法隆寺では回廊が塔と金堂をとり囲む

Ⅲ. 岡本廃寺・岡本遺跡発掘調査概要

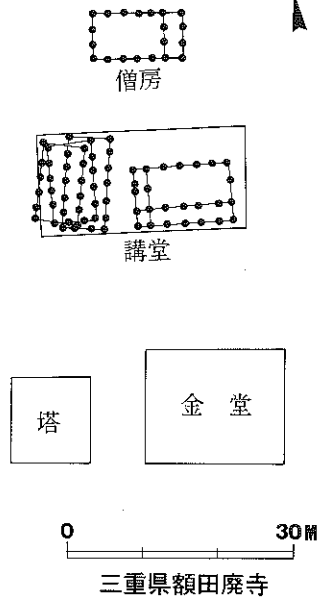
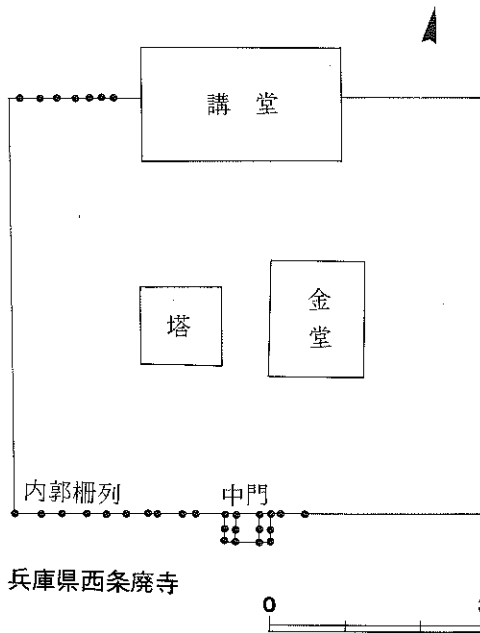
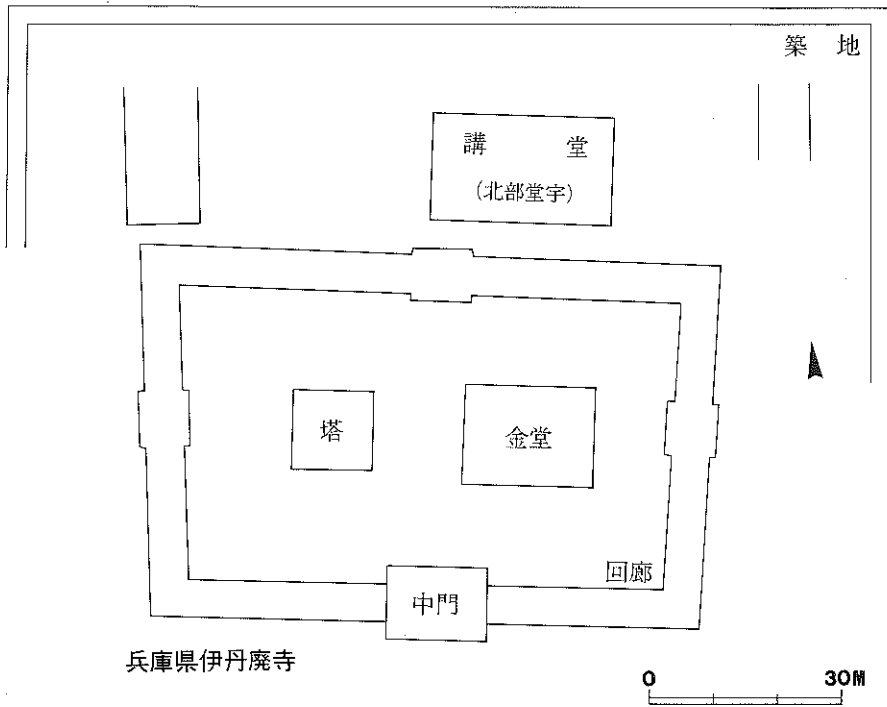
のに対し、岡本廃寺では回廊に相当する内郭柵列が講堂にとり付く点で異なっている。

岡本廃寺のように金堂の背後に講堂を持つ例は、兵庫県伊丹^{註20}廃寺がある。法隆寺西院伽藍と同じ配置であり、金堂の背後には回廊をはさんで講堂(報告書では北部堂宇)が建てられている。鳥取県東伯町斎尾^{註21}廃寺も同様な伽藍配置である。また、最近調査された亀岡市の観音^{註22}芝廃寺でも岡本廃寺と同様な伽藍配置が想定されている。三重県桑名市の額田廃寺では、瓦積基壇の講堂の下層に中心伽藍にはぼ方位を合わせる6間×3間の掘立柱の東西棟建物が検^{註23}出されており、この建物を前身講堂と考えれば、前身講堂は金堂の背後に建てられていたこととなる。このように、塔と金堂を並置する伽藍配置の中には、まだ少数ながら金堂の背後に講堂を配置するものがあり、新たな伽藍配置を想定できる可能性がある。

今回の調査では、寺の中心伽藍を一定解明はできたが、付属諸堂については全く検出できなかった。しかし、SB120の北側には多量の瓦が中世の開墾にともなって投棄されていた。掘立柱建物であるSB120は瓦葺きの可能性が低いいため、これらの瓦は他の未発見の建物の瓦である可能性が考えられる。SB120(講堂)北方に、開墾により消滅した瓦葺建物の存在を想定したい。



第46図 岡本廃寺伽藍復元図



第47図 岡本廃寺に類似する寺

Ⅲ. 岡本廃寺・岡本遺跡発掘調査概要

創建・改修・廃絶 岡本廃寺の創建瓦は、大和川原寺創建瓦の系譜を引く軒丸瓦Aと法隆寺西院伽藍創建瓦の系譜を引く軒丸瓦B、そしてそれぞれと組み合わせる重弧文軒平瓦である。

大和川原寺の創建年代は、なお検討の余地を残すが、天智天皇元年(662)以降、天武天皇2年(674)までの13年間に限定できる可能性が強い。また、法隆寺西院伽藍は、天智天皇9年(670)に焼亡した若草伽藍の跡に再興された寺院であり、再興年代は焼亡から余りへだたっていない。

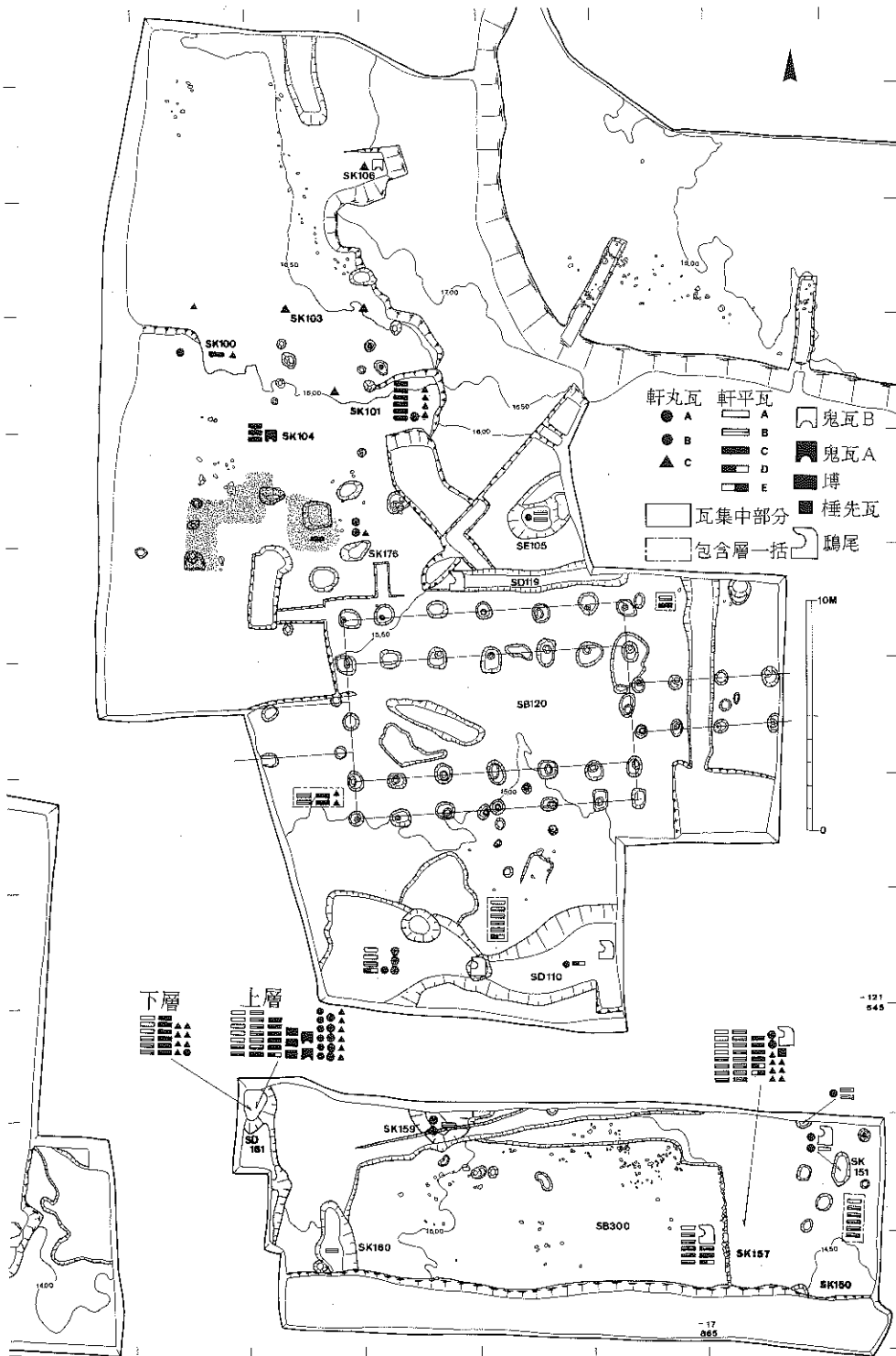
このことから、岡本廃寺の創建は670年を遡ることはなく、また、文様が標式例と比べて極端な退化をしていないことから、7世紀後半代の中にあると考えられる。結紐文極先瓦・鬼瓦B・鷗尾も創建時のものと思われる。軒丸瓦の2種の創建瓦のうち、その主要な瓦は軒丸瓦Bである。これは出土量比と後述する改修時に使用された文様が軒丸瓦Bの系譜を引いている事から理解できる。

当寺跡は瓦から見る限り1度の改修が行われている。使用された軒丸瓦はCであり、軒平瓦はそれと組み合わせるものである。軒丸瓦Cの文様は、明らかに軒丸瓦Bを手本とし、複弁を単弁とする等、新しい要素をもり込んでいる。改修に使用された瓦(補修瓦)のうち、軒丸瓦・平瓦・丸瓦には縄叩きの痕跡が見い出せる。また、平瓦(平瓦C)は平瓦桶巻作りである。瓦の製作に用いる叩き板が、格子状のきざみ目から縄を巻きつけたものへと変化するの、持統天皇8年(694)に造営された藤原京を一つの境とし、平瓦の製作が平瓦桶巻作りから一枚作りへと確実に変化するの、和銅3年(710)の平城京遷都以後である。このような瓦作りの技術変化が比較的早く畿内の寺院にも伝播しているとすれば、岡本廃寺の補修瓦の年代は、7世紀末から8世紀初頭に想定される。

この時の改修は、金堂の屋根の葺きかえ、金堂瓦積基壇の積みなおしが確認できる。また講堂の北方に想定した建物も、この時に建てられたと考えられる。

鬼瓦Aはこの改修時期のものと思われる。軒平瓦にしる軒丸瓦にしる、補修瓦は創建瓦の文様を基本的に踏襲している。鬼瓦Aの剣菱形の単弁文もその手本となる創建期の鬼瓦が存在した可能性が強い。また、南山城諸寺院では、補修瓦として平城宮式が良く見受けられるが、当寺跡にはない。

岡本廃寺は、焼亡により廃絶し再建されなかった。確実に焼亡したのは金堂であり、SK157は当時の状況を生々しく伝えている。他の諸堂がどのような運命をたどったか、不明であるが、金堂の火災を境として寺は急激に衰退したことは確かである。寺の廃絶年代を窺う良好な資料は少ない。しかし、金堂の火災後、瓦片を投棄し整理したと思われるSK159最下層から出土した土師器の皿が概ね8世紀末に比定できることから、この年代とさほど違わない時期に寺の廃絶を求めて大過ないものと思われる。



第48図 文様瓦等出土位置図

Ⅲ. 岡本廃寺・岡本遺跡発掘調査概要

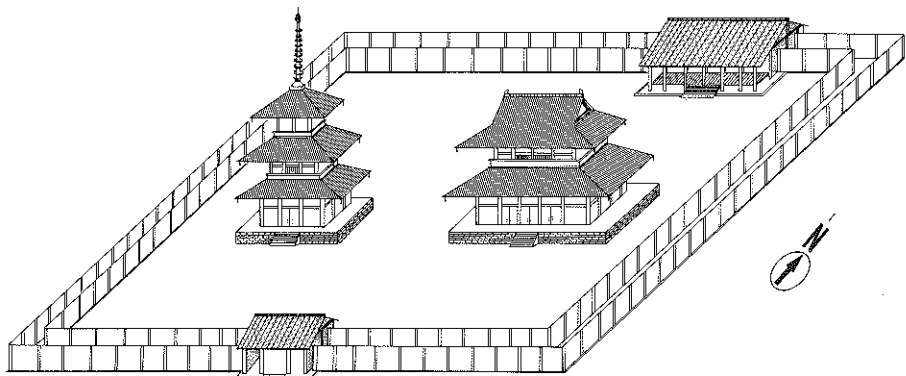
建立氏族 岡本廃寺のある宇治市五ヶ庄日皆田は、旧の山城国宇治郡の南端部にあたり、岡屋郷推定地に近い。このあたりを勢力基盤とした豪族に岡屋公がいる。『新撰姓氏録』によれば、岡屋公は山城国諸蕃とされ、百済国比流王を祖としている。渡来系氏族である。

7世紀後半、すなわち白鳳時代は、有力な豪族が競って寺院を建立した時代である。この時代の旺盛な造寺意欲は、遺跡からも十分に窺うことができる。岡本廃寺の建立氏族として岡屋公が最も有力であるといえる。

岡本廃寺とその周辺 岡本廃寺の東南約1km^{註25}のところに大鳳寺跡がある。この寺は、岡本廃寺とほぼ同じ頃に創建され、創建瓦として川原寺式を採用している。岡本廃寺では軒丸瓦Aが一応川原寺式の系譜を引くものであるが、大鳳寺のものとは大きな差異がある。この瓦の周縁に配される珠文帯は、朝鮮半島統一新羅時代の瓦に良く採用されており華麗な統一新羅瓦を特徴付けている。そして、新羅の王都慶州にある王宮庭園雁鴨池で軒丸瓦Aの類例を見い出せるため、この瓦の成立背景に統一新羅の影響を認めることができる。また、岡本廃寺の主要な創建瓦は法隆寺西院伽藍の創建瓦(法隆寺式)に似る軒丸瓦Bである。瓦を見る限り大鳳寺と岡本廃寺との間には共通点が見い出せない。

岡本廃寺の北約5kmに法琳寺跡(京都市伏見区)がある。遺構は明らかでないが、法隆寺式や紀寺式の瓦を出土することや結紐文榿先瓦を出土することで著名な寺跡である。現在、京都府下で法隆寺式を出土する寺跡は、岡本廃寺・法琳寺跡・醍醐廃寺(京都市伏見区)の3^{註26}寺跡であり、いずれも宇治郡内の寺である。岡本廃寺出土の結紐文榿先瓦が法琳寺のものと同範であることを考え合わせると、岡本廃寺は山科盆地南部にある法琳寺や醍醐廃寺と強い関係にあったことが推測できる。

また、このような周辺寺院との関係以外にも、岡本廃寺は立地の点でも大変興味深い。当



第49図 岡本廃寺のイメージ

寺跡の西方400mを宇治川が北流している。現在の宇治川は、豊臣秀吉の伏見城築城により流路がつけかえられており、かつては巨椋池と呼ばれる巨大な淡水湖に注ぎ込んでいた。

巨椋池は、昭和16年の干拓完了まで存在し、周囲16kmに及んだ。巨椋池の東端は岡本麿寺の西方約150m付近に想定できる。岡本麿寺は巨椋池畔に建てられていたこととなる。金堂跡の南で検出した沼状遺構は、巨椋池へと続く湿池と考えられる。

「宮柱太しきいまし」と歌われた藤原宮・平城宮の建築用材は、近江・丹波から、それぞれ宇治川・桂川を南下し巨椋池に集積され大和へと運ばれた。水運に係わる港として多くの津が存在したことを記録は留めている。貞観13年(871)の「安祥寺伽藍縁起資材帳」に見える岡屋津は、現在、岡本麿寺の北西約1kmの^{註27}ところに推定されている。立地から考えて、岡本麿寺は、このような巨椋池の水運を強く意識した寺であろうことは想像に難くない。

以上、今回の調査で得られた知見の概要を報告した。調査途中で、当遺跡が寺跡と判明し以後の調査計画で苦慮した面はあったが、岡本麿寺の全容は、ほぼ解明できたと考えている。

先述したごとく、白鳳時代は全国的に寺院建立が盛んに行われ、仏教文化が開花した時代である。しかし、各地域における受容は、岡本麿寺の伽藍が示すようにバラエティーに富んだものであったことが理解できる。寺院建築として朝鮮半島から導入された礎石建物と従来の掘立柱建物が混在する有様は、建立者の経済力によるのか、他の事情によるものなのか、さらに追究する必要があるだろう。今後、幅の広い検討を行いたい。

(註)

註1. 京都府教育委員会『京都府遺跡地図』昭和47年。

註2. 橋本清一氏のご教示。『宇治市史』第1巻によれば、花崗岩を産出する最も近い場所は大津市南部の石山付近となる。

註3. 奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所基準資料Ⅰ』瓦編1解説 昭和49年。

註4. 奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所基準資料Ⅱ』瓦編2解説 昭和49年。

註5. 佐原眞「平瓦桶巻作り」『考古学雑誌』第58巻第2号 昭和47年。

註6. 江谷寛氏のご教示。奈良国立博物館編『飛鳥・白鳳の古瓦』昭和45年。

註7. 奈良国立文化財研究所『南都七大寺出土軒瓦型式一覽(1)法隆寺』昭和58年。

註8. 奈良国立博物館編『飛鳥・白鳳の古瓦』昭和47年。

註9. 同 上。

註10. 植山茂氏のご教示。

註11. 斎藤孝正「猿投窯における灰釉陶の展開」『考古学ジャーナル』No.211 昭和57年。

註12. 同 上。

註13. 高槻市教育委員会『上牧遺跡発掘調査報告書』昭和55年。

Ⅲ. 岡本廃寺・岡本遺跡発掘調査概要

- 註14. 京都府教育委員会「平安京跡(左京内膳町)昭和54年発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概要』1980—3、昭和55年。
- 註15. 平安学園考古学クラブ『陶邑古窯址群Ⅰ』昭和41年。
- 註16. 樋口隆久氏のご教示。
- 註17. 城陽市教育委員会「久津川遺跡群発掘調査概報」『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第10集 昭和56年。
- 註18. 兵庫県教育委員会「西条廃寺跡」『兵庫県埋蔵文化財調査年報』昭和57年度、昭和60年。
- 註19. 松山市教育委員会『来往廃寺』昭和54年。
- 註20. 伊丹市教育委員会『摂津伊丹廃寺』昭和41年。
- 註21. 野田久男・清水真一『日本の古代遺跡9 鳥取』昭和58年。
- 註22. 註16に同じ。
- 註23. 小玉道明氏・山中敏史氏のご教示。額田廃寺発掘調査会『三重県史跡額田廃寺発掘調査概要』昭和40年。
- 註24. 奈良国立文化財研究所『川原寺発掘調査報告』昭和35年。
- 註25. 宇治市教育委員会『大鳳寺跡発掘調査報告』昭和62年。
- 註26. 京都府立山城郷土資料館『山城の古瓦』昭和58年。
- 註27. 『宇治市史』第1巻 昭和47年。

B. 岡本遺跡

岡本遺跡は、五ヶ庄岡本を中心に東西約740m、南北430m程の範囲に広がる遺物散布地であり、以前より須恵器片や中世土器片が採集されていた。遺跡は、標高20m程の段丘西端ぞいに立地する。岡本廃寺や瓦塚古墳(円墳、直径30m)も岡本遺跡範囲内に含まれる。今回が初めての発掘調査であり、遺跡の東端部分を調査した。ここで報告するトレンチは、C・D・E・Hの各トレンチである。

(1) 遺構

〔a. Cトレンチ〕

Cトレンチは、岡本廃寺の講堂背後の段丘上に設定した。標高19.3m程を測り、講堂あたりより3m程高い。遺構は未検出。水田を造るにあたり、トレンチ東端部分で0.5m以上の削平が行われていると考えられる。瓦片が水田床土より若干出土している。

〔b. Dトレンチ〕

Dトレンチは、D₁とD₂トレンチに分けられる。D₁トレンチは、Cトレンチ寄りに設定し、D₂トレンチは、Eトレンチ寄りに設定した。標高は、19.6m程である。D₂トレンチは削平が深くまで及び、遺構・遺物は未検出。D₁トレンチで遺構を検出した。遺物は、水田床土と地山との間にわずかに形成された暗褐色土層(遺物包含層)から、須恵器片・瓦器片が若干出土した。

土壌SK38 D₁トレンチ南端で検出した不定形土壌。浅い。埋土中に炭・灰を含む。無遺物。

古墳SX41 一辺約8.5mの方墳の残欠と思われる。周溝の一部を検出。無遺物。

〔c. Eトレンチ〕

Eトレンチは、標高20m程で、比較的多くの遺構を検出した。土壌・溝が中心である。しかし、時期がわかるものは少ない。遺物は、遺構内埋土と水田床土下にわずかに形成された遺物包含層から出土した。

古墳SX01 一辺9m程の方墳の残欠と思われる。周溝を検出した。周溝底より鉄製の斧と鉋が出土した。また、土師器片が若干出土しているが器形は不明。主体部は未検出。

土壌SK03 不定形土壌。埋土中より須恵器片が出土。

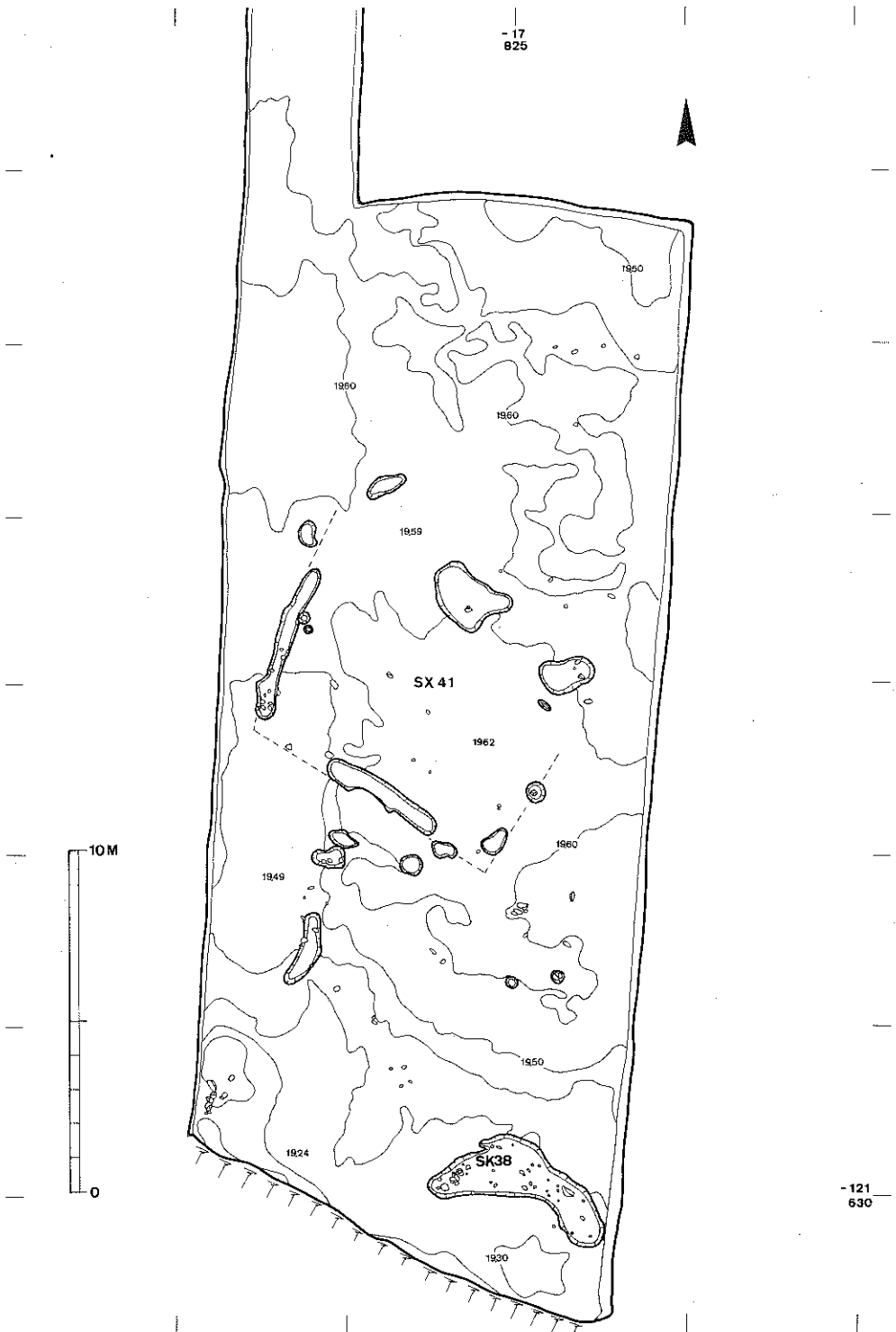
土壌SK04 不定形土壌。埋土中より須恵器の杯等が出土。

土壌SK08 不定形土壌。埋土中より須恵器の壺が出土した。

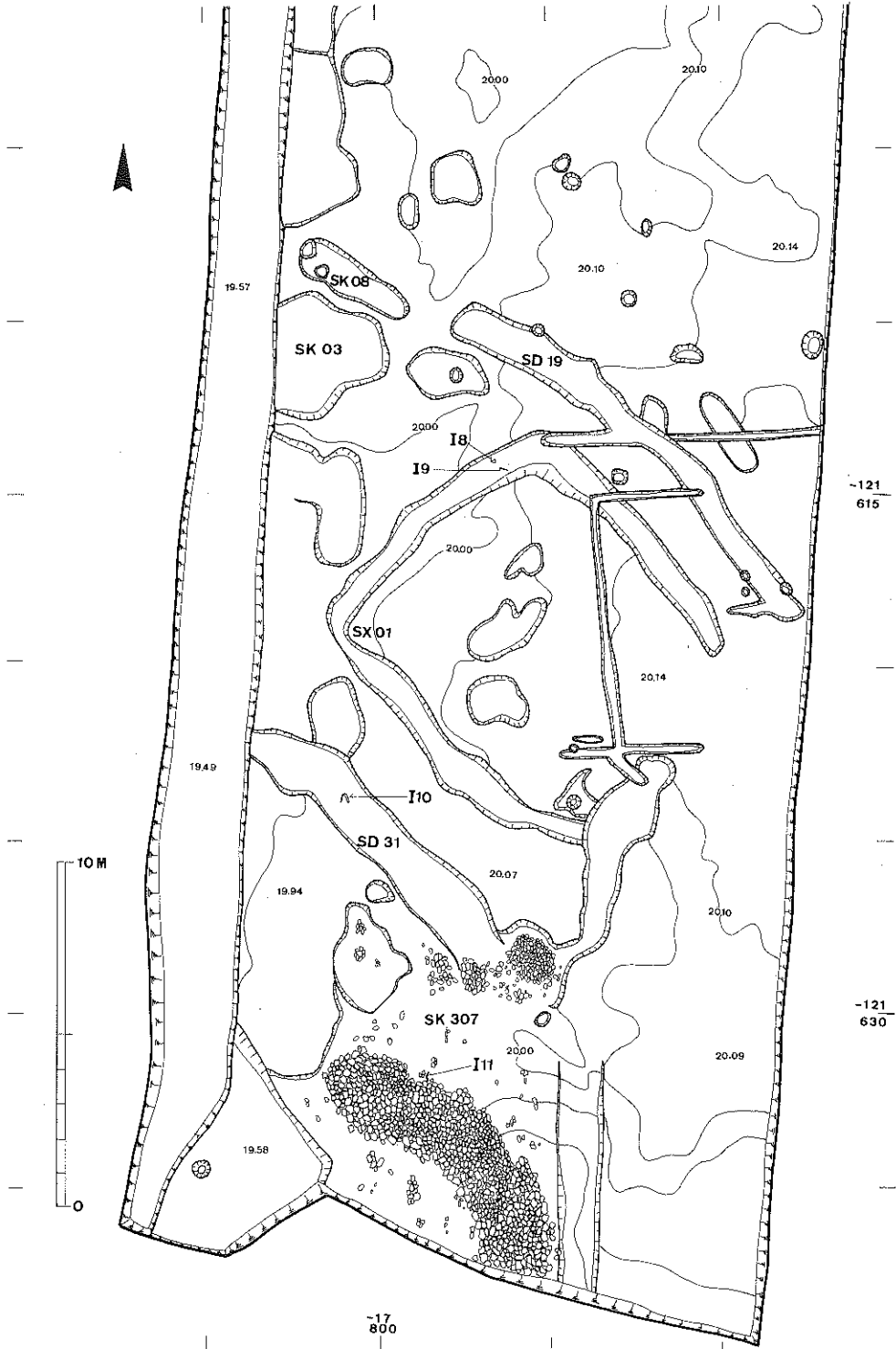
溝SD19 検出長13m、幅1mの溝。須恵器片が出土した。

溝SD31 検出長8m、幅2mの溝。瓦片と鉄製の鋤先が出土した。

Ⅲ. 岡本廃寺・岡本遺跡発掘調査概要



第50図 D₁トレンチ



第51図 Eトレンチ

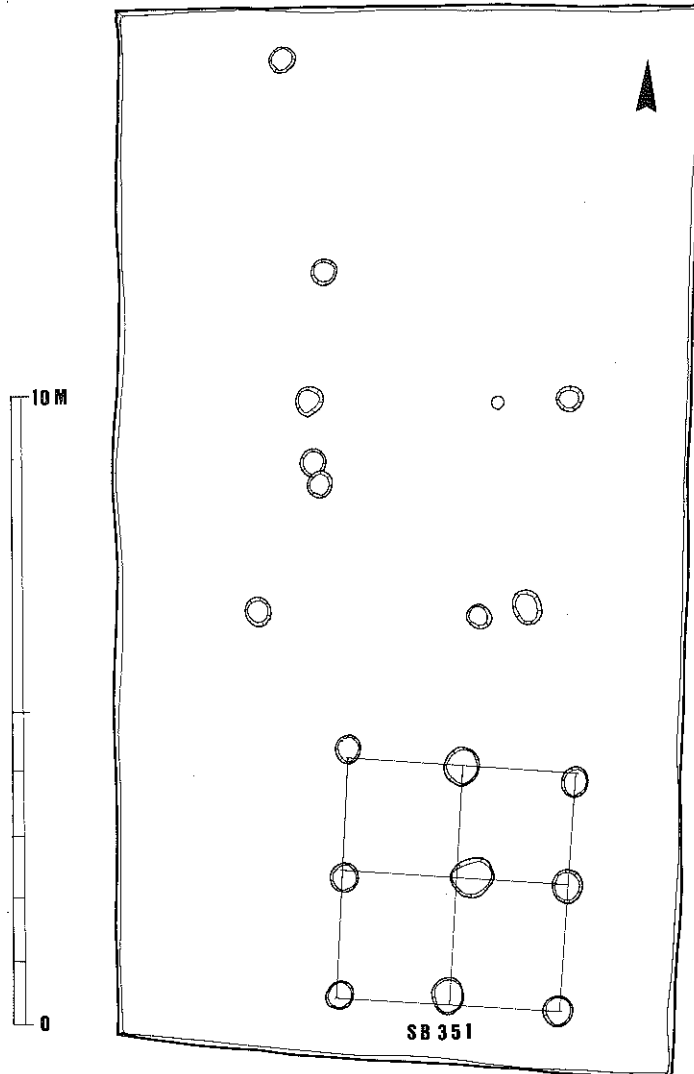
Ⅲ. 岡本廃寺・岡本遺跡発掘調査概要

瓦溜り SK307 トレンチ南端で検出した瓦溜り。瓦は細片化したものが多く、2次的堆積の可能性もある。また、鉄製の鎌が瓦と混じって出土した。

〔d. Hトレンチ〕

Hトレンチは、工事用道路建設中に遺構を発見し、緊急に調査した所である。ここでは、掘立柱建物と柱穴を検出した。

掘立柱建物 SB351 2間×2間の総柱の掘立柱建物、東西約3.5m、南北約4m。柱掘方は円形。時期不明。



第52図 Hトレンチ

(2) 瓦 類

瓦は、SK307 からコンテナ40箱程出土している。

軒丸瓦 軒丸瓦は3点出土している。3点とも同型式。内区は複弁8弁蓮華文で、外区には圈線に囲まれた珠文を配す。内側の圈線は波うつ特徴がある。中房は小さく、1+5の蓮子をもつ。東寺(京都市南区)に同^{註1}范例がある。

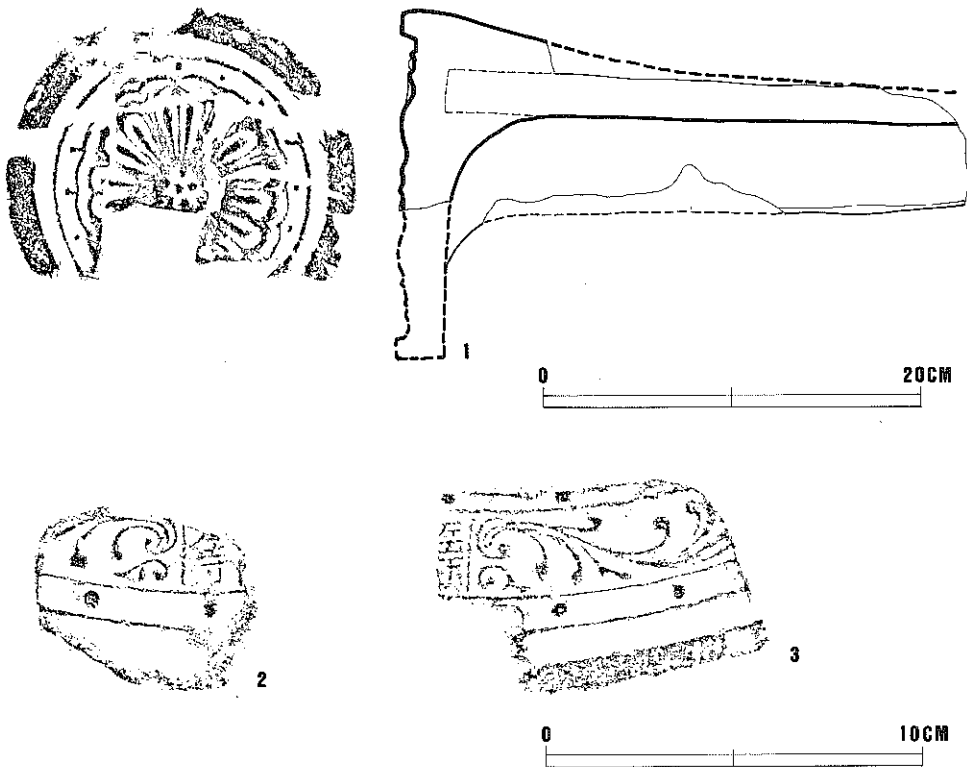
軒平瓦 軒平瓦は4点出土している。4点とも同型式と思われる。均整唐草文を内区主文とし、外区には2重の^{註2}圈線に囲まれた珠文がめぐる。中心飾には、「左寺」銘が正字で陽刻されている。東寺に同^{註2}范例がある。

平瓦 瓦の中で圧倒的多数を占めるのは、平瓦である。凸面には縄叩きの痕跡を残す。凹面には布目が残る。凸型台一枚作り。

丸瓦 丸瓦が少量ある。凸面に縄叩きを残す。玉縁式の丸瓦か。

平瓦・丸瓦については、整理作業が終了しておらず、詳細については不明である。しかし、平瓦は、一見した限りすべて同一の製作手法で作られている。

以上の瓦は、すべて同時期の所産と思われ、平安時代前期の年代が与えられる。



第53図 SK307 出土瓦

Ⅲ. 岡本廃寺・岡本遺跡発掘調査概要

(3) 土器・金属器

今回の調査では、多量の瓦類とともに土師器、須恵器、及び若干の瓦器、中世陶器、近世陶磁器、金属器がコンテナ1箱分程出土した。出土場所は調査地全域にわたるが、大半はEトレンチの各遺構及び遺物包含層からである。量的には須恵器がその大半を占める。时期的には5世紀後半から16世紀後半に及ぶが、その中心となるのは概ね8世紀前半に比定できる須恵器の一群である。ここでは遺物の整理作業が未了のため、土器は主要遺構出土の土器と遺物包含層出土の土器と分け、また金属器は種類ごとに分けそれぞれの概要を述べることにしたい。なお、近世陶磁器については今回一切割愛した。

[a. 土 器]

遺構出土の土器 Eトレンチの各遺構からは、土師器の杯・皿・甕、及び須恵器の杯・杯蓋・壺・甕がある。土師器は全体に細片のうえ風化が著しく図示しえるものはない。須恵器もその多くは細片である。S2・S3は須恵器の杯である。S2は口径13.4cm、器高3.6cmを測る。SK04出土。S3は口径19cm、器高5.6cmを測る。底部外面は中央部を残しロクロケズリを施す。SD31出土。S6は須恵器の壺である。端面が外傾する凹面をなす高台をもつ。肩部には降灰がみられ、体部下半はロクロケズリのちクロロナデを施す。口径10.6cm、器高14cmを測る。SK08出土。

S2・S3・S6は、概ね8世紀前半に比定できるものである。

遺物包含層出土の土器 遺物包含層からは、土師器の杯・皿・鍋・甕、須恵器の杯・杯蓋・鉢・壺・甕、瓦器の羽釜、中世陶器の鉢等が出土した。遺構出土の土器と同様、土師器は細片のうえ風化が著しく図示しえるものはない。その他の土器もその多くは細片である。S1・S5は須恵器の杯である。杯には、受け部と立ち上がりをもつ古墳時代のもの(S1)と、歴史時代のもの(S5)とがみられる。S4は須恵器の壺または甕の口縁部である。凹面をなす口縁端部と口縁部下半に断面三角形の突帯をめぐらす。細片のため速断はできないが、陶器編年TK208号窯式^{註3}に類似する特徴をもつ。S7は須恵器の壺の底部である。底部外周より外方へ張り出す高台をもつ。

遺物包含層出土の土器も、遺構出土の土器と同様に概ね8世紀前半に比定できる土器群がその中心をなす。

[b. 金 属 器]

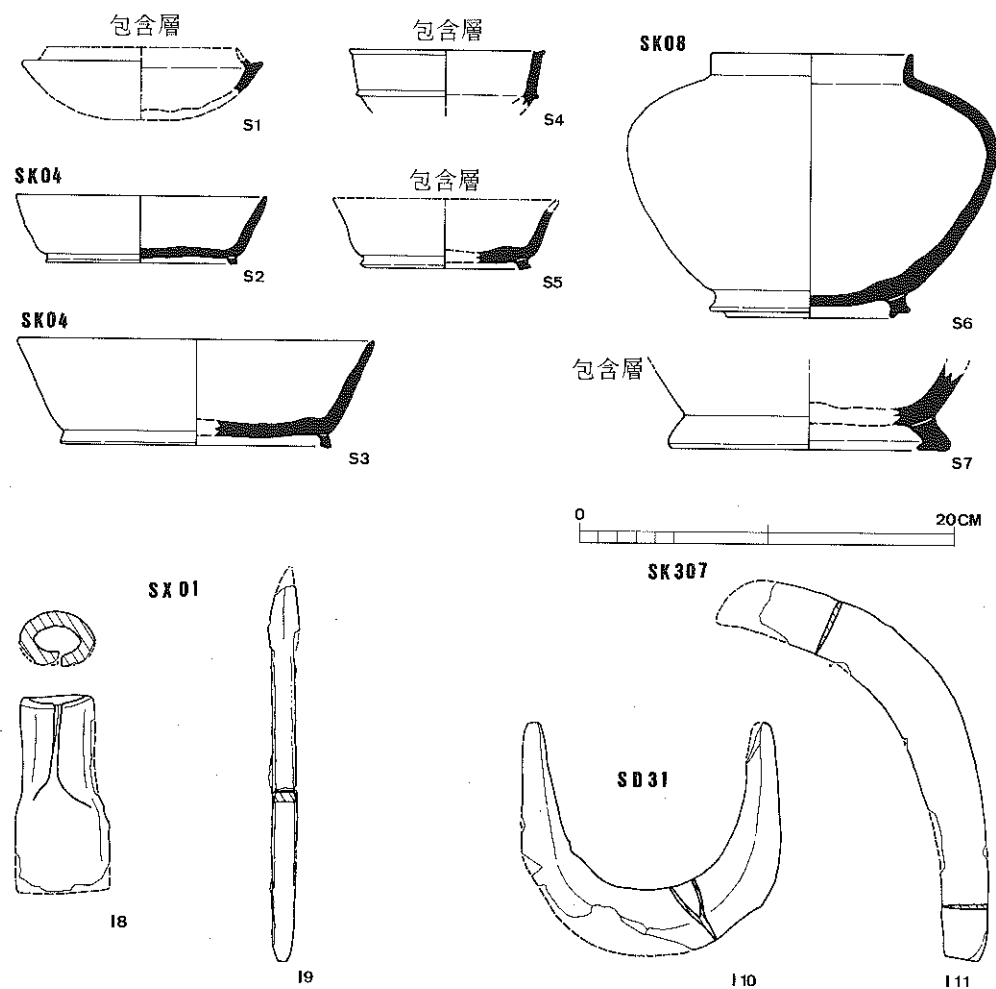
今回の調査で出土した金属器はすべて鉄製品であり、それ以外の金属器はない。出土場所は、Eトレンチの主要遺構のSX01・SD31及びトレンチ南端の瓦溜りからである。斧・鉞・鋤先・鎌各1点のほか、釘が数点出土している。以下、種類ごとにその概要を述べることにしたい。

斧(I8) 刃先部を欠損した鍛造有袋式のものである。残存長10.4cm、刃身幅5cm、袋部長径4cm、同短径3cmを測る。SX01出土。

鉈(I9) 残存長20cm、刃身幅1.7cmを測るものである。刃先端部欠損。刃部はそりをもたせ両刃をもつ。裏面はわずかな凹みをもつ。SX01出土。

鎌先(I10) 断面Y字形をなす木部装着部を備えたU字形をなすものである。全長12cm、幅13.6cmを測る。SD31出土。

鎌(I11) 刃先部が欠損した残存長23cmの曲刃鎌である。刃部は基部端部より始まり、残存刃部長18.5cm、刃身部は基部で2.5cm、刃先部で3cmを測る。基部端部背側には、わずかな折り返しが認められる。Eトレンチ SK307より出土。



第54図 Eトレンチ出土遺物

Ⅲ. 岡本廃寺・岡本遺跡発掘調査概要

(4) ま と め

以下に、調査で判明したことを整理し、まとめとしたい。

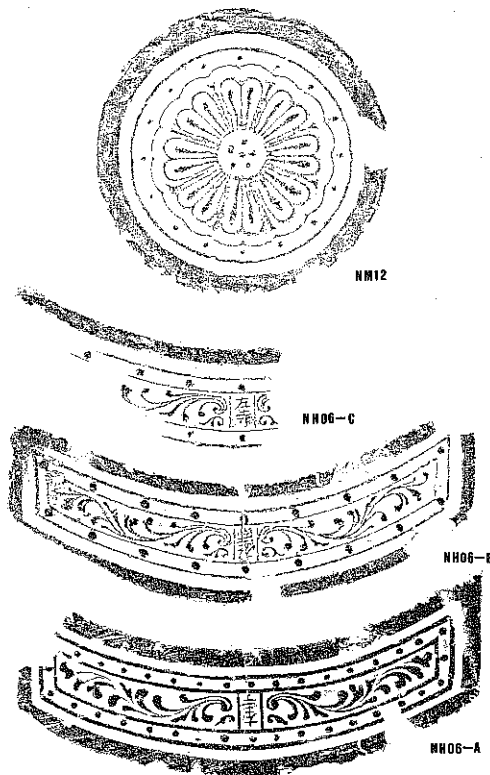
削平された古墳 耕地化に伴う土地改変で、遺構の多くがすでに失われていた。古墳とした SX01・SX41 もその一部をかりうじて留めていたにすぎない。遺物が少なく、時期を特定し難いが、古墳前期から中期にかけてのものと考えている。付近で、旧状を留めている古墳は、瓦塚古墳だけであるが、岡本廃寺の整地層から出土した埴輪や古墳時代の須恵器片、かつてこのあたりに存在したとされる一里塚古墳等を考え合わせると、比較的まとまった数の古墳が当該地付近に築造されていた状況が復元できる。

東寺造営の瓦 SK307 から出土した瓦は、すべて同時期のものと思われ、昭和56年に刊行された『教王護国寺防災施設工事・発掘調査報告書^{註4}』の東寺(教王護国寺)出土瓦の分類に従えば、SK307 出土軒丸瓦は NM12 と軒平瓦は NH06-C と同范と考えられる。

東寺は、延暦13年(794)の平安京遷都とともに建立された寺と考えられており、弘仁14年(823)に弘法大師空海に勅給された。瓦当中央に「左寺」銘をもつ軒平瓦は、東寺境内の東北に位置する洛南高等学校内の瓦窯^{註5}で焼成されたことがわかっている。この左寺銘軒平瓦と

文様が酷似するものに「大伴」銘の軒平瓦がある。木村捷三郎氏^{註6}によれば、弘仁14年(823)淳和天皇の即位に伴い、大伴氏が伴氏と改姓していることより、大伴銘軒平瓦の製作下限は弘仁14年とすることができ、以後、左寺銘軒平瓦が製作されたと考えられている。左寺銘軒平瓦は、空海勅給後の造営に使用された瓦とすることができる。

左寺銘軒平瓦は、かつて調査地北側の旧陸軍宇治弾薬庫(現陸上自衛隊関西地区補給処・京都大学宇治校地)敷地内から出土したことがある。田中重久氏^{註7}が「左寺の宇治瓦窯」と報告したものである。この瓦は、瓦当面の3分の2を残すもので、中央に正字で「左寺」の陽刻がある。写真で見ると、東寺の軒平瓦 NH06-C と同范と考え



第55図 東寺出土瓦(註4より)

られる。地元での伝聞によれば、旧陸軍弾薬庫建設において、調査地付近から大量の土砂を掘削し、建設用に充てたという。その正確な場所はすでに知ることはできないが、田中氏が報告した瓦は、この時に移動したものの可能性^{註8}がある。

岡本遺跡 SK307 で出土した瓦群が、いったい、いかなる理由によりここで出土するのか、それを直ちに解明することは難しい。しかし、以下の2通りの可能性を想定できる。

1. 田中重久氏が指摘するように、付近に東寺の瓦窯を想定する。
2. 付近に、岡本廃寺以外の寺院を想定する。

現状では、市内の寺跡からはこのような瓦が出土して^{註9}おらず、また、調査地付近には岡本廃寺以外の寺跡を想定するには無理があるように思える。前者の可能性が高いことを指摘しておきたい。ただ、その位置については、SK307の瓦が2次的な堆積の可能性が強いことから、直ちに調査地付近に瓦窯を想定することはできない。また調査地の北側に字「瓦塚」があることも注意しておきたい。

以上、調査成果を要約した。今回の調査での知見は、予想以上に重要な問題を含んでおり、今後、付近の調査には充分留意してのぞむ必要がある。

(註)

註1. 木村捷三郎氏のご教示。

註2. 同 上。

註3. 平安学園考古学クラブ『陶邑古窯址群Ⅰ』昭和41年。

註4. 教王護国寺『教王護国寺防災施設工事・発掘調査報告書』昭和58年。

註5. 鳥羽離宮跡研究所『洛南高等学校新築体育館用地埋蔵文化財調査報告』昭和56年。

註6. 同 上。

註7. たなかしげひさ「教王護国寺の彫刻羣の研究—付「左寺」の字瓦を出土する ひがし寺の瓦窯—」
『日本歴史考古学論叢』昭和41年。

註8. 報文の中で田中氏は「戦後、京都大学の分校と自衛隊になってから、幾度かその瓦窯址を探しにいったが、校舎の新築で毀してしまったのか、未だに見つからない。」(P.62)としている。

註9. 大鳳寺跡で出土していると聞くが確認していない。

付表1 岡本廃寺出土瓦一覧

番号	種類	型式	出土場所	番号	種類	型式	出土場所
01	軒丸瓦	A	B ₁ トレSE105上面	22	丸瓦	B	B ₂ トレSK157
02	軒丸瓦	A	B ₂ トレSD161上層	23	丸瓦	B	B ₂ トレSK157
03	軒丸瓦	A	B ₂ トレSD161上層	24	丸瓦	D	B ₂ トレSK157
04	軒丸瓦	Ba	B ₁ トレ中央包含層	25	丸瓦	A	B ₂ トレSK157
05	軒丸瓦	Ba	B ₂ トレSD161上層	26	丸瓦	E	B ₂ トレSK159
06	軒丸瓦	Bb	B ₂ トレSD161上層	107	丸瓦	C	B ₂ トレSK157
07	軒丸瓦	Bc	B ₁ トレSD110西側	27	平瓦	A	B ₂ トレSK157
08	軒丸瓦	Bc	B ₂ トレSK157	28	平瓦	BI	B ₂ トレSK157
09	軒丸瓦	Bc	B ₁ トレSK101	29	平瓦	BI	B ₂ トレSK157
10	軒丸瓦	C	B ₂ トレSK157	30	平瓦	BI	B ₂ トレSK157
11	軒丸瓦	C	B ₂ トレSK157	31	平瓦	BI	B ₂ トレSK157
12	軒丸瓦	C	B ₂ トレSK157	32	平瓦	BII	B ₂ トレSK157
101	軒丸瓦	A	B ₂ トレSD161下層	33	平瓦	C	B ₂ トレSK157
102	軒丸瓦	A	B ₁ トレSD110東側	34	平瓦	C	B ₁ トレSK101
103	軒丸瓦	A	B ₂ トレSD161上層	35	平瓦	D	B ₂ トレSK157
104	軒丸瓦	C	B ₂ トレSK157	36	熨斗瓦		B ₂ トレ東側表採
105	軒丸瓦	C	B ₂ トレSD161上層	37	鬼瓦	A	B ₂ トレSD161上層
106	軒丸瓦	C	B ₁ トレSK101	38	鬼瓦	A	B ₁ トレSK104
13	軒平瓦	E	B ₂ トレSK157	39	鬼瓦	A	B ₂ トレSD161上層
14	軒平瓦	A	B ₂ トレSK157	40	鬼瓦	A	B ₂ トレSD161上層
15	軒平瓦	D	B ₁ トレSD110西側	41	鬼瓦	A	B ₂ トレ包含層
16	軒平瓦	C	B ₁ トレSK101	42	鬼瓦	B	B ₁ トレSK106
17	軒平瓦	BI	B ₂ トレSK157	43	極先瓦		B ₂ トレSK157
18	軒平瓦	BI	B ₁ トレSD110西側	44	鷓尾		B ₁ トレSD110
19	軒平瓦	BII	B ₂ トレSK157	45	鷓尾		B ₂ トレSK151
20	軒平瓦	BIII	B ₂ トレ東側包含層	46	鷓尾		B ₁ トレSD119
21	軒平瓦	BIII	B ₂ トレSK157				

※トレ=トレンチの略

(注記) 付表1の番号は本文中挿図の遺物番号を整合する。

但し、付表1での型式別個数は破片数であるため、個体数を基本として作成した本文中の第48図での型式別個数とは必ずしも一致しないものがある。

付表2-1 岡本廃寺出土土器一覧

番号	器種	器形	法量(mm)			調整等の特徴	遺存率(%)	備考
			口径	器高	底径			
H01	土師器	杯	161	50		内面一摩滅のため不明 外面一底部ヘラケズリ 体部ヘラミガキ	40	B ₁ トレンチSK119上層
S02	須恵器	杯	120	35		ロクロ成形 底部内面仕上げナデ 底部外面不調整 ヘラ起し痕	40	B ₁ トレンチ SD110
S03			125	40		ロクロ成形	80	B ₁ トレンチ SE105
S04			106	38	60	ロクロ成形 底部外面不調整	40	B ₁ トレンチ SE105
H05	土師器	杯	186	24		口縁部ヨコナデ 底部外面不調整	40	B ₂ トレンチ SK159
H06		杯蓋	179			口縁部ヨコナデ 天井部外面ヘラミガキ	20	B ₁ トレンチ SD119上層
H07		杯	178			内面一 2段放射暗文 外面一底部ヘラケズリ 体部ヘラミガキ	40	B ₁ トレンチ SD119上層
H08		甕	275			口縁部ヨコナデ 体部内面ヨコナデ 外面タテハケ	5	B ₁ トレンチ SD119上層 体部外面にスス付着
H09		皿	236	24		内面一螺旋暗文+2段放射暗文 底部外面ヘラケズリのち ヘラミガキ	40	B ₁ トレンチ SD119上層
S10		須恵器	杯蓋				ロクロ成形 天井部外面ロクロケズリ	20
S11	147					ロクロ成形 底部内面仕上げナデ 天井部外面ロクロケズリ	80	B ₁ トレンチ SD119上層 外面全体に降灰
S12	杯		119	32		ロクロ成形 底部外面不調整	40	B ₁ トレンチ SD119上層
S13			116			ロクロ成形 底部外面不調整	5	B ₁ トレンチ SD119上層
H14	土師器	杯	125			体部外面ハケのちヨコナデ	20	B ₁ トレンチ SD119上層

付表 2-2 岡本廃寺出土土器一覧

番号	器種	器形	法量(mm)			調整等の特徴	遺存率(%)	備考
			口径	器高	底径			
H15	土師器	高杯	126			杯口縁部ヨコナデ 杯体下半ヘラケズリ	20	B ₁ トレンチ SD119上面 器表面に赤色顔料付着
S16	須恵器	杯蓋	86			ロクロ成形 天井部外面ロクロケズリ	40	B ₁ トレンチ SD119上面
S17			82			ロクロ成形 天井部外面ロクロケズリ	20	B ₁ トレンチ SD119上面
S18			92			ロクロ成形 天井部外面ロクロケズリ	5	B ₁ トレンチ SD119上面
S19			94			ロクロ成形 天井部外面ロクロケズリ	5	B ₁ トレンチ SD119上面
S20			杯	105	27	61	ロクロ成形 底部外面不調整	40
S21		獣脚				不均整四面体 2辺ヘラケズリ 脚先端部欠失	5	B ₁ トレンチ SD119上面
S22		杯	92	24		ロクロ成形	40	B ₁ トレンチ SD119上面 外面全体に自然釉付着
S23			92			ロクロ成形	5	B ₁ トレンチ SD119上面
S24		杯蓋	117	43		ロクロ成形 天井部外面ロクロケズリ	20	B ₂ トレンチ SD161 外面天井部に自然釉付着
S25		杯	131	31	88	ロクロ成形 底部外面不調整	20	B ₂ トレンチ表採
S26		壺				ロクロ成形 外面一肩部・体部上半に 2条の沈線体部上 半に櫛描き波状文	20	B ₁ トレンチ SD110 外面全面に降灰
S27					38	ロクロ成形 底部外面回転系切り痕	5	B ₁ トレンチ遺物包含層 底部外面に「×」のヘラ 記号
S28	甕	230			ロクロ成形	5	B ₁ トレンチ SK100	

付表 2-3 岡本廃寺出土土器一覧

番号	器種	器形	法量(mm)			調整等の特徴	遺存率(%)	備考
			口径	器高	底径			
S29	須恵器	甕	194			ロクロ成形 外面一頸部に櫛描き波状文	5	B ₁ トレンチ SD110
H30	埴輪	円筒				内面一不調整、粘土紐痕 外面一2次調整のヨコハケ	5	B ₁ トレンチ SD116 円孔透し
H31	土師器	皿	82	13		口縁部ヨコナデ 底部外面不調整	40	B ₁ トレンチ遺物包含層
H32			79	16		口縁部ヨコナデ 底部外面不調整	100	B ₁ トレンチ SK115
H33			77	13		口縁部ヨコナデ 底部外面不調整	80	B ₁ トレンチ SK115
H34			83	13		口縁部ヨコナデ 底部外面不調整	100	B ₁ トレンチ遺物包含層
H35			116	22	84	口縁部ヨコナデ 底部内面仕上げナデ 外面不調整	20	B ₁ トレンチ SK107
H36			122	23		口縁部ヨコナデ 体部内面ヘラミガキ 外面不調整指圧痕	5	B ₂ トレンチ SK159
Z37			瓦器	椀	131			口縁部ヨコナデ 体部内面ヘラミガキ 外面不調整指圧痕
Z38	132	46			48	口縁部ヨコナデ 体部内面ヘラミガキ 外面不調整指圧痕	20	B ₁ トレンチ遺物包含層
Z39	148	47			48	口縁部ヨコナデ 体部内面ヘラミガキ 外面不調整指圧痕	40	B ₁ トレンチ遺物包含層
Z40	139					口縁部ヨコナデ 体部内面ヘラミガキ 外面不調整指圧痕	20	B ₁ トレンチ遺物包含層
Z41	143					口縁部ヨコナデ 体部内面ヘラミガキ 外面不調整指圧痕	5	B ₁ トレンチ遺物包含層
Z42						44	口縁部ヨコナデ 体部内面ヘラミガキ 外面不調整指圧痕	5

付表 2-4 岡本廃寺出土土器一覧

番号	器種	器形	法量(mm)			調整等の特徴	遺存率(%)	備考
			口径	器高	底径			
Z43	瓦器	椀	156			口縁部ヨコナデ 体部内面ヘラミガキ 外面不調整指圧痕	5	B ₁ トレンチ遺物包含層
Z44			136			口縁部ヨコナデ 体部内面ヘラミガキ 外面不調整指圧痕	20	B ₁ トレンチ遺物包含層
Z45		皿	90	14		口縁部ヨコナデ 体部外面不調整指圧痕	100	B ₁ トレンチ遺物包含層
Z46		羽釜	166			口縁部ヨコナデ 体部内面ユビオサエのち ハケ	5	B ₁ トレンチ遺物包含層
H47		鍋	244			口縁部ヨコナデ 体部内面ハケ調整 外面ユビオサエのちハケ	20	B ₁ トレンチ遺物包含層 体部外面にスス付着
T48		灰釉陶器	椀			72	体部内面に施釉 底部外面に回転糸切り痕 貼り付け高台	20
T49					66	底部外面を除く全面に施 釉, 底部全面に回転糸切 り痕, 貼り付け高台	20	B ₁ トレンチ SK100
G50	青磁	椀			62	底部外面を除く全面に施 釉, 底部内面に菊花文の スタンプ文様 削り出し高台	20	B ₂ トレンチ SD161
G51			150				5	B ₁ トレンチ SK100
G52					40	底部外面を除く全面に施 釉, 体部下半はロクロケ ズリ, 削り出し高台	5	B ₂ トレンチ遺物包含層
G53					52	底部外面を除く全面に施 釉, 削り出し高台	5	B ₁ トレンチ遺物包含層
G54			白磁	椀			60	底部内面及び体部に施釉, 体部内面に1条の沈線, 削り出し高台
T55	中世陶器	壺	123			ロクロ成形 口縁部内面に施釉	20	B ₂ トレンチ SD161 肩部外面に厚い自然釉
T56		鉢	300				5	B ₁ トレンチ SD120

付表 2—5 岡本廃寺出土土器一覧

番号	器種	器形	法量(mm)			調整等の特徴	遺存率(%)	備考
			口径	器高	底径			
T57	中世陶器	鉢	292				20	A ₂ トレンチ SE218
T58			292	128	118	内面一条文痕	20	A ₂ トレンチ SE218
T59					140			5

遺存率は下記のような基準を設け4区分に分けた。
 5%……細片のため全形の窺えないもの。
 20%……実測可能なもので比較的遺存の悪いもの。
 40%……比較的遺存の良いもの。
 80%……ほぼ完形のもの。

付表3 岡本遺跡出土土器一覧

番号	器種	器形	法量(mm)			調整等の特徴	遺存率(%)	備考
			口径	器高	底径			
S 1	須恵器	杯				ロクロ成形 体部外面ロクロケズリ	5	Eトレンチ遺物包含層
S 2			189	36	94	ロクロ成形	80	Eトレンチ SK04
S 3			188	56	143	ロクロ成形 中央部を残し底部外面ロ クロケズリ	40	Eトレンチ SD31
S 4		壺	92			ロクロ成形	5	Eトレンチ遺物包含層
S 5		杯			80	ロクロ成形 底部外面不調整	5	Eトレンチ遺物包含層
S 6		壺	106	140	88	ロクロ成形 体部外面下半ロクロケズ リのちロクロナデ	80	Eトレンチ SK08 肩部外面降灰
S 7					122	ロクロ成形	5	Eトレンチ遺物包含層

遺存率は下記のような基準を設け4区分に分けた。

- 5%……細片のため全形の窺えないもの。
- 20%……実測可能なもので比較的遺存の悪いもの。
- 40%……比較的遺存の良いもの。
- 80%……ほぼ完形のもの。

IV. 寺界道遺跡発掘調査概要

1. はじめに

本報告は、宇治市五ヶ庄野添57-2番地の府・市営住宅五ヶ庄野添団地の改築に伴う発掘調査の概要報告である。

寺界道遺跡は、東西約400m、南北約500mの広がりを用意される集落跡で、調査地は、その南端部分にあたる。市内最大の古墳、二子塚古墳(前方後円墳、推定全長105m)もこの範囲の中に位置している。寺界道遺跡は、今回が初めての発掘調査である。

発掘調査は、木造の旧住宅の解体後、新住宅(鉄筋3階)の建設予定部分を対象として実施した。現地での調査期間は昭和60年8月19日から同年11月15日までである。調査面積は、890m²である。調査後、工事を実施した。調査で検出した遺構は、縄文時代晩期の貯蔵穴を始め、古墳時代後期から奈良時代にかけての集落跡である。

発掘調査の実施については、事業者である京都府・宇治市を始め、多くの方々よりご協力をいただいた。感謝申し上げます。

報文の執筆は、1・2を杉本宏、3・4-2・4-3・5-2・5-3を猿向敏一、4-



第1図 調査地位置図(1:5000)

IV. 寺界道遺跡発掘調査概要

1・5-1の縄文時代遺物に関して南博史(古代学協会研究員)・中村健二(関西大学)両氏より寄稿いただいた。編集は猿向敏一が担当した。

<調査組織>

調査主体者	宇治市教育委員会	
調査責任者	宇治市教育委員会 教育長	岩本昭造
調査指導者	元近畿大学教授	杉山信三
	京都府教育庁文化財保護課 記念物係長	中谷雅治
調査担当者	宇治市教育委員会 社会教育課 主事	杉本宏
調査事務局	宇治市教育委員会 参事	木村光長
	同 社会教育課 課長	小林巧
	同 社会教育課 文化係長	吉水利明
	同 社会教育課 主事	梅田正人
	同 社会教育課 主事	小西弘子
調査補佐員	猿向敏一	
調査補助員	岸本弘司郎・鐘方正樹・樋口秀一・元川康司・中尾由香里・古川小百合	
調査協力者	京都府住宅課、宇治市住宅課、京都府教育委員会、平安博物館 渡辺 誠(名古屋大学)、高橋美久二(京都府立山城郷土資料館)、 南 博史(古代学協会)、中村健二・森下英治・中村健二・澤山孝之(関西大学学生)、高橋 潔(立命館大学学生)、浅岡俊夫(伊丹市教育委員会)	

2. 調査の経過

調査地(五ヶ庄野添57-2)は、寺界道遺跡の想定される範囲の南端部分にあたり、府・市営住宅五ヶ庄野添団地の改築に伴い事前に発掘調査を実施したものである。

調査着手時の当該地の状況は、旧の建物がすべて取りこわされ整地され、その中にかつての団地内道路が「コ」字状に残されていた。旧建物は木造建物が中心であるため、この建築に伴う地下遺構の破損は少なく、比較的良好な状況で遺跡が検出できる可能性が考えられた。

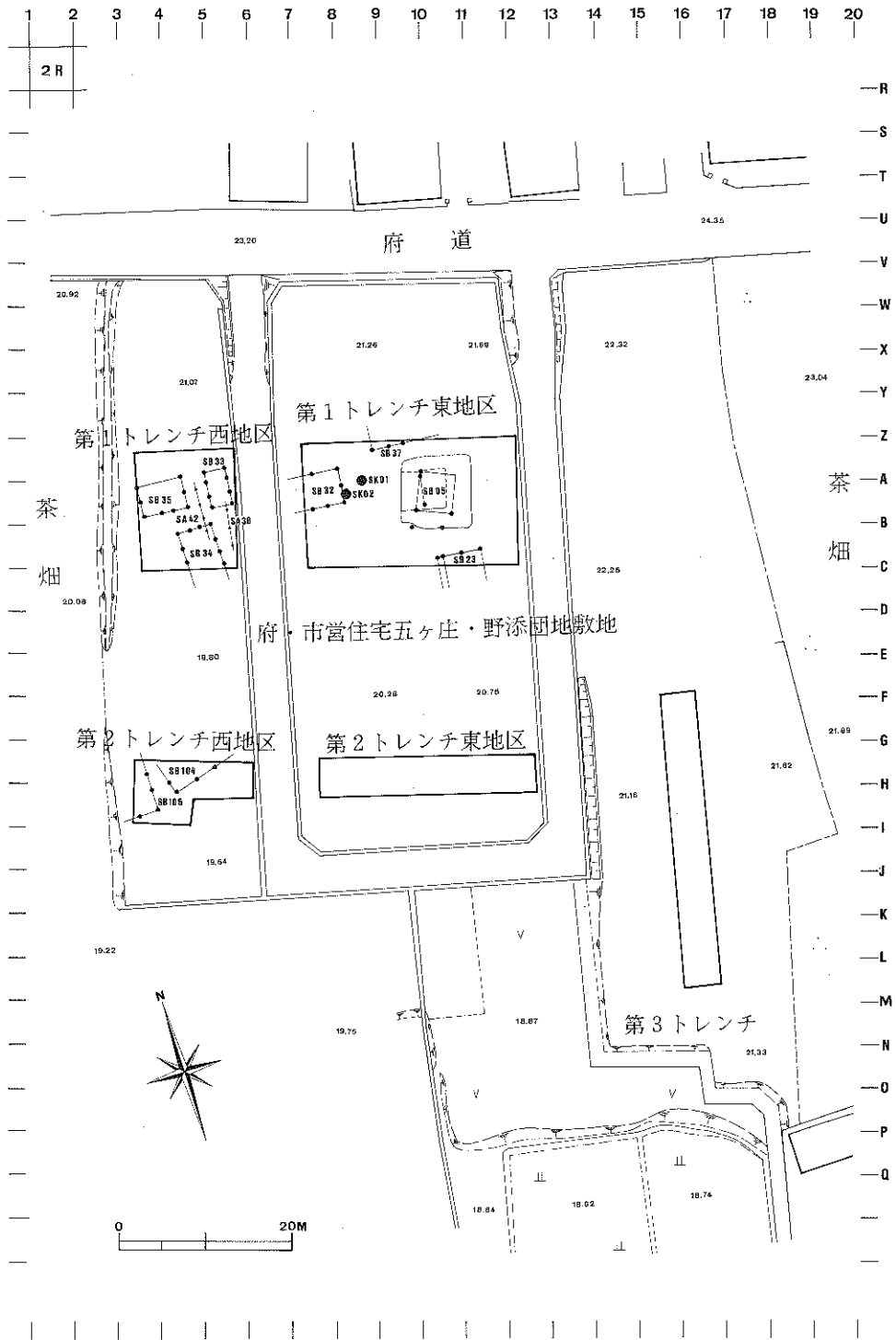
調査を行う部分は、新たに建築される鉄筋建物範囲内とし、まず幅4m、長さ35~45mのトレンチを3本設定した。北から第1トレンチ、第2トレンチ、第3トレンチとした。ただし、第1・第2トレンチは、団地内道路がトレンチ予定地内に含まれており、この道路を調査時においても使用することとしたので、東西に分断されることとなった。したがって、この分断された部分については、それぞれ東地区・西地区と呼び分けすることとなった。調査地区の設定は、東西方向を数字、南北方向をアルファベットで表記する5m方眼とした。ただし、この設定は任意である。

現地の掘削は、昭和60年8月26日より開始した。遺物包含層に致るまでの土砂はパワーショベルにて除去し、後は人力によって掘削を行った。この結果、古墳時代後期から平安時代にいたる遺構・遺物が各トレンチで検出され、本市で初めての縄文時代の遺構も第1トレンチ東地区で検出された。このため、関係機関と協議した結果、遺構密度の高い第1トレンチについては最大限の拡張を行ない、他のトレンチについては、必要に応じて小規模な拡張を行うこととなった。

以上の調査が概ね終了した11月9日に市民対象の発掘調査現地説明会を実施し(約300名参加)、11月15日にすべての現地作業を完了した。発掘調査した総面積は約890m²である。

今回の調査で出土した遺物及び調査記録については宇治市教育委員会が保管している。また、調査中に第1トレンチ西地区の東壁より下顎骨の入った近世か近代の蔵骨器が出土した。これは、かつて当地が墓地として使用されていた時のものであり、改葬時に残ったものである可能性が高いため、改葬先である西導寺へ埋葬することとなった。

IV. 寺界道遺跡発掘調査概要



第2図 地区割と主要遺構

3. 遺 構

今回の調査で検出した遺構は、縄文時代晩期の貯蔵穴、古墳時代後期の竪穴住居、古墳時代後期及び奈良時代前期の掘立柱建物・柵列、土壇・柱穴群のほか、近世の土壇等がある。

以下、各トレンチで出土した主要遺構の説明をする前に、まず調査地内の基本的層序の概要から述べることにしたい。

1 層 序

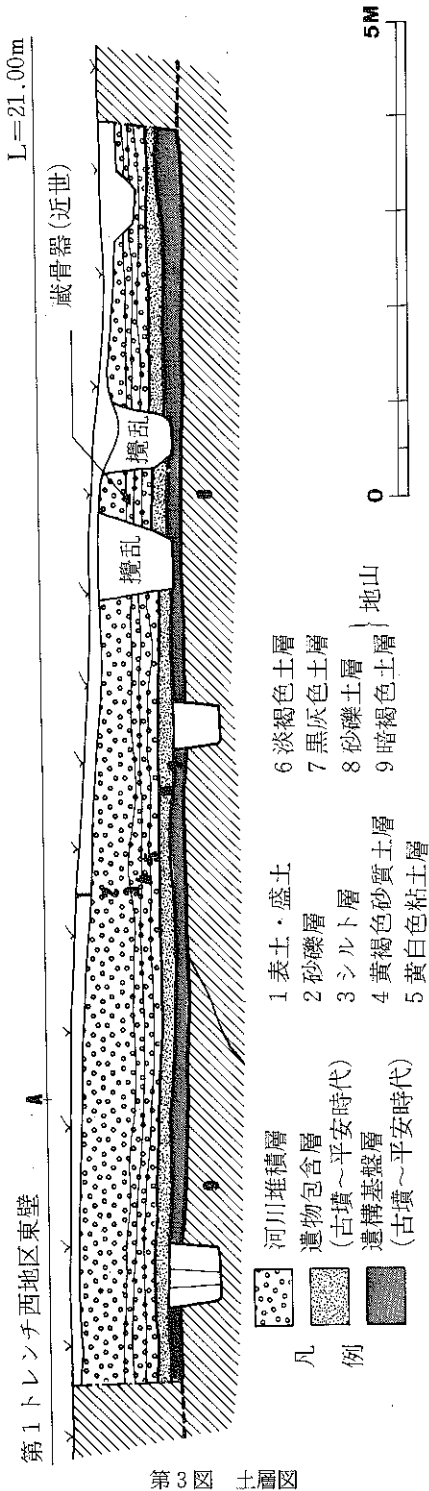
(基本的層序)

調査地で認められる層序は地区によって若干の差異はあるものの、基本的には下記のようになっている。大局的には上層から、表土及び盛土層、黄褐色系の砂礫層・砂層、淡褐色土層、黒灰色土層、そして地山である。第1層の盛土層は、市・府営住宅の建設に伴うものである。第2層の黄褐色系の砂礫層・砂層は、いく層もの縞状の堆積が認められ、明らかに河川等による堆積であることがわかる。この河川堆積層は、調査地北側ほど厚く、第1トレンチ北壁で約1m、第2トレンチ南壁で約0.2mである。第3層の淡褐色土層は、古墳時代後期から平安時代初頭にわたる土器を包含する遺物包含層である。第4層の黒灰色土層は、古墳時代から平安時代の遺構面を形成するものである。古墳時代から平安時代にかけての遺構の大半は本層上面において検出し、縄文時代の遺構は本層除去後検出した。第5層は地山層である。

(弥陀次郎川の堆積)

現在、調査地北200mに位置する二子塚古墳の北側を東に流れる弥陀次郎川は、かつては、調査地北側を東西に走る府道黄檗停車場線(以下、府道とする)に沿って西へ流れ、隠元橋南側付近で宇治川に注いでいたといわれる。『宇治市史』では、府道はその当時の堤防の名残りをとどめるものであるとの伝承を紹介し、「地形図を見ると、現流路はかつて形成された扇状地の北端近くに位置し、もとは中央部を流れていたのであろう」(『宇治市史』第2巻・P.625)と推定し、その裏付けとして隠元橋東方(調査地北西300m)には古川の小字名が現存することを挙げている。さらに、現在黄檗宗本山万福寺^{註1}に所蔵されている「万福寺領五箇庄村絵図」には、弥陀次郎川の流路が府道沿いに描かれていることから、「弥陀次郎川が現流路をとるに至ったのは、意外に後のことと思われる。」としている。これらと調査地で認められる層序から、調査地を厚く覆う砂礫層・砂層は、かつて府道にそって流れていた弥陀次郎川により形成されたものであると考えられる。現在、府道と調査地との比高差は約2.5mあり調査地の方が低い。この比高差は府道の北側においても認められる。このことから、弥

IV. 寺界道遺跡発掘調査概要



第3図 土層図

陀次郎川が流路変更直前では天井川であったことが推察される。

ここで再度、調査地における層序と遺構との相関関係について整理する。第2層の河川堆積層は遺物包含層の直上に堆積しており、近世の遺構はその河川堆積層を掘り込んでいる。つまり、遺構は厚く覆う河川堆積層をはさんで、その直下に縄文時代晩期から平安時代初頭のものである。これら遺構の様相と弥陀次郎川による河川堆積層の形成とを考え合わせると、調査地付近は弥陀次郎川天井川化によって平安時代の初頭から流路変更のあった近世まで、常に洪水や氾濫等の水害の危険性のはらんだ土地となっていた可能性がある。調査地において遺構・遺物が平安時代初頭を境に見られなくなるのは、このような自然環境の変化に起因するものと考えられる。なお、弥陀次郎川が現流路を採った時期であるが、その特定は難しい。ただ、前掲の「万福寺領五箇庄村絵図」が天明年間(1781~1789年)に描かれたものとされることから、弥陀次郎川の流路の変更は少なくとも18世紀後半以降と考えてよいだろう。

2 第1トレンチの遺構

第1トレンチで検出した遺構には、縄文時代晩期の貯蔵穴2、古墳時代後期の竪穴住居2、古墳時代後期から奈良時代の掘立柱建物5、柵列2、土塼・柱穴群がある。以下、主要遺構についてその概要を述べる。

貯蔵穴SK01 東地区9B区で検出した縄文時代晩期の土塼であり、貯蔵穴と思われる。上面直径約1.4m、底部直径約1.8m、深さ約0.5m

の規模で、底に向かって広がる、いわゆる袋状土壌である。砂質系の地山を穿っているため土壌上面はもろく、調査中にも崩落する部分が多々あった。次にのべる埋土の状況においても、崩落土と思われる土が土壌内の周囲に認められるため、現状での規模・形状が必ずしもかつての状況ではないことがわかる。

埋土は大きく4層に分けることができる。すなわち、最下層の淡黄色砂質土、その上の縄文土器・石器を多量に含む層、土壌の壁や上面が崩落したと思われる崩落土層、そして土壌廃絶後にその凹みに流入した流入土層である。縄文土器・石器を含む層には多量の炭化物の細片が混ざっている。炭化物には種子表皮(おそらくシイの実)が認められる。最下層の淡黄色砂質土には若干の炭化物が認められたが、土器片は出土しなかった。

遺物には、縄文土器と石器がある。ともに前述した部分から集中して見つかった。土器はすべて破片化しており、接合しても旧状に復するものはない。SK01 廃棄時に破損した土器を投棄している可能性が考えられる。

貯蔵穴 SK02 SK01 の南に近接し営まれた縄文晩期の土壌。貯蔵穴と思われる。上面直径約1.9m、底部直径約1.9m、深さ約0.8mの規模である。袋状土壌である。

埋土の状況から、前述のSK01 同様に後の崩落が著しいことが理解でき、土壌上面の直径は、現状より一まわり小さかった事がわかる。崩落した部分は、土壌周囲の上半部である。

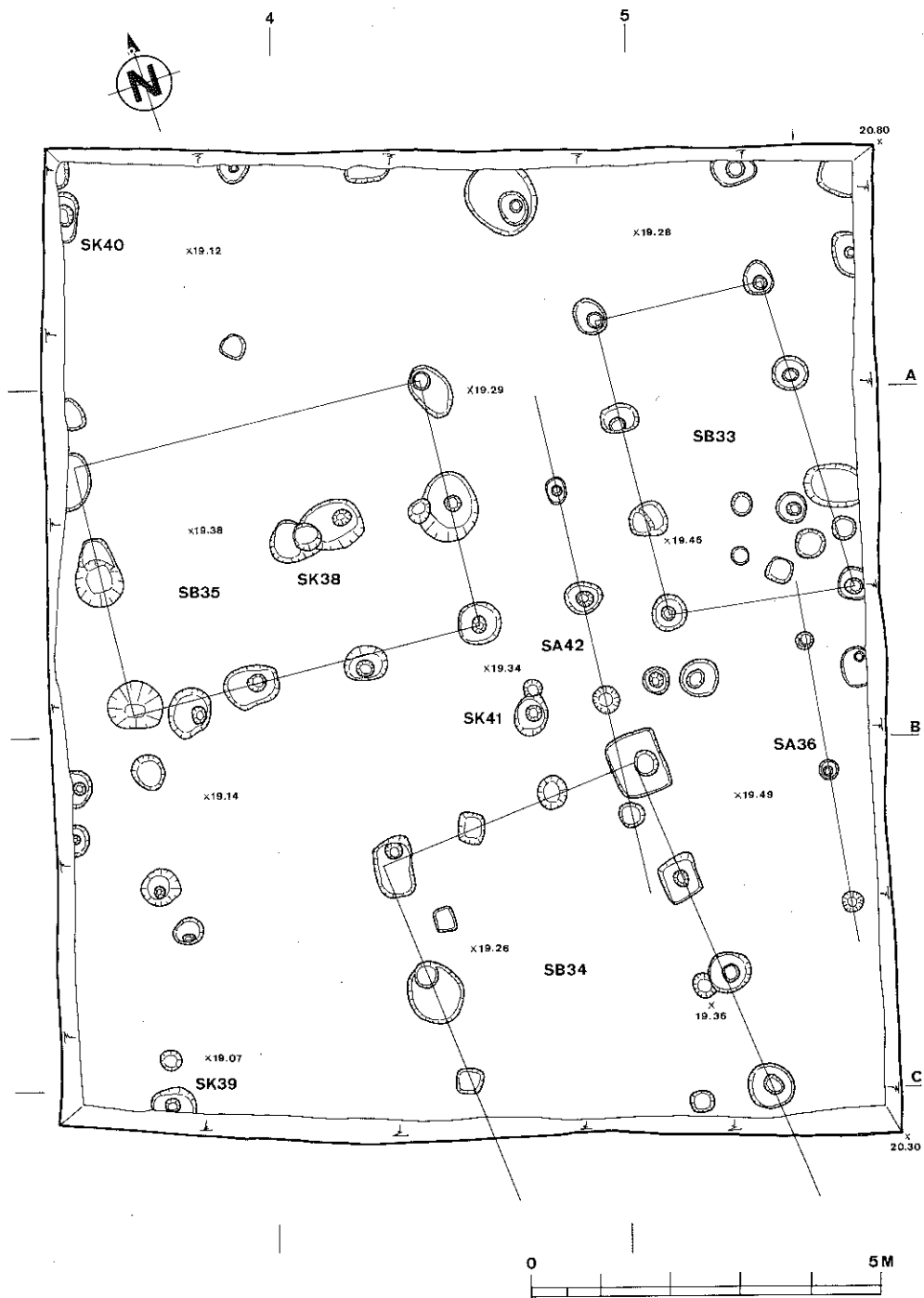
また、SK02 は廃棄された後に新たに同じ場所で掘りなおされた可能性がある。最初に掘られたものをSK02(古)、後に掘られたものをSK02(新)とする。上述した規模及び状況はSK02(古)の状況である。

SK02(新)は、SK02(古)が廃絶した後、一定時間経過後に同じ場所で一まわり小さく穿られている。上面直径1.5m、底部直径0.8m、深さ0.7m程の規模である。袋状土壌ではない。SK02(新)は、SK02(古)の崩落によって掘り直されたものではない。これはSK02(新)が、SK02(古)が廃絶した後に流入した土を掘り込んでいることから理解できる。

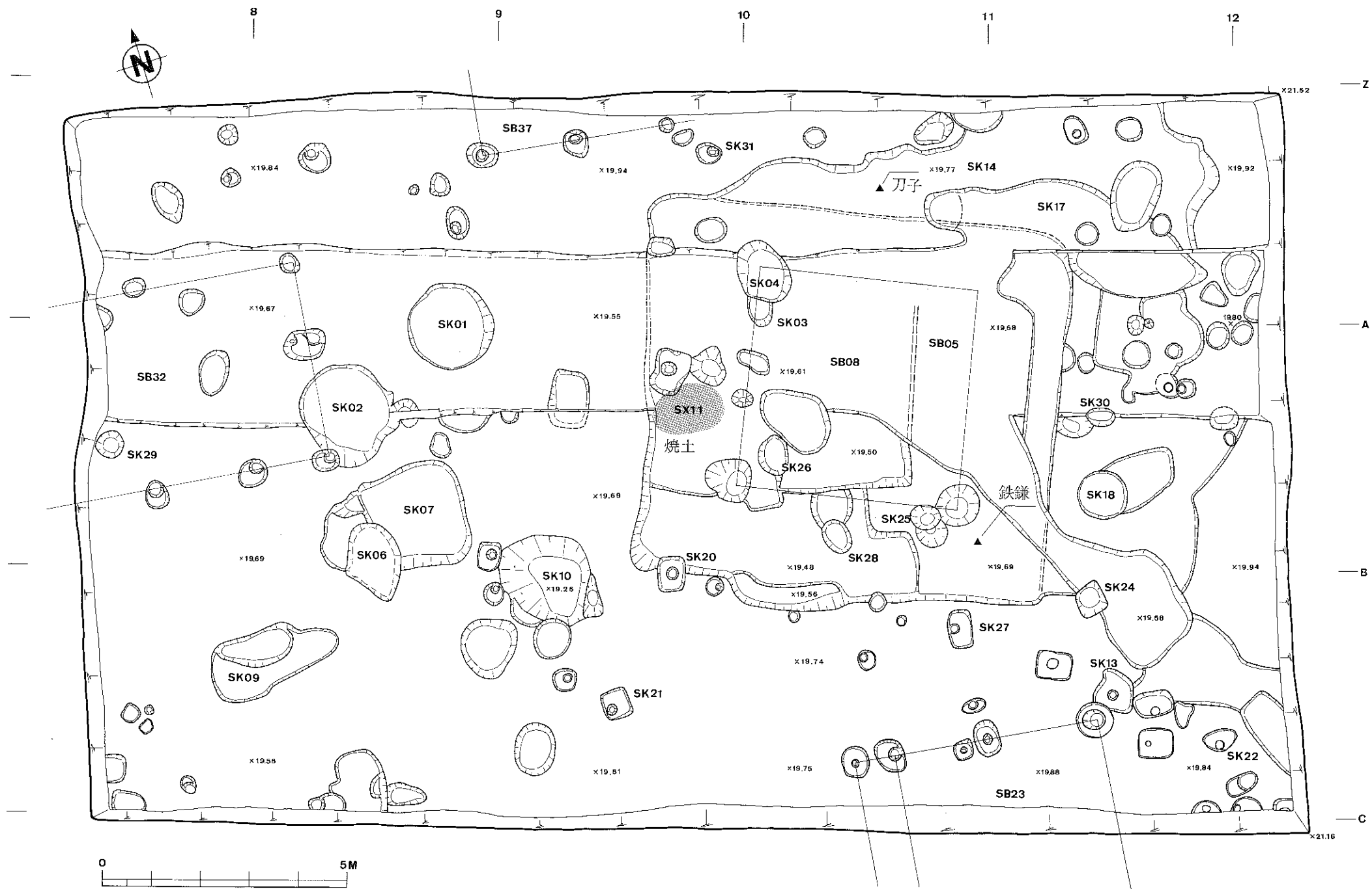
遺物には、縄文土器と石器がある。遺物が集中して出土したのは、SK02(古)の最下層であり、シイの種子等も伴出した。土器はいずれも破片化している。SK02(新)の下層からも縄文土器が出土したが、細片化しておりその量も少ない。

竪穴住居 SB05 東地区11B区。北辺は遺構が重複しており不明瞭である。しかし、北東・北西隅と残る3辺が比較的遺存状態がよく建物規模は確認することができた。東西約8.5m、南北約7.7mの長方形プランをもつ大型竪穴住居である。後述するSB08と重複関係にありそれより新しい。周壁は遺存状態のよい南辺中央部で残存高0.3mを測る。壁溝は認められなかった。床面は黄褐色粘土を厚さ約0.1mで貼床している。西壁中央部に接し焼土塊SX11を検出した。焼土・炭を包含する赤褐色土層が床面よりレンズ状に盛り上がり焼き締ってお

IV. 寺界道遺跡発掘調査概要

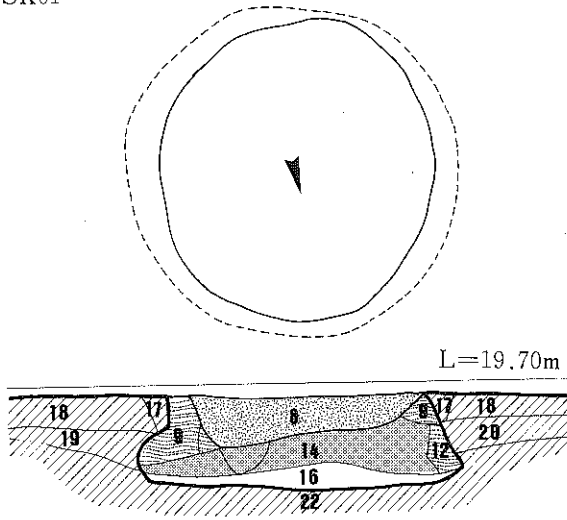


第4図 第1トレンチ西地区



第5図 第1トレンチ東地区

SK01



凡 例



流入土



崩落土



縄文土器・石器・炭
を多く含む層

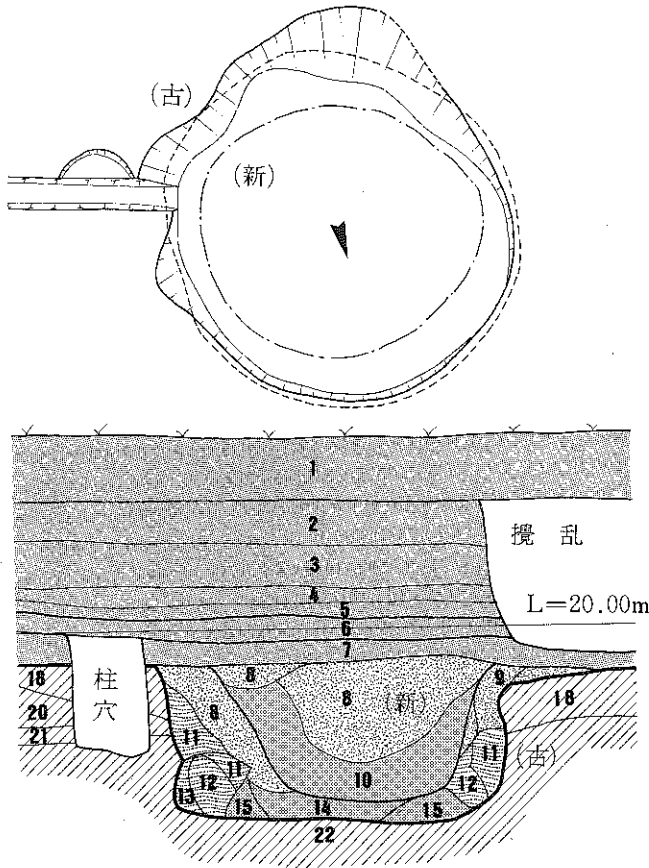
1. 表土・盛土
2. 砂礫層
3. 砂層
4. 淡褐色砂層
5. 黄褐色シルト層
6. 淡褐色土層(古墳～奈良包含層)
7. 暗褐色土層
8. 淡褐色砂質土
(少量の縄文土器含む)
9. 淡黄色砂質土
10. 黒灰色砂質土
11. 淡黄褐色砂質土
12. 褐色砂質土
13. 淡黄色粘質土
14. 黒灰色砂質土
(縄文土器・炭多量に含む)
15. 茶褐色砂質土
16. 淡黄色砂質土(礫を含む)
17. 黄褐色の砂礫土
18. 淡黄褐色砂質土
19. 淡黄褐色粘質土
20. 暗褐色混礫土
21. 黄灰色砂質土
22. 淡黄色粘土

河川堆積

土
擴
埋
土

地
山

SK02



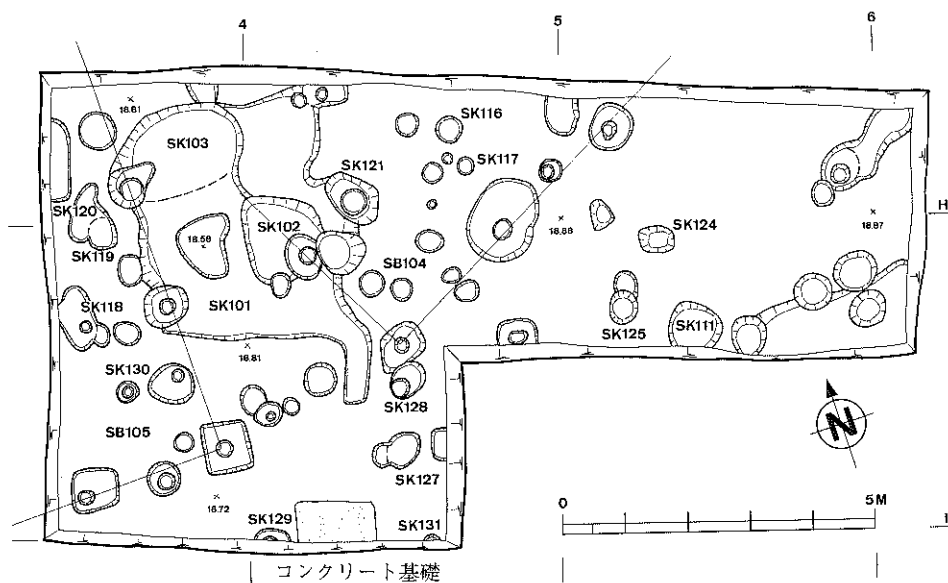
第6図 SK01—SK02実測図

IV. 寺界道遺跡発掘調査概要

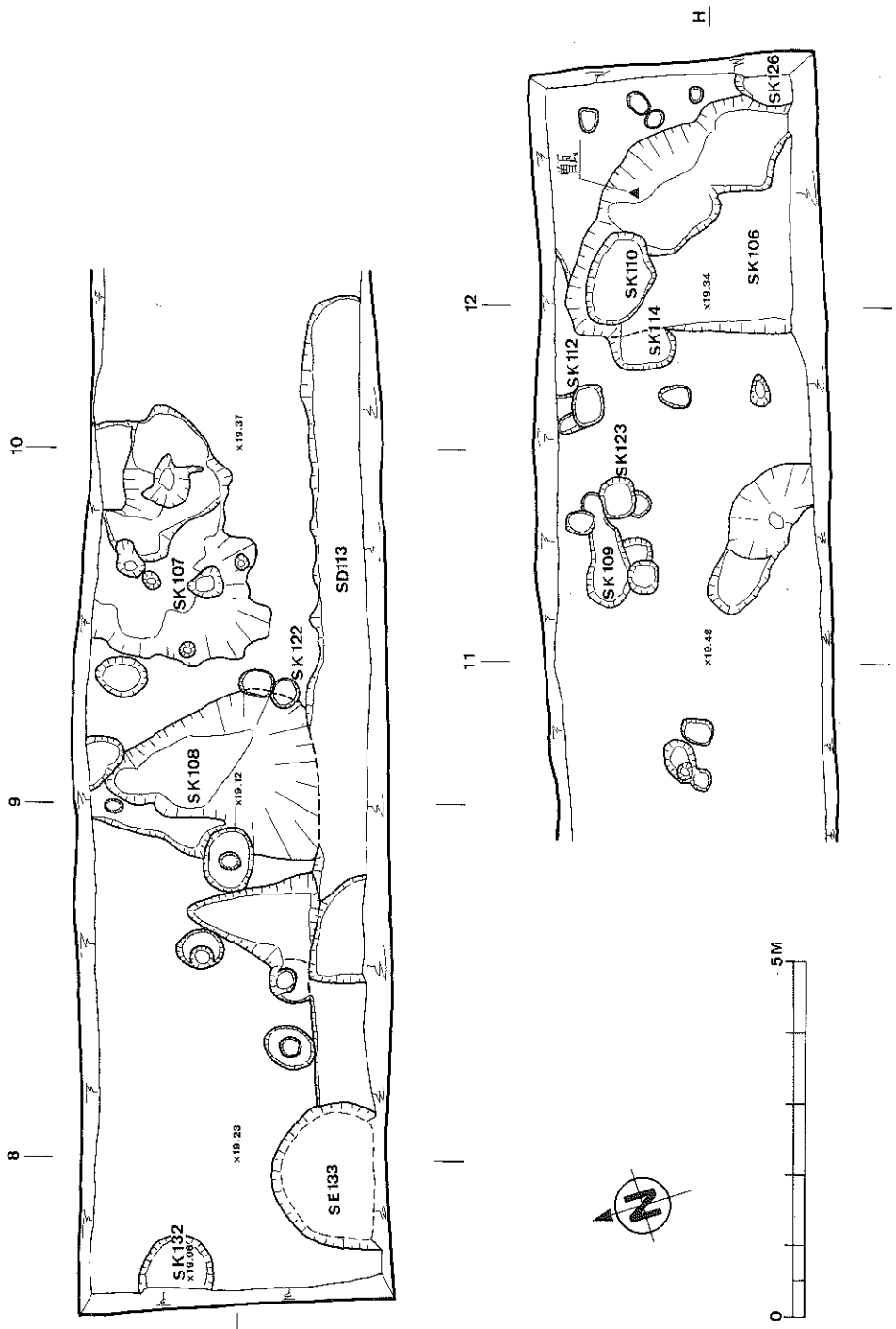
り、土師器の甕片数個体分が出土した。状況的には造り付けカマドと推察されるが、規模・構造等詳細は不明である。住居内からは10数個の土壇・柱穴を検出した。柱穴の配置から、SB05の主柱穴を推定することができた。柱掘方は径1m前後、深さ0.3m程を測る円形掘方である。柱間距離は4.5m等間である。SK04は推定北西主柱穴である。SK03と重複関係にありそれより新しい。南壁西寄りに床面より約0.1m一段高くなる突出部分と、住居外側に左右1個所の小柱穴を検出した。状況的に入口施設の可能性がある。

竪穴住居 SB08 東地区11B区。SB05と重複した竪穴住居である。検出したのは南辺及び南東・南西隅である。建物規模は東西約5.5m、南北推定長約4.5mを測る。西壁はSB05と共有する。西壁の中央部よりSX11(SB05：カマド)とは別の焼土面を検出した。上部は完全に削平を受け遺存状態は悪い。東西0.7m、南北0.9m、深さ0.1mを測る。住居内より検出した土壇・柱穴の中で、SK03・SK26は形状・規模が類似した楕円形土壇である。土壇の長軸方向が住居の長軸方向と一致することから、SB08の主柱穴である可能性がある。SK03は前述のとおりSK04と重複関係にありそれより古い。SK03からは、土師器の鉢・甕、須恵器の杯が一括で出土した。SB05との新旧関係については、主柱穴のSK03、SK04の重複関係、出土遺物の検討からSB08はSB05より古い。

土壇 SK09 東地区9C区。東西1.7m、南北1.2m、深さ0.4mを測る不定形土壇である。土壇内より土師器の甕、須恵器の杯が一括で出土した。

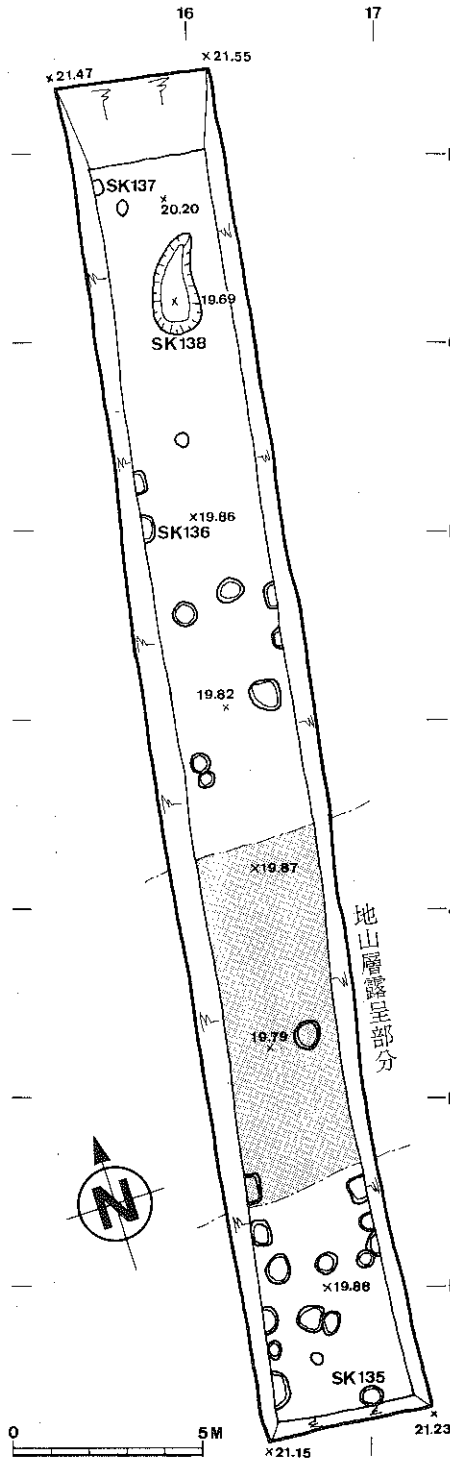


第7図 第2トレンチ西地区



第8図 第2トレンチ東地区

IV. 寺界道遺跡発掘調査概要



第9図 第3トレンチ

土壌 SK10 東地区10C区。東西1.9m、南北1.8m、深さ0.5mを測る不定形土壌である。黄褐色粘土を厚さ約0.2m貼付した土壌である。土壌底より須恵器の壺口縁部出土。

—F

掘立柱建物 SB23 東地区11C区。建物のほとんどが調査範囲外のため棟方向、規模は不明である。検出した建物規模は東西4.2m(2間)である。柱筋から桁行1間以上、梁行2間の南北棟建物と推察される。方位は北に対し6°程東に振る。柱掘方は隅丸方形掘方である。梁行柱筋の西延長線上に1間分(0.85m)の距離において同規模の柱穴が存在する。状況的に廂部柱穴の可能性はある。

—G

—H

掘立柱建物 SB32 東地区8B区。建物西側は調査範囲外のため全形は明らかではない。建物規模は、桁行が3.6m(2間)以上、梁行が4.0m(2間)を測る。東西棟建物である。方位は北に対し6°程東に振る。柱掘方は、北辺柱掘方の遺存状態が悪く速断できないが隅丸方形掘方と考えられる。

—I

—J

掘立柱建物 SB33 西地区6B区。建物規模は、桁行が4.5m(3間)、梁行が2.4m(1間)を測る。南北棟建物である。方位は北に対して3°程東に振る。柱掘方は円形掘方である。桁行の柱間距離は約1.5m等間である。

—K

—L

掘立柱建物 SB34 西地区5C区。建物南側は調査範囲外のため全形は明らかではない。建物規模は、桁行が5.1m(3間)以上、梁行が3.9m(3間)を測る。南北棟建物である。方位は北に対し5°程西に振る。柱掘方は規模・形状とも不揃いである。

掘立柱建物 SB35 西地区4B区。建物規模は、

桁行5.1m(3間)、梁行3.6m(2間)を測る。東西棟建物である。方位は北に対し3°30'程東に振る。柱掘方は円形掘方である。

柵列SA36 西地区6C区。3.8m(2間)検出した南北方向の掘立柱柵列である。方位は北に対し7°30'程東に振る。柱間距離は1.9m等間である。

掘立柱建物SB37 東部10B区。建物のほとんどが調査範囲外であるため建物棟方向・規模は不明である。検出した建物規模は東西3.8m(2間)以上である。方位は北に対し7°程東に振る。柱掘方は円形掘方である。柱間距離は1.9m等間である。

柵列SA42 西地区5B区。SB33とSB35との中間に位置する南北方向の掘立柱柵列である。4.8m(3間)検出。方位は北に対し4°程東に振る。柱掘方は円形掘方である。位置等の関係から、SB33ないしSB35に付属する隠し堀的な施設と考える。

3 第2トレンチ

第2トレンチで検出した遺構には、古墳時代後期の大型不明土壌1、古墳時代後期の掘立柱建物2、土器溜り土壌1、土壌・柱穴群のほか、近世の土壌等がある。以下、主要遺構についてその概要を述べる。

土壌SK101 西地区4H区。重機による掘削段階に、遺物包含層の暗褐色土層上面で検出。遺構として明確な平面形をもたない2×3m程の広がりをもつ土器の集中部分である。検出面には他の遺構が認められなかったため、さらに掘り下げた。出土遺物は多量の須恵器破片と若干の土師器細片である。奈良時代前期のものである。

土壌SK102 西地区5I区。SK101と重複する下層遺構である。東西1.2m、南北1.5m、深さ0.3mを測る不定形土壌である。

掘立柱建物SB104 西地区5H区。建物のほとんどが調査範囲外のため建物棟方向・規模は不明である。検出した建物規模は、東西4.8m(2間)以上、南北2.1m(1間)以上を測る。方位は北に対し29°程西に振る。柱掘方は不揃いである。SK102と重複関係にありそれより新しい。

掘立柱建物SB105 西地区4I区。SB104と同様、建物棟方向・規模は不明である。検出した建物規模は、東西2.3m(1間)以上、南北4.4m(2間)以上を測る。方位は北に対し2°程西に振る。柱掘方は隅丸方形掘方である。

土壌SK106 東地区13H区。そのほとんどが調査範囲外のため全体像は窺えない。検出した遺構規模は、東西・南北とも約3m、深さ0.4mを測る。土壌内からは、須恵器の杯・壺脚部及び土師器の甕・甌などが出土した。甌は、1個体分がまとまって出土した。

4 第3トレンチ

第3トレンチは、東西3m、南北34mと南北に狭長なトレンチであり、かつ若干遺構検

IV. 寺界道遺跡発掘調査概要

出面を掘削したことから南側において幅9m程地山である黄褐色砂礫層が露呈するなど、遺構密度に比べ性格のつかめぬトレンチとなった。

検出した遺構は、遺構性格の不明な不定形土壇1のほか、ほとんどが遺物を伴出しない小土壇・柱穴群であった。以下、主要遺構についてその概要を述べる。

土壇 SK135・SK136・SK137 SK135は、17M区に位置する径0.6m、深さ0.2mを測る円形土壇である。SK136は、16H区に位置する一辺0.7m、深さ0.1mを測る方形土壇である。SK137は、16G区に位置する径0.4m、深さ0.1mを測る円形土壇である。それぞれ若干の須恵器片・土師器片を伴出するが、器形・時期を決定しかねる細片であり遺構の性格は不明である。

土壇 SK138 16G区に位置する不定形土壇である。東西1.2m、南北2.5m、深さ0.5mを測る。土壇内には遺物包含層である黒灰色土層が堆積していた。遺物は出土せず遺構の性格は不明である。

今回の調査で検出した主要な遺構は以上のとおりである。

縄文時代晩期の貯蔵穴 SK01・SK02の検出は、全く偶然であったとはいえ、縄文時代の遺構・遺物の良好な資料が皆無であった本市にとって大変重要な発見であった。調査地周辺には、まだ同時代の遺構が存在している可能性が高く、今後、充分留意する必要がある。また、古墳時代後期から平安時代にいたる数多くの建物や土壇・柱穴の検出は、当地付近が集落のまっただ中にあることを物語っており、昭和61年に本市教育委員会が刊行した『宇治市遺跡地図 改訂版』所載の寺界道遺跡の範囲はさらに南に向かって広げなければならないこととなる。

4. 遺 物

今回の調査で出土した遺物は、コンテナで約20箱分ある。時代的には、縄文時代晩期と古墳時代から平安時代にかけての遺物とに大別でき、前者が約5箱、後者が約15箱分である。縄文時代晩期の遺物は、SK01・SK02から出土しており、土器と少量の石器がある。古墳時代から平安時代にかけての遺物は、須恵器と土師器で大半が占められており、少量の陶硯と鉄器が認められる。出土場所は各トレンチの遺構埋土及び遺物包含層である。以上の遺物以外にも、中世及び近世・近代の土器類が若干出土している。これらは表土及び盛土層や河川堆積層を掘り込んだ遺構から出土しているもので、今回は割愛することとした。では、以下に縄文時代晩期の遺物と古墳時代以降の遺物について概要を説明する。

1 縄文時代晩期の遺物

(1) 土器(第10～17図 第1～4表)

当遺跡の縄文土器はSK01、SK02の2基の貯蔵穴より出土した。出土した縄文土器はすべて、刻目凸帯文をもつ晩期後半に属している。

この時期の器種構成は縄文時代に一般的な深鉢形土器と浅鉢形土器という組み合わせに少量の壺形土器註3を加えるものである。当遺跡では壺形土器の出土はなく、深鉢形土器と浅鉢形土器の2種類である。また、当該期の土器編年は家根祥多氏により滋賀里IV式から長原式までの3段階に型式学的に分けられている註4。今回検出した2基の貯蔵穴では、層的にこれらを分離することはできなかった。

したがって、本節では型式学的分類を中心に説明を行う。

(分 類)

上で述べたように凸帯文土器の編年は家根氏による一連の論文により、滋賀里IV式→船橋式→長原式へという順序註5が示されている。また、氏は口縁部凸帯の位置と凸帯貼り付け技法などの分析により、上記の型式学的編年を行った。

当遺跡では家根氏の編年を踏まえて、凸帯の位置による分類と形態による分類をそれぞれ行った。また、浅鉢形土器および底部に関しては形態により分類した。なお、縄文土器の土器番号は遺構ごとに番号をつけているので、以下で述べるときはSK01-1というように遺構名、番号の順に記載する。

深鉢形土器

深鉢形土器は、口縁部凸帯の位置により下記に分類できる。

〔I類〕 口縁部よりやや下がり凸帯を貼り付けるもの(SK01-1～8、SK02-1～6)。

IV. 寺界道遺跡発掘調査概要

第1表 口縁部凸帯の位置による分類

分類	SK01	SK02	計
I 類	8 (27.6%)	6 (35.3%)	14(30.4%)
II 類	8 (27.6%)	5 (29.4%)	13(28.3%)
III 類	10(34.5%)	6 (35.3%)	16(34.8%)
IV 類	3 (10.3%)	0 (0%)	3 (6.5%)
計	29(100%)	17(100%)	46(100%)

I 類は家根氏編年の滋賀里IV式から船橋式に相当するものを中心とする。SK01—1・7、SK02—3は口縁端部を面取りしている。しかし、SK01—7は部分的に端部が丸いところもあり、全体を丁寧に撫でたものとは若干違う。また、SK02—3は口縁端部に刻目を入れているが端

部の面取りは甘い。これらは家根氏編年による滋賀里IV式に相当する。

SK01—1・5～8およびSK02—3・4が明確に口縁端部より下がって凸帯が貼り付けられているのに対して、他のI類は口縁端部に非常に近く貼り付けられている。

SK02—2は口頸部に櫛状工具あるいは非常に細かい原体を束ねた工具による文様をもつ。このように口頸部に文様をもつものは瀬戸内地域の刻目凸帯文期に見られる。しかし、瀬戸内地域のものは^{註6}篋描文である点でやや異なる。

〔II類〕 口縁端部に接して凸帯を貼り付けるもので、やや凸帯が垂れ下がり気味になる。

I類とIII類との中間的要素を示す(SK01—9～16、SK02—7～11)。

SK01—14～16は本類の典型である。

〔III類〕 口縁端部に接して凸帯を貼り付けるもの(SK01—17～26、SK02—12～17)。

SK01—17～27、SK02—12・14～15は本類の典型である。

〔IV類〕 凸帯がI類～III類に比べて小さく、器壁の薄いもの(SK01—27～29)。

SK01のみに存在する。SK01—27は比較的本類の中では大形のものである。

これらの分類の構成比率は第1表の通りである。

形態により下記に分類できる。

深鉢形土器は凸帯文期の他の遺跡と同様に二条凸帯と一条凸帯が存在する。

〔形態A〕 口頸部でくびれて、口縁部で外反するもの(SK01—8・14～16・27、SK02—2)。

SK02—2のみが一条凸帯である。

〔形態B〕 口縁部が内傾するもの(SK01—4・7・9・19・20・24・26、SK02—6・7・11)。

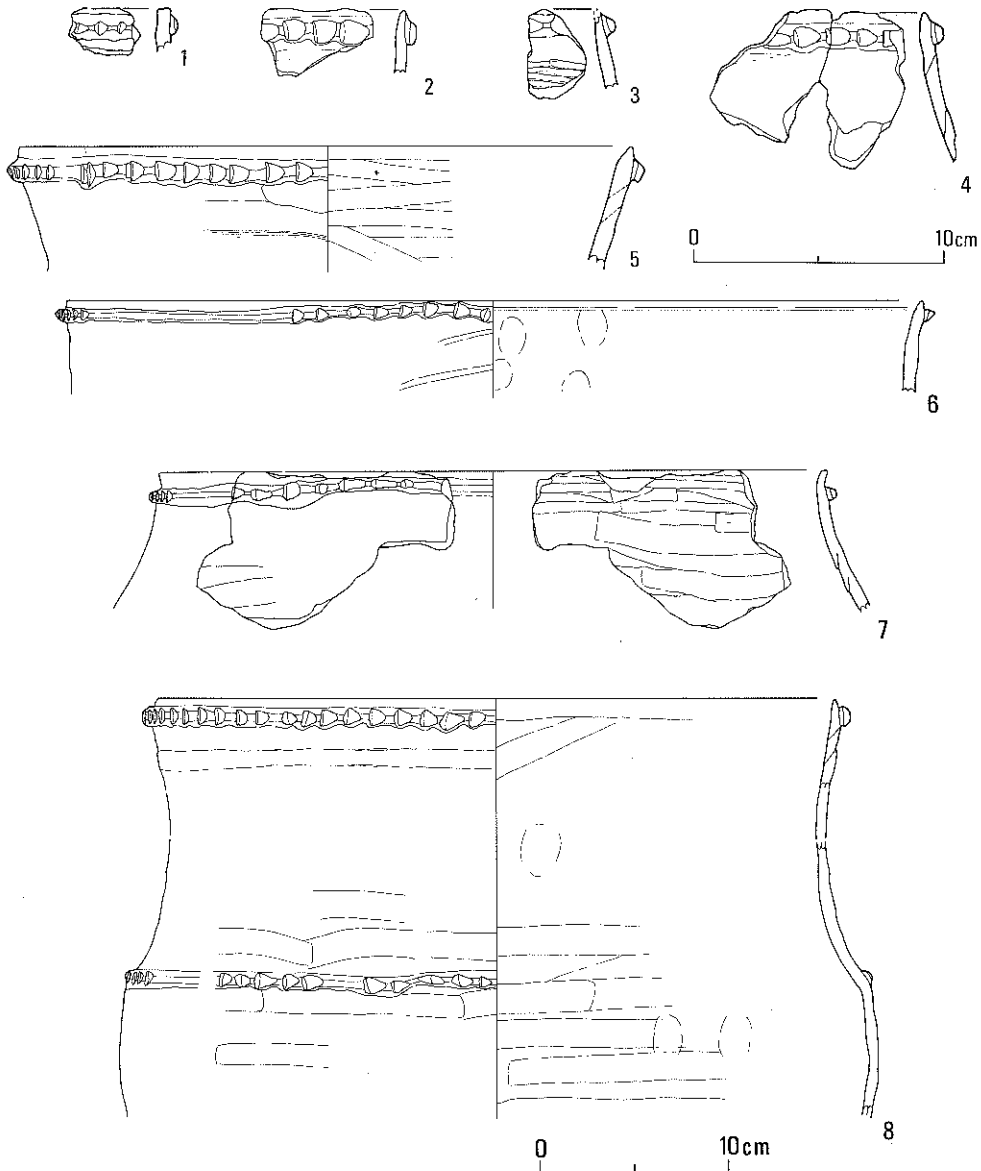
このように、口頸部のくびれがなくなってくるのは家根氏編年の長原式に多い。

〔形態C〕 口縁部は直線的に立ち上がり、口縁部と体部の径がほぼ同じもの(SK01—21、SK02—15)。

これらは家根氏編年の長原式の典型である。

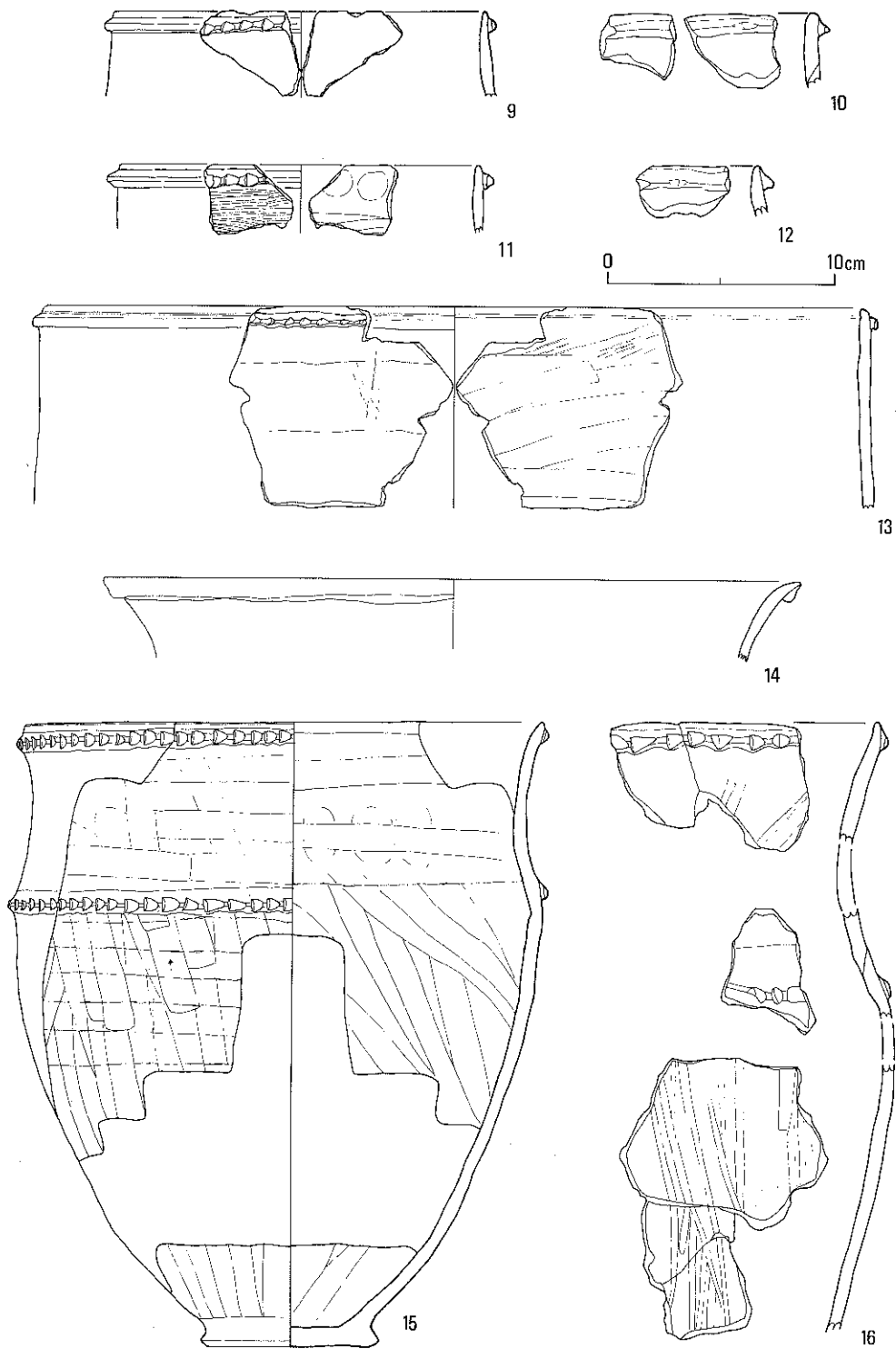
〔形態D〕 肩部でのくびれがなく、直線的にのびる器形(SK01-13)。

このような形態で一条凸帯をもつものは大阪市長原遺跡、藤井寺市船橋遺跡や堺市鈴の宮遺跡などの河内地域およびその周辺ではあまりみられない。形態Dはむしろ、奈良県天理市前栽遺跡、天理市和爾森本遺跡、高市郡明日香村稲淵ムカンダ遺跡などの大和地域で見られる。これらの遺跡出土の土器は形態だけでなく、原体の違いはあるものの外面に縦方向の調整を施す点でも同種である。

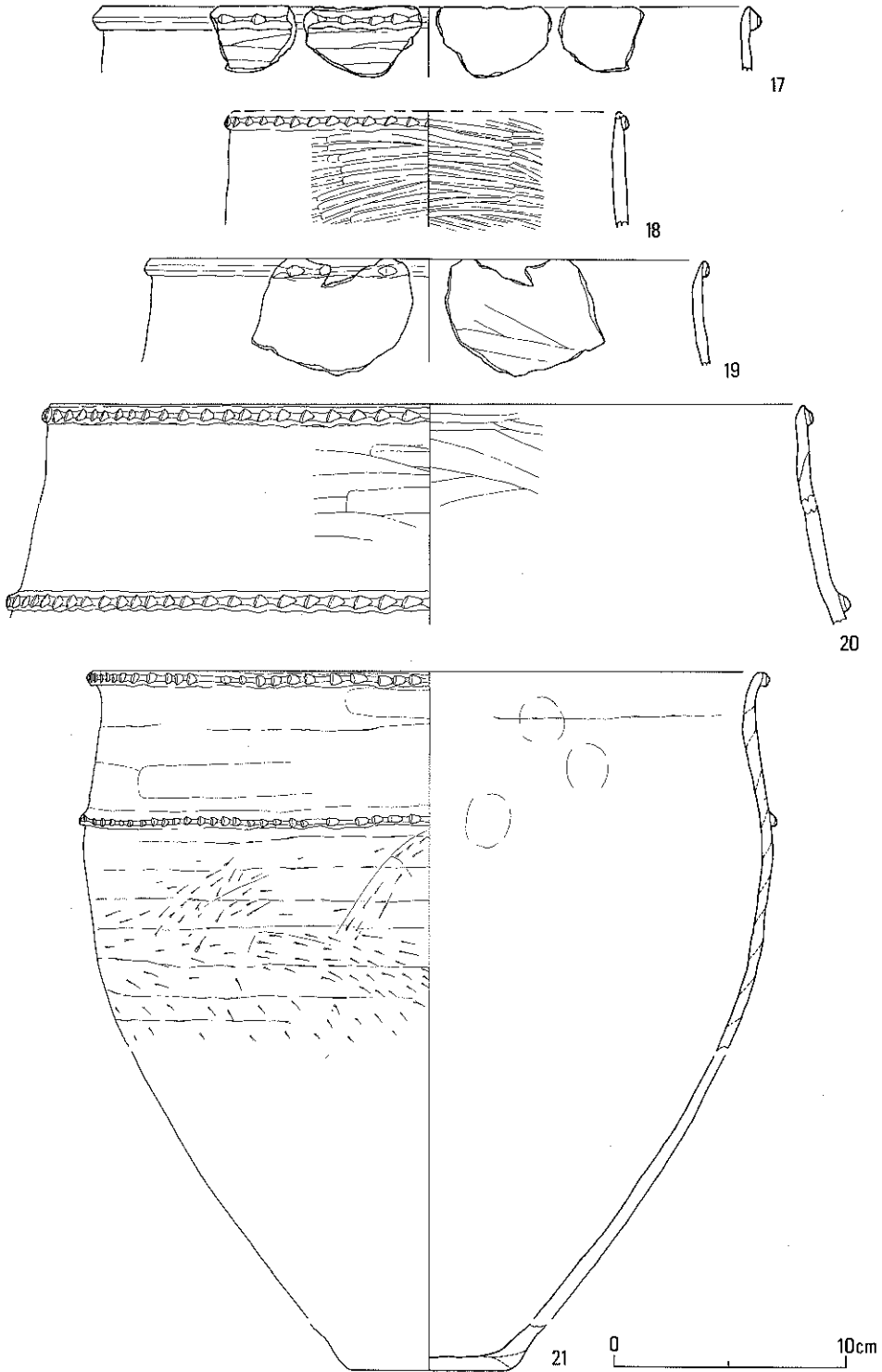


第10図 SK01 出土縄文土器実測図 (1)

IV. 寺界道遺跡発掘調査概要



第11図 SK01出土縄文土器実測図 (2)



第12図 SK01 出土縄文土器実測図 (3)

IV. 寺界道遺跡発掘調査概要

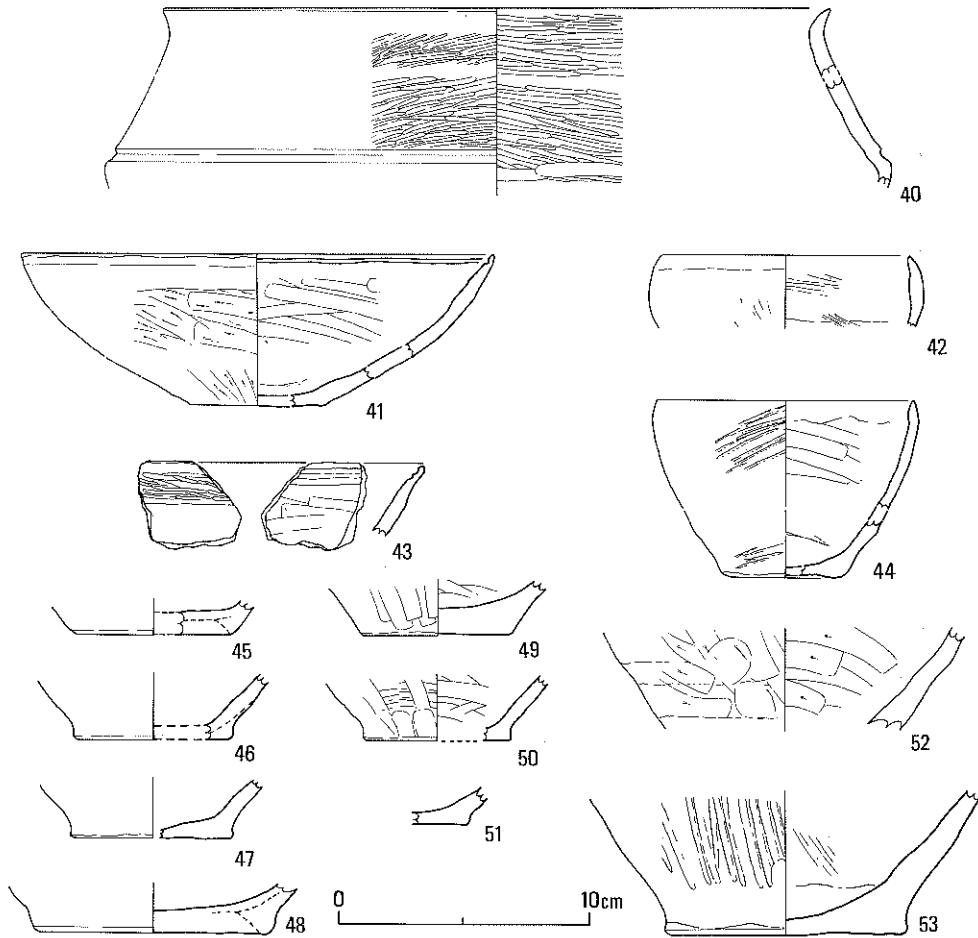


第13図 SK01 出土縄文土器実測図 (4)

SK01-13は上記の大和地域の諸例に比べて、内面に沈線をもち、外面調整が顕著でない点でやや異なる。

(形態E) 口縁部が内傾気味に立ち上がり、肩部から体部へはゆるやかに移行するもの。一条凸帯をもつものである(SK02-1)。

このような一条凸帯をもつものは滋賀県彦根市福満遺跡に比較的多く存在する。これらの形態は河内地域などにもある。しかし、当遺跡のSK02-1は体部外面を二枚貝もしくは同様に明瞭な条をもつ工具で調整する点で異なる。したがって、形態や調整などから考えると近江地域との関係が深いのかもしれない。



第14図 SK01 出土縄文土器実測図 (5)

〔形態F〕 内湾する口縁部をもつもの(SK02-4・8~10)。

形態Fは凸帯文期の一般的形態で、長原遺跡、鈴の宮遺跡、福満遺跡などで、二条凸帯あるいは一条凸帯の土器に少量伴う。

なお、形態別分類の構成比率は第2表の通りである。ただし、この数値は器形判別可能な個体を対象としている。

浅鉢形土器

浅鉢形土器は下記に分類できる。

〔形態1〕 肩部で「く」字に屈曲し、口縁部で外反する大形のもの(SK01-40)。

〔形態2〕 皿形を呈し、無文のもの(SK02-24)。

〔形態3〕 皿形を呈し、内面に沈線を有するもの(SK01-41・43)。

41は外面を削るのに対して、43は外面を磨く点で異なる。

IV. 寺界道遺跡発掘調査概要

第2表 深鉢形土器形態別分類表

形態	SK01	SK02	計
A	4 (28.6%)	1 (10%)	5 (20.8%)
B	8 (57.2%)	3 (30%)	11 (45.8%)
C	1 (7.1%)	1 (10%)	2 (8.3%)
D	1 (7.1%)	0 (0%)	1 (4.2%)
E	0 (0%)	1 (10%)	1 (4.2%)
F	0 (0%)	4 (40%)	4 (16.7%)
計	14 (100%)	10 (100%)	24 (100%)

第3表 浅鉢形土器形態別分類表

形態	SK01	SK02	計
1	1 (20%)	0 (0%)	1 (14.3%)
2	0 (0%)	1 (50%)	1 (14.3%)
3	2 (40%)	0 (0%)	2 (28.5%)
4	2 (40%)	1 (50%)	3 (42.9%)
計	5 (100%)	2 (100%)	7 (100%)

器の可能性はある。しかし、外面に縦方向のヘラ状工具による条痕があることを考えると、断定できない。SK01-48はいわゆる生駒西麓産の胎土を有するものである。なお、当遺跡では生駒西麓産の胎土をもつ口縁部片は一片も出土していない。

〔B類〕 平底で底部側面が突出しないもの(SK01-45・49、SK02-21)。

SK02-21は底部から大きく開きながら体部に移行すると推定されることから、浅鉢形土器の底部であろう。

(技法の観察)

貼り付け技法

家根氏は「縄文土器から弥生土器^{註7}へ」の中で、「滋賀里IV式における口縁部調整、口縁端部の面取り、突帯の貼り付け、口縁端部の刻目施文、突帯上の刻目の施文が船橋式では口縁端部の面取りと刻目の施文が消えて3工程になり、長原式では口縁端部の調整とが一つの工程に収斂して2工程となるのである。」と述べられている。このように氏は口縁部凸帯の貼り付け、口縁端部の調整にいたる一連の工程が型式の時間的側面を決めるのに最も重要であると考えられている。当遺跡の貼り付け技法をみた場合、下記の通りになる。

〔1〕 凸帯上下端を丁寧に撫でて貼り付けるもの。断面形は三角形もしくは台形を呈する(SK01

〔形態4〕 形態2・3に比べて口径に対して、器高の占める割合が高く、ボール状あるいは碗形を呈する(SK01-42・44、SK02-23)。

SK01-42・44は小形で外面を削ったり、粗い条痕があるのに対して、SK02-23は大形で丁寧に磨く。

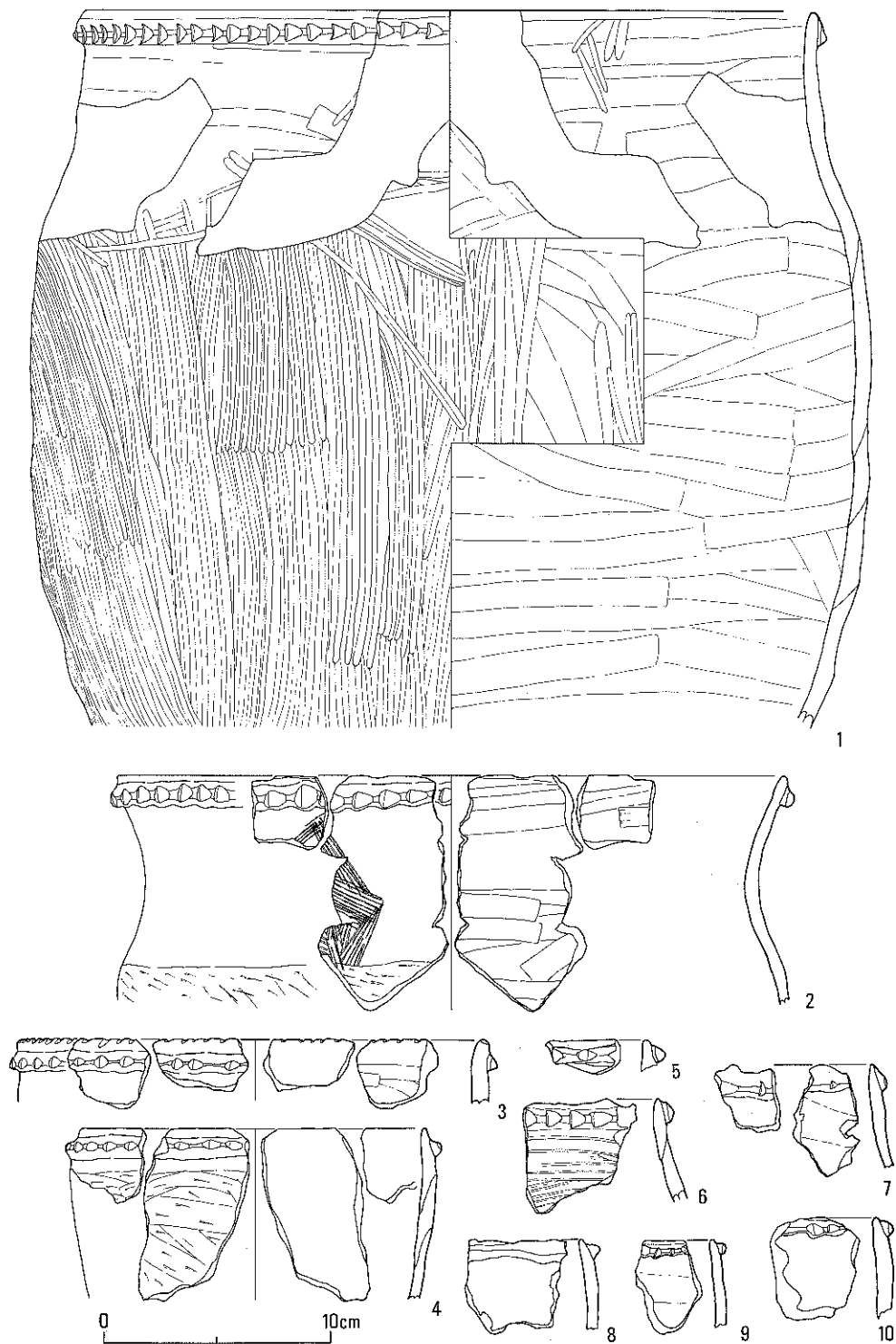
形態分類の構成比率は第3表の通りである。

底部

底部は下記に分類できる。

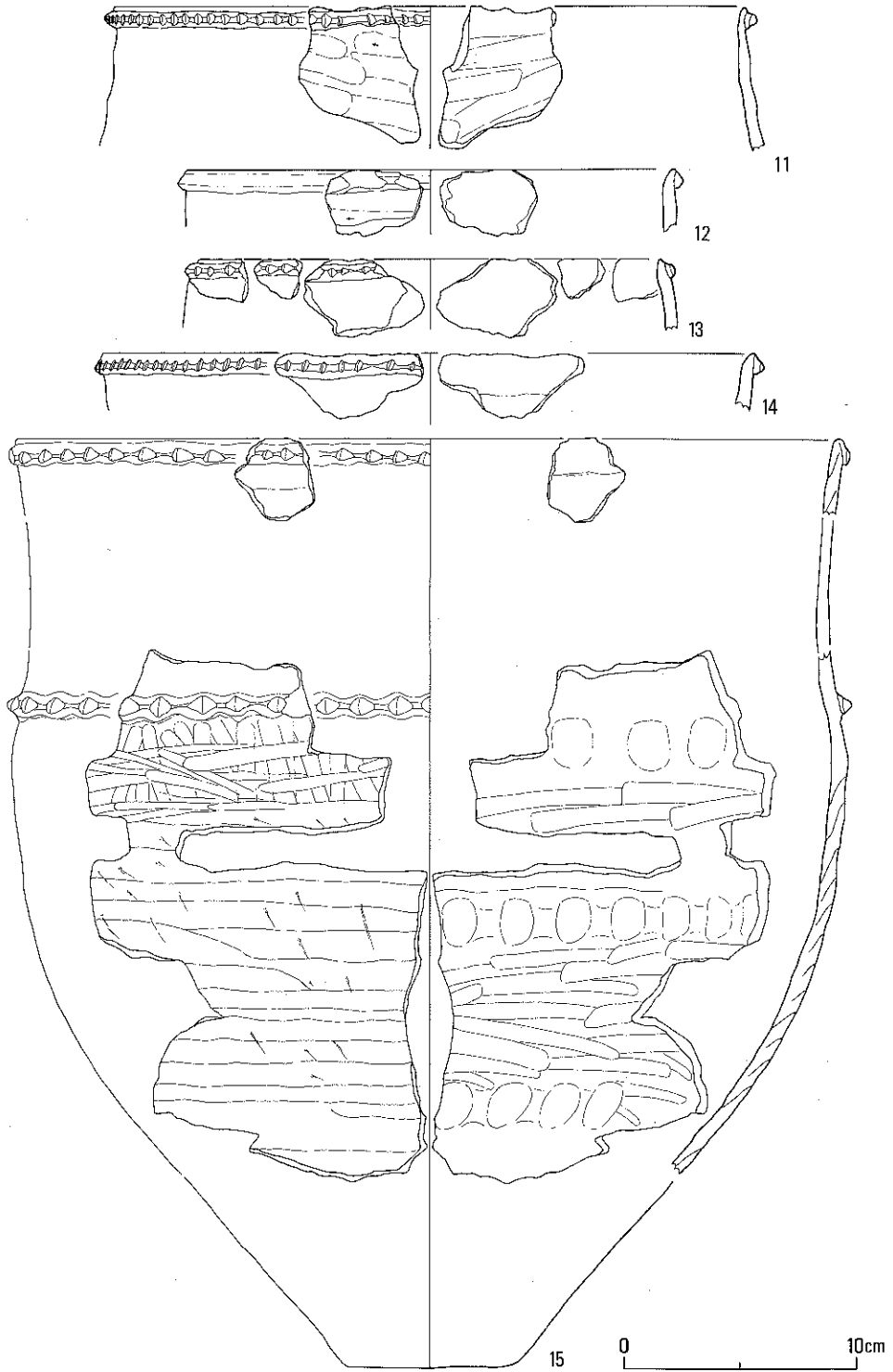
〔A類〕 底部側面が外方にやや突出する平底(SK01-46~48・50・51・53、SK02-25)。

SK01-53は底径9.3cmと大きく、他の底部と比べて器壁も厚いことなどを考えると畿内第I様式の壺形土

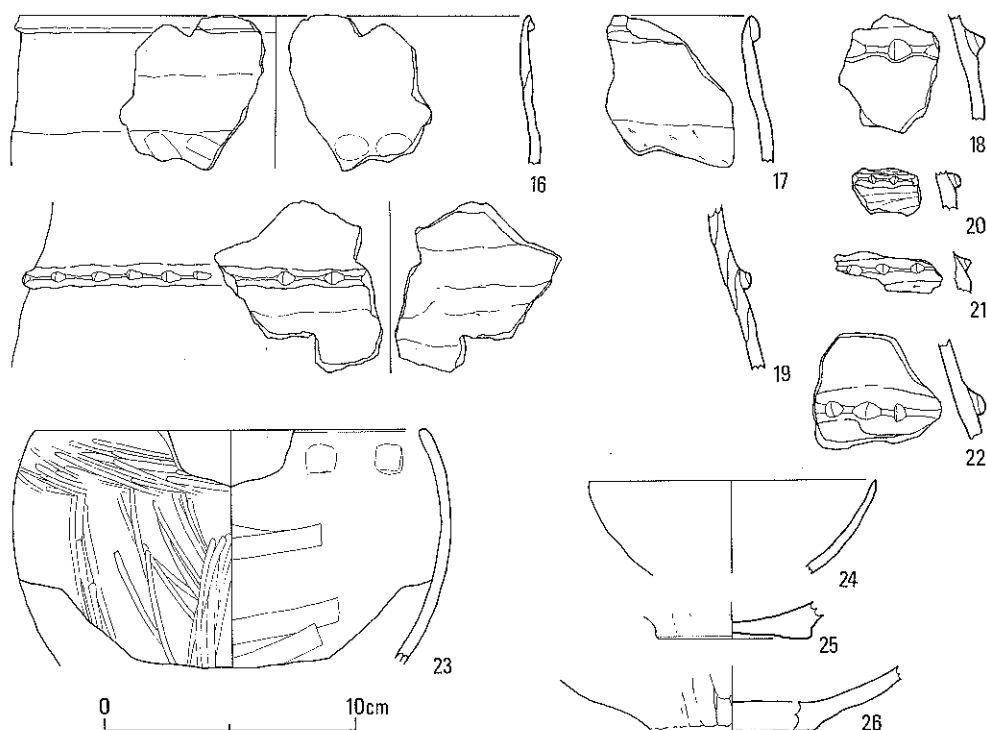


第15図 SK02 出土縄文土器実測図 (1)

IV. 寺界道遺跡発掘調査概要



第16図 SK02 出土縄文土器実測図 (2)



第17図 SK02 出土縄文土器実測図 (3)

—1・4・6～8・27・29、SK02—3・4)。

(2) 凸帯上端と口縁部内面を同時に撫でて貼り付けるもの(SK01—16と1で述べた6個を除いたものが相当する)。

(3) 口縁端部に被さるように貼り付けるもの(SK01—16)。

なお、SK01—8・27に関しては凸帯上端を指ナデの可能性も否定できないが、比較的シャープな面を持つことからヘラ状工具によるナデと思われる。以上のことから、当遺跡の貼り付け技法は2が圧倒的に多く、口縁部凸帯の位置による分類のI類～IV類までを含む。家根氏が述べられた凸帯上下端を挟んで凸帯を貼り付けるものは、口縁端部よりやや下がった位置につく。これらは古い様相として捉えられており、この傾向は当遺跡でもみられる。しかし、口縁端部よりやや下がった位置に凸帯がつく例でも、2の貼り付け技法をもつものも存在する。

刻目

- (A) ヘラ状原体を垂直に立てて刻むもの。刻目はV字を呈する。
- (B) ヘラ状原体をねかせて凸帯に刻むもの。刻目はD字を呈する。
- (C) ヘラ状原体をすべらせて凸帯に刻むもの。刻目はO字を呈する。

IV. 寺界道遺跡発掘調査概要

当遺跡ではBに相当する刻目が圧倒的に多い。口縁部凸帯刻目ではSK01(23個体中20個体で87.0%)、SK02(13個体中9個体で69.2%)をそれぞれ占めている。

調整

器面内外面の調整には削り、ナデ、磨きをもちいている。ナデには指ナデ、板ナデ、各種原体によるナデ(条痕が残るもの)がある。

長原遺跡などの河内地域では、ナデは深鉢形土器の口縁部内面や口頸部調整にもちいられる。それに加えて、当遺跡では深鉢形土器の体部調整としても比較的多用される。SK01-8・15・16がこれに相当する。また、家根氏編年という長原式に相当するSK01-13、SK02-15などにも、体部凸帯直下4cm程度の幅で指ナデあるいはヘラナデを行っている。このようにみていくと、河内地域と比べて体部にナデ調整を多用することが当遺跡の1つの特徴であるといえる。

福満遺跡の概報によれば、福満遺跡の深鉢形土器も体部を比較的ナデ調整をしていることを考えれば、このような調整は近江地域から当地域に多いものかもしれない。類例の増加をまちたい。

板ナデ調整には、全く条が残らないもの、深く明瞭な条が残るもの、刷毛目状に残るものなど各種ある。SK01-18・39、SK02-1などの外面に認められる調整はいわゆる「二枚貝条痕」あるいはそれに類似するものである。磨き調整は浅鉢形土器の調整として用いられる。

このように晩期後半凸帯文期の調整は多種多様化している。今一度、調整具を明らかにし、製作技法との関係からこれらの調整を再検討する必要があるだろう。

器種構成

当遺跡の器種構成はSK01では深鉢形土器^{註8}84.9%に対して、浅鉢形土器15.1%、SK02では深鉢形土器89.5%、浅鉢形土器10.5%、全体では深鉢形土器86.5%、浅鉢形土器13.5%を占める(第4表)。このように深鉢形土器が80%以上を占める構成は凸帯文期に一般的である

従来、凸帯文期になると浅鉢形土器が減少するが、長原遺跡の^{註9}4.4%、鈴の宮遺跡の^{註10}6.7%や前栽遺跡の4.0%に比べて、当遺跡では多いと言える。どちらかといえば滋賀里遺跡の滋賀里IV~V式期の浅鉢・椀類17.5%に近いと言える。このように浅鉢形土器が多いのが当遺

跡の器種構成の上での特徴として考えられる。さらに、もう1つの特徴として壺形土器が欠落していることがあげられる。上述の4遺跡では滋賀里遺跡を除いて壺形土器の占める割合が浅鉢形土器の比率に近い。こ

第4表 器種構成表

器種	SK01	SK02	計
深鉢	17(89.5%)	28(84.9%)	45(86.5%)
浅鉢	2(10.5%)	5(15.1%)	7(13.5%)
計	19(100%)	33(100%)	52(100%)

のようなことから考えると器種構成のうえでは滋賀里遺跡の滋賀里Ⅳ～Ⅴ式期に近いと言える。

(2) 石器(第18～20図第5・6表)

(出土状態と石器組成)

今回の調査において出土した石器は、すべて縄文時代晩期後半に位置づけられる貯蔵穴の埋土に含まれていた。これらの石器群は、共伴の土器資料からみても程度の時期幅をもつものと考えられる。

石器は、石鏃・石錐・楔形石器・磨石・敲石などが20点出土した(第5表)。このうち石鏃が14点あり、全体の70.0%を占めている。本遺跡の石器組成の特徴である(第6表)。

以下、各石器について説明を行う。

石鏃(第18図)

未製品を含め14点出土した。大きさ・形態から4類に分ける。石材は全てサヌカイト。

〔Ⅰ類〕 長さ2cmまでの小形品。平面形三角形をなすもの(2・3)と五角形状になるもの(1)がある。扱いはいずれもごく浅い。

〔Ⅱ類〕 細身で側縁がやや外湾する(4)。5も同類であろう。

〔Ⅲ類〕 長身で側縁下部を段状に加工し、先端部を極細にする(7)。6も同類であろう。

〔Ⅳ類〕 長さ2.5～2.8cmの大形品(8・9)。9はⅡ類と同様に外縁がやや外湾するが、やや幅広で扱ひも深い。また先端部、脚端部は尖る。10は風化が著しい点で他例とは異なる。サヌカイトの質の差によるものかもしれない。

その他、未製品(10・14)、先端部片(11～13)がある。

敲石(第19図15)

磨製石斧の転用品。頭部を中心に磨製石斧製作時における成形のための敲打痕が残る。上面の刃部付近に磨面。刃部には敲石として使われた時の敲打痕が著しい。なお、断面形は楕円形を呈しており、幅に比べ長さが短くずんぐりした感がある。刃部を欠損した磨製石斧を再度利用して再び磨製石斧を作った後、敲石に転用したものと思われる。

磨石(第19図16)

約1/2を欠く。明瞭な使用痕は見られないが、出土状態、形状より磨石とする。

不明石器(第19図17)

上部を約1/3欠く。裏面に主剥離面を大きく残し、周辺部を粗い加工によって成形。さらに表面の大部分に磨痕が見える。

第5表 石器組成表

器種	点数	%
石鏃	14(2)	70.0
石錐	1	5.0
楔形石器	1	5.0
磨石	1	5.0
敲石	1	5.0
不明石器	1	5.0
その他	(1)	5.0
計	20	100.0

()は未製品数

IV. 寺界道遺跡発掘調査概要

第6表 石器一覧表

No.	器種	遺構	遺存状況	石材	長さ	幅	厚さ	重量
1	石 鏃	SK01	完 形	サヌカイト	1.4	1.0	0.3	0.3
2	石 鏃	SK01	完 形	サヌカイト	1.4	1.2	0.3	0.3
3	石 鏃	SK01	完 形	サヌカイト	1.9	1.3	0.4	0.7
4	石 鏃	SK01	完 形	サヌカイト	2.3	1.1	0.3	0.8
5	石 鏃	SK01	1/3 欠	サヌカイト	(1.5)	1.2	0.3	(0.5)
6	石 鏃	SK01	1/2 欠	サヌカイト	(1.2)	(1.2)	0.3	(0.5)
7	石 鏃	SK01	完 形	サヌカイト	2.4	1.5	0.4	0.9
8	石 鏃	SK01	完 形	サヌカイト	2.5	1.7	0.4	1.1
9	石 鏃	SK01	完 形	サヌカイト	2.8	1.7	0.5	1.7
10	石 鏃	SK01	未製品	サヌカイト	2.5	1.4	0.3	1.2
11	石 鏃	SK01	先端部片	サヌカイト	(0.8)	(1.1)	0.3	(0.2)
12	石 鏃	SK01	先端部片	サヌカイト	(1.1)	(0.7)	(0.2)	(0.2)
13	石 鏃	SK01	1/3 欠	サヌカイト	(2.0)	(1.4)	0.3	(0.9)
14	石 鏃	SK01	未製品	サヌカイト	(3.1)	(1.7)	0.4	(2.1)
15	磨 石	SK02	1/2 欠	花崗岩	(6.0)	8.5	4.3	(380)
16	敲 石	SK01	完 形	砂岩?	9.2	5.6	3.9	277
17	不 明	SK01	1/3 欠	粘板岩	(8.9)	4.2	1.0	44.8
18	不 明	SK01	未製品	サヌカイト	5.6	2.7	0.5	7.5
19	石 錐	SK01	1/3 欠	サヌカイト	(4.3)	(0.9)	(0.8)	(2.7)
20	楔形石器	SK01	一部片	サヌカイト	(2.5)	(3.0)	0.5	(4.5)

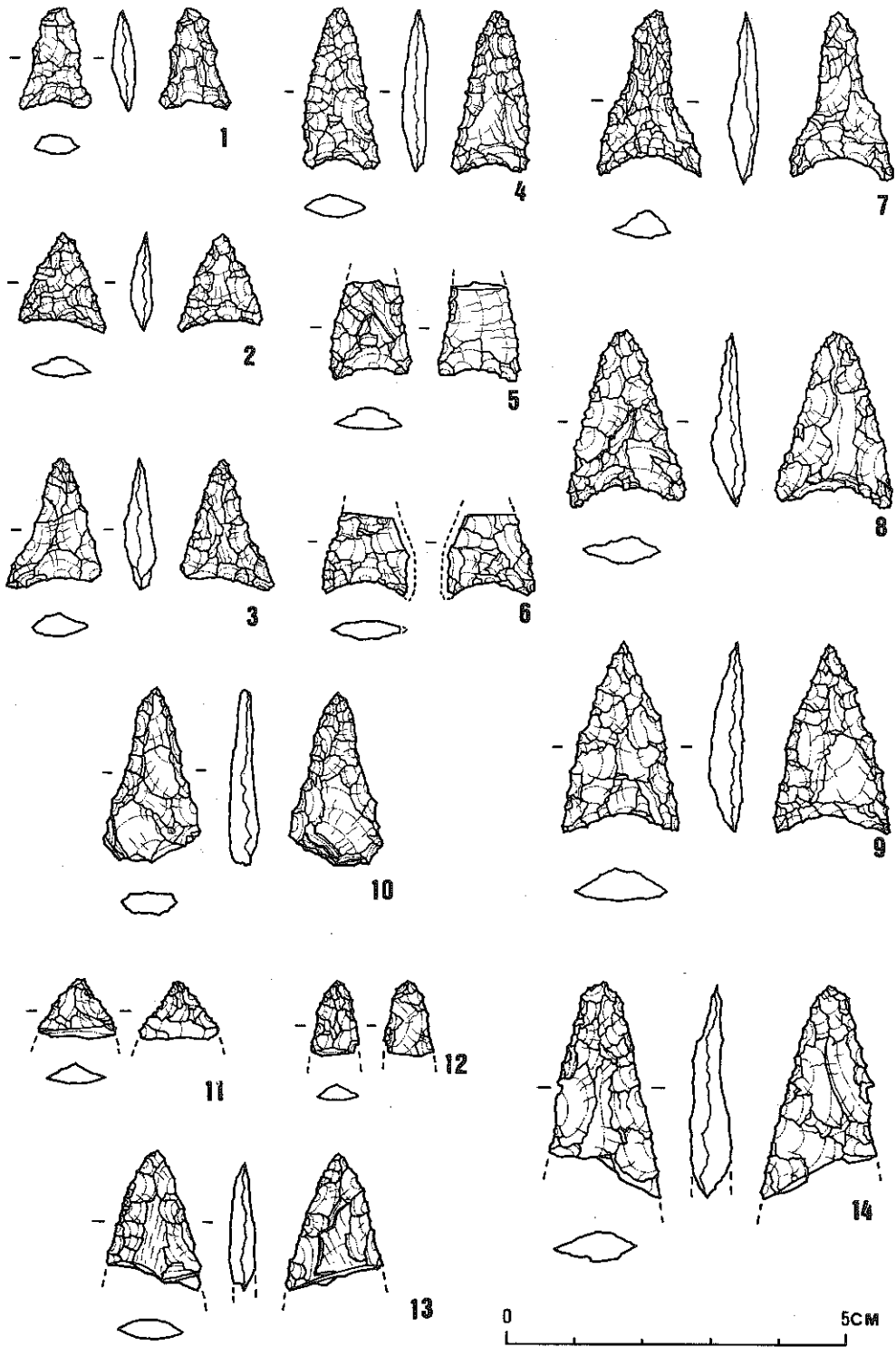
(単位は cm、g。()は現存値)

一部では面取り状に磨面が形成されている部分もある。明らかに意図的に磨ったものであろう。石材は質の悪い粘板岩を用いている。

この石器の器種については、石刃・石剣・磨製石斧などの未製品とも考えられるが、石質がよくないこと、使用時に剥離したと思われる剥離痕が下端部両面に認められるなど、下端部を刃部とする打製石斧的な機能をもっていたものとも考えられる。

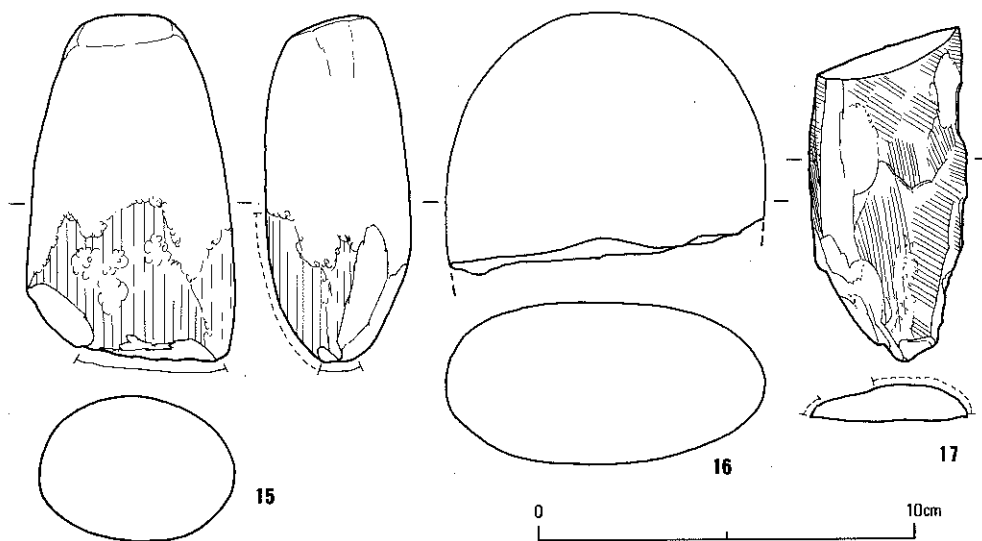
その他(第20図)

18は未製品であるが器種は不明。横長の剥片の一方を両面から調整し、石鏃状の先端部を作り出している。

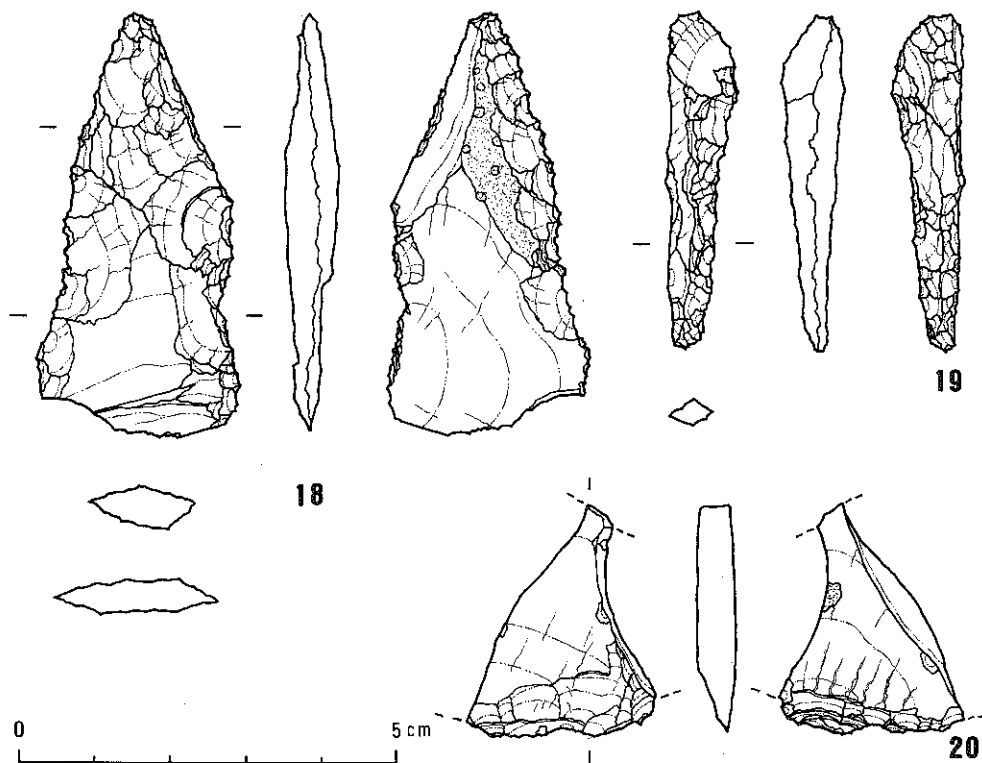


第18图 石器实测图 (1)

IV. 寺界道遺跡発掘調査概要



第19図 石器実測図 (2)



第20図 石器実測図 (3)

19は、残存長4.3cmを測る石錐である。直径は約0.5cm、つまみ部を欠く。比較的粗い剥離によって調整をしており、一部に素材の剥離面を残す。

20は楔形石器であろう。石材はいずれもサヌカイトである。

2 古墳時代以降の遺物(第21~28図)

古墳時代以降の遺物は、須恵器・土師器などの土器類を中心に少量の陶硯と鉄器がある。土器類はいずれも破片化しており、全形を窺えるものは少ない。時期的には、古墳時代後期から平安時代初頭に及ぶが、量的には古墳時代後期と奈良時代のものが多く、他は比較的少ない。

(1) 土器(第21~26図)

SK03 出土の土器 土師器の鉢・甕、須恵器の杯蓋がある。1は須恵器の杯蓋である。口径14.3cm。5は土師器の鉢である。口径20.8cmを測る片口の鉢である。底部内面には粗いハケ調整を施す。外面は風化が著しく不明。2~4は土師器の甕である。2・4は球形状の体部に短く立ちあがる口縁部をもつ丸底の小型甕である。4は内面にヨコハケ、外面にハケ調整を施す。口径13.4cm。3は「く」の字に外反する口縁部をもつ甕である。調整は体部内外面ともハケ調整を施す。これらの土器は一括で出土した。

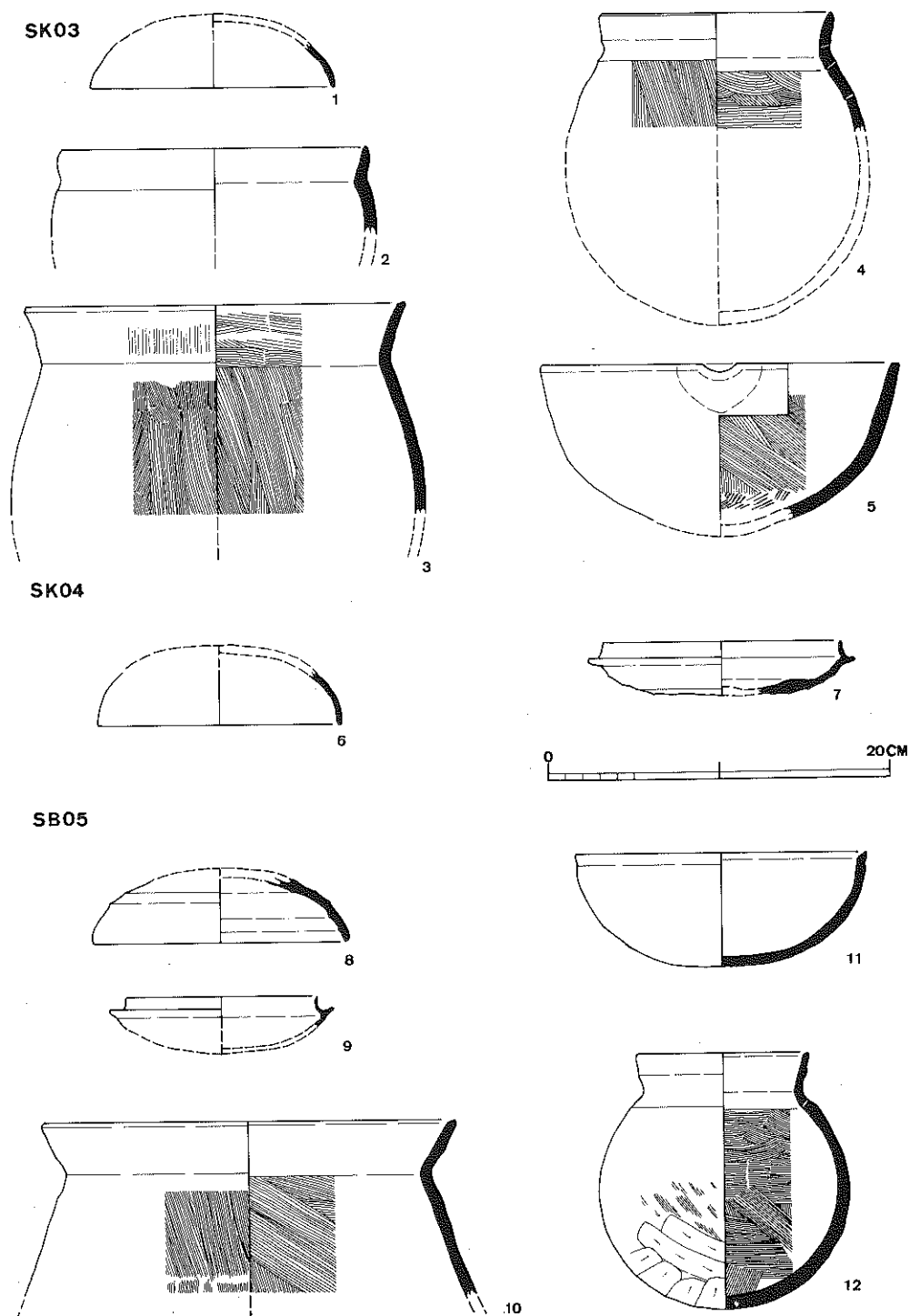
SK04 出土の土器 土師器細片、須恵器の杯・杯蓋・甕がある。土師器は細片のうえ風化が著しく全形の窺えるものはない。7は須恵器の杯である。底部外面はロクロケズリを施す。口径13.8cm、器高3.1cmを測る。

SB05 出土の土器 土師器の杯・甕、須恵器の杯・杯蓋がある。8は須恵器の杯蓋である。天井部外面はロクロケズリを施す。口径14.6cm。9は須恵器の杯である。受け部・立ちあがり部は退化し口径も11.2cmと小型である。古墳時代の伝統的な杯の末期的形式である。11は土師器の杯である。風化が著しく調整は不明である。形態的に、坂田寺跡の池SG100出土の杯C註11に類似する。10・12は土師器の甕である。12は小型の甕である。体部外面にハケ調整を施したのち、下半以下に手持ちヘラケズリを施す。口径10.0cm。器高14.7cmを測る。体部外面は、2次の加熱を受けた際に見られる色調の変化と剥離現象を呈す。9・11は概ね7世紀前半に比定できるものであり、そのほかのものは、概ね7世紀前後に比定できるものである。

SB08 出土の土器 土師器細片、須恵器の杯・杯蓋がある。13は須恵器の杯蓋である。口縁端部は内傾する凹面をなす。口径14.0cm。14は須恵器の杯である。体部外面はロクロケズリを施す。口径11.8cm、器高4.2cmを測る。遺構検出面より出土した完形品である。概ね7世紀前後に比定できるものである。

SK09 出土の土器 土師器の甕、須恵器の杯・壺がある。15は須恵器の杯である。底部外面

IV. 寺界道遺跡発掘調査概要



第21図 古墳時代以降の土器実測図 (1)

はロクロケズリを施す。口径12.2cm、器高3.5cm。16～18は土師器の甕である。16は小型の甕で2次的加熱を受けた痕跡をもつ。18は体部内面にヨコハケ、外面にハケ調整を施す。

SX11 出土の土器 土師器の甕、須恵器の杯蓋・壺がある。19は須恵器の杯蓋である。口縁端部は内傾する凹面をなす。口径16.4cm。20は須恵器の壺の脚部片である。2段に屈曲する高い脚台で2段3方透しをもつものである。長頸壺の脚部と思われる。21は土師器の甕である。内面にヨコハケ、外面にハケ調整を施す。口径25.0cm。SX11からは、21のほかに土師器の甕が数個体分一括して出土している。中には2次的加熱を受けた痕跡やススの付着がみられるものもある。19・20は概ね6世紀後半に比定できるものである。

SB35 出土の土器 掘立柱建物 SB35の柱穴より、土師器細片、須恵器の杯・杯蓋・提瓶が出土している。いずれも細片のため図示しえなかった。提瓶は、体部側面の同心円文様及び肩部の把手接合部が明瞭に残る。概ね7世紀前後に比定できるものである。

SK41 出土の土器 土師器の甕細片のほか、羽釜(25)がある。25は、円筒状の体部と口縁部直下に鐔を貼り付けるものである。体部外面にはハケ調整痕を残す。概ね平安時代初頭(9世紀代)のものと思われる。

SK101 出土の土器 土師器細片、須恵器の杯・杯蓋・鉢・壺・甕がある。土師器は細片のうえ風化が著しく全形の窺えるものはない。28～30は須恵器の杯蓋である。内面のかえりは消失し折り返しただけの口縁部に、扁平した宝珠様のつまみが付くものである。33～41は須恵器の杯である。33～38は平底のものである。底部外面は不調整ヘラ起し痕を残す。口径12～14cm、器高3～4cmを測る。41は外側に開く高台をもつ。この形式の初期段階の特徴をもつものである。45・46は須恵器の長頸壺の体部である。45は、櫛書き列点文を施し比較的なで肩の肩部をもつものである。46は、肩部と体部との境が稜をなすもので、形式的に若干新しい。44は須恵器の鉢の底部である。底部外面は不調整指圧痕を残す。バケツ状のものと思われる。42・43は、須恵器の甕の口縁部である。端部において上方につまみあげるものである。26・27・31・32は古墳時代のもので概ね6世紀代のものである。混入品であると思われる。28・29・36・41・45は概ね7世紀後半に比定できるものであり、そのほかの土器は概ね8世紀前半に比定できるものである。

SK102 出土の土器 土師器細片、須恵器の杯がある。55は須恵器の杯である。口径9.0cm、器高2.9cm。古墳時代の伝統的な杯の末期形式である。概ね7世紀前半に比定できる。

SK106 出土の土器 土師器の皿・甕・甗、須恵器の杯・杯蓋・高杯・壺がある。47～51は須恵器の杯・杯蓋である。形式的に数タイプ認められる。53は須恵器の壺の脚部片である。2段に屈曲する高い脚台のもので、長頸壺の脚部と思われる。52は土師器の皿である。口縁部はヨコナデを施す。底部外面は不調整で粘土紐痕・指圧痕が残る。54は土師器の甗である。

IV. 寺界道遺跡発掘調査概要

SB08



13

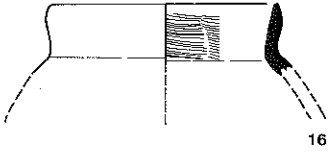


14

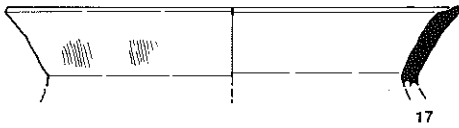
SK09



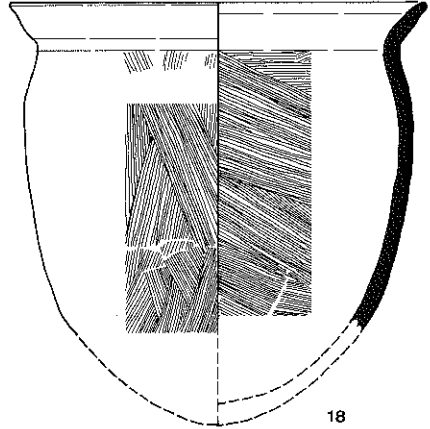
15



16

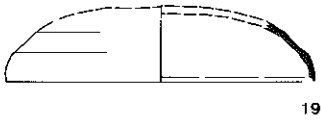


17

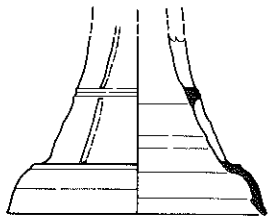


18

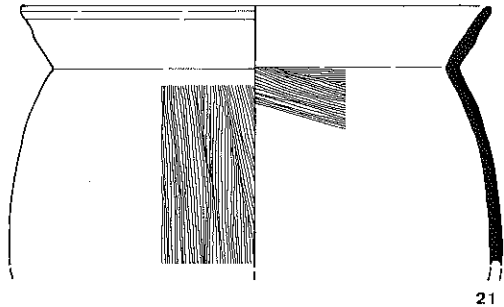
SX11



19



20



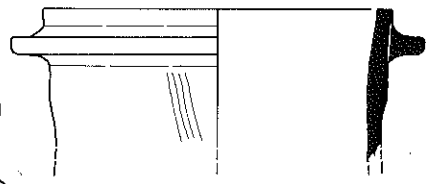
21

SK39



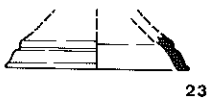
22

SK41



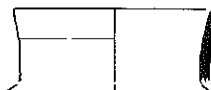
25

SK26

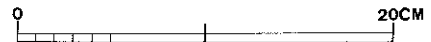


23

SK10



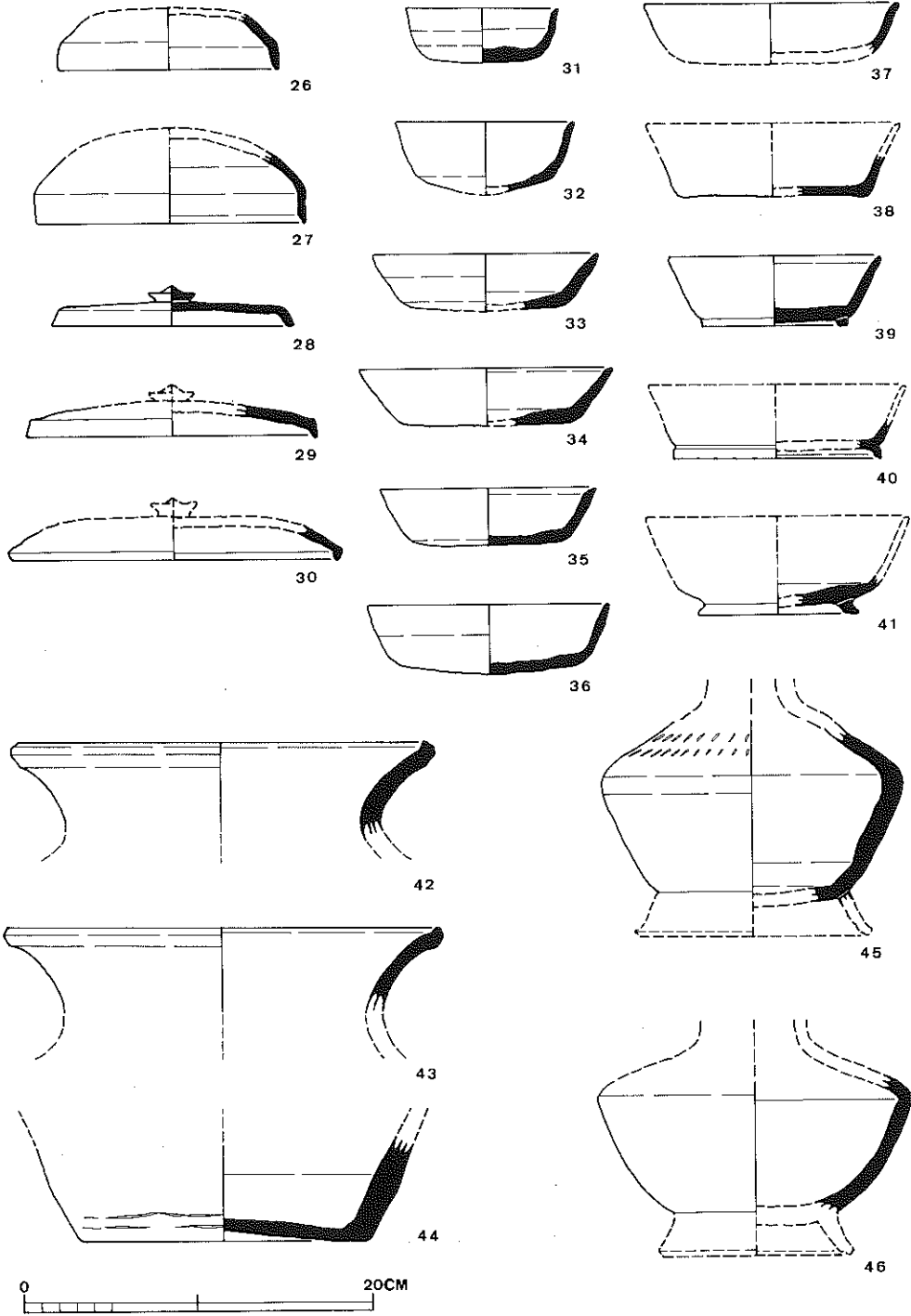
24



20CM

第22図 古墳時代以降の土器実測図 (2)

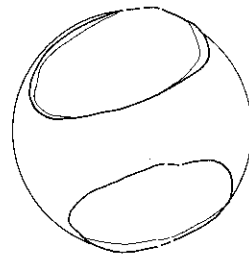
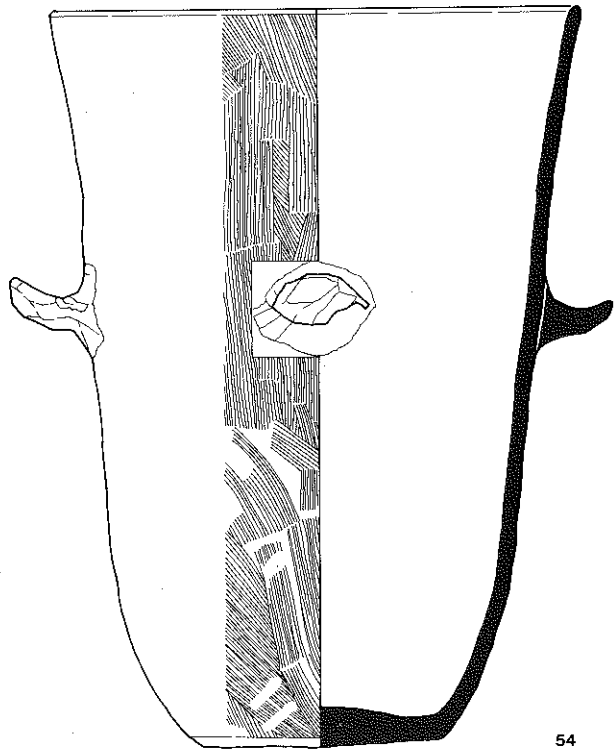
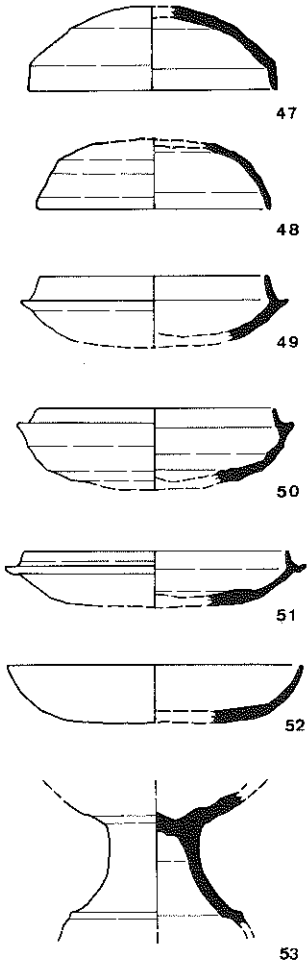
SK101



第23図 古墳時代以降の土器実測図 (3)

IV. 寺界道遺跡発掘調査概要

SK106



SK102



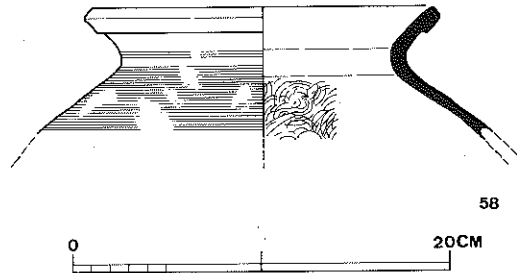
SB104



SK129

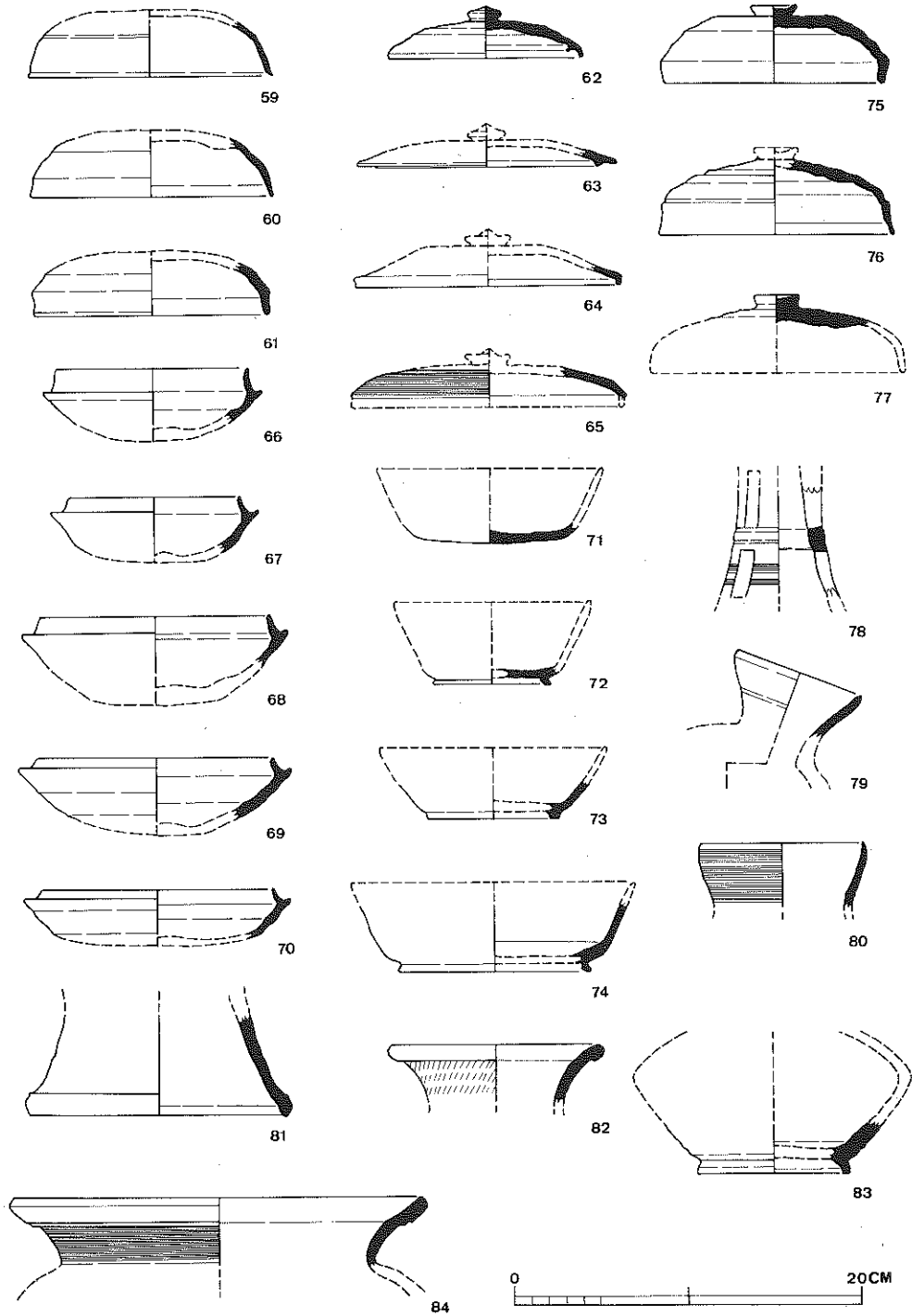


SK107



第24図 古墳時代以降の土器実測図 (4)

遺物包含層



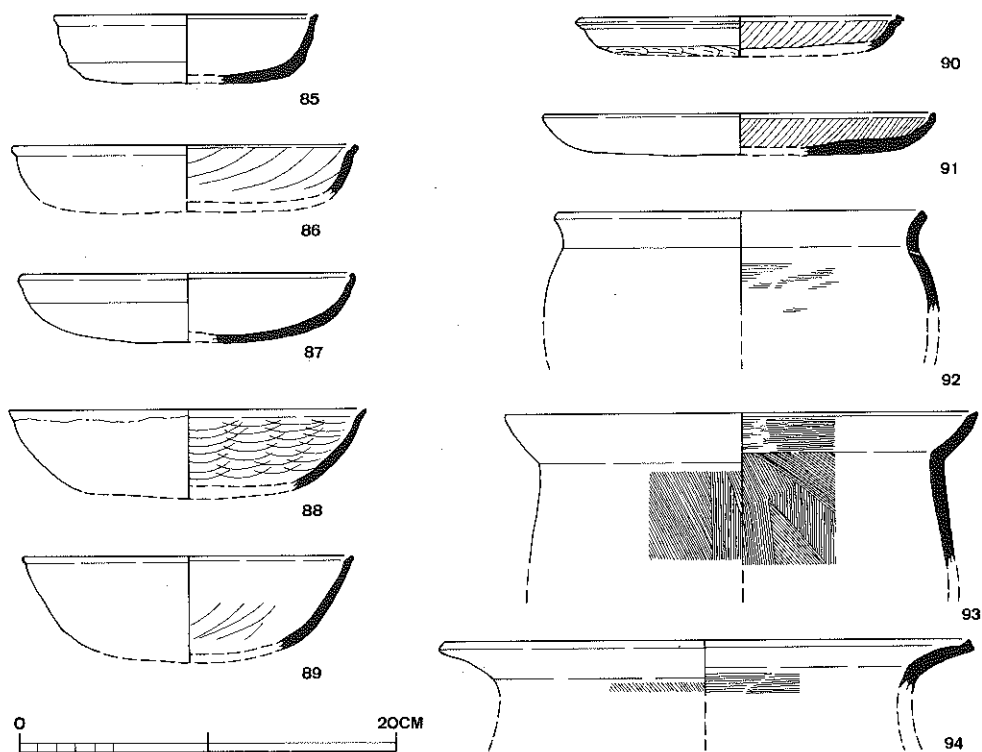
第25図 古墳時代以降の土器実測図 (5)

IV. 寺界道遺跡発掘調査概要

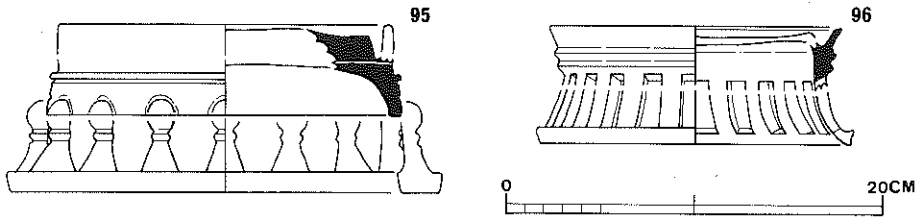
円筒状の体部の外面中位に、扁平化した一対の把手を貼り付けたものである。底部には長円形の蒸気孔を2箇所穿つ。体部外面はハケ調整を底部外面はナデを施す。体部内面は一部タテ方向の強いナデと指圧痕を認める。口径27.6cm、器高39.0cm。土器の大半が甌を中心に一括で出土した。これらの土器は、概ね6世紀後半を中心とした時期に比定できるものである。

遺物包含層出土の土器 土師器の杯・皿・椀・甕・羽釜、須恵器の杯・杯蓋・高杯・壺・平瓶・提瓶・甕のほか、黒色土器の杯がある。59～63は須恵器の杯蓋である。形式的に数タイプ認められる。62は口縁部内面にかえりをもつもので、この形式の杯蓋としては古いものである。口径11.0cm、器高2.9cm。64・65は須恵器の杯蓋である。65は天井部と口縁端との境に1条の沈線をもつものである。天井部外面にはカキ目調整痕を残す。71～74は須恵器の杯である。83は須恵器の壺の底部である。貼り付け高台をもつものである。85～87は土師器の杯である。86は口縁端部が内側に巻き込んで丸く肥厚するものである。内面に粗い一段放射状暗文を施す。口径18.0cm。87は内湾気味の体部をもつもので、口縁端部は内側に折れ曲がる。底部外面は不調整。暗文はもたない。口径17.8cm、器高3.6cm。88は黒色土器の杯

遺物包含層



第26図 古墳時代以降の土器実測図 (6)



第27図 陶硯実測図

である。器壁の内面のみに炭素を吸着させた黒色土器A類の杯である。内面には丁寧なヘラミガキを施す。89は土師器の碗である。体部内面には粗い一段放射暗文を施す。口径17.4cm。90・91は土師器の皿である。90は2段に屈曲する口縁端部をもつものである。底部外面はヘラケズリを施す。口径16.8cm。91は口縁端部内面に沈線をもつものである。底部外面は不調整。口径20.6cm、器高2.1cm。両者とも内面に丁寧な一段放射暗文を施す。92・94は土師器の甕である。92は球形状の体部をもつものである。口径19.2cm。概ね9世紀後半に比定できるものである。93は土師器の甕である。長胴の体部をもつものである。体部内外面ともハケ調整。古墳時代に相当する土器としては、59～63・66～70・75～82等があり、これらは概ね6世紀後半がその中心となるものである。90・91は概ね8世紀初頭に、86・87・89は概ね8世紀前半にそれぞれ比定できる。

(2) 陶硯(第27図)

遺物包含層より、蹄脚円面硯(95)・圈脚円面硯(96)が1点ずつ出土している。

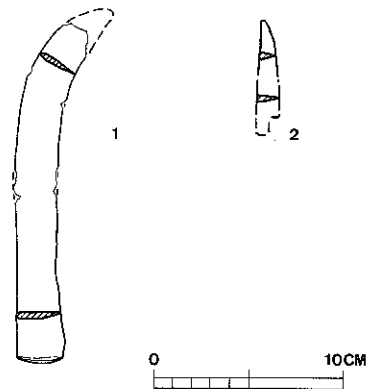
蹄脚円面硯(95) 硯部と台部を脚によって結合したものである。外提部を欠損した硯部破片である。陸部は海部より1段高く海陸の区別が明瞭なものである。外提下端には断面半球状の低い突帯が1条めぐり段をなす。硯部外面下端には脚頭上半部の剥離痕跡が残り、脚柱部は16脚に復元できる。胎土は粗く灰色硬質を呈す。調整は外面にロクロナデを施し、内面は不調整。硯面以外に自然釉が薄く付着する。

圈脚円面硯(96) 硯面を欠損した硯部破片である。外提は外上方に突出し端面は内傾する。外提下端には断面三角形の低い突帯を2条めぐらす。圈脚部には幅1cmの長方形透し孔を20個所穿つ。胎土は灰色硬質。調整は外面にロクロナデを施し、内面は不調整。

(3) 鉄製品(第28図)

今回の調査では、鉄鎌(1)1点と刀子片(2)1点が出土している。

鉄鎌(1) 残存長18.0cmの曲刃鎌である。刃先部は欠



第28図 鉄器実測図

IV. 寺界道遺跡発掘調査概要

損。刃部は基部から5cm程より始まり、残存刃部長13.0cm、刃身幅2.3cmを測る。基部末端はわずかな折り返しをもつ。竪穴住居SB05埋土より出土。

刀子(2) 刃部中央部及び基部は欠損。残存長4.5cm、刃身幅1.1cmを測る。刃部の断面形は三角形をなす。遺物包含層出土。

以上、出土遺物の概要を説明した。貯蔵穴SK01・SK02出土の縄文土器は比較的大きな破片を含んでいるものの、これらを接合しても本来の半分以上に復元できる個体は極く少ない。大半が4分の1以下にしか復元できない。土壌の埋没状況とこのような土器の状況から、SK01・SK02出土土器は、遺構の廃絶に伴い破損した土器を投棄したものである可能性が指摘できる。

また、古墳時代以降の土器では須恵器に比べて土師器の割合が少ない。これは、自然条件による器種別の遺存状態の良否によるものではなく、実態として少ないと考えてよい。

5. ま と め

前章までにおいて、調査地より検出した主な遺構・遺物についてその概要を述べた。以上、知見した遺構・遺物について若干の整理・検討を加えまとめとしたい。

1 縄文時代晩期

前章で、今回出土した土器・石器について分析を行った。最後にもう一度これらの遺物についての特徴をふまえて、縄文時代晩期後半期の本遺跡の状況についてまとめておく。

土器については、下記の特徴を挙げることができる。

- 1) 前記したように、器種組成において浅鉢形土器の占める割合が、長原遺跡や鈴の宮遺跡、前栽遺跡などの例に比べ多く、この率は滋賀里遺跡の滋賀里Ⅳ～Ⅴ式期のそれに近い。
- 2) SK01・SK02各々をみると、SK01においては二条凸帯をもつ深鉢形土器を主体とし、各種の浅鉢形土器が含まれているのに対して、SK02には一条凸帯が多く、浅鉢形土器も碗形を呈するもののみを含むなど、その構成において若干異なる。
- 3) 今回出土した土器群は、型式学的分類が可能であるが、それらを時間的前後関係に位置づけることはできなかった。

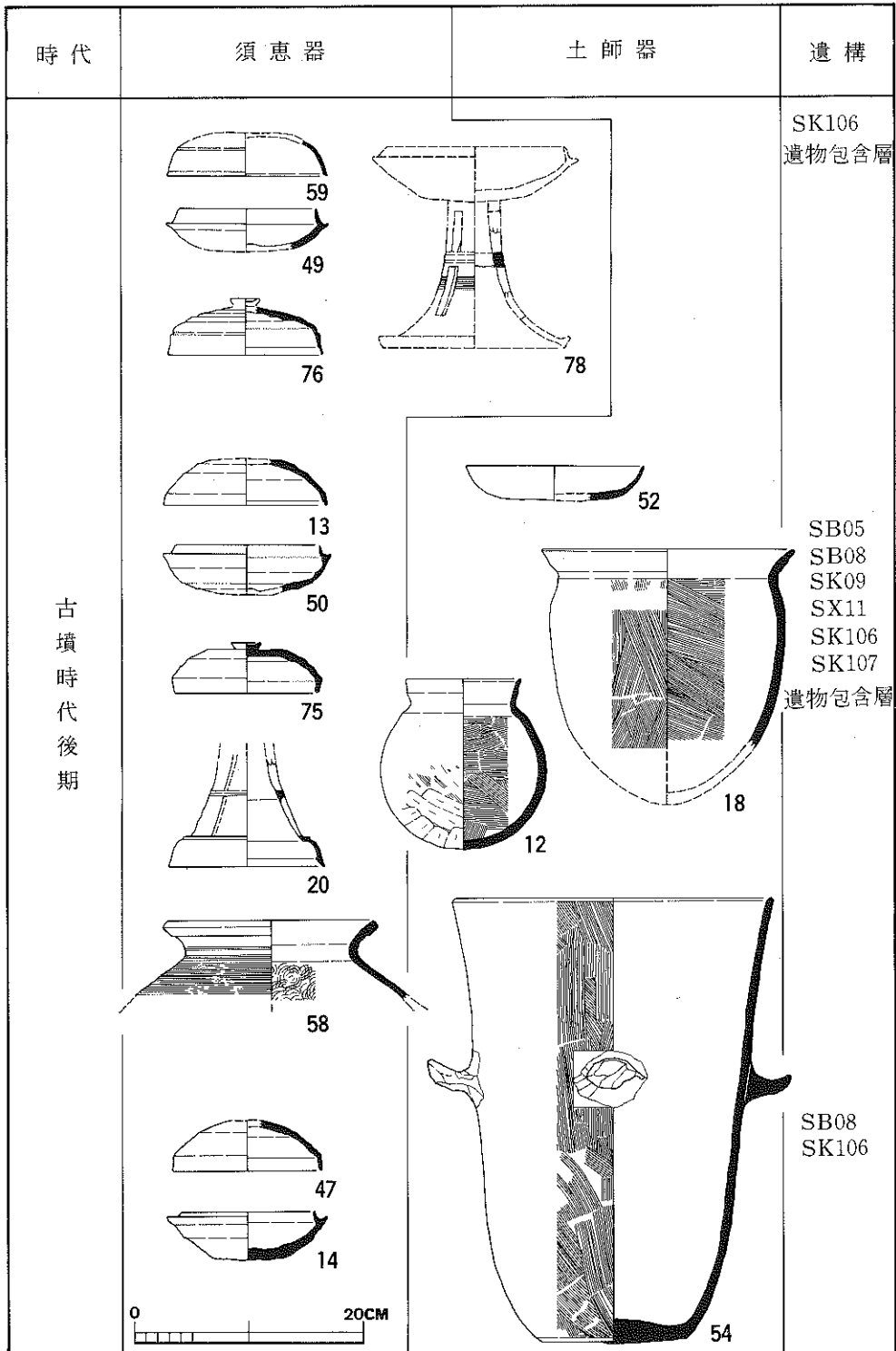
これらの土器群を従来の凸帯貼り付け技法などの検討を中心とした型式学的分類にあわせてみると、滋賀里Ⅳ式に含まれるものがわずかに認められるほか、船橋式とみられる例が数点程度あるが、大半が長原式的な凸帯貼り付け技法による凸帯形態をもっている。しかし、これらを器形などの点からみると単純に割り切れないことは、各類に含まれる器形のバラエティーをみれば明らかである。深鉢形土器のセット関係の中での位置づけを考える必要と、ともに、地域差の問題の検討も今後の課題となろう。

石器類については、前節で記したように石鏃の石器組成に占める割合が非常に高いことが特徴といえる。近畿地方において同時期の遺跡の中での石器組成が明確にされているものは少ないが、石鏃の率の高さは調査の進んでいる長原遺跡や伊丹市口酒井遺跡註12などと比べても際立っている。ただし、全て貯蔵穴出土であり、現時点ではこれらの石器組成が本遺跡の特定の生業形態を反映しているとは考えにくい、今後検討する必要のある問題である。

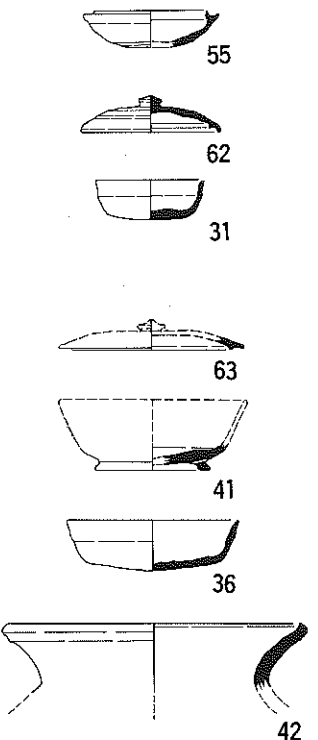
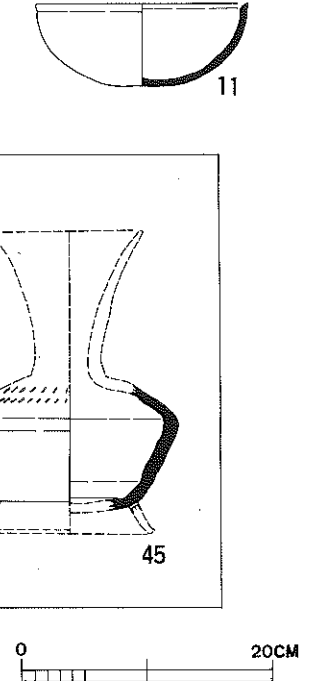
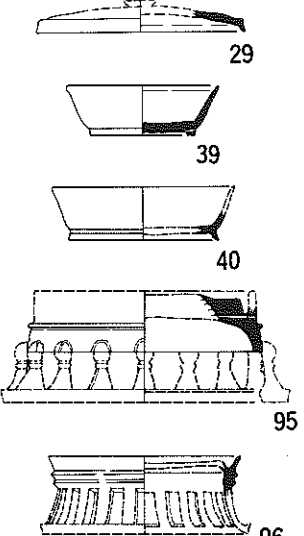
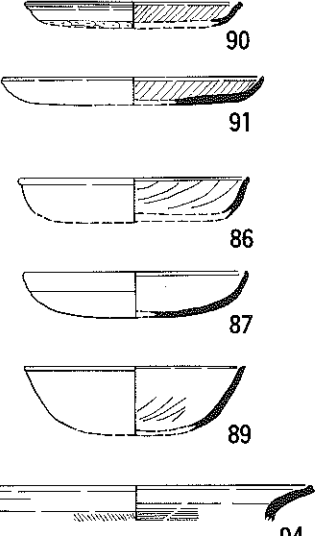
いずれにしても、縄文時代から弥生時代への過渡期において、各遺跡・各地域での変化の様相は、それぞれの条件によって異なったものとなったと思われる。今回調査された寺界道遺跡の様相が宇治市周辺の当時の社会を復元する一つの手がかりになることは明らかである。今後周辺の調査に注意が必要であり、その成果ともあわせて研究を進めて行きたい。

2 古墳時代以降

IV. 寺界道遺跡発掘調査概要



第29図 古墳時代以降の土器編年図 (1)

時代	須恵器	土師器	遺構
飛鳥時代			<p>SB05 SK101 SK102 遺物包含層</p> <p>SK101 遺物包含層</p>
奈良時代			<p>SK101 遺物包含層</p>

第30図 古墳時代以降の土器編年図 (2)

IV. 寺界道遺跡発掘調査概要

(集落の時期)

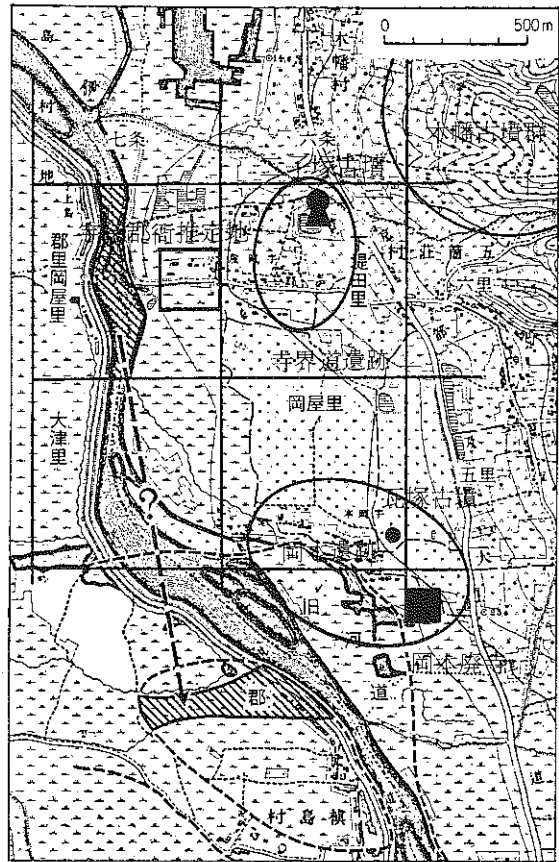
通常、出土量のもっとも多い土器の年代がその遺跡の主要遺構の年代を示すという一般的見解に従えば、当遺跡の中心となる時期は古墳時代後期後半及び奈良時代前半であり、年代的には概ね6世紀後半と8世紀前半である。しかし、6世紀中頃・7世紀代の須恵器も少量ながら認められることから、前述の年代は断絶するものではなく、概ね6世紀中頃から8世紀前半にかけて連続して集落が営まれたことが理解できる。そして、二子塚古墳外濠の調査では、6世紀頃から7世紀後半の須恵器と古墳時代前半の土師器が出土していること^{註13}から、寺界道遺跡そのものは、古墳時代前期には集落が形成され始めた可能性が考えられる。いずれにしても、その具体的様相の解明は、今後のより広範囲な調査によらなければならないだろう。

(宇治郡衙との関係)

出土量は少ないが、奈良時代前半の硯の出土は注目してよい。一般集落では出土がまれな硯は、文字通り識字層の存在を物語る資料である。特に蹄脚円面硯は、官衙等の比較的限られた場所で使用された硯である。^{註14}『宇治市史』では、条里復元と地名との検討から調査地西250mに位置する許波多神社を東北隅とする方二町域を宇治郡衙推定地としている。今後、当遺跡とこの推定宇治郡衙との関係は考古学的に追究する必要があるだろう。

(二子塚古墳と木幡古墳群)

調査地北150mに位置する二子塚古墳は、6世紀前後頃に築造された二重周濠を備えた所謂大王陵級の前方後円墳である。墳丘全長105m、新たに確認された外濠まで含めると東西・南北とも全長200mというその規模は、古墳時代後期の山城地方最後の大型古墳といつてよい。また、調査地北東500mの低丘陵には、現在、宮内庁が宇治陵墓として管理する木幡古



第31図 周辺遺跡位置図

(『宇治市史』第1巻69図に加筆)

墳群がある。現状で120基程、かつては数百基があったとされる山城地方最大規模の後期群集墳である。大半が直径15m程の円墳であり、直径30m程の大型のものも少数認められる。内部構造は明らかではないが、盗掘坑の形状より横穴式石室と判断できるものが40基含まれている。年代的には6世紀中頃から後半を中心とするものと考えられる。これらの古墳と寺界道遺跡とが年代的・地理的状况からまったく無関係であったはずはなく、その関係の解明は、古墳時代後期の宇治を考えるうえで重要な視点となろう。

(遺跡の範囲)

調査地の南側一帯、すなわち旧陸軍宇治弾薬庫敷地(現陸上自衛隊関西補給処・東宇治中学・京都大学宇治校地)は、当遺跡の立地する扇状地に続く大きな平坦地が形成されている。その南端、宇治川が西へやや屈曲する段丘上には岡本遺跡・岡本廃寺を始め瓦塚古墳などの遺跡が存在している。このような遺跡の立地状況からは、現在遺跡の空白地帯である陸上自衛隊関西補給処や京都大学宇治校地にも、寺界道遺跡の一部や未知の遺跡が存在している可能性は高い。

今回の調査は、二子塚古墳を含んだ南北一帯に広がる寺界道遺跡のほんの一部にすぎない。しかし、従来より遺物散布地として周知していた当遺跡の具体的な内容の一端を確認することができた。今後の周辺地域の調査により、寺界道遺跡の様相がますます明らかになることに期待したい。

(註)

- 註1. 寛文元年(1661)に中国僧隱元が開創した黄檗宗本山である。
- 註2. 『宇治市史』 第2巻 昭和48年。
- 註3. 永島暉臣眞・家根祥多・田中清美ほか『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告Ⅱ』昭和57年。
- 註4. 家根祥多「近畿地方の土器」『縄文文化の研究』4：縄文土器Ⅱ、昭和56年。
家根祥多「縄文土器」『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告Ⅱ』昭和57年。
家根祥多「縄文土器から弥生土器へ」『縄文から弥生へ』昭和59年。
- 註5. 註4に同じ。
- 註6. 高橋護「篋描紋」『弥生文化の研究』3：弥生土器Ⅰ、昭和61年。
- 註7. 家根祥多「縄文土器から弥生土器へ」『縄文から弥生へ』昭和59年。
- 註8. 口縁部数を個体数として計算した。
- 註9. この数値は『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告Ⅱ』(昭和57年)によるものであり、『大阪市平野区長原遺跡調査報告Ⅲ』(昭和58年)と合わせると、浅鉢形土器の占める割合はより減少する。
- 註10. 壺形土器が2個体出土しているが、この構成比率には含まれていない。
- 註11. 『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』奈良国立文化財研究所、昭和53年。
- 註12. 伊丹市教育委員会 浅岡俊夫氏の御教示による。

VI. 寺界道遺跡発掘調査概要

註13. 二子塚古墳は、昭和60年に宇治市教育委員会が一部調査した。

註14. 『宇治市史』 第1巻 昭和47年。

付 表 縄文土器観察表

<凡 例>

1. 実測図及び観察表の配列は遺構、器種別とした。なお、深鉢形土器については分類順とした。
2. 焼成は、堅緻、良好、やや軟、軟の4段階に分けた。
3. 胎土は包含する砂粒の多さあるいは大きさを加味し、粗密を以下の記号で示した。
密……………◎ やや粗い……………○ 粗い……………△
4. 技法の項では刻目の形状や調整について記した。
5. 色調については外面で最も特徴的な色を記した。但し、内面の色調が著しく異なる場合、これを続けて併記した。
6. 生駒西麓産の胎土については角セン石を含み、暗茶褐色の色調をもつものとする。

1. SK01 出土縄文土器

深鉢形土器〔I類〕(第10図)

番号	色 調	焼成	胎土	形 態	技 法	備 考
1	黄灰白色	良好	○	口縁端部は面取り。 凸帯は二等辺三角形を呈す。	刻目小D字	
2	淡灰褐色	やや軟	○	口縁部は丸い。	刻目D字。内外面共にナデ。	外面にスス付着有り。
3	灰褐色	やや軟	◎	口縁端部は欠損。	刻目D字。外面に条痕残る。	条痕原体二枚貝か。
4	淡黄褐色	良好	△	口縁部は内傾。端部は丸い。	刻目D字。外面ナデ。内面板ナデ。	
5	暗灰褐色	良好	○	復元口径24.5cm。 口縁部は外方に開く。 端部は尖る。	刻目D字(左→右)。 内外面共調整板ナデ。 外面に条痕。	外面吹きこぼれ有り。 内面黒斑有り。
6	淡黄灰色	良好	◎	復元口径45.6cm。 口縁部は外反。端部は面取り気味。		
7	茶灰褐色	やや軟	△	復元口径35.6cm。 内傾気味に立ち上がり、 口縁部はやや外反。	刻目D字。外面ナデ。 内面板ナデ。	外面黒斑有り。
8	淡黄褐色	良好	○	復元口径36.0cm。 体部最大径40.0cm。 体部が強く張りだす器形。 二条凸帯。端部は尖る。	上下共刻目D字。口縁部内外面共にナデ。 凸帯上端は工具によるナデ。	

深鉢形土器〔Ⅱ類〕(第11図)

番号	色調	焼成	胎土	形態	技法	備考
9	淡橙白色	やや軟	○	復元口径16.4cm。 口縁端部は丸い。	刻目D字。内外面共ナデ。	
10	黒褐色	良好	◎	口縁端部は丸い。	刻目O字か。内外面共ナデ。	外面スス付着有り。
11	淡橙色	良好	◎	復元口径15.7cm。 口縁端部は丸い。	刻目D字。外面板ナデ(条痕顕著に残る)。内面ナデ。	
12	淡橙色	良好	◎	口縁端部は丸い。	刻目O字か。内外面共ナデ。	
13	淡黄白色	やや軟	○	復元口径36.0cm。 口縁部はほぼ直線的にのびる。端部は丸い。	刻目D字。口縁部内面沈線1条。外面板ナデとナデ。内面板ナデ。	
14	灰褐色	良好	◎	復元口径30.6cm。 口縁部は強く外反。端部は丸い。	刻目無し。内外面ナデ。凸帯上端に条痕有り。	外面ススの付着有り。
15	灰黄褐色	やや軟	○	口径22.6cm。器高27.3cm。底径7.0cm。 口頸部は内傾し、口縁部で外反。体部はあまり張らない。底部は突出。二条凸帯。凸帯は上下共にやや下方に向く。	刻目上下共にD字。内外面共に板ナデ。口縁部内外面共にナデ。	体部外面ススの付着有り。体部内面黒斑および有機物の付着有り。
16	灰黄白色 内面黒色	良好	○	口頸部は内傾し、口縁部で外反する器形。端部は丸い。二条突帯。	刻目上下共にD字。外面下半条痕および板ナデ。内面板ナデ。	体部内面スス付着有り。

深鉢形土器〔Ⅲ類〕(第12・13図)

番号	色調	焼成	胎土	形態	技法	備考
17	灰褐色	良好	△	口縁端部は丸い。	刻目D字。外面ナデ。	外面スス付着有り。
18	灰黒褐色	軟	△	口縁端部欠損。直線的に立ち上がる口縁部。	刻目小D字。内外面共二枚貝条痕による調整。	外面スス付着有り。
19	淡黄褐色	良好	△	復元口径24.0cm。 口縁端部は丸い。	刻目O字か。内面ナデ。	外面磨滅が激しい。
20	赤橙色	良好	○	復元口径32.6cm。 口縁部が内傾する器形。	外面板ナデ。内面ナデ。	
21	淡黄褐色	やや軟	△	復元口径27.4cm。 底径6.8cm。口頸部でほとんどくびれない器形。凸帯幅は狭い。	刻目上下共に小D字。口頸部外面板ナデ。体部外面ケズリの後、凸帯下4cm程度のヨコナデ。内面ナデ。	

番号	色調	焼成	胎土	形態	技法	備考
22	黄白色	やや軟	△	端部は丸い。	刻目O字か。	
23	淡橙灰色	やや軟	○	端部は丸い。	刻目D字。	磨滅激しい。
24	灰黄褐色	やや軟	○	端部は丸い。	刻目無し。内面ナデ。	外面磨滅が激しい。
25	灰黄褐色	良好	△	端部は丸い。	刻目O字。	
26	灰褐色	やや軟	△	端部は丸い。	刻目D字。内外面ナデ。	

深鉢形土器〔IV類〕(第13図)

番号	色調	焼成	胎土	形態	技法	備考
27	黄灰色 内面 灰黒色	堅緻	◎	体部はあまり張らず、 口縁部で外反する器 形と推定。口縁端部 は尖る。器壁は薄い。	口縁部内面と肩部外 面に1条の沈線。外 面条痕。内面ナデ。	内面黒斑有り。
28	灰橙色	良好	◎	口縁端部は尖り気味。	刻目O字。	
29	灰茶褐色	良好	◎	口縁端部は丸い。	刻目D字。外面条痕。	条痕原体板状工具。 外面スス付着有り。 No.51と同一個体。

体部

番号	色調	焼成	胎土	形態	技法	備考
30	淡黄褐色	やや軟	○	凸帯はやや下方を向く。	刻目O字か。	
31	淡橙色	良好	◎	復元体径38.8cm。	刻目D字。外面条痕。 内面ナデ。	外面スス付着有り。 条痕原体板状工具。
32	暗橙色	やや軟	○	凸帯はやや上方を向く。	刻目D字。外面板ナ デ。内面ナデ。	
33	灰黄色 内 面灰色	やや軟	◎	扁平な凸帯。	刻目D字。内外面ナ デ。	
34	黄灰色	良好	○	凸帯は下方を向く。	刻目D字。外面板ナ デおよびナデ。内面 ナデ。	外面条痕残る。
35	灰黄色	やや軟	○	体部は僅かに丸味を もつ。	圧痕による文様を3 個配置。体部下半軽 いケズリ。内面ナデ。	
36	淡黄白色	良好	○	凸帯断面形は扁平。	刻目D字。外面板ナ デ。内面ナデ。	
37	淡橙色	軟	○	凸帯はやや下方を向く。	刻目O字か。内外面 ナデ。	外面スス付着有り。
38	灰黄色	堅緻	◎	凸帯はやや下方を向く。	刻目D字。内外面共 に板ナデ。	

番号	色 調	焼成	胎土	形 態	技 法	備 考
39	赤褐色	良好	○	体部は強く内湾。	刻目D字。外面条痕。内面ナデ。	条痕原体二枚具。

浅鉢形土器(第14図)

番号	色 調	焼成	胎土	形 態	技 法	備 考
40	淡灰褐色 内面黒灰色	良好	◎	復元口径26.7cm。 口縁部が「く」字に 屈曲する大形の浅鉢。	肩部に1条の沈線。 内外面共磨き。	
41	暗赤橙色	良好	◎	復元口径18.8cm。 復元底径3.7cm。底 部は平底。器形は皿 形。	内面1条の沈線。外 面ケズリ。内面工具 によるナデ。	
42	灰黄褐色	良好	○	器形は皿形と推定。	口縁部内面2条の沈 線。外面磨き。内 面ナデ。	
43	暗褐色	やや軟	○	復元口径9.9cm。器 形は碗形。端部は尖 る。	外面ケズリの後ナデ。 内面ナデ。	
44	灰褐色	良好	○	復元口径10.3cm。 復元底径4.2cm。器 形は碗形。底部は上 げ底。	外面条痕。内面板ナ デ。	条痕原体板状工具。

底部(第14図)

番号	色 調	焼成	胎土	形 態	技 法	備 考
45	淡赤褐色	やや軟	○	復元底径6.0cm。平 底。	内面指頭押圧。外面 ナデ。	
46	灰黄色	やや軟	○	復元底径6.2cm。	内外面共にナデ。	
47	淡黄橙色	やや軟	△	復元底径6.2cm。平 底。	内外面共にナデ。	
48	暗茶褐色	やや軟	△	復元底径9.2cm。平 底。	内外面共にナデ。	生駒西麓産の胎土。
49	灰黄褐色	やや軟	△	底径6.0cm。平底。	外面板ナデ。内面ナ デ。	
50	淡黄褐色	良好	△	復元底径5.7cm。	内外面共に板ナデ。	
51	淡橙色	良好	◎	平底と推定。	内外面ナデ。	内面スス付着有り。 No.29と同一個体。
52	灰黄褐色	やや軟	△	底面欠損。	外面ケズリ。内面板 ナデ。	
53	淡黄褐色	やや軟	○	底径9.3cm。平底。	外面縦方向の条痕。 内面ナデ。	条痕原体へら状工 具か。

2. SK02 出土縄文土器

深鉢形土器〔I類〕(第15図)

番号	色調	焼成	胎土	形態	技法	備考
1	淡褐色 内面黒灰色	良好	○	復元口径32.0cm。口縁端部は丸い。口縁部は内傾気味に立ち上がる。一条凸帯。	刻目D字。体部外面板ナデの後条痕。内面板ナデ。	外面黒斑。ふきこぼれ有り。条痕原体二枚貝か。
2	灰黄色	良好	◎	復元口径29.4cm。口縁部は外反する。口縁端部は丸い。	刻目D字。口頸部内外面共にナデ。体部外面ケズリ。体部内面板ナデ。口頸部に櫛状工具による文様有り。	
3	赤橙色 内面灰白色	やや軟	○	復元口径20.0cm。口縁端部は面取り気味。	口縁端部刻目有り。刻目D字。	
4	灰黄色	やや軟	△	復元口径15.5cm。口縁端部は尖り気味。内湾する器形。	刻目O字。外面ケズリ。内面ナデ。	外面スス付着。
5	灰褐色	やや軟	◎	口縁端部は丸い。	刻目O字。	
6	灰茶褐色	良好	◎	口縁端部は丸い。	刻目D字。外面条痕。内面ナデ。	条痕原体板状工具。

深鉢形土器〔II類〕(第15・16図)

番号	色調	焼成	胎土	形態	技法	備考
7	淡黄白色	やや軟	○	口縁端部は丸い。	刻目上下共D字。外面ナデ。内面ナデ。	外面スス付着有り。
8	淡茶灰色	良好	◎	口縁端部は丸い。	刻目無し。内外面ナデ。	
9	淡褐色	良好	◎	口縁端部は丸い。	刻目D字。外面ナデ。内面板ナデ。	内外面黒斑有り。
10	淡黄褐色	良好	○	口縁端部は尖り気味。	刻目D字。	
11	淡灰黄色	やや軟	○	復元口径27.2cm。口縁端部は丸い。	刻目D字。内外面ナデ。	外面僅かにスス付着有り。
12	灰橙色	やや軟	○	復元口径21.0cm。口縁端部は丸い。	刻目の有無不明。内外面共にナデ。外面一部板ナデ。	
13	明黄橙色	良好	○	復元口径19.9cm。口縁端部は尖り気味。	内外面共にナデ。	
14	暗橙色	やや軟	△	復元口径28.0cm。口縁端部は丸い。	刻目O字。外面ナデ。内面磨滅のため不明。	
15	灰褐色	やや軟	△	復元体径36.0cm。肩の張らない器形と推定。口縁端部は丸い。二条凸帯。	凸帯上下共にO字。体部外面ケズリの後、工具によるナデ。内面工具によるナデ。	

深鉢形土器〔Ⅲ類〕(第16・17図)

番号	色調	焼成	胎土	形態	技法	備考
16	明橙色	軟	○	復元口径20.4cm。 一条凸帯。口縁端部は尖る。	体部外面下半ケズリか。	磨滅激しい。
17	灰白色	やや軟	○	口縁端部は丸い。	内外面共にナデ。体部下半軽いケズリ。	

体部(第17図)

番号	色調	焼成	胎土	形態	技法	備考
18	暗橙色	やや軟	△	復元体径25.4cm。	刻目〇字。内外面共にナデ。	
19	灰黄褐色	やや軟	○	凸帯はやや下方を向く。	刻目D字。外面ナデ。内面板ナデ。	
20	灰黄褐色	良好	○	凸帯は丸味をもつ。	刻目〇字。内外面共にナデ。	
21	淡橙色	良好	◎	凸帯断面形は二等辺三角形を呈す。	刻目〇字。外面板ナデ。内面ナデ。	
22	暗橙色	軟	△	扁平な凸帯。	刻目〇字。	磨滅が激しい。

浅鉢形土器(第17図)

番号	色調	焼成	胎土	形態	技法	備考
23	黄灰褐色	やや軟	○	復元口径15.5cm。 碗形。口縁端部は面取り気味。	口縁部内外面共にヨコナデ。体部外面ミガキ。内面板ナデ。	
24	灰褐色	やや軟	○	復元口径11.4cm。 碗形。	内外面共にナデ。	

底部(第17図)

番号	色調	焼成	胎土	形態	技法	備考
25	淡橙色	やや軟	○	復元底径6.0cm。やや上げ底気味。	外面指頭押圧。内面ナデ。	
26	淡黄灰色	良好	○	復元底径6.4cm。	外面ケズリ。内面ナデ。	